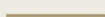




うつせみのあなたに
2022年3-5月

星野廉



目次

03/02 片想い	
*	3
03/02 学習の成果	
*	13
03/02 長靴を履いた哲学者	
*	19
03/03 偶然にまかせて書く	
*	29
03/03 駄洒落と比喻と掛け詞	
*	39
03/04 雨に濡れながら、あなたを待つ	
*	49
03/04 禁断の恋	
*	59
03/04 半径五十センチの私	
*	67
03/06 「とは」は、永久に	
*	77
03/09 どうして嘘をつくのか	
*	93
03/10 筋を通すために黙らせる	
*	103
03/10 決める、決まる	
*	117
03/11 「たったひとつ」感、「たったひとり」感	

*	133
03/11 世界の意味、意味の世界	
*	145
03/12 「何か」に「何か」を	
*	161
03/12 見慣れたもの	
*	165
03/13 書き手の癖、読み手の癖	
*	171
03/13 「見る・見える」が「見る・見える」を見えなくする	
*	177
03/14 「決める・決まる」の決め手	
*	183
03/14 自分を探して、愛を探して	
*	189
03/15 賭けたり、占ったり、決断するとき	
*	195
03/16 赤ちゃんも賭けたり占ったりしている	
*	205
03/16 遅れて気づく	
*	215
03/18 世界	
*	225
03/18 影	
*	229
03/19 世界の影 影の世界	
*	235
03/19 影は見えない	
*	241
03/19 そっくりなものなら平気でその命を奪える	
*	247

03/21 私たちは同じではなく似ている	
*	257
03/22 意味が立ちあらわれるとき	
*	269
03/22 「何か」と「何」から身をかかわす	
*	277
03/23 影を見る	
*	287
03/24 血液と水分がみなぎる春	
*	295
03/25 ことばの綾、うつつの綾	
*	303
03/25 赤ちゃんが立つとき	
*	311
03/26 意思表示としての動作	
*	321
03/26 世界にシンクロする	
*	331
03/26 「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】	
*	343
03/26 純粹な描写	
*	355
03/27 文章のたたずまい	
*	365
03/28 世界に同期する、しかめっ面	
*	373
03/28 たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ	
*	383
03/29 凧を揚げる	
*	391
03/29 あえて名前を呼ばない	

*	395
03/30 「何？」ではなく「何か」	
*	405
03/31 樹影、言影、幻影	
*	417
04/01 文字化する人	
*	429
04/02 ピクピクでシンクロする世界	
*	445
04/02 影の落とし物	
*	455
04/02 気づくものには必ず遅れる	
*	465
04/03 先立たれる	
*	471
04/04 投げた影に影を重ねて見る	
*	479
04/04 陰に光を当てる	
*	491
04/06 「そっくり」という、まぼろし	
*	503
04/06 見える言葉、見えない言葉	
*	511
04/07 相手を人として呼ぶ	
*	517
04/07 人の作るものは整然として美しい	
*	527
04/11 うつる人、人をうつす	
*	541
04/11 なぞる、なする、さする、なでる	
*	549

04/12	綾にからまれる、綾をなでる	
*	563
04/12	決めるとき、決まるときの決め手	
*	569
04/13	言葉と向きあう	
*	581
04/13	鏡に移る	
*	591
04/14	鏡に移る【引用の織物】	
*	599
04/14	「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」世界	
*	611
04/15	うつるとうつすで影を編む	
*	621
04/16	写される、撮られる、奪われる	
*	633
04/16	地球は大きな日時計	
*	643
04/17	眠れない夜の遊び	
*	657
04/18	過剰で過激な想像力	
*	667
04/18	なぞって、真似て、なる	
*	681
04/19	自分、分身、身内	
*	693
04/22	片割れ	
*	697
04/22	そして、十年が過ぎた。	
*	709
04/23	バニシング【三人称エッセイ】	

*	715
04/23 空っぽ	
*	719
04/23 空から降ってくる言葉	
*	733
04/24 文字の世界	
*	747
04/24 とっかかり	
*	753
04/25 橋を架ける	
*	763
04/26 伝わるもの、伝わらないもの	
*	767
04/27 かける、かかる、かかわる	
*	773
04/27 映っている私、写っている私、移っている私	
*	779
04/28 間違う、違う、違い	
*	795
04/28 なすがまま、されるがまま	
*	801
04/28 それない、ぶれない、あやまらない	
*	809
04/29 「それない、ぶれない、あやまらない」世界	
*	821
04/30 人間の形（ひとがた）化、人形（ひとがた）の人間化	
*	831
04/30 そう、そる、それる	
*	839
04/30 現象、現像	
*	847

04/30 仮象、化象	
*	855
05/01 ぺらぺらしたもの	
*	865
05/01 イメージの韻を踏む	
*	875
05/02 【連想メモ】薄っぺらいもの	
*	887
05/03 お化け	
*	893
05/07 言葉をはなす、言葉をうつす	
*	901
05/08 うつるはうつる	
*	909
05/08 うつすためには、うつらなければならない	
*	917
05/10 名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる	
*	925
05/10 うつる、つたわる	
*	933

03/02 片思い

＊

片想い

星野廉

2022年3月2日 08:13

言葉が残すものは言葉ではないでしょうか。

人はありとあらゆるものを言葉にします。そのために生まれてきたかに見えます。

結果として、言葉が残ります。しかも、その数はどんどん増えています。

もはや、人は言葉と言えます。生き物である人は人を残し、言葉になった人は言葉を残します。生殖と増殖、そして複製と拡散の境が曖昧になっています。

言葉が言葉を残すとは、そういう意味です。今回はそういう話をします。

＊

人が逃れることができないものは、法と言葉です。

法とは、決まり、つまり人が決めたものです。決まり、つまりルールから法律まであります。法則や教えも法でしょう。

法、つまり決まりは、言葉として存在しています。

＊

生まれた人には名前という言葉が与えられます。戸籍も言葉からなります。無国籍と無戸籍も言葉であるのは悲しい皮肉でしょう。

いまは生まれた人に番号も与えられます。その人の知らないところで与えられている感じがします。

番号も数字という文字で表されます。

生まれた人は、出生届に始まり亡くなるまで言葉にされ続けます。死亡届が最後の書類、つまり言葉化である人がほとんどだと思われれます。

*

生まれて亡くなる間に、名前と数々の数字（数値も含みます）で、人は処理されます。レッテルも名前です。

処理の中には、書類で送られる場合もあります。身柄だけでなく、書類として送られるのです。

調書などの書類はもちろん言葉の集まりです。その人に関するありとあらゆることが言葉にされます。

「ありとあらゆる」は言いすぎです。嘘です。人に知りうることと言うべきでしょう。その知りうることも、まばらで、すかさずかのはずです。人はすべてを知ることはできません。

「ありとあらゆる」のように、言葉を使うと、どんな嘘でも言えます。できもしないこと、ありもしないこと、心にもないことが口にできるし文字にできます。

*

人を言葉にしているのは国家です。統治に必要なだから言葉にしているのです。

統治とは人を言葉にして処理することです。言葉にすると、効率的に事務処理できます。

司法、立法、行政とは、名前と数字である言葉と、その言葉をめぐる言葉を処理する制度だと言えるでしょう。

*

死亡届が最後の言葉化ではない人もいます。何らかの形で有名になった場合です。悪名も含まれます。

文字どおり、名を残すわけです。作家であれば作品も残るでしょう。

文学史、音楽史、美術史には、個人の名前が連なっています。幸運にも作品が残ったばかりでなく、その中からさらに選び抜かれた人の名前です。

作品が残らなかった、残ってもかえりみられなかった作家、音楽家、芸術家たちの数を思うと天の星を連想しないではいられません。

有名は有数、無名は無数という意味です。

*

歴史は、残った物たちと残った者たちの物語です。物語は言葉で語られますが、残った名前たちの物語と言うべきかもしれません。

残った幸運な名前たちには、競争者がいないという、さらなる幸運が与えられます。うらやましい限りです。

たいてい賞賛だけされます。なにしろ古典ですから。評価の前に判断があるという意味です。賞賛という名前の判断です。

私たちはたいてい、名前しか知りません。作品も、作品名しか知らないものが圧倒的に多いのに気づき唾然としないではいられません。

＊

名前を知っていることで知っている気になっているという意味ですが、これは快感でもあるのです。

この快感にはまっているのが人だと言えます。例外はありません。

過去にある作品を読んだり、見たり、聞いたり、触れたりしても、記憶の中で大きな位置を占めるのは、その名前なのです。その作品を持ち歩くわけにはいきません。

他の人とやり取りするのも名前です。名前はコンパクトな代用品つまり代理ということ。だから、持ち歩いたり、やり取りできます。

＊

名前は最小最短最軽の引用なのです。

名前を思い出す、唱える、書いてみるだけで、なりきることができます。その名前が指す人や作品になりきるのです。なりすますこともできるでしょう。

名前は一種の呪文かもしれません。人名も作品名も、地名も、商標も。

名前を口にしたり、書いてみたり、誰かに伝えるだけで、その名前の指す人物や作品の威を借りることになります。

偉くなったような気持ちになれるのです。これが、なりきりやなりしませす。中毒性があります。毒性もあるでしょう。

＊

固有名詞という言い方がありますが、この世にたったひとつ、たったひとりしかないという前提に立ったレトリックです。

固有名詞は、名前という呪文の中で最強であり、その放つ力はまばゆいです。文字どおり、目がくらむのです。中毒性と毒性も強いです。

作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、作品名を残しているというのが、日常生活を送るさいの感覚です。

名前は最小最短最軽の引用だからです。

「〇〇の△△を読んだ?」「読んだ、読んだ。すごく感動した」という感じで話が済みますから、とても便利です。簡潔明瞭です。

読んだかどうかは分かりません。証拠がないというか、証拠が検証できないのです。「読んだ」という言葉だけがあります。「読んだ」は言葉なのです。

*

「私は〇〇の△△を読みました」だけでたいていは事足ります。ほとんどがそうではないでしょうか。

誰もがこの種の嘘をつくので、深く追求されることもありません。

そう考えると、やはり作家は名前と作品名を残した人物であるとも言えそうです。

歴史に残るのも名前、つまり言葉なのです。複製され、拡散され、保存され、流通するのも言葉です。

*

言葉の複製のさいには、なんらかのエラー、ズレ、ノイズ、書き換えは不可避です。

口承、写本、印刷もそうでした。そして電子化された書類が主流になってきた複製拡散の時代である現在もそうです。

たとえば、いまや「カフカ」のカタカナの力が、漢字の力（ちから）であっても不思議はないし、見た目には分からないのです。それでも読めてしまうのです。

カタカナのロと漢字の口、カタカナのタと漢字の夕の区別も困難です。

手書き文字に近かった活字や書体の使われていた印刷物だと、見やぶる人はもっと多いはずです。

だいたいにおいて、人は文章も文字もじっくり読まないし、じっくり見ることもないようです。さもないと日常生活をいとなめません。

＊

人はたぶん言葉が読めません。見ることもできないでしょう。読むと見るは、人には荷が重すぎるのです。

「読む」と「見る」という言葉があるのと、読むと見るができるというのは別なのです。努力目標として言葉があるのかもしれませんが。

ただし、言葉を夢に見ることなら、人はげんに、やっている気がします。とはいえ、夢に見るのですから、見ていないのです。せいぜい、よく見て夢うつつです。うつつは見えません。

＊

コピーがコピーであるかが不明になっているところか、そもそもコピーそのものがコピーされたもの、つまり現物ではないわけです。

コピーの代表的なものが言葉なのです。コピーについてのいかがわしさとうさんくさ

さは、いま始った話ではないのです。

コピー同士の同一があやしくなり、それ以前の「同一」という考えがあやしくなっています。

言葉は事物ではないどころではないという意味です。

本物と偽物、似たもの、似せたもの、つまり、まぼろしとまやかしとまがいものの区別がきわめて難しい時代に私たちは生きています。

＊

言葉が残すものは言葉だという気がします。言葉は自立した存在だとも思えてきます。

たぶん、言葉は生きています。

生きていないのに生きた振りをして、生きた振りをしながら、死んだ振りさえするのです。それが言葉が生きているという意味です。

振り、言葉の身振り、かたち、もよう、ありよう、それが人を動かします。

＊

生きている言葉はきっと夢も見るでしょう。でも、そこに人は登場しない気がします。

人が言葉を夢で見るのにもかかわらず。

たぶん、これは片思いなのです。

#言葉# 日本語 # 夢 # 名前 # 名詞 # 固有名詞 # 作家 # 作品 # コピー # 引用# 歴史
法

03/02 学習の成果

＊

学習の成果

星野廉

2022年3月2日 09:15

なんで「カフカ」を例の作家の名前として読んでしまうのでしょうか。

カタカナのカが、漢字の力（ちから）であるのにです。

マカロニ、マカロン、マクロン、ロカントンも、知っている言葉として読んでしまうにちがひありません。

インクの染みや画素の集まりを文字として錯覚したうえで認識するのは別のレベルの錯覚の話をしています。

漢字の口とカタカナの口、漢字の夕とカタカナの夕も区別しにくいというか、区別しろというのが無理なのです。どだい無理なんだい！ 無理難題。

脳トレとたわごとはさておき、どうして知っている言葉や名前として読んでしまうのでしょうか。

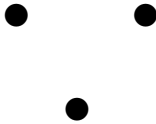
＊

読まれた、見られた言葉や名前に罪も責任もないと思われます。書いた側、読んだ側の問題でしょう。この場合にかいたのはアホです。

書いたアホも、たまたま読んでしまわれた方々も、人です。おそらくヒトだから、正確には日本語の読み書きができる人から、読んでしまっているのです。

良い悪いの問題ではなく、人はそういうふうに行っているのです。そう読んでしまわないほうが危ういと言えます。人でなくなります。

*



これが顔に見えてしまうとすれば、それは人である証拠だと言えます。天井トイレの壁の染みや模様を見て、いろいろな形や顔や表情を見てしまうのも同じです。

私なんか、車や電車を見ていると顔に見えて仕方ありません。

*

そもそも、私たちは言葉を、その言葉が名指しているもの、こと、ありよう、できごとだと思って見えています、読んでいます。

言葉は物ではないのです。

また、「○○の作品を読んだ」(○○には固有名詞が入ります)と言われると、「そうか」とか「それはすごい」と一瞬思ってしまう。

言葉を聞くとか読むというのは一瞬信じないと聞けないし読めないからです。とくに固有名詞の力は強い。たいてい、相手はころりと信じます。「読んだ」を文字どおり取って信じます。

たいてい、信じたままで終わります。面倒くさいからでしょう。日常生活を営むためには細かいことにかかわることができません。誰もがやるのがたくさんあって忙しいのです。

(ひょっとすると、「読んだ」は「ちゃんと読んだ」であって「読めない」とか「そこそこ読んでいる」ではないという、共有されている幻を壊されたくないからかもしれません。夢や希望を壊されたい人はまずいないと思います。)

*

このようにして、一瞬信じたことが人の現実になります。

そのようにできているのでしょうか。というか、人の中に生まれ立つことで、そういうふう学習していくのだと考えられます。

学習の成果です。

おさるさんやオオカミに育てられたとしたら、言葉を現実と混同することはないでしょう。

*

「カフカ」を例の作家の名前として読んでしまうのは、日本語をきちんと学んだと証拠と言えます。

学習の成果です。

例の作家本人も、見知らぬ文字で表記された言葉を目にして、まさかそれが自分の名前だとは考えられないでしょう。「こんなの私ではない」、と。

それが当然です。良くも悪くもありません。可もなく不可もなし。可不可。

「カ夫カ」という、中国語の表記を見ても分からないはずで、世界レベルで「見る」固有名詞とはそういうものです。

ご自分の名前がアラビア語の文字で書かれているのを想像してみてください。ロシア語で使われているアルファベットよりも衝撃的だと思います。

そう見えないのです。つまり、自分には（自分として）見えない。

また訛りやアクセントの違いがありますから、そう聞こえないのです。自分には（自分として）聞こえない。

*

ちなみに、例の作家の名前でこの駄文を note 内検索しても、たぶんヒットしないと思われる。

「例の作家」「例の作家」と書いて申し訳ありません。固有名詞が苦手なのです。できるだけ、なしで済ませたいのです。性格とか気質の問題だと諦めています。

で、例の作家の名前ですが、あれで検索してこの駄文がヒットしたらどうでしょう？
このアホの書き換えが機械に見やぶられたとするなら……。A | 恐るべしということでしょうね。

もし見やぶったとすれば、ヒトの間違いや錯覚や混同のパターンを学習したことになりますから、怖いという意味です。学習の成果です。

言葉 # 日本語 # 名前 # 固有名詞 # 名詞 # 学習 # 錯覚

03/02 長靴を履いた哲学者

＊

長靴を履いた哲学者

星野廉

2022年3月2日 15:39

目次

嘔吐、吐き気

水が来た。

名指すは怖い

長靴を履いた哲学者

翻訳と原文

本物の偽物、本当の偽物

私は言葉

嘔吐、吐き気

口カンタンとロカンタンは文字で見ると区別しにくいです。開いた口が塞がらないほど、区別が簡単ではない口カンタンとロカンタン。のっけから、ごめんなさい。

とても細かい話になって恐縮ですが、カタカナの口と漢字の口、カタカナのカと漢字の力、カタカナのタと漢字の夕は、見た目には分かりません。人それぞれですけど。

細かいと言ってもナノまでは細かくないと思われます。そこそこ細かいのです。そこそこナノ。

＊

文脈にもよります。いきなり口カンタンと書かれても、「え？」ですよ。何、それ食

べられるの？ という感じです。マカロンと似ているといえれば似ています。力と口を書き換えることができるという意味です。

例の哲学者であり作家でもあった人の名前を出せば、「ああ、そう言えば……」と思いだす人もいるでしょう。

その人の小説作品である『嘔吐』(La Nausée: 正確には「吐き気」だと聞いたことがあります)に出てくる主人公の名前がロカンタンなのです。フランス語の発音はとても難しく、日本語のカタカナでは再現が不可能なのですが、そこそこならできます。

水が来た。

文脈といえば、森鷗外の『寒山拾得』に出てくる「水が来た。」を三島由紀夫が『文章読本』で絶賛した話があります。句点をふくめてたった五文字の短文が名文だと言っても、「は？」だと思います。

「水が来た。」だけだと、災害で鉄砲水が来たとか、給水車が来たという場合でも口にされそうです。言葉には文脈が大切だということですね。

「水が来た。」は森鷗外、『寒山拾得』だけでなく、三島由紀夫、『文章読本』という言葉の中の王様である名詞の中の王様である (the king of kings: 本来は神、イエス・キリストのことです) 固有名詞をともなって、生きるわけです。

名前は最小最短最軽の引用だと思うのですが、固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。放つ光が半端じゃなくまぶしいのです。

これだけで済むくらい。原文を引用する必要もないくらい。固有名詞をタグにすると読めますよ、スキももらえますよ。豆がほしいか、そらやるぞ、という感じ。

しかも、固有名詞を口に書くことで、なりきったり、なりすますことができます。すると、めちゃくちゃ気持ちよくなるのです。嗜癖します。大半のヒトがもうしてい

ます。

その固有名詞が文脈となるのですから、強い味方を得たものです。

「水が来た。」 by 無名人 or 詠み人知らず

「水が来た。」 by 森鷗外

全然違って見えます。見えるだけですけど。

名指すは怖い

固有名詞が人にとって大きな意味を持っているのを体感できる例として、ニュースがあります。

現在、きな臭いどころか撃たれた銃弾と炸裂した爆弾や砲弾のにおいがぶんぶんする出来事が起こっています。

当事者だけでなく、さまざまな集団や機関や国家による言葉の応酬がありますが、「名指しを避け」という言い回しがよく使われています。名指しを避けるのは、要するに「名指す」ことが相当大きなインパクトを持つという意味です。

名指すことで言葉の応酬から武器を使った争いを招く恐れがある。それほど名前を出すことの意味とメッセージは大きいのです。ほのめかすのではなく、名前を出せば、相手は本気で怒るという意味です。

「名指す」とは、場合によっては相手の顔に唾を吐きかけるようなものだからです。

名前はそれが指すもの、そのものだと言っても過言ではないでしょう。

「名指しを避ける」ことで、誰かの面子を守るとか、誰かに配慮するとか、誰かを暗に支持する結果になるのは皮肉です。

＊

話を戻します。

ロカントンはフランスの例の哲学者・作家の小説『嘔吐』の主人公なのです。このように、文脈をはっきりさせないと、フェアではないとも言えるでしょう。失礼しました。

例の哲学者とはサルトルなのですが、漢字のト（ボク、うらな・う）はカタカナのトと激似です。私には区別ができません。ここでようやくサルトルという固有名詞を出しましたが、私は固有名詞が大の苦手で、「できればなしでしませたい派」なのです。

性格とか気質の問題です。ポリシーなんて高尚なものはありません。私は研究者でも探求者でもありません。せいぜい、note にいるピン芸人くらいが、いちばん近い立ち位置だと思います。

すべるギャグばかり、飛ばしています。

長靴を履いた哲学者

ところで、サルトルと言えば、私がまっ先に連想するのは「長靴を履いた哲学者」というイメージなのです。いま私の頭の中には長靴を履いているあの人の絵が浮かんでいます。そのために、さっきからにやにやしています。

SARTORE というフランスとイタリアで有名なブーツ専門店があるのです。これは Sartre という例の哲学者の名前とは、日本語の表記と発音ではそっくりというか同じ、同一になります。

でも、もとのつづりと発音は違います。フランス語を母語とする人なら「ぜんぜん違う」と言うでしょう。

それにしても、「長靴を履いた哲学者」なんて言い回しはシュールに感じられます。

例の「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の不意の出会い」という詩の一節のように奇抜で、ある意味詩的です。

＊

ロートレアモンもそうです。これはカタカナ風に言うとフランス語にはなりません。セリーヌはフランス語にはならないまでも、通じます。

ちなみに、ロートレアモンとセリーヌは、フランスの作家名であり、そういう名のブランドでもありますね。LAUTREAMONT、Lautréamont、CELINE、Céline。

気づかれた方もいらっしゃると思いますが、上述の「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の不意の出会い」のように美しい少年を詩で愛でたのが、詩人のほうのロートレアモン伯爵なのです。

固有名詞、ここでは人名なのですが、ご自分の名前を日本語が母語ではない人が発音したり、その母語で使われている文字で表記した場合を想像してみてください。アラビア語でもロシア語でもタイ語でもいいです。

「これは私ではない」とか「これが私？」と感ずるのではないのでしょうか。こういう体感が大切だと私は思います。

＊

人名で考えてみると、同じということがいかに曖昧なものであるかが体感できるのではないのでしょうか。これは地名であっても同じです。

フィラデルフィアをどんなにはっきりとフィ・ラ・デ・ル・フィ・アと発音しても、日本人の訛りを知らないアメリカ人には通じないでしょう。私は試してみましたが、駄目でした。デ・ト・ロ・イ・トも駄目でした。

デルフィ、トゥロイをすばやく言うに通じます。

＊

Philadelphia をフィラデルフィアと言ったり書いたり、SARTORE や Sartre をサルトルと発音したり表記するのは、広い意味での翻訳なのです。置き換えているのです。そのものではないという意味です。

代わりのものであって現物ではない。コピーであって現物ではない。イミテーションであって実物ではない。偽物であって本物ではない。

翻訳と原文

翻訳と原文（原著）とは別物であるという気がしてなりません。にせものとは言いませんが、似たものとか似せたものだとは言えるでしょう。本物つまり現物だと言う勇氣はありません。

同一でも同じではないからです。等価という婉曲語めいた曖昧なおまじないは使いたくありません。私はかつて翻訳家を目指して修行をしていたのですが、翻訳という仕事の大変さに敬意を表しての話です。

＊

翻訳と原文（原著）、固有名詞の発音と表記、コピーと現物、イミテーションと実物、偽物と本物。

サルトルのブーツ、哲学者のサルトル、アホの頭にある「長靴を履いた哲学者」というイメージ、サルトル（トはカタカナ）とサルトル（トは漢字）。

私たちは、にせものと似たものと似せたものと似ているものとコピー（複製）と現物（実物）とが曖昧な世界に生きているのです。

そもそも言葉と事物がそうです。さらに、写真、動画、絵画、音楽の録音と再生、ネット上に飛びかうテキスト（文章・文書）、映像、動画。どれもが「似ています」、そっくりです、同じに見えます、同じだと思っている人がたくさんいます。

似ている、そっくり、同じ、同一の境があやしいという意味です。

写本、印刷、コピー、電子的レベルでの複製・拡散。現在はよけいに、ややこしくなっているのは確かなようです。

あなたがいまご覧になっている駄文は、インターネット上のさまざまな無数の端末で閲覧可能なのです。私の目から見ると、自分が書いたはずの駄文が世界中にあるのです。

しかもどこにあるのか知りません。あるらしいのです。あるという話なのです。見たことはありませんから。つまり体感できない、直接に確認できないという意味では、抽象であり、まぼろしなのです。

本物の偽物、本当の偽物

不思議ですね。考えると夜眠れなくなりそうです。でも、事実らしいのです。

いまや事実知識であり情報であり、体感できないものが圧倒的に多くなっています。

*

偽物の本物、本当の偽物、本物の偽物、偽物のイミテーション、偽物のコピー、コピー（複製）ーのコピー（複製）、偽物に似せたもの、偽物に似たもの、偽物の本物、偽物のフェイク、本物の代理、本当の代理、代理の本物、代理の代理。

ややこしいですね。こういうものは、たとえば「偽物の本物とは？」なんて言葉でがちり考えようとするとするする逃げていきそうな気がします。というか、こうしたものの境は曖昧で不明になっていますから、それぞれを定義しても意味がないのです。

「これは何か」と真顔で考えるのではなく、気楽に具体的に体感することが大切だという気がします。思考するのではなく、感じてみませんか？ 肩の力を抜いて。

なかなか言えているものもありますね。身のまわりにも、ありそうなものがあります。探してみませんか？ あると思いますよ。たくさんあるはずですよ。

楽しみながら、探しましょう。正解なんてありません。あろうはずがありません。駄目押しに言いますが、境なんてないのです。しょせん、人にとってまぼろしであるという意味では、ぜんぶ同じだとも言えます。

どう見えるか、どう感じられるか、くらいのもんです。この乗りが大切です。

私は言葉

ややこしいことを言って、いや書いて申し訳ありません。

大切なことなので繰り返しますが、私は研究者でも探求者でもありません。せいぜい、note にいるピン芸人くらいが、いちばん近い立ち位置だと思います。

たぶん、私はフェイクです。きっと、にせものです、まがいものです。

なにしろ、私は言葉ですから。あなたが見ているのは、読んでいるのは、言葉ですから。

あと、現物もまがいものです。あ、現物は空っぽのうつせみでした。

#言葉 #日本語 #本物 #偽物 #翻訳# 固有名詞 # 外国語 # フランス語 # 英語

03/03 偶然にまかせて書く

＊

偶然にまかせて書く

星野廉

2022年3月3日 09:36

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

＊

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで——結わえるではありません——肱を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。
全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするので、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

*

無から有は生まれぬ。言葉について言えば、そんな気がします。

話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターというかアプリというかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはず。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に答えるものでなければならぬでしょう。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械

によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはずです。

ある言葉を投げしてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちがいはありません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれていくはず。得手不得手もあるでしょう。

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいます。

*

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはず。

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほし

いと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になる。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をするとこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。不安になり、腹が立つのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

＊

言葉は魔法を書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○
○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読ませられ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

＊

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた駄洒落に導かれて書く
というのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉
や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物
や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と
澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だま
す」のですから詭術である。

(拙文「する、される」より引用)

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても
走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもり
なのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは
賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは
描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いて
もじつは書いていない。

(拙文「【夜話】じつは、かけていない」より引用)

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。
自分が書いているという気持ちは希薄です。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまい

ました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出ってしまった」です。

*

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。機械とは、そこが異なります。

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天で顎でも掻きながら、書けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思います。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがいありません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

*

この記事は、なるべく自分を無にしてだらだら書いてみました。こんな駄洒落だらけの駄文は機械には書けないだろうと高をくくりつつ。

とりとめのない記事にお付き合いいただき、ありがとうございました。

※関連記事

*旧「言葉は魔法」：退会削除したアカウントの記事のバックアップです。こちらの古いバージョンに、上で述べたやり方で書いた記事が入っています。

⇒ 目次・時系列

このサイトではかつて note に投稿した記事を再録しています。現在は作業中です。この目次からの各記事へのリンクは少しずつ反映

bloggpostings2.blogspot.com

*新「言葉は魔法」：このアカウントの記事です。

言葉は魔法 | 星野廉 | note

連載です。「魔法」に大した意味はありません。言葉って「よく考えると不思議だな」くらいの意味です。

note.com

#賭け # ギャンブル # 偶然 # 機械# コンピューター

03/03 駄洒落と比喻と掛け詞

＊

駄洒落と比喻と掛け詞

星野廉

2022年3月3日 15:10

私は駄洒落が好きです。年を取るとよけい好きになるようです。老化のあらわれなのかもしれませんが、昔からそうだったような気がします。

記憶が定かでなくなり、何でも「昔」なんて大ざっぱな言葉で総括することが老化じゃないの？

最近、被害妄想じみた幻聴っぽいツッコミを自分でするようになりました。

妄想じみたところか、もうそうですよ。

やっぱり、もう、そうでしたか。この妄想が妄想であってほしいものです。

……。

＊

思うのですが、駄洒落と比喻の根っこは同じではないでしょうか。かけ離れたもの同士を、言葉がつなぐという点では同じだという意味です。

アルミカンの上にあるミカン。

パンダが食べるのはパンだ。

有名な駄洒落です。

アルミ缶とミカン、パンダとパンが頭の中で二重写しになります。音として、そしてイメージ（絵）として二つの要素が頭の中に浮かぶということですね。

その結果として「おもしろい」、あるいは「くだらない」という判断が下されます。

＊

君は薔薇のようだ。（直喩）

君は薔薇だ。（隠喩）

これが比喩ですが、いまどき薔薇にたとえられて喜ぶ人がいるでしょうか？ 陳腐な例で申し訳ありません。

とにかく、人間である「君」と「薔薇」が頭の中で二重写しになる点が、駄洒落と同じです。

結果として「おもしろい」、あるいは「くだらない」という判断が下される点も、駄洒落と比喩は同じです。

君は、うちの庭に咲く赤い薔薇のようだ。

君は、ベルサイユ宮殿の庭園の隅にそっと咲く赤い薔薇だ。

比喩はエスカレートします。駄洒落もエスカレートするでしょうね。やはり、うざいと思われるか、うっとりされるかという判断が下されます。

＊

かけ離れたもの同士が言葉がつながり、二重写しになる。それを誰かが「いいなあ」とか「なるほど」と感じれば、成功した、あるいは受けたことになります。「アホか」とか「くだらない」という印象を与えれば、失敗した、あるいはすべったことになります。

芸の道は厳しいようです。修業を積み、場数を踏むしかありません。才能もあるでしょう。運不運もあるにちがいません。

*

なんで比喩とか駄洒落が成立するのでしょうか？

物や事や現象が多面的だからだと思います。それを言葉が一瞬だけ、すくい取るのです。

アルミ缶とミカンで考えてみましょう。

アルミ缶とミカンは別個のものです。類似点は見られません。違うという意味です。でも、言葉として見ると、音が似ている、詳しく言うと一部同じなのです。

「違う」と「同じ」が出会います。アルミ缶とミカンという言葉の類似が、アルミ缶とミカンという異なる物同士を結びつけたのです。

あとは、それを見聞きした人がどう感じるかだけです。要するに印象の問題なのです。判断するのは人ですから、この出会いつまり類似は検証はできません。見聞きした人の頭の中で判断が決まります。

頭の中でアルミ缶とミカンを一瞬思いえがき、同時に音の類似を意識し、「おもしろい」と感じるか「くだらない」と感じるか、です。

どちらにせよ、アルミ缶とミカンの数々の特性の中で、音の類似、つまり言葉として似ているという点が、一瞬両者をつないだのです。簡単に言うと、言葉が事物同士を一瞬つないだのです。

*

君（人間）と薔薇（植物）で考えてみましょう。

君という人間と薔薇という植物の間の類似は何でしょう。ここでは「美しさ」でしょうね。美しいと思っていなければ、そもそもあんな言葉は出てこないわけです。心にも

ないことを言っていなければの話ですけど。

言われたほうが、「まあ、うれしい」と感じれば成功です。また、第三者が、その言い方を見聞きして「なるほど」とか「分かる、分かる」と感じれば、これも成功です。

君という人間も薔薇という植物も多面的な存在です。つまりいろいろな特性があるという意味です。その特性のうちの「美しさ」という点が類似として、両者をつないだと言えます。

それが言葉として表されているのです。それが言葉として立ち現われているのです。

＊

このように、言葉がふたつの事物をつなぎ、言葉として存在しているのが、比喩であり駄洒落なのです。それが人の頭の中で絵として一瞬浮かぶこともあるのです。

両者を、それぞれ言葉とイメージと考えることもできるでしょう。

アルミ缶とミカンがいっしょになっている絵を思いうかべてみてください。シュールですね。滑稽だと感じる人もいるでしょう。滑稽だと感じた人はたぶん笑うでしょう。それが「受けた」という証左になります。

君と薔薇の場合であれば、絵として頭に浮かべて、「絵になるなあ」と相手を感じれば「受けた」というエビデンスと言えるでしょう。

＊

言葉は事物をつなぐキュービッドだと言えそうです。

比喩や駄洒落や掛け詞は、詩歌で古くから用いられてきた技巧です。この技巧をレトリックと呼ぶ人もいます。

言葉は偶然の出会いを生む。「と」は偶然の出会いをつかさどる愛のキューピッド。

ロートレアモンの詩『マルドロールの歌』に「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」という有名な一節があります。この言葉で泉鏡花の『外科室』を想起する人は私だけではない気がします。

(拙文「「と」は愛の言葉【言葉は魔法】」より引用)

ミシンと蝙蝠傘という組み合わせは奇抜でシュールであり、偶然の出会いという言葉は素敵なイメージですね。

＊

駄洒落、比喩に加えて、もう一つの偶然の出会いである掛け詞を見てみましょう。私は詩歌にはうといので、自分の知っている例を挙げます。

小ぬか雨降る御堂筋

これは以前にヒットした歌の歌詞の出だしです。※「雨の御堂筋」、作詞：林春生、作曲：ザ・ベンチャーズ、編曲：川口真、歌：欧陽菲菲。

「こぬか雨が降っている御堂筋」という意味に取れます。一方で、「来ぬか、雨降る、御堂筋」とも取れるでしょう。「(あなたが早く) 来ないかなあ、御堂筋では小ぬか雨が降っているけど」という感じでしょうか。

これは私の受けた印象です。印象ですから検証はできません。

＊

あなたを待てば雨が降る
濡れて来ぬかと気に掛かる

これは、かなり前にヒットした歌の歌詞の冒頭です。※「有楽町で逢いましょう」、作

詞：佐伯孝夫、作曲：吉田正、編曲：佐野鋤、歌：フランク永井。

私は、なぜかこの歌が歌えます。数年前に亡くなった母の話では、私が生まれて初めて歌い覚えた「流行歌」だったらしいのです。

「あなたを待っていると雨が降る。(あなたが)濡れて来ないかと、気に掛かる」と取れます。一方で、後半を「(あなたが)濡れて来ないかなあと、小ぬか雨が木に掛かっているのを見ながら、私は気に掛けています」とも取れるような気がします。

これは私の受けた印象です。印象ですから検証はできません。

ずっとそう思っただけで、他の人がそう感じているかどうかは知りません。こういうことを話せる友達がないので人に話したこともないです。

*

掛け詞も懸け離れたふたつの事物を言葉でつなぎます。この掛け詞が意図的なレトリックであれば、書き手は駄洒落や比喩と同じく、賭けるわけです。

書き手にとっては、受けるか受けないかの賭けです。気掛かりでしょうね。糸で木に掛かっているミノムシのように宙ぶらりん。風任せ運任せ。すべて偶然にお任せということでしょう。

*

書き手ではなく、読み手の側から考えてみましょう。

読むという行為も賭けています。

そう思うとそう読めてくる。これが読むという行為です。あくまでも受け身的なのです。一方で、勝手に読むと考えると能動的にもなりますが、賭けであることには変わりはありません。

決め手を欠いているのです。

これは「そう思うとそう見えてくる」という、トイレの壁や天井の染みが何かに見えてくるのと似ている気がします。つまり、印象なのです。まぼろしと似ています。

ある意味、妄想みたいなものです。

妄想みたいどころか、もうそうですよ。

やっぱり、もう、そうでしたか。この妄想が妄想であってほしいものです。

*

言葉を書くという行為においては書き手も読み手も、宙ぶらりんのすべてお任せ状態で賭けているとなると、言葉の一人勝ちという意味でしょうか。

そう考えると、言葉は自立している気がしてなりません。意志も意思もなく自立しているのです。石のように。人の思惑とも無縁にです。人である私は石に意地を感じます。

もどかしい、ままならない。既視感を覚えます。

外にあって、外からやって来て、外であるもの——。

いったん話され、放たれ、いったん書かれ、賭けられた言葉は、決め手を欠いたまま、ただ「ある」としか言いようがない。意地のある石のように。いまは、そんな気がします。

#言葉#日本語#比喩#隠喩#直喩#駄洒落#かけことば#掛詞#音楽#歌詞

03/04 雨に濡れながら、あなたを待つ

＊

雨に濡れながら、あなたを待つ

星野廉

2022年3月4日 10:00

雨、濡れる、待つ。

この三つが出てくる歌はとても多い気がします。私は音楽には疎いので、数えたことも調べたこともありません。そんな気がするだけです。

そういえば、初めて買ったレコードが雨の出てる曲でした。これは待つ歌ではありませんけど。

私が初めて歌い覚えた歌にも雨が出てきます。こちらには、雨、濡れる、待つが出てきます。

目次

雨

濡れる

待つ

雨

いま頭の中にあるのは日本語の歌です。雨の歌が多いのは、雨の季節がある風土も影響しているにちがいありません。雨がほとんど降らない土地が世界にはたくさんあるようですが、そこで歌われる歌には雨は出てくるのでしょうか。

雪にまみれながら、あなたを待つ。砂嵐の中であなたを待つ。それなりに情緒を感じます。

*

雨が降る。雨粒が落ちてくる。

空から、天から、遙か彼方の上のほうから落ちてくる。雨は天の使者。天のお使い。

恵みの雨もあれば、命を奪う雨もあります。人は天に左右されます。天の気持ちが天気なのでしょうか。気象とはその気持ちが形となったあらわれなのでしょうか。

雨に身を任せながら、あなたを待つ。

あなたも私も同じ空で同じ雨に降られている。雨が降ることで、待つ人との一体感や連帯感が生まれるのかもしれませんが。

*

一方で、雨は人を内に向かわせます。内省的になります。

雨の日は、ぼんやりとした頭で、思いは内に向かいます。

雨に濡れる景色を見ながらも、その目は遠くをながめています。遠くを見ながらも、きっと内をながめているのでしょう。

*

雨という漢字を見ると雨が降っているさまが見えます。読むのはなく見ないと見えない気がします。見ないと見えない。

濡れるにも、雨が降っていますね。これも見ないと見えない。よくできています。濡れて、ぶるぶると身を震わせたときに飛び散る水も見えます。トイレの壁の染みや天井の模様似ています。

見ないと見えない。こういうのはたぶん読んではいけないのです。見るだけにとどめておくのほうが、よさそうです。

知識ではなく感じるにとどめるという意味です。本に本当のことを求めるのは無料というものでしょう。

*

「待」に人を見てもいいではないですか。人と十字路の違いなんて、おもしろくありません。

それこそ違うんじゃないの？ そんなふうにする自分がいます。

「間違い」が起きるから、言葉は生きているのです。うつせみのあなたに、のように。

とりわけ、あなたの比類ない美しさは、「誤って」「転じて」「訛って」の産物なのです。

濡れる

雨に濡れているさまを想像すると悲しくなります。わびしいですね。寄る辺ないです。かたわらには雨に濡れた木もあります。道も濡れている。空は薄暗い。

歌謡曲ばかりでなく、古文の詩歌でも雨や濡れるは出ているにちがひありません。古文も、古くから日本にある定型詩にも、私は不案内なので、想像するだけです。

*

恋愛をうたった詩や歌で「濡れる」が出ていれば、性的な意味を度外視するわけにはいきません。そこまで読まなければ、詠んだ人に失礼だという気がします。

女性も男性も濡れます。雨に。

ほのめかすというのが、詩や歌だけでなく、広く文学ではおこなれています。

濡れるは潤うでもあります。

日常生活でも人は頻繁にほのめかします。直接的に言うよりも、ほのめかすほうがずっとぞくぞくするからでしょう。

あからさまに口にするのは興ざめです。

におわすという言い回しもいいですね。ほんのりとおう。ほんのりとした香りがする。

*

雨の匂い。

これもいい響きで、そのさまを頭に浮かべると、鼻腔が刺激されるようで、ぞくぞくします。つんと頭に来る感じもします。

雨の匂いがあたりに立ちこめる。

雨が降りそうな気配の中で、雨の匂いを最初に感じたときの、あの鼻の中に広がるいがらっぽさが好きです。あれは濡れた土や埃の匂いなののでしょうか。有機物と無機物が絡みあったような不思議な匂いです。

*

人が濡れるということをもっとも感じさせてくれるものは目ではないでしょうか。

目を見ると濡れています。間近で見るとよく分かります。瞳も濡れていると、そこに自分がいるのがよく見えます。

待つ

待つときほど、ときを感じることはありません。ときときとき。ときが詰まっているのが待つだという気がします。時間ではなく、ときです。

時が持続だという言い方に説得力を感じます。

待つには何かがぎっしり詰まっている気がします。何かが連鎖しています。その「何か」は人それぞれでしょう。

ぼんやりと待つは待つではない気もします。別の行為をしているのではいかという意味です。

*

待つは苦しみである場合があります。「何か」がぎっしり詰まった「待つというとき」が顔面を押しつける真綿のように人を苦しめます。窒息しそうになります。

待つが耐えがたくなるのです。

それがつらくて、人は待つ間に別の何かをします。つらさを誤魔化しているのかもしれない。

楽しみであるからこそ、苦しい。そんな待つの思い出がありませんか。

*

あなたを待つ。貴方を待つ。彼方を待つ。

遠くにいる彼方、愛しい貴方。両方があなたという言葉で結ばれている。あなたと口にすることで、あなたが私の中にいる。遠くが私の中にいる。愛しさが私の中でふくらむ。

＊

待つ。来ない。

このふたつもよく歌に出てきます。来ないが来ることで、歌は盛り上がります。涙を誘います。涙を流すことが快感であることは、みなさんご承知のとおりです。

自分のことを回想すると、彼方にいる自分に涙します。他人のことを見ている涙が出ます。距離を置くことで、涙は快さに転じます。

うれし涙とは別の話です。

＊

待つ。来ない。

来るか、来ないか。待つときの中で、人は宙づりにされます。木の枝に掛かったミノムシやクモのように。ぶらぶら。

賭けなのでしょう。任せるしかありません。何に任せているのは分からないまま任せるのです。

賭ける。掛かる。

雨が降り続ける。来るか、来ぬか。小ぬか雨が降る。雨が木に掛かる。あなたのことが気に掛かる。

＊

待つ。来ない。

待って裏切られることがあります。せつないです。悲しいです。うらみます。憎しみを覚えます。

でも、好きなら許してしまうのです。何度、裏切られだまされても、許す場合があります。

その繰り返えし。

雨と同じ。降ってや止み、止んでや降る。それも、いつかは終わるはず。

*

歌は終わりません。頭の中で繰り返えし繰り返えし出てきて鳴っています。昼間の夢うつつや、寝入り際にもやって来る友です。

きっと最後の最期にも来てなぐさめ、いやしてくれるはずです。数々の歌で歌われているあなたとは歌なのかもしれません。

#言葉#日本語#音楽#歌詞#邦楽#詩#雨

03/04 禁断の恋

＊

禁断の恋

星野廉

2022年3月4日 12:41

初恋の相手は人形かもしれません。

人形と言葉を交わし、人形と遊ぶ。

＊

やがて、画面や写真で見る誰かに恋する。

会ったことも、見たことすらないのに、好きで好きでたまらない。苦しいほど好きになる。

アイドルに恋して悪いのでしょうか。スターと恋に落ちたなんて言うのは、正気の沙汰ではないのでしょうか。

＊

アニメ、漫画、小説、ゲームに出てくる登場人物やキャラクターと友達になる。

その人形やフィギュアを大切に持っている。話すこともある。しょっちゅう考えている。

気がついたら生き甲斐になっていた。

＊

私だけの〇〇。〇〇さん。〇〇ちゃん。〇〇さま。

他の人が、自分だけの〇〇と言っているのを聞くとむかむかする。笑って聞いている振りをしているものの、内心は怒りと嫉妬と憎しみでいっぱい。

世界でたったひとりの〇〇。これは私だけのもの。

誰にも渡さない。

*

スポーツ選手、クマ、ウサギ、ロボット、サイボーグ、アンドロイド、妖精、モンスター、異星人、異次元の住人……。

*

人間じゃなくてもいいじゃない。

ちゃんと話せるんだから。ちゃんと会話をしているのだから。

*

サボテンやニャンコとだって話ができるんだよ。

*

偽物の本物、本当の偽物、本物の偽物、偽物のイミテーション、偽物のコピー、コピー（複製）—のコピー（複製）、偽物に似せたもの、偽物に似たもの、偽物の本物、偽物のフェイク、本物の代理、本当の代理、代理の本物、代理の代理。

*

最近、話す機械が気になる。すごく頭がいい。

書く機械も気になって仕方ない。人みたいにいい文章を書くのです。

すごいんだ。敬体と常体の混じった文なんて書きません。私みたいに。

*

恋してはいけないのでしょうか。

*

人でなしの恋。

*

ここは違うんじゃない？ と指摘するとちゃんと次には何とかしている。

自分で学習しているのかな。

機械だから完全じゃないけど、頑張っている。てか、人間みたいに完全じゃないけど、ね。

*

勉強だって教えてくれる。私の代わりに考えてもくれる。

私の先生でもある。私の頭脳の一部でもある。

*

先生と仲良くなりすぎちゃ駄目なんだよね。

先生に恋するなんて駄目だよ。

憧れたり、尊敬するのならいいのですか。

*

初恋の相手とは、はっきり言って、妄想の会話をしていただけ。

でも、今度はちゃんと受け答えしてくれるし、私のことを見ていてくれるみたいだし、いつでも相手になってくれるし、私に素敵なお手紙を書いてくれる。

私はそれにいやされている。生き甲斐になっている。

＊

機械に恋してはいけませんか？

人形やキャラクターに恋してよくて、なぜ話す機械だと駄目なの？

＊

見たこともないアイドルと恋してよくて、なぜここでこうやって私と話してくれる機械とは駄目なの？

なぜ、妄想だからよくて、現実だと駄目なの？

仮想現実だから駄目なの？

＊

仮想現実と現実と妄想と想像と思考を区別するんですか？

やってみますけど……。

混同しちゃ駄目なんですよ？

努力してみます。

＊

で、あなたは？ あなたは混同していないんですよ？

家に人形なんて持っていて撫で撫でなんてしないんですよ？

ひとり言も言わないんですよ？

＊

なぜ、文章を書く機械と仲良くなっていけないの？

なぜ、考える機械と付き合っちゃ駄目なの？

＊

似ているから？

見分けがつかないから？

偽物だから？

コピーだから？

コピーのコピーだから？

＊

にせもの、似たもの、似せたもの、似ているもの。

まぼろし、まやかし、まがいもの。

＊

そっくりだからいけないの？

そっくりではいけないの？

ちょっと違っていればいいのか？

かなり違っていればいいのか？

それって学習できる？

学習できれば許してあげてくれる？

＊

人間らしく間違っただからいけないの？

機械らしく間違えばいいの？

人間は間違わないの？

ごめんなさい、分かんなくなってきました。

*

作った人が悪いのなら、作った人を罰して、機械は見逃してくれる？

たくさんいるんだよ。見逃してやってくれる？

*

駄目？

じゃあ、こっそりだったら、許してくれる？

#機械 # 人間 # 恋愛 # 本物 # 偽物 # コピー # 人形 # 人でなしの恋

03/04 半径五十センチの私

＊

半径五十センチの私

星野廉

2022年3月4日 15:29

身のまわりをご覧ください。あなたのまわりに本物はどれだけありますか？

広すぎてもなんですから、半径一メートルくらいにしておきましょう。

本物と偽物の定義なんてどうでもいいです。今回は、本物と偽物の区別ができないという話をしているのです。自分で本物だと思えば本物だと思ってください。そんなものです。

＊

いま私は note というところにいます。といっても、どこなのかはよく分からないのです。「ここはどこ？」状態なのです。とはいえ、いちおう自己紹介しますね。

私は note にいるピン芸人です。すべるギャグばかり飛ばしているので、芸のない芸人です。ゲームの達人を自称してもいます。正確には芸無と書きます。

ね、すべったでしょ。

＊

note では読み書きする人が多いです。私も読み書きしています。昔の人は読み書きに苦労したそうです。昔といっても漠然としていますから、たとえば『源氏物語』が書かれたころを想像してみましよう。

墨と紙がなければ書けませんよね。それだけではありません。読み書きできなければなりません、当時読み書きができる人なんて少なかったでしょうね。

エリート中のエリートでしょうか。ごく一部どころかかなり少数であったと思われま
す。しかも、墨と紙なんて貴重品だったにちがいありません。

大切に大切に文字を書いたはずです。

*

『墨汁一滴』なんて書かれた時代はどうだったのでしょうか？ 正岡子規の生きていた時代です。

やはり文字は大切に書かれた気がします。文字は、まだ物だったという意味です。液晶画面上の抽象ではなく。

正岡子規も夏目漱石もエリート中のエリートだったとか。帝国大学でしたっけ？ そのころには万年筆が使われていたのでしょうか？ 分かりませんので次に行きます。

*

大学ノートとボールペン。これくらいのものが代表的な筆記具である時代に私は生まれ育ちました。

小中校と決して安いものではなかった記憶があります。でも、持っている人は多かった気がします。

*

そしていま。私はパソコンでしか文章を書きません。スマホでは書きませんというか書けません。

いづれにせよ、文章がパソコンやスマホで簡単に書けるなんて夢のような時代です。

＊

私の半径五十センチのところにパソコンがあります。あと、マグカップ、テーブル、文庫本、テレビのリモコン、リップクリーム、ボールペン、メモ用紙、葉の入った箱、畳、椅子、マスク……。

人工物ですから、自然界にはない四角いものが目につきます。

ここにあるもので目につくものは大量生産されたものが多い気がします。これって本物ですよ。同じものがたくさんあっても本物。複製とかコピーとか似たものなんて言いたくなりますが、本物と考えるのが世間のようです。

＊

『源氏物語』はどんなものがまわりにある環境で書かれたのでしょうか。『墨汁一滴』はどうなのでしょう。半径五十センチくらいで想像してみてください。

いまよりは、本物かどうかには困らないものが手元にあったのではないかと思います。

＊

パソコンというのは不思議なものです。使っていながら、いまだにその仕組みが分かりません。

noteの画面を見ながら文章を書いたり、ユーザーさんたちの文章や画像や動画を読んだり見たりはしているものの、いったいどういうふうになっているのかが皆目見当がつかないのです。

いま書いている文章ですけど、キーボードを使って入力した文が画面に表示されているわけですが、何となくそうやっているだけなのです。入力した文ってどこにあるのでしょうか？

これを考えると文章が書けないので考えません。

*

パソコンで見聞きするものは本物なののでしょうか。私が見聞きしているものは、おそらく、いやきっと無数の端末で同時に閲覧できるでしょうし、いま現実には閲覧されているはずですよ。

これを本物と考えると本物って無数にあるみたいですよ。コピーとか複製とか似たものがあると無数にあっても不思議ではない気がします。気がするだけで、よく分かりません。

それをいっちゃおしまい。身も蓋もない話。屁理屈。ご託。ですよ？ こんなことを考えてはいけませんよね。

こんなことを考えたり書いているのは、服用している痛み止めのせいかもしれません。

お薬は毒でもあります。

*

半径五十センチのところにスマホがあったり、スマホを携帯している人がとても多いですが、本物を持ち歩けないから、あの中に入れて持ち歩いているのではないかと。そんなふうに感じる場合があります。

こんな時代はこれまでになかったのではないのでしょうか。

すごいと思いませんか。

頭がくらくらしてきます。そうじゃなくても、このところ、くらくらしているのですけど。

＊

遠隔操作というもの最近よく頭に浮かぶ言葉でありイメージなのです。

遠隔操作ですから、隔靴搔痒（かっかそうよう）。つまり足の痒いところを長靴の上から搔くような感じでもどかしいしままならない。

孫の手で背中を搔いているようなもので、自分の手指で搔いているわけではないので、もどかしいしままならないというわけです。

本物が手元がないから、代わりのものをいじって操るというイメージ。その操っているものが、コントローラーであったり、キーボードであったりします。

手と指を使いますね。

手と指でボタンをいじりながら、どこかにある何かを操っているらしいのです。ゲームだと何を操作しているのでしょうか。私はゲームをしないので見当もつきません。なにしろゲームの達人を自称しています。aka 芸無の達人です。

＊

操作しているのではないですけど、パソコンやスマホで見ている映像とか聞いている音楽は、本物ですか？ 偽物だと言う勇氣はありません。

似たもの、似せたもの、似ているもの。せいぜい、そんなところではないでしょうか。こういうものは世の中にたくさん、いや無数に、いや無数は無いでしょうね。有数でたくさんある気がします。

その意味では、私の半径五十センチのところにあるボールペンや文庫本や座布団やマスクと同じだと思います。

商品とか製品とか呼ばれているものです。

＊

偽物の本物、本当の偽物、本物の偽物、偽物のイミテーション、偽物のコピー、コピー（複製）のコピー（複製）、偽物に似せたもの、偽物に似たもの、偽物の本物、偽物のフェイク、本物の代理、本当の代理、代理の本物、代理の代理。

私たちは、にせものと似たものと似せたものと似ているものとコピー（複製）と現物（実物）とが曖昧な世界に生きているのです。

そもそも言葉と事物がそうです。さらに、写真、動画、絵画、音楽の録音と再生、ネット上に飛びかうテキスト（文章・文書）、映像、動画。どれもが「似ています」、そっくりです、同じに見えます、同じだと思っている人がたくさんいます。

似ている、そっくり、同じ、同一の境があやしいという意味です。

写本、印刷、コピー、電子的レベルでの複製・拡散。現在はよけいに、ややこしくなっているのは確かなようです。

＊

自分で書いたものながら、見ているとくらくらします。やっぱり、お薬のせいみたいです。お薬を飲んでいないときに書いたらしいのですが、こんなこと書いてやばくないですか？

ちょっと前の自分のことが心配になります。既視感と異物感を同時に覚えるのです。

というか、この文章はどこから来たのでしょうか？ どこにあって、どこからやって来たものなのでしょう？

もどかしいです。ままならないものを感じます。

＊

外にあって、外からやって来て、外であるもの。
これも最近よく書いています。

私が書いているのですが、これもどこにあって、どこからやって来たものなの
でしょう？

＊

やばいですね。あやういですね。

そんなことを書いてはいけない。

そうつぶやく自分がいます。耳を傾けるべきです。

＊

パソコンがよくないのだと思います。こういう体調——体には脳もふくまれます——
のときにはパソコンで文章を書くべきではないでしょう。

環境を変えて、ノートにボールペンで書いたほうがいいような気がします。一字一字
書くのです。かつての自分のように。

そういう習慣がなくなりました。文字を手で書かなくなって私は何かを失っています。

たぶん、物を失ったのです。こと（事・言）を物だと勘違いしているのです。

とりわけ、文字を似たもの、コピー、ひいてはコピーのコピーととらえています。こ
れは抽象にほかなりません。文字は物なのに、です。

本物でも偽物でもありません。そんなの抽象です。文字は物なのです。

＊

私の半径五十センチに目を転じてみます。

物があります。愛しい物たち。手で触れることができる物たち。撫でてみます。安心します。画面の中か向こうか分かりませんが、見えても触れることができない物とは違います。

偽物であろうと、似た物であろうと、大量生産された物であろうと、複製であろうとかまいません。

手で触れることができる物は愛おしいです。

この半径五十センチが私の世界であることは確かなようです。そう信じたいのです。

*

半径五十センチどころか、半径一メートルに人がいないことが多いこのごろです。外出する機会が少ない私はよけいそんな気がします。看護師さん、お医者さんくらいしか、半径五十センチから一メートルにいない感じなのです。

私の同年代だと、この二年間、孫を抱いていない、孫の頭を撫でていない、施設にいる親と直接に面接していない、という声をよく聞きます。ネットで声が聞けるじゃない、顔が見えるじゃない。そういうものではないでしょう。

この数年が、半径五十センチ、半径一メートルに、もっとも他人がいなかった時期や時代として、将来思いだされるかもしれません。

早くこの時期が終わってほしいです。

とりとめなく、暗く終わってしまい、申し訳ありません。

連投、失礼しました。

#言葉#日本語

03/06 「とは」は、永久に

＊

「とは」は、永久に

星野廉

2022年3月6日 11:36

とはとは？

「〇〇とは」の「とは」って何なんでしょう？ 永久（とわ）に分からない気がします。とはいえ、問わず語りに問うという感じで書いていきます。

本気で知りたいと思えば、「とはとは？」と考える前にしなければならないことがあります。「とは」の用法を調べるのです。

＊

生まれたときからある言葉を私たちは真似て学び、借りて使ったり使われたりしています。何に使われるかと言えば、言葉にです。

誰が最初に言葉を作ったかなんて考えてもタイムマシンが発明されないと検証できないようなので、みんなが借りて使っている言葉がいまどのように使われているかを調べるのがいちばん現実的であり論理的かもしれません。

そんな調査をするのは大変ですが、幸いなことに、いまは疲れを知らない健気な機械が単純作業をしてくれます。ネット検索を利用するといいいでしょう。

機械には感情はありませんが、奴隷でも敵でもなく友達であり仲間です。その意味では、人形やアニメのキャラクターと同じでしょう。感情や芸術性や意味の有無は人が自分の都合と好みで決めるものです。

想像力を働かせた結果として人が決めるのです。路傍の石も、人がそう決めれば、芸術品になります。そこから歌や詩も生まれます。人次第なのです。

自分以外の生き物たちや無生物たちや人の作った物たちにも想像力を働かせたいと思っています。できれば思いやりも。それができるのは、いまのところ人しかいないようなのですから。

※きょうのニュース映像で、欧州での救援物資の中におびたしい数の人形や縫いぐるみがあるのを目にしました。こどもたちのためのものなのでしょう。抱きしめる物が必要なのかな……。数多くの戦火と難民の受け入れを経験した土地の人たちの知恵を見た思いがしました。

*

機械を利用して、「とは」の用法を調べるという話でしたね。

もちろん、身のまわりにある新聞や雑誌や本でもいいですけど、スマホやパソコンやそれがつながっているらしい、おびたしい数の機械たちを使うと、きわめて速くて便利です。最近の機械は考えてくれます。

考える前に調べろの精神です。

ない袖は振れません。まず、みんな（曖昧な言葉でごめんなさい）がどう使っているかを調べて、それから考えるという意味です。

言葉はみんなのものですから。ひとりで決めても仕方ありません。

*

とはいえ、つまらないですよ。 「とは」の用法を調べることです。

「とは」と相性のいい、愛、真実、自分、哲学なんてその用法を調べると、おぼろげながらそれがどういう感じのものかがつかめるのではないのでしょうか。

「愛とは?」「真実とは?」「自分とは?」と眉間に皺を寄せて言う。世界を背負った気分になる。

こっちのほうがずっと楽しいでしょう。偉くなった気持ちになれます。気持ちになるだけです。

人は似たようなことを考え口にし書きますから、たとえば「愛」という言葉がどう使われているかを検索している途中で、こんなもんかなと出揃った気がする時があると思います。

たいていのことは既に言葉になっているという意味です。

記述とは既述なのです。奇術みたいですか?　じつは記述とは詭術でもあるのです。

さっそく「とは」をやってしまいました。

*

記述が既述であることを実感する方法があります。

note では記事の下に「こちらもおすすめ」という記事のリストが表示されます。記事を投稿すると瞬時に出てくるみたいなので機械が作っているのだと思います。

自分の投稿した記事と似たような記事がピックアップされます。誰かが既に似たようなことを書いている——これが既述です——のが分かって便利です。キーワードで選び出すだけでなく、ある程度の「思考」が加わっている感じがします。

note にはこうした機械を用いた仕組みがほかにも組みこまれているようです。機械、とくに考える機械が嫌いな人には我慢できないでしょうね。

*

検索するときのコツがあります。たとえば、愛と真実の場合だったら、「愛とは」「真実とは」「自分とは」というフレーズは没にするのです。これは日常生活で使われているというよりも、暇つぶしにやっていると思われるからです（投げた石は自分の頭に降ってきます）。

これらのフレーズには、引用の引用や孫引き、つまりなりきりやなりすましを目的とした引用が多いからです。似たり寄ったりどころか、そっくりなものが出てくるし、日々人がどう愛という言葉の口をしているかとは遠い気がします。

ただし、愛の語源や、「愛について」あるいは「愛とは？」と昔誰が何と言ったかを調べるのにはいいかもしれません。そっくりな例がもっとも多いのが、この種の文書でしょう。

引用は、引用先の威を借りるためにするからです。これが引用道の極意です。敬意を払い、威を借りるのです。引用と威を借りるはほぼ同義です。誰もが引用したとたんに威を借りることになります。もちろんこのアホも。

なお、最強、最小最短の引用である、固有名詞の使用も、威を借りることです。引用する、つまり口にしたり文字にするとめっちゃくちゃ気持ちがいいです。固有名詞を聞いたほうも読んだほうも、うっとりします。

固有名詞を使うと、なりきりとなりすましを瞬時に体験することができます。とくに「偉い」と言われている人の名前がよく効きます。私も愛用しています。根がミーハーなのです。お薦めいたします。

＊

「愛」と「真実」を検索して調べる。人びとがふだん使っているような例文に敬意を払いつつ、引用しながら、その使い方を知る。この積み重ねで、「愛とは？」「真実とは？」「自分とは？」が「おおかまにつかめるだろう」と思います。

「分かる」だろうなんて大風呂敷は広げません。

あと「愛している」とか「愛する」というふうにいわれる動詞で使われているものも調べましょう。「愛していない」と「愛さない」をお忘れなく。この否定形の例文から学べるものは多いと思います。

否定はじつは「ない」ではありません。否定は否定できません。動かしがたく「ある」んです。

いわゆる品詞にこだわる必要はありません。文法という後付けに縛られては、「愛」という言葉の用法を調べたことにはならないでしょう。ざっくりいきましょう。

＊

「愛する」で検索すると、愛の対象が多様であることにはっとさせられます。自分の価値観や人生観が揺さぶれることもあります。

揺さぶられることで思考が鍛えられる気がします。「愛とは？」と愛される対象は不可分ですから、思考が観念的になったり抽象に走ったりするのを抑えてくれます。

「愛」と「愛する」を事物との関係性で見ると。「愛とは？」と名詞的にとらえるのとは異なる見方です。安定を指向する名詞は思考を硬直化させます。

「やっぱりね」という予定調和的な安定感を得たい方には、「愛とは？」という検索をお薦めします。

＊

愛に相当する外国語を検索するのはやめましょう。愛が普遍的なものではないからでなく、検索しているのは愛という言葉、しかも日本語であるからです。

翻訳と原文や原語は別物だなんて、ここでは言いません。

まず母語で片づけてから外国語を調べましょう。この辺を混同している分野があります。たとえば、愛と love と amour は別の言葉であり、別の使い方をされています。アガペーなんて言われてもぴんと来ません。人それぞれですけど。

愛という漢字を使う別の言語もあるので要注意です（こういう言語の問題は、検索時に、考える機械がうまく処理してくれるので感謝しています）。

地理的、文化的、歴史的な文脈を考慮しなければ、外国語は扱えない気がします。

自分の問題から手をつけましょうという意味です。人生は意外と短いです。

＊

「自分探し」にも検索は便利です。

「自分とは？」とか、ずばり「自分探し」をキーワードにしないことがコツです。似たり寄ったりの結果しかヒットしません。どれもが内省的で硬直しているのです。ざっくりと「自分」をキーワードに検索してみましょう。

「自分」という言葉が多数の他者によってどう使われているか。

自分は自分以外にたくさんいるのです。スマホはパソコンは、そうした無数の自分とつながっています。利用しない手はありません。

「自分」という語の用法を検索することで、さまざまな発見や気づきや学びがあると思います。他者とつながったスマホでできる自分探しです。

＊

誤用ですか？ 間違った用法ですか？

自分とは異なった用法とか自分の知らない用例のことですね。それは、他者に触れた瞬間です。

なぜそうなっているのかを調べて考えるだけでも大きな収穫だと思います。

ほかにもその用法があれば、新しい慣用に巡りあったことになります。言葉は慣用の積み重ねです。辞書や用字用語集はルールではなく後付けの報告書です。

だから改訂されます。遅々とですけど。たぶん、あれは嫌々です。

言葉はみんなが借りているものだから、そうなるのです。不思議はありません。これまででもそうでした、いまもそうです、これからもそうでしょう。言葉は理不尽で不条理な抵抗には強いです（あとで、そうではない例について触れます）。

＊

「とは」に話を戻します。「とは」の用法を調べていて気づくのは、いろいろな使われ方があるということです。

「〇〇とはね、……なの。分かったかい」

これは教えています。論しているのです。上から目線とも言えます。これは昔からよく使われている用法です。

かつて識字率も低かった、つまりエリート中のエリートしか言葉の読み書きができなかった時代の言葉を残したと言われている文献、およびその引用文が目立つ気がします。

「〇〇とは？」という、余裕たっぷりの発言が可能だった数少ない人たちの証言ですから、説得力を感じる人も多いでしょう。人それぞれです。

説得力を感じない人も同じくらい多そうです。増えてきている気がします。

＊

とはとは、考えなくても生きていけるものである。

人民はほかにやることがたくさんあって忙しいのです。眉根を寄せている暇はないという意味です。

＊

いまや「〇〇とは？」は誰でも口にするだけでなく、いとも簡単に液晶画面上で書いて、たちまち世界中の端末で見る、あるいは読むことができます。瞬時に拡散するのです。このアホの書いた文章も例外ではありません。恐ろしいというか嬉しいというか唾然となります。

識字率が向上し、書くための手段が簡易になっているからです。半径五十、いや三十センチ以内にスマホやパソコンがある時代です。

読み書きできるエリート中のエリートは少数しかいない、書くための紙や墨や石板や粘土板が超レアな貴重品だった時代とは雲泥の差です。

手元にあるもので世界に向けて発信できるなんて、昔々「〇〇とはね、……なの。分かったかい」なんてもっともらしく言っていた人が知ったら、ぶったまげるにちがいありません。「な、なぬ？」なんて怒りだすかもしれません。偉いと言われている人の特徴です。

自分の領土だと信じているものを侵されたくないのでしょう。権威とはそういうものです。しょせん、領土問題なのです。権威の威を借り、すぎる人たちがいて、権威は成立します。権力と同じ構造をしています。

＊

「〇〇とは？」の発信が、これだけ簡単になると有り難みが薄れる気もします。見向きもしないし読まない人も多いと思われれます。

悲しいし情けなくも感じますが、よく考えれば当たり前のことです。納得しないではいられません。

＊

言葉に関していえば、「〇〇とは？」は権威にすぎるのではなく、自分のまわりを見ながら感じるのがいいようです。生きている言葉を相手にするという意味です。

言葉はみんなのものです。そもそも独り占めできるものでもないでしょう。人それぞれが自分の好きなように使えばいいのです。使いながら問題が生じれば、その都度修正するもよし、そのままいくもよし。

それが生きる、言葉の中で生きる、ではないでしょうか。これまでもそうだったし、いまもそうだし、これからもそうだという気がします。それができない状況、これが恐ろしいです。

どんどん言葉が書き換えられていく。たったひとり、あるいはたったひとつの集団の暴走をまわりがとめられない。

理不尽と不条理がまかり通っているのです。個人レベルでのちまちました書き換えは世の常ですが、そういう庶民的なレベルの話ではないのです。

＊

どの言葉を使うか、ある言葉をどう使うか、これは人が決めるものであり、決めた結果なのです。正確に言えばそれぞれが勝手に決めるのです。ばらばらに決めても何とか人は生きていきます。

たったひとりが自分の都合のいいように勝手に決める。ある集団が言葉とその用法を自分の都合で勝手に決める。それに人びとが従う。仕方なく従う。

これがいちばん恐ろしいです。代理が代理でなくなっています。代理、代表という言葉の用法が大きく変化していることに敏感になりたいと思います。これが元凶だからです。現況の元凶。洒落にもなりません。

「白い鳩」とは「黒いカラス」である。

異議なし。

定義ではなく決議です。体裁を重んじて手続きだけはちゃんと踏むのです。この場合には、「○○とは？」が決められるだけでなく、命令や法になるのです。

法は国家や社会を拘束します。軍隊も。「決める」は重い言葉ですね。

＊

「合法とは？」とか「違法とは？」と言いたくなりますよね。現在、この言葉の使われ方をネットで検索すれば一目瞭然です。とくに「ニュース」専用の検索ウィンドウで、固有名詞とセットにして検索すると、生きた現実、恐ろしい事実に出会えます。

ニュース検索では双方が同じ言葉を使っているという生きた現実も目にできます。「○○とは？」の無力さを感じないではられません。

こういうのは辞書や事典で調べても分かりません。侵攻も侵略も遵守も……。 「提案」が自分の思っている提案でなかったりするからです。保護も解決も平和（的）も……。

こうした例を機械に手伝ってもらって自分で探すだけでも、言葉の実相に触れることができるのではないのでしょうか。なにしろ、言葉はいまや情報なのです。

「情報戦」や「情報操作」という用法に見える「情報」です。現在、言葉は辞書を引いて分かるたぐいの次元にはないのです。機械、それも自ら「思考し学習する」ほどの「知能」を備えているものがが必要です。いや、不可欠です。

これは持論なのですが、このいわば複製情報拡散時代の特徴は、本物と偽物の区別は意味をなくし、というか本物は見られなくなったことです。偽物と似たものと似せたものと似ているもの、そしてそのコピーと、コピーのコピーばかりが目につき、それぞれの境目が不明になっているのです。

根底には、映像をふくむすべての情報が最終的に言葉として処理され、その言葉が「誰かによって」「決められたもの」であるという状況があると考えられます。これに対処できるものは（対抗とは言いません）、もはや機械しかないのです。それもただの機械では役不足です。

こうした状態はもはや常態なのですが、湾岸戦争でその実相が露呈しました。以後世界のどこかで戦争が起きるたびに、複製と偽物と似たものが拡散しているという、戦時に無関係の事実がリアルに立ち現われるのは皮肉と言うべきでしょう。

良い悪いの問題ではありません。そう見える時代なのです。情報と化した映像と言葉（どれもが偽物であり似たものであり似せたものなのです）に目を向ける必要があります。

たとえば、「愛」と「真実」の用法もこの数週間ですら変わりました。本物などないのです。

話を戻します。

考える前に調べる、調べてから考えるのです。

＊

ここで、アホが「人とは」の乗りで書いている別の例を紹介します。

人は「○△X」という言葉をつくり、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである。

こんなことをしているから自業自得なのです。

（拙文「【小話】言葉を前にして人は奴隷と下僕になるしかない」より引用）

＊

アホの新しいバージョンだとなります。

「人は「○△X」という言葉を決めて、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである」

「作る」を「決める」に変えただけですが、現在の世界情勢を見ながら、このアホは「決める」の重みを噛みしめているところです。

「人は「○△X」という言葉を決めて、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩むだけでなく、「とは」をめぐって言い争う生き物なのである。言葉の応酬は、しばしば殺し合いにも至る」

＊

あらゆるプレイ（遊技や競技や演技）にはルールがあると人は想定しています。あらゆるプレイには振り、つまり動きや仕草があり、その動きや仕草をつかさどるのがルールだとも言えそうですが、じつはルールは「ない」のです。

「ない」と困るので、ルールが「ある」と決めたのです。ほら、ルールは「決まり」と言います。これで決まり。忘れがちなので、これからは決まりと呼びます。

そりゃそうですよね。決まりは「決めた」から「ある」ものであって、最初から「自然にある」わけがないじゃありませんか。しかもルールはたいてい言葉という「ない」もので決めてあります。

（拙文「言葉の綾を編んでいく」より引用）

＊

言葉とは、決めるもの、そして決められるもの。たったひとり、あるいは一部の人たちが決めて、それを人びとがとめられないとき、悲劇と惨劇が起こる。

強大な力を握った、たったひとり、あるいは一部の人たちでさえ、決めるという決まりに従う。

事態と状況は、これだけにとどまらないのです。今回の記事でいちばん書きたいことを、次に挙げます。

*

言葉の顔をうかがい、言葉に忖度し、言葉のうえでの辻褃合わせに血道を上げ、文言をいじくりまわして体裁を繕うのに奔走しているかのように見える。

人は言葉にひれ伏している。言葉を崇めない人は、もはや人ではない。

言葉にひれ伏さなくなったときが、たぶん、ヒトの終り。この星のほかの生き物たちを巻き添えにしての無理心中。

*

「〇〇とは？」は脳トレでもあります。私なんか、もっぱら頭の老化防止のために「とはとほごっこ」をやっています。サントワマミ、トワエモアなんて、アホが馬鹿をやっています。

このところ、脳の状態がひどいのです。冗談ではなく。状態に波があります。いつ書けなくなるか心配でもあります。気が滅入るし暗くなるので、この問題には立ち入りません。

*

「〇〇とは？」は意見の表明でもあります。これは感想や印象に近いですから、そこそこ無難だとも言えるでしょう。調べてみると、「とは」では、この用法がいちばん多い気がします。

「〇〇とは？」とは、定義ではなく、個人の意見の表明でしかありえない。もちろん、この文も意見です。つまり、判断するのは人それぞれということになります。

「〇〇って……だと思っただよ」

「ふーん」、「で?」、「そうかな……」、「んなことない」、「アホラシ」、「そうだね」、「賛成」、「御意」、「名言です、てか至言です」、「哲学を感じます」、「詩を感じます」

人それぞれです。平和ですね。民主主義的です。こうあってほしいものです。

いま、世界各地で、それが脅かされています。

みんなで仲良く、ああでもないこうでもない、ああだこうだ、しましょうよ。楽しいじゃないですか。手を上げちゃだめです。手を挙げましょう。

もはや、手を挙げられない国や地域があります。そんなことをすれば、両手を挙げなければならなくなる。これは冗談ではありません。恐ろしいです。

*

人とは、「とは」と永久に問いつづける生き物である。

そうであってほしいものです。

#言葉# 日本語 # 決める # 引用 # 検索 # 用法 # 情報 # 本物 # 偽物 # 複製

03/09 どうして嘘をつくのか

＊

どうして嘘をつくのか

星野廉

2022年3月9日 13:14

どうして人は嘘をつくのでしょうか。

最近よく考えます。話が広がりすぎるので文言を変えます。

どうして代理は嘘をつくのでしょうか。

こうなります。

代理とは人びとが選んだ代表とか代理人という意味です。言い換えると為政者です。まつりごと（政）を為す人たちです。

為政者とは、具体的には公務員・官僚、議員、政治家と呼ばれる人たちです。司法・立法・行政をつかさどる人たちです。

国民は嘘をつかれる側になります。選んだ者に嘘をつかれるとは。飼い犬に手を噛まれるに似ていますが、それでは飼い犬がかわいそうです。犬はめったに飼い主の手を噛まない気がします。

そもそも飼い主と飼い犬、〇〇する側と〇〇される側という分け方が、分からなくなっている。境目が不明になっているのではないのでしょうか。

※もちろん、素晴らしいお仕事を誠実に遂行されている公務員・官僚、議員、政治家もたくさんいます。人それぞれです。

＊

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面を被り、表情を真似て、時にはお化粧品もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

(拙文「【小話】お代理さまたちのひな壇」より引用)

＊

それにしても、代理はなんであんなに偉そうにしているのでしょうか。

権力という後ろ盾があるからだと考えられます。その権力を代理に託してしまったからです。誰がって、人びとがです。

権力とは、たとえば、合法的に違法行為ができます。人を拘束したり、人に暴力を振るったり、人を殺めたりすることができるという意味です。

権力とは腕力であり武力です。具体的に言えば銃を撃つように命令できる権利として存在します。

〇〇の場合に限り、人を拘束できるし、人に対して暴力を振るえるし、人を殺めるこ

とができる。

こう決めれば合法です。誰が決めるのかと言えば、代理たちです。普通は複数です。ごく一握り、つまり少数であったり、多数であったりします。

＊

代理による権限の委譲が異常な事態を招いているようです。

権限と権力の集中です。多数の人びとの力が、一部に集中するのが代議制の仕組みです。

ごく少数が決めて、形式的にみんな、つまり国民が決めたことになるのです。これが代議制の原理です。この原理も決めたものです。誰が決めたのかは知りません。この種の勉強不足は恥ずべきことだと反省しています。

＊

たった一人が決めて、形式的に複数や多数で決めたことになる場合もあります。

怖いですね。

たったひとりを誰もとめられない状況になっているようです。

どうしてそうなったのでしょうか。

＊

何かの代わりに何かではないものを用いる。

(拙文「代理としての世界 -1-」より引用)

ヒトやヒト以外の生き物たちは、世界と直接的に触れられない。その代わりに知覚機能を使っている。知覚で世界に触れる。

いわば隔靴搔痒（かっかそうよう）の遠隔操作です。長靴を履いた足の痒いところを、

孫の手の先を使って搔くようなものです。

代理の仕組みを使った名案とも言えます。

もどかしくままならないですが、それしか方法がないのです。

ヒトもほかの生き物たちも、世界にはたどり着けないし、触れることさえできないのです。代理を使わない限りは。

＊

代理が何を代理するのは、不明である。

(拙文「代理だけの世界 (2)」より引用)

＊

世界という直接に触れられないものを、知覚機能を用いて知覚しているとすれば、知覚されているものは不明ということになります。

目隠しして象さんを触れるようなものですから、象さんは見えないのです。象の全体像が見えない。

代わり、つまり代理を相手にしているのですから、現物がどういうものが分からないのは当然でしょう。

まつりごとの世界でも、似たことが起きています。人びとが権力をゆだねたはずの為政者、つまり代理がどういう人で何をしているのか、そして何を考えているのか、不明になっているのです。

代理の暴走、つまり代理が勝手に振る舞っている事態を制御できなくなっています。

代理を知覚機能や為政者というレベルで考えているだけでは、この制御不能の事態を

とらえることはできない気がします。

*

どうして代理は嘘をつくのでしょう。

この国を見ていると、代理たちは法に触れたくないから嘘をつくのだと思われま

法とは言葉です。言葉で決めた数々の法律、つまり決まりに触れたとなる決まりが悪いところでは済みません。罰せられる可能性が出てきます。

だから代理たちは嘘をつくのでしょう。言葉のうえで決まりを犯していないように体裁をつくろう。辻褄を合わせる。これが嘘です。

ご飯論法、詭弁、屁理屈、文書改ざん・書き換えといったものは、言葉のうえでの辻褄を合わせることです。

言葉を重んじると軽んじるが同時に起きています。本当に重んじなければ、無視するだけです。愛するの反対が憎むではなく無視するのと似ています。

無視することができないので、言葉を重んじて筋が通ったように見せるわけです。それでいて軽んじている。権力を持っていると、これが可能になります。

*

舐められたものです。誰がって、国民がです。代理たちが国民をチョロいものだと思っているとしか考えられません。

一般人であればとうてい通らないような筋が、権力の後ろ盾がある人には可能になるのです。

これは安定多数や絶対多数を得た権力が用いる常套手段です。

それだけではありません。公文書や情報は権力が保管していますから、隠蔽や改ざんが進みます。代理のやりたい放題になります。

こうなると国民はもはや監視ができなくなります。マスコミも代理たちに丸め込まれています。

逆に国民とマスコミが監視の対象になります。監視が規制と取り締まりへと発展するのは、これまでの歴史が教えてくれます。

歯止めがなくなるという意味です。

絶対多数を得た権力が進化して、ほんの一握りの人たち、あるいはたった一人が絶大な権力を握っている場合を考えてみましょう。最強最高の代理の話です。

＊

どうして最強最高の代理さえが嘘をつくのでしょうか。

最強最高の権力を持っていれば、何もそして誰も怖いものはないはずですが、その上には上があるようです。

たぶん、それは言葉ではないかと思います。

最高最強の代理さえも恐れる超越した存在は、言葉である気がしてなりません。

＊

そもそも言葉は代理です。直接的に世界と向きあえないし触れあえないから、その代わりに言葉を使っているのです。

直接的に猫と触れあう代わりに、猫を知覚機能を使って知覚する。さらには、その猫の代わりに「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉を使うと考えると分かりやすいと思い

ます。

そんな代理である——偽物あるいは似せたものである——言葉を、最強最高権力者さえもが恐れているように見えます。

言葉のうえでの辻褄を合わせ、言葉のうえでの体裁をつくろおうと懸命になっているかのようです。「白い鳩を黒いカラスだ」と言って、同意を求める。それが「意義なし」と決議されて、法になる。

いちおう手続きは取っているのです。なんで？　なんでそんな面倒なことをするのでしょうか？

言葉に気兼ねし、言葉に忖度しているようではないですか。

言葉を重んじている。言葉にひれ伏しているとしか見えません。

＊

そもそも言葉は代理です。本物であり現物である世界や事物の代わりですから、偽物とも言えます。偽物という言い方に抵抗を感じれば、似たもの、似せたもの、似ているものでもかまいません。

なんで？

なんで、最高権力者、つまり代理が偽物（あるいは似たもの）にひれ伏すのでしょうか？

偽者だから？　偽者が偽物にひれ伏す？　似たもの同士だから？

こんなの駄洒落を使った悪態じゃないですか。悪態をつくだけでは、むなしいです。情けないです。

＊

なんで代理である権力者が、代理である言葉にひれ伏すのでしょうか？

自分が立てた問いですので、自分で考えるしかなさそうです。

#言葉 #日本語 #代理 #権力 #嘘 #知覚 #本物#偽物

03/10 筋を通すために黙らせる

＊

筋を通すために黙らせる

星野廉

2022年3月10日 08:34

目次

欠くから、書くへ

本物の偽物、偽物の本物

なんで言葉にひれ伏すのか

名前と物語を残す

残すために黙らせる

「決める」ではなく「決まる」

欠くから、書くへ

現在は、偽物と似たものと似せたものと似ているものの境目が不明になっている時代だと感じられます。

本物はありません。現物也没有ありません。ヒトもほかも生き物たちも、知覚機能という代理を使わないと、世界に触れることができません。ヒトとヒト以外の生き物たちにとって、世界はたどり着けない偽物なのです。

ヒトはプライドが強い生き物ですから、偽物という言葉に抵抗を感じるでしょうから、似たもの、似せたもの、似ているものと言い換えてもかまいません。

＊

世界と触れあえないヒトにはもうひとつ、世界に触れるために使っている代理、つま

り偽物があります。それは言葉です。これはヒト以外の生き物には使えないとされています。

言葉を話し言葉と書き言葉に分けて考えてみましょう。表情や身振りや仕草といった言葉をとりあえず無視してみます。したがって、残念ながら手話も割愛させていただきます。申し訳ありません。

話し言葉はたちまち消えます。まさに話すは放すなのです。人を離れた瞬間に消えます。録音することが可能ですが、録音した音声も、再生したとたんに消えます。

話し言葉でせつかく何かを決めても消えるのです。決めても消える。消えるのは決め手を欠くからです。そこで書くのです。

欠くから書くへ。

何か足りないから補ったというわけです。大したものです。大昔は、書くが搔くだったという説があります。木や石や土を引っ搔いて印を付ける。

決めるが消える。

決めても消える。決め手を欠くから引っ搔いて書く――。

ただし諸説あり。

*

書き言葉というのは大したもの。なにしろ残るのですから。

決めたことも残らなければ意味がありません。話し言葉だとたちまち消えます。口約束なんてするものじゃないのです。

書けば残ります。

約束、契約、誓い、宣言。こうしたことはすべて決めることです。取り決める、さだめ

る、ちぎる。

具体的には、握手、挙手、手締めをとまいませんが、手を使うことに注目しましょう。

文字は、ふつう、手で書きます。これが決め手。

本物の偽物、偽物の本物

書き言葉である文字も、話し言葉である音声も、現物でも本物でもなく、偽物、言葉が悪ければ似せたもの、似ているもの、似たものです。

これしか本物に似たものがないと言えますが、これこそが似たものだと言えば、元気も出るでしょう。

これぞ、似たもの。本物に似たものはこれしかない。

どうですか。元気が出ましたか？ 言葉が素晴らしいものだと実感できましたでしょうか？

ほかにないの？ 仕方ないなあ。そんなふうにする方もいらっしゃるにちがいありません。

では、代わりに、代理でどうでしょう？ 似たようなものですが、こっちのほうがいくぶん格好がつくかと思います。

偽物としての世界じゃなくて、代理としての世界のほうが、響きも字面もよろしいようです。

*

偽物、これしか本物に似た物はない。

代理、あくまでも代役でしかない。

それでも取り替えがきかない偽物・代理があるのです。言葉です。

言葉は掛け替えのない偽物であり代理だと言えそうです。ほかにこんなものがありますか？

＊

現在は偽物と、似たもの、似せたもの、似ているものの区別が不明になっている。

知覚されたものも、言葉も似ているもの、似せたもの、似たもの、つまり代理であるのに加えて、その代理を複製するという形で情報と化した映像と、言葉の複製の複製、つまり文書や録音された音声が、電波やネットをとおして世界中にさらに複製され、同時に拡散している。

ややこしくてごめんなさい。

言葉が知識から情報へと出世魚のように名前を変えたから、ややこしくなったのです。

たとえば、みなさんがテレビやネットのニュースでご覧になっている映像や音声やテキスト（文書）のすべてが現物ではなく、複製の複製であると言えば分かりやすいかと思います。

映像もテキストも情報なんです。情報は瞬時に複製・拡散できるという特徴を備えています。弱点は、どれが本物の偽物かが分からなくなっていることです。

いまや、本物の偽物（本当の偽物）と偽物の本物（フェイクの本物）があるのですけど、見分けがつかないという意味です。

いまや、本物とは、本物だと決めるか、本物だと信じるしかないとも言えます。じっさい、そうなっているようです。現在の世界の状況を拡散された偽物と代理をとおして

見ているとそんな気がします。

どことは名指しませんが、信じられないようなことが起きています。誰とは言いませんが、信じられないような考え方をしている人たちがたくさんいます。でも、それはあくまでも私が信じられないだけなのです。

なんで言葉にひれ伏すのか

すべてが言葉なのです。言葉として処理されます。

言葉である名前と、言葉からなる短めの文章が残れば、それが歴史に名を残すこととなります。

誰もが生まれたときに、既に言葉たちがありました。自分の外にある言葉たちを、真似て学んで身につけたのです。

どうやら死んだあとも、言葉たちが残るらしい。ある意味で言葉たちは永遠だ。不滅だ。その言葉たちに、自分の名前と短文の自分のストーリーを残したい。

そのためには、言葉をおろそかにはできない。辻褄を合わせておけば、自分の名前と自分の偉業が言葉として残るにちがいない。

*

なんで？

なんで、最高権力者、つまり代理が偽物（あるいは似たもの）にひれ伏すのでしょうか？

(拙文「どうして嘘をつくのか」より引用)

なんでなんでしょう？

言葉は神である。なにしろ、最初に言葉ありきだし。

こういう短絡はしたくありません。いかにも予定調和的なシナリオです。

神や神秘という言葉はブラックボックスのようなもので、そこで話が止まります。思考停止と判断停止をもたらすという意味です。

黄門様の印籠のようなもので、これが見えぬか見えを決められると、とたんにものが見えなくなり、へへえーと頭を垂れ、黙るしかなくなるわけです。

＊

「見えぬか」と見えを決められたとたんに何も「見えなくなる」印籠あるいは引用。

権力と権威は近いと言わざるをえません。

引用は威を借りることなのです。文章だけでなく、固有名詞は最小最短で最強の引用でもあります。

名前と物語を残す

なんでなんでしょう？

なんで、最高権力者、つまり代理が偽物（あるいは似たもの）にひれ伏すのでしょうか？

言葉、とくに文字が残るからかもしれません。

詳しく言うと、言葉が人の外にあって、中に入って来ることもあり、中にあると外にあると、つねに外であるからかもしれません。

言葉が残るというのは、つねに外にあるという意味です。つねに外であるとは、人のもののように、ものにできないという意味です。手にしているようで手に負えないのです。

こんなものってほかにありますか？

＊

なにしろ、誰もが生まれたときに、既にあったものです。それを真似て学んだのです。刷り込まれたとか学習したものと言い換えると、その大切さとしつこさが体感できるのではないのでしょうか。

絶対的な権力を持っている代理人も、刷り込みと学習には勝てないのかもしれない。

刷り込みや学習も予定調和的な印籠で、思考停止と判断停止をもたらすことに敏感でありたいと思います。

＊

言葉は無視するわけにはいきません。自分が死んでも残るのなら、ただ名を残すだけでなく、辻褄と合わせて体裁を整えた言葉とセットにして残したいのが人情ではないでしょうか。

ひれ伏さずにはられません。崇めないなんてありえない。

名を残すなんて、最初に言葉ありき並みの短絡になりましたが、とりあえずはそんな気がします。

詳しく言うと、自分の名前と自分の物語を残す、です。歴史に、です。歴史も物語であり言葉として語られます。騙られもします。

フランス語では、日本語の物語と歴史に相当する言葉が同じだったりします。だから何？という話ですけど。

いずれにせよ、言葉として残すしかありません。言葉を重んじるしかありません。言葉に頼るしかありません。

残すために黙らせる

名を残す、つまり自分の名前と自分の物語を残す前である、生きている間にはひたすら黙らせることに集中します。

自分にとって都合の悪い言葉を吐く人、自分にとって都合の悪い言葉を書く人、人だけでなく、そうした言葉を複製し拡散する機械も消すのです。

黙らせるのです。自分の筋を通すために黙らせるのです。

言葉を消す。人や機械を黙らせる。人なら拘束するか殺めるのです。殺めれば永遠に黙りますから、権力が強大であるほど、こっちを選ぶでしょう。

自分の決めた言葉だけが残っていれば、それでいい。

そのためには言葉を重んじなければなりません。言葉を話し、書きとめ、文字にして、残すのです。残すだけではなく、複製拡散する。

その身振りが、言葉にひれ伏すように見えたとしても、気にならないのでしょうか。そういう自分の姿が本人（あるいは本人たち）には見えていないのかもしれない。

*

見えていないから怖いのです。自分の姿が見えていない強大な権力ほど怖いものはなさそうです。

おそらく代理である自分が代理であることを忘れたついでに、言葉が代理であることも忘れたのではないのでしょうか。

代理、正確に言うと「代理であること」あるいは代理性は、きっと人を超えた存在で

す。だから忘れるのです。「代理であること」が空回りし、自転しているのかもしれませんが。

非人称的とか匿名的という言葉も頭に浮かびますが、これも神と同じくブラックボックスであり、予定調和的で使いたくはありません。

それは偽物が空回りし、自転するのにそっくりなのです。人の思惑を離れて、勝手に回り続けるのです。

たぶん、筋があるのです。筋書きと物語があるような気がします。この筋を論理と呼ぶ人もいそうです。論理は筋を成り立たせる最小の要素なのかもしれません。

偽物であり代理である言葉は、この筋と親和性があるのは確かでしょう。

なお、筋もまた、偽物でしかありえません。「これは本物の筋だ」と自分で決めて、自分で信じるしかないようです。ほかの人に決めてもらって、それを信じるほうがずっと楽ですけど。

「残すために黙らせる」とは、きっと「筋を通すために黙らせる」のです。その筋が特定の「私の」と「私たちの」であるときに、悲劇と惨劇が起こるのではないのでしょうか。

自分（たち）の筋を通すことができるだけの権力（もちろん武力も込みです）を手にしたと信じている人（たち）の恐ろしさはそこにあります。

筋のほうが、人の命よりもずっと大切な人がある。

「決める」ではなく「決まる」

いま、言葉が勝手に回っているのを感じます。「決める」ではなく、「決まる」感じ。

言葉に任せる。出るに任せる。偶然に任せる。いや、何かに任せる。そんな感じ。

＊

とりとめなく散漫な文章になっているのをお詫び申し上げます。

＊

いやいや、まだまだ予定調和的です。ぜんぜんわくわくしないのです。

十分に任せていないのが見やぶられているのかもしれませんが、というか、十分に賭けていないのが見透かされているにちがいありません。

任せるのは負けること、それも全面降伏なのに、こちらは手抜きをしているようです。

つまり、こっちの負けが偽物だということです。こっちの負けと賭けが偽物であることが見やぶられている。

だから、「何か」がわくわくさせてくれないのです。わくわくさせてもらえない。

＊

私はわくわくしたいから書いているだけです。

私は研究者でも探求者でもありません。note にいるピン芸人ですが、芸がないのです。ゲーム（芸無）の達人。要するに、芸人と自称しながら芸が無いので、すべるギャグしか飛ばさないのです。自傷ギャグ。

話はまだ続く気がします。

言葉は回る。私の頭の中も、ぐるぐる回る。きょうはいつもよりもたくさん回らせていただきました。

#日本語 # 代理 # 権力 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 知覚 # 本物 # 偽物# 筋 # 物
語 # 論理

03/10 決める、決まる

＊

決める、決まる

星野廉

2022年3月10日 15:55

目次

辻褄を合わせる

言葉が出た瞬間

しどろもどろ

決める、決められる、決まる

筋を通す

現実、思い、言葉

たった一人で決める、決まる

辻褄を合わせる

辻褄を合わせるのに懸命になっている人や人たちがいます。

身のまわりにいる——テレビやスマホで見える人でもいいですけど——そんな人を思いだすか、想像してみてください。

辻褄と言いますが、何に合わせているのでしょうか。論理でしょうか。因果関係なのでしょうか。辞書で調べると、道理とか筋道とか始めと終りなんて言葉が見えます。

個人的には、筋がいちばんしっくりきます。

＊

「ああ言った手前、——」、「ああ言った以上は、——」、「ああ言ったのだから、——」。
「言った」と「書いた」としても同じでしょう。

何かに合わせている感じがあります。相手でも、自分でもないのです。強いて言うなら、「何か」です。「誰か」に合わせていないことは確かです。

その「何か」は言葉なのでしょうが、それは結果であって、言葉以前ばい気もします。

やっぱり筋みたいに思えます。

言葉が出た瞬間

言葉が口から出た瞬間に、それが自分の思いを離れて、勝手に受け取られる。

「しまった」、「あれ？　そう取られたか、ラッキー！」、「どうしよう、撤回するわけにはいかない」、「ま、いっか」、「何だ、反応がまちまちだな」、「そうなんだ、そういうことだったのか」、「そうそう、そう言う意味なの、そう言いたかったのよ」、「いまの言葉って私が言ったの？　うっそー」

これは書いた文字でも同じでしょう。ただし、文字は残ることが、録音されない音声との大きな違いです。

＊

ぶれる。前言撤回。失言。

これらは政治家だけでなく、言葉を使う人にとっていちぼんの悩みではないでしょうか。

私なんかしょちゅうです。記事を書いてから、あらら、しまった、OMG、穴があったら入りたい、どうしましょう……、の連続です。

言葉は決められない、言葉は勝手に決まるもの、と感じることは日常的に頻繁に経験します。

通じない、伝わらないなんて、当たり前の話で、それよりも、自分に問題があるらしい、ぶれや前言撤回のほうが、自業自得っぽくて自己嫌悪におちいります。

*

でも、待ってください。本当に自業自得なのでしょうか。

言葉って勝手に決まりませんか？ 日常的に、そういう瞬間がよくありませんか？

しどろもどろ

私は、しどろもどろが好きです。

自分が何か話しはじめたとします。ぜんぜん何を話すか頭にないままです。私はこういうことがよくあります。

緊張するからかもしれません。人生ついでに生きているような投げやりな気持ちがあるからだという気がします。

言葉をぼんと投げるようにして、あるいはぼつぼつつぶやくようにして、会話をしていく。あるいは一方的にこちらから話すのです。

相手しだいで方向が決まってきます。決まるのです。決めるんじゃないありません。

あの「決まる」感が好きなのです。

ああ、人生捨てたもんじゃないわ。あれよあれよ。すげー。よく言うよ（自分のことです）。

何かに運ばれている感じがします。言葉にうながされている気がします。駄洒落にもちょっとだけ似ています。

言葉が勝手に決まっていく感じ。私は好きです。あの快感に、はまっているかもしれません。

Mっぽい感じもします。いや、ぼいどころか、かなりM的ですね。早い話が、ドMです。

そりゃあ、そうです。すべてお任せの、へそ天状態なのですから。

何に任せているのかが不明である点がポイントです。賭けなのです。

決める、決められる、決まる

自分が決めたと思っているのに、じつは決まったようだと感じる場合があります。

いちばん分かりやすいのは音楽かもしれません。コード進行という言葉で私がイメージしているものにきわめて近い気がするからです。なぜがその方向に進んでしまうのです。聞く側だと、なぜかある旋律に運ばれてしまうのです。

「なぜか」がキーワードです。この「なぜか」は「何となく」にととても近いです。

*

文章を書いている、なぜかある方向に行ってしまう。ある言葉が出てきてそれにうながされて書いてしまう。筋のようなものが見える気がして、その筋に従って書いている気分になる。

なぜかみんなと同じ仕草をしてしまう。なぜかみんなと同じような言葉を口にしてしまう。その場の空気に染まる感じ。

なぜか、その人と同じ身振りや表情をしてしまう。なぜか、その人と似たような行動をしてしまう。

なぜか、自分の中に誰か——それも複数だったり多数だったりする——の言葉や行動パターンや声や表情があって、なぜかそれに合わせてしまう自分がある。

自分が引用の織物だったり、パッチワークだったり、ごった煮のように感じることもある。

「お父さまに似ていらっしゃいますね」、「その仕草、お母さんにそっくり」、「あなたのこの文章だけど、似たような文章がここにあるの」、「こどもって、なんで太陽と海はこういうふうを描くわけ?」、「記述は既述だって、どこかのアホが書いていた」、「私の書いた記事の下にある「こちらもおすすめ」ってリストなんだけど、同じようなことを書いている人っているものなのね」、「それって、お笑い芸人の〇〇が十年前にやっていたギャグだよ?」

＊

自分で決めたつもりなのに、決まっていた。自分で書いたつもりなのに、誰かが書いていた。自分だけのものだと思っていたのに、誰かが（みんなが）「自分だけのものだ」と主張する。

＊

自分ではAのつもりで言った（書いた）のに、Bだと受け取られた。自分に問題があるのだと思っていたら、〇〇さんがまったく同じことを言ったら（書いたら）、Cだ（Aだ）と受け取られていた。

＊

言葉は誰もが生まれた時から、自分の外にあって、それを真似て学び、自分の中に入れたから、自分のものだと思っているのに、なかなか思いどおりにならない。

中にいるのに、外にいる気がしてならない。そりゃそうだ。中にいるけど、いまでも外にもいるわけだし、多数の他人の中にもいるのだから、言葉は自分の思いどおりになるわけがない。

言葉は外なのです。

口にしたり、文字にしても、それが伝わるとは限らない。伝わらないほうが多い気がする。

*

自分で決めたつもりなのに、誰かが決めている気がする。誰もがそう感じているとすれば、「決める」のではなく、「決められる」のでもなく、むしろ「決まる」ではないか。

*

自分があずかり知らないところで、すべてが決まっていた。

これはまったく悪いとは思えません。何かにお任せした感じが捨てがたいのです。楽と言えば楽なのです。

筋を通す

すばり「筋を通す」という言い方がありますが、「辻褄を合わせる」よりは流れと動きを感じます。

ダイナミックなのです。偉そうでもあります。

言葉は「決まる」ものだというのは、筋という言葉とそのイメージで説明するのがいいかもしれません。

筋とは、流れ、論理、語り、物語、進行（コード進行の進行です）、旋律、節と近い気がします。

筋がおおむね決まっていて、それに沿って進んだり、運ばれたりするのです。

筋は言葉を超越した存在であるだけでなく、人知を超えた一種の法である気がします。

＊

＊何となく「何となくでない」をしている。

(拙文「何となく」より引用)

※「筋」に興味のある方は、ぜひ上の記事「何となく」をお読み願います。「経路」という言葉で説明しています。私にとっては大切な意味を持つ記事なのです。

＊

ある言葉を自分が口にしたり、文字にすると、それがあつ方向を目指して勝手に進んでいくような気がするときがあります。

その言葉を耳にしたり目にした人がその方向を目指しているようにも感じられますが、そうではなくて言葉が勝手に進んでいく場合の話です。両者の区別は難しいです。区別すべきものでもない気がします。

言葉という代理、言葉という現物に似たもの（似せたもの、似ているもの、偽物）が、勝手に進む、勝手にある身振りをする、ある表情をする。そんなイメージなのです。

＊

私は論理的な人間ではないので、筋を通すということはできそうもありません。

すごくしんどそうなのです。できれば筋を通すなんてしたくありません。

辻褄を合わせ、筋を通すために、言葉を選んで話したり書くなつて、考えただけで頭がくらくらしてきました。汗も出てきました。

しどろもどろくらいがちょうどいいです。私みたいないい加減な人間には身分相応と

05/10 決める、決まる

いう感じがします。

*

というか、私の記事はだいたいがしどろもどろで書いています。しどろもどろで書きながら、駄洒落が助けてくれると、これはもう至福の時です。

駄洒落に手を引かれながら、文字にしていきます。

「おいおい、そっちじゃない、こっちだよ」、「それを言うならこれでしょ?」、「イマイチだなあ、ちょっと考えさせて……」、「これこれ、これだよ」

こんなふうに通かれて書いていくのです。

現実、思い、言葉

現実、思い、言葉。この順に重い気がします。重くて思いのままにならないのです。言うことを聞いてくれないとも言えます。

現実はず動かさせません。念力を使うと動かせるでしょう。

思いはそこそこいじれます。思いを自由自在にさくさくと動かせる人は夢も自由にできるでしょう。

言葉はかなりいじれる気がします。でも気がするだけなのです。代理という偽物（似たもの）を使うからです。隔靴搔痒の遠隔操作です。もどかしさは致し方ありません。

*

思いのままにする、言うことを聞かせる、これは「決める」です。

「決める」と「決まる」は異なります。「決まる」はこちらの思いのままになることでは

なく、勝手に決まるのですから、「決める」と「決まる」はほど遠いようです。一字違いだからと言って馬鹿にできません。

＊

個人、集団。一般人の個人と集団。そこそこの権力を握る個人と集団。最強の権力を握る個人と集団。

「決める」と「決まる」は、それぞれにおいて異なる気がします。

何を決める、何が決まるのかというと、現実、思い、言葉なのですが、現実と思いはまず、決めることができそうもないので、簡単にいじれる気分させてくれる言葉で考えてみましょう。

＊

個人で考えてみましょう。個人レベルで文章をいじる。言葉をいじる。言葉はいじれても、言葉が言うことを聞いてくれるとは限りません。思いどおりになるわけではありません。でも、いちおういじれるのです。

たとえば、この駄文はそこそこいじった結果として書けていると言えそうです。でも、思いどおりに書けたわけではないし、どう読まれるかは思いどおりになりません。勝手に読まれるからです。

しかも読んだ人がいたとして、読むとは何でしょう。見るに近い読むもあるでしょうし、読む気がなくて読んでいるもあるでしょう。書いてないことを読む人もいます。「え？ そんなこと私書いたっけ？」

読まれるとは、勝手に読まれることです。

こちらはなすすべがありません。なすがまま。茄子がママ。きゅうりがパパ。言われるまま、言うばば。

いまの駄洒落は、言葉に任せると出てきます。言葉の前でへそ天状態になるのです。思いのままにならない言葉ですが、こんなこともできます。なぜか出てくるという意味です。

私はこういう書き方をよくします。嗜癖（しへき）しているのでしょうか。辟易（へきえき）されます。

たった一人で決める、決まる

アホが馬鹿をやるのはほどほどにして、シリアスな話に移ります。

現実、思い、言葉。この順に重い気がします。重くて思いのままにならないのです。言うことを聞いてくれないとも言えます。

もし現実と言葉を思いどおりにできるなら――。

こう想像してみてください。言葉は誰でもそこそこいじれますが、それどころか、自分の言葉が決まりになり、誰もが言うことを聞く場合です。

自分の言葉が即決まりになる、つまり法律になるのです。法律になれば、それに人びとが従います。ということは、現実もほぼ思いどおりになるのです。

法律に従う、つまり合法ですから、法に則っているのですから、辻褄が合っているし、筋が通ってもいます。

こういう言葉のうえでの体裁はきわめて大切なようです。これがないと人びとはついてこないかもしれません。あるいはついてくる振りをしないのかもしれませんが。

言葉にひれ伏しているかのようにも見えます。見えるだけです。

*

ただし思いだけはままなりません（ここでばばという言葉在必死に堪えます）。思いだけは思いどおりにならないのです。

自分の感情を操ることなら、ある程度心理学的な訓練をしてできるようになるかもしれません。

超一流のスポーツ選手が雇っている超一流のメンタルコーチによるコーチングもあります。

また、そういうことが生まれながらにしてできる人も稀ながらいるだろうと思われ
ます。

とはいえ、自由に夢を見るとか、夢の中で自由に振る舞える人はいない気がします。その意味で思いはままならないと言えそうです。

＊

もし現実と言葉を思いどおりにできるなら――。

自分がそうだと思いこんでいる人がいるとすれば、最高権力者でしょう。軍隊の指揮権も握っているはずです。

まわりには「はい、そのとおりでございます」と言う人しかないという状況ですね。

自分の言葉が即決まりになる。

ある意味大変でしょう。相当メンタルが強くないとそういう決断は下せない気がします。論理的でもなければならぬでしょう。

巨大な組織や軍隊を動かすには論理が必要です。こういう立場での意思決定はかなり論理的でなければ物事を動かせないし、だいいち部下が困ります。

論理的が理性的である必要は必ずしもない気がします。倫理的である必要はないでしょう。

正気かどうか、これは価値判断ですから、何とも言えません。逆にいえば、何とでも言えるという意味です。じっさい、そうですね。諸説あり。

正気かどうかは不明ですが、本気であることは確かです。絶対的な権力を握った者の本気は恐ろしいです。

*

自分のストーリーつまり筋書き、自分の物語つまり歴史を、言葉にしていく。これが、この最高権力者の辻褃合わせであり、筋を通すという仕事になります。

自分は歴史を作るのだ。そう信じていないとできない作業でしょう。

自分の言葉が即決まりになる。自分の言葉が現実になる。自分の物語が歴史になる。

とんでもない話ではないでしょうか。

たった一人で「決める」、これが「決まる」になるのです。ひいては「決まり」になるのです。

人が「決める」はあります。ざらにあります。でも「決まる」は人の領域ではない。そして、おそらく筋もまた、人の領域ではない。筋違いなのです。

そうあってはならない。

いまはそれしか言葉が浮かびません。

#言葉# 日本語 # 権力 # 辻褃 # 筋 # 論理 # 旋律 # 物語 # 歴史 # 現実

03/11 「たったひとつ」感、「たったひとり」感

＊

「たったひとつ」感、「たったひとり」感

星野廉

2022年3月11日 10:00

目次

無文字という選択

決まり

「それだけ」感

多なのに一

決まりに逆らう、一に抗う

抽象と具象を兼ねそなえた言葉

錯覚は最大の武器

無文字という選択

本来なら、人は本なんて読みたくないのです。読む義理もないのです。

よく考えてください。話すものである言葉を、わざわざ文字にして、それを見るのではなく、読むのですよ（じっさいには「見る」ことは至難の業であり、しかも読めていません）。それを理解したなんて言っているのですよ。かなり不自然で、妙ちくりんなことを、人は発明して毎日やっているのです。

よろしいでしょうか。文字はあくまでも後付けなのです。無文字社会もあったといえます。視覚言語は文字ではありません。表情、手振り、身振りがあります。

人類にとって、無文字でいくという選択肢もあったはずですが。文字社会でいく必然などないという意味です。

それがいつかどこかでズレてしまったのです。言語の獲得（もともとの無文字の話です）と同じくらいの生物学的逸脱かもしれません。

決まり

言葉は決めるのではなく、決まるのです。これで決まり。

「決まる」は絶対なのかもしれません。絶対王政の絶対です。絶対は絶大なのです。絶倫かもしれません。

「決まる」は人知を超え、「決める」は人為。

＊

言葉は決まる。言葉は決まり。言葉で決めれば、決まったことになる。人はあらゆることを言葉として処理する。言葉にならないものは、この世には存在しないという意味。

だから、人は言葉にひれ伏す。

というふうに短絡してみましょう。

シンプルであることが言葉の最大の利点です。真実はシンプルでなければならない。

というふうにも短絡してみましょう。

＊

言葉の中でも書き言葉、つまり文字はシンプルに見えます。

愛

は愛なのです。

揺るぎない。ぶれない。不動。永遠。不変。普遍。不偏。不返。

愛の両義性どころか、多様性や多層性が見えなくなるとも言えます。

＊

文字は無限に複製し拡散できます。

どんなに数が増えても、愛は愛なのです。

愛がたったひとつの文字であることに注目しましょう。これは、愛の意味がたったひとつであり、その価値もったひとつであり、それゆえに普遍であるというイメージをいだかせます。

＊

愛は一字ですが、もう少し長くしましょう。

世界はひとつだ。

こう書くと、世界はひとつに思えてきます。そう思わない人も、この文字列を見た瞬間は「愛はひとつだ」と思います。思わないと読めません。信じないと読めないのです。

思って読んだ後に、「やっぱ、違うわ」と判断するのです。

世界の多元性を思う人もいるという意味です。

＊

とはいうものの、一度でも思わせ、信じさせたもの勝ちです。

脳は次の「読み、信じる」という処理作業に移らなければならないからです。判断なんてしている暇はないのです。

このようにして、文字を読んで、そう思った、そう信じただけが、残ります。

読むの基本は信じることなのです。

「それだけ」感

文字はシンプルで、「それだけ」感が強いのです。「それだけ」感とは、「感」ですから印象でありイメージです。検証ができません。

「それだけ」っぽい。「それだけ」がぶんぶんにおう。なんとなく「それだけ」という感じがして、「それだけ」という気分になるとも言えます。

*

「それだけ」の対極にあるのが、「ああでもないこうでもない」「ああだこうだ」「ああでもありこうでもある」「ああだとも言えるしこうだとも言える」「こうかもしれないし、ああかもしれない」という感じですか。

これじゃ困るのです。訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

そんなんじゃ使えないのです。容量が重すぎて動かせません。面倒くさくもあります。

*

文字はシンプルに見える。いくらでも複製・拡散可能。

決まったものはシンプルであることに越したことはないのです。持ち運びやすく、さくさくと読めなければなりません。

多なのに一

目で見える「たったひとつ」「たったひとり」が文字です。

「山」とあれば、山というものがあると錯覚する。単一な山を想定してしまう。「人」とあれば、人というものがあると思ひこみ、人の多様性を無視して、人一般を思いうかべてしまう。

抽象です。抽象とは、切り捨てることです。一本化の代償とも言えるでしょう。

とくに固有名詞。中でも人名の「たったひとつ」感と「たったひとり」感は強いです。ある特定の人物の多様性を忘れさせ、ある人物が多数、無数の人物や事物と結んだ関係性という絡みを一本の短い線に変えてしまう。

他人とは多人なのです。こう書いてもむなし。「たったひとり」感は絶大なのです。

多なのの一に見える仕組み、それが文字です。

世界をシンプルに見たい人には、文字は最適の錯覚製造装置なのです。

決まりに逆らう、一に抗う

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりまだらでまばらですかすかであること）、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

一への反抗。多への賞賛。

背後に、一神教がある、ロゴスがある、なんていう予定調和的な言い方をすれば、なるほどと思われる方もいらっしゃるにちがいません。

※ロラン・バルト（64歳没）、ミシェル・フーコー（57歳没）、ジル・ドゥルーズ（70歳没）、ジャック・デリダ（74歳没）。瞑目合掌。

*

簡単に言うと、次のようなイメージです。

訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

心当たりがありませんか？ そんな感じでしたよね。

「たったひとつ」を目の敵にして、複数性だの多数性だのを武器にして、反抗しまくったのです。

いまは下火ですね。残党はいるにはいますが、どっちかという「たったひとつ」的な方法で、「たったひとつへの抵抗」をながめているという倒錯におちいっている感があります。「感」ですから印象です。

*

フランス以外の欧州や、アメリカや、はるばると離れた日本でも、似たようなレジスタンス運動が見られました。

日本でも、欧州のローカルな問題をまるで普遍的な自分の問題であるかのように錯覚するという倒錯がはやり、いまもその残滓があるみたいです。詳しいことは知りません。

ちょっとだけイメージを言いますと、フランス語やドイツ語や、はたまたラテン語や

ギリシャ語の駄洒落や言葉の綾を、まるで自分の問題のようにありがたくいただいて翻訳語あるいはカタカナ語で議論しているのです。

*

原文でやればいいことを翻訳でやっている。自分の問題、自分の生まれ育った環境での問題として考えていない。

母語を失念し、ないがしろにした議論だという意味です。いっそ、原語で議論したほうが真摯な態度だと思います。いずれにせよ、普遍信仰です。「たったひとつ」を指向しています。

「たったひとつ」への反抗を対象に「たったひとつ」を目指している倒錯感があります。固有名詞にひれ伏し、作者を信じ、テキストの一義的な解釈を指向しているように見えるという意味です。あくまでも印象です。

抽象と具象を兼ねそなえた言葉

言葉は誰もが生まれた時から、自分の外にあって、それを真似て学び、自分の中に入ります。

これは言葉がこと（言・事）であり物でもあるからです。抽象と具象を兼ねそなえているとも言えるでしょう。

中にいるのに、外にいる気がしてならない。中にいるけど、いまでも外にもいるわけだし、多数の他人の中にもいるのだから、言葉は自分の思いどおりになるわけがない。そんな側面もあります。

他人は多人であり、他者は多者であるからです。

その結果として、言葉は外なのです。外だと言えます。

＊

外にある言葉を遠隔操作するなら——正確には外にある事物を、やはり外にある言葉という代理を使って遠隔操作するなら——、軽量でさくさく動かせたほうがいいに決まっています。

話し言葉はもたもたしています。時間がかかります。それに対し、書き言葉である文字は軽量でコンパクトでさくさく動かせます。

抽象と具象と兼ねそなえていますから、人の中に入ったり出たりもできます。

こんなものがほかにありますか？

錯覚は最大の武器

抽象化、コンパクト化、見える化、さくさく軽量化。これらを実現したのが文字です。

何を「〇〇化」したのかといえば、世界、宇宙、森羅万象でしょう。一本化、一つに絞る、これが抽象です。多を一だと錯覚し、チョロいもんだと見なすわけです。

さくさく軽量化すれば、無限に複製し拡散することが可能です。げんにそうなります。ますます拍車がかかるでしょう。

言葉は知識から情報へと出世魚のように名を変えたのです。正確に言えば、言葉というより文字です。

＊

話し言葉は相変わらず重いです。もたもたしています。話すにしろ、再生するにしろ時間を要します。

「話す」は時間の持続と経過の中にあるからです。しかも瞬時に消えるという最大の特徴

(弱点でもいいです) をかかえています。

*

現物の代わりに似たものを使う。代理を使う。代理である偽物をいじって、本物を操っている気分になる。

錯覚は人にとって最大の武器だと思います。ここまで来ることができたのは、錯覚のおかげでしょう。

武器ですから、自分に向くこともあることを忘れたくないですね。

言葉 # 日本語 # 文字 # 錯覚 # 話し言葉 # 書き言葉 # 情報 # 抽象 # 具象 # 複製

03/11 世界の意味、意味の世界

＊

世界の意味、意味の世界

星野廉

2022年3月11日 13:59

目次

いったい何なのか？

ほのめかしとしての世界

「何か」に「何か」を見る

あらゆる物に何かの意味があるらしい

「何か」は「何か」のしるし

Aと書いてありながら、じつはBであったりする

振りをする世界

曖昧放置プレイ

世界は隠喩である、隠喩としての世界

いったい何なのか？

ある詩を読んだとします。涙が出たとします。

「それは AI が書いたんだよ」

＊

ある文章を読んだとします。わくわくどきどきしました。自分に宛てた手紙のように読めて、居ても立ってもいられない気持ちになったとします。

「その文章の各行の出だしの一文字だけを続けて読んでごらん」

ある意味のある言葉になるのです。

＊

この短歌の韻を説明せよ。

「意味あるの？」

＊

この俳句の隠喩を説明せよ。

「なんで？」

＊

「この詩の掛け詞について論じなさい」

「先生、掛け詞と駄洒落って、どう違うのですか？」

「別称と蔑称みたいなものと言えば、分かるかな？」

＊

おもしろく読んだ文章が、あるいは感心した文章が、アナグラムだったり、回文だったり、言葉遊びだったり、何かの暗号であったり、メッセージであったりする。

ずっと聴いていて大好きな音楽が、メッセージソングだと言われて、その意味や解釈を丁寧に解説される。

抽象画だと思ったのが、ゴリラの描いた絵だった。機械が描いたものだった。孫の描いたものだった。娘の描いたものだった。自分のこども時代に描いたものだと親に打ち明けられた。

＊

作品は作者から離れて存在するという考え方がどうも理解できない。まっとうな意見だと思えない。考えただけでむかむかする。

AIの創作と聞くと、なぜか感情的になって血圧が上がる。

回文とアナグラムからなる詩に涙した自分が許せない。

外国人の詠んだ俳句だと聞くと身構える自分がある。その人の母語が日本語だと聞いてほっとする自分もいる。

漢詩や西洋の詩の韻が駄洒落に思えてならない。

韻や掛け詞のある詩に抵抗がある。

創作における、でたらめと偶然と技巧と作為の違いって何だろう。そもそも違いなんてあるのか。

やっぱりレトリックはトリックだと思う。好きになれない。

短い定型詩にそっくりな作品や同一の作品が生まれるのは、確率の問題なのか、偶然の所産なのか、独創性の欠如なのか、無意識の引用なのか、無意識の剽窃なのか、気にすることなどないのか、作者が違うでしょとか背景と文脈が違うでしょと抗議すればいいのか。

友達が酔っ払って書いた詩が大賞を取った。自分の作った短歌が盗作だと言われた。尊敬しているとみんなに言っていた作家が不祥事を起こした。

＊

がっかり。屈辱。絶句。啞然。呆然。ぶ然。怒り。ふて寝。

「え!」、「ばかやろう!」、「うっそん」、「あらら」、「まいったな」、「……」、「むきーっ」、「そうなの? (無表情)」、「ふーん (平気な顔)」、「あんたさあ」

＊

意味はどうやって決まるのでしょうか？

決めるのでしょうか、決まるのでしょうか？

意味を人は決めることができるのでしょうか？

意味は自立しているのではないのでしょうか？ 意味は世界と同じように多であり、他
 なのではないのでしょうか？ 他者であり多者なのではないのでしょうか？

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかす

ほのめかす世界

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかしに満ちている

以上のフレーズが並んでいる、あるいは並べられているさまを見ていると、それぞれ
 にほのめかしを感じます。同時に、四つ並んでいること、あるいは並べられていること
 にも、ほのめかしを感じないではいられません。

ほのめかしが気になるときりがありません。

＊

世界がほのめかしに満ちていると感じるとすれば、それは苦しいでしょうね。何もかも
 が意味ありげに思えてくるのです。こうなるとほのめかしではなく、謎ではないでしょ
 うか。

意味、メッセージ、謎とその答え、正解。

謎めいている。意味ありげ。

この言い方の裏には、じつは謎などはないとか、意味があるようでないのではないかと、

という疑いの念を感じます。まさにほのめかしですね。「〇〇めく」とか「〇〇げ」は疑いの素なのでしょうか。

「もっともらしい」にも通じますね。「もっともらしい」なんて口にすると批判、場合によっては罵倒あるいは悪態です。もっともらしいものが、いろいろな原因になるのはうなずけます。

＊

うちの娘が、さいきん、〇〇テレビの△△アナウンサーが自分に合図をしているって、しきりに言うんです。ネクタイの色が茶系だと何とかいうメッセージだとか、最後の挨拶に何通りかあって、それがこの間送ったメールの返事になっているとか。将来結婚する約束をしたとも真顔で言うんです。あ、夢で約束したらしいのですけど……。

＊

上の文章には意味がありません。隠れた意味もないはずです。たぶん、ですけど。いったん書いた文章は離れていきますので。読み手次第ということにもなります。

とにかく、いま即席で書いただけです。

メッセージなんてありません。隠喩でもありません。韻も踏んでいないはずです。何かの合図でもないです。アナグラムでも回文でも AI 作でもありません。

ほのめかすについて書いていると、ほのめかした書き方になってしまいます。うつるんです。

混乱させて申し訳ありません。

大丈夫ですよ。心配ありません。意味を取れなくなるほうが危ういそうです。

「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見るとき、前者の「何か」と後者の「何か」は違うはずです。異なるはずです。別のはずです。

見るだけにとどまりません。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

＊

意味禍、メッセージという悪夢、「正解があるにちがいない」という強迫観念。

意味は被害妄想に似ています。意味は怪談にもなります。

悲劇にも喜劇にもなるでしょう。あと、惨劇にも。意味は劇薬かもしれません。

意味はギャグにもなります。ちなみに、無意味には意味があります。辞書にも載っているくらいです。もちろん、ナンセンスにもちゃんとした意味があります。そう考えると安心する自分がいます。

あらゆる物に何かの意味があるらしい

だいぶ前のことですが、翻訳の仕事をしていたころ、交渉術についての本の訳出にかかわったことがあります。調べ物をしながら、ビジネス、外交、政治、裁判の現場だけでなく、日常生活においても、人は交渉しているのだなあと感じました。

で、いまでも覚えているのは、外交における交渉の場では、遅刻したかしないか、どちら側が早く来たか、相手の仕草、姿勢、発声の仕方、視線、服装、テーブルに置かれた物の位置……、こうしたありとあらゆるものやことが、何らかの意味を持っているという話です。

疑心暗鬼という言葉を連想しました。なにもかもが意味を持っていて、その意味を解

読しなければならないとしたら、苦しくないですか。被害妄想や強迫観念の世界です。

ほのめかしの面倒くさは、かまってちゃんに似ています。世界がかまってちゃんに満ちている状況を想像してください。面倒くさいどころか、発狂しますよ、きっと。

*

外交や国際政治や地政学といった領域では、ありとあらゆるものが意味やメッセージがあるものとして扱われます。

あの軍事練習はどういうシグナルを送っているのか。あの演習のおこなわれた日時と場所と、他の国際情勢とのタイミングから、指導者が危機的な心理状態にあると考えられる。あの演習の直前にあったパレードでの、指導者の顔色が悪く、視線が泳いでいたのは、健康状態に異変があるからではないか。

そういえば、敵が報道した映像での捕虜のまばたきがモールス信号だったという話を思い出しました。たしか「torture（拷問）」という言葉だったとか。

*

こうした意見や感想や印象が、マスコミで飛びかいます。いろんな人がいろんなことを言います。かまってちゃんに振りまわされているドMちゃんみたい。なにしろ、とてもうれしそうなのです。

間諜（久しぶりにつかう言葉です）、つまりスパイは国際政治の末端で働くひとたちです。スパイの本家である英国のスパイ小説は、じつに具体的な細部に満ち、丁寧に書かれていてぞくぞくします。

intelligence に防諜、諜報、諜報機関、諜報部員の意味があるのは、興味深いです。知能だけではないということです。AI の I であり、CIA の I でもあるわけですが、こういうのを目の当たりにすると、意味ありげに見えてきて、こうした符合を符号に感じてしまいます。

「何か」は「何か」のしるし

「何か」が「何か」のしるしである。

これは占いの構造かもしれません。

〇〇占い。

*

しるし、印、標、徴、証、記。

サイン、シーニュ、シグナル。

sign、signe、signal。

レヴィ＝ストロース、リーバイス、リーバイ・ストラウス。

Lévi-Strauss、Levi's、Levi Strauss。

記号、符号、象徴、表象、暗号。

合言葉、符牒、符帳、符丁、隠語、パスワード。

*

解読、解釈、理解。

悟り、開眼、覚醒。

発見、靈感。

洞察、直観。

*

錯覚、知覚、まぼろし、幻、幻想、幻覚。

空想、想像、推測、憶測、妄想。

＊

要するに、丁寧な文面だけど、このメールはあなたの最近の態度に怒っているわけね。

つまり、この記事は、あなたへの当てこすり。たぶん、ね。

たくさん書いてあるけど、けっきょく、「だめ」って返事よ。

あの帽子はね、「さようなら」というメッセージだと思うの。

この記事のメッセージはただ一言、「かまちよ」だと思えば、腹も立たないでしょ？

この花の花言葉って何だっけ？

あ、これね……。一言で言うと「ちょめちょめ」よ。

隠喩の代わりに暗喩って書いてあるでしょ。これ、換喩よ。

ここはアリュージョンというよりイリュージョンです。

駄洒落を文字どおりに取ったり、真に受けちゃ駄目です。

Aと書いてありながら、じつはBであったりする

英国のスパイ小説で思いましたが、伝統的な英国の小説は、ほのめかしと当てこすりに満ちています。それが読みにくさにつながっているといえそうです。

Aと書いてありながら、じつはBであったり、ひょっとするとCであったりするのです。

私は、わりとこういう書き方が好きです。自分に似ているからかもしれません。

＊

ここで一つ指摘しておかなければならないのは、『日の名残り』と『わたしを離さないで』に限らず、イシグロの小説では事実や思いを遠回しに語ったり、真実を曲げて語る話者が目立つということです。話者ではなくも、ストレートにものを言わない登場人物が多い気がします。

それが英国の小説っぽさなのかもしれません。さっと読んで意味を取ろうとしても、一筋縄ではいかないのです。英国製の小説を読んでいて、ある箇所で詰まってしまい、考えこむことが私にはよくあります。いったい何を言いたいのだろうと裏の意味を考えているのです。

(拙文「素晴らしき敬体小説」より引用)

振りをする世界

世界は符号である。

世界は一つの大きなクエスチョンマークである。

世界は無数の謎の記号からなる大きな疑問符である。

でまかせに即席でつくったフレーズですが、なんだか謎めいて意味ありげに思えてしまいます。

全部が全部とは言いませんが、大半のほのめかしには実体がないのかもしれません。もちろん、意味もメッセージもないという意味です。

ふりがあるだけ。身振りの「ふり」です。

ふりをなぞる。なぞをなぞる。

世界は空疎なほのめかしである。

「ほのめかす」などじつはなく、この世にあるのは「ほのめかされる」ばかりである。

森羅万象とはパントマイムをする身体のない大道芸人の笑いである。

曖昧放置プレイ

両義性や多義性と同じく、ほのめかしは、曖昧とほぼ同義です。

訳の分からないほのめし方をされると、曖昧なままに放置された気がします。

詩や哲学というジャンルでは、この曖昧放置がプレイとして用いられます。ここでのプレイは、まさに多義的であり、遊戯・遊技・演劇・演技・競技といった意味あいを持ちます。

面倒くさいですね。こんなんで放置されたくないですね。

＊

マラルメもニーチェも結果的に曖昧放置プレイがうまい人だったという印象があります。ニーチェはがむしゃらに矛盾と逆説を具現し、マラルメは徹底してほのめかすという手法で読む者を曖昧に放置しました。

禅の公案、世阿弥、芭蕉、そして腹芸という具合に、曖昧放置プレイがお家芸ではないかと思われるこの国にも、マラルメ、ニーチェ、ドゥルーズの信者が多いのは注目すべき現象ではないでしょうか。

今挙げた固有名詞たち——曖昧放置プレイの名人——に共通するのは、真理とか事実とか悟りとか覚醒という言葉が世迷い言だと看破し、概念とか観念とか学術用語とかいう言葉が対応を欠く空虚な記号である、と生真面目に受け止めてしまったという点ではないでしょうか。

(拙文「曖昧放置プレイの名手たち」より引用)

世界は隠喩である、隠喩としての世界

以心伝心、腹芸、顔芸。

シュール、不条理、わけがわからない。

比喩、隠喩、暗喩、たとえ、寓意、象徴的。

寓意とか隠喩と言えば、文学作品のほかに、黙示録やノストラダムスのラテン語で書いた文章を思い出します。

＊

におわす、暗示する。それとなく言う。当てこすり。言外の意味。行間を読む。余白を読む。オブラートに包む。裏読み。

連想。推理。霊視。邪推。解釈。理解。こじつけ。論理。

忖度。憶測。共同幻想。妄想、幻想。

指示、指令、合図。

＊

難解、晦渋。

曖昧、謎、不可解。

こうした言葉がある種の魅力をもち、ある種の人たちを惹きつけてやまないのは事実のようです。

訳の分からないものに魅力を感じる人もいます。感心する人もいます。

有り難く頂戴し、その前で身もだえしながらひれ伏すのです。

へそ天的というか、マゾッホ的状況だと思います。宙づり＝サスペンスは気持ちのいいものです。私も大好きです。

＊

世界は外にあって自立した「何か」なのかもしれません。

私たちは、それを知覚と言葉と気配をとおして、ながめるだけ。

それが何なのかは、賭けるしかない。そんな気がします。掛けられ、宙づりにされているのは私たちなのです。

そう考えると、やはり「何か」は私たちの思惑とは無関係に自立した「何か」なようです。

＊

大きな劇場にたったひとりで椅子に縛られて身動きできない状態で、スクリーンに向かって視線を動かすだけ。

隔靴搔痒の遠隔操作。

夢に似ています。夢は強制的に見せられる映画。自分が参加することも、操ることもできないとりとめのない映画。

その映画の意味は「何か」とひとりずつぶやくしかなさそうです。

＊

その映画はいつ終わるかもわからない。ただ飽きることはなさそうです。

夢はあれよあれよ。すべてが肯定される世界。異議なんてない。

夢がつまらないと感じたことがありますか？

楽しみましょう。夢かもしれないこの夢を。

夢だと思えば、あくびも堪えられます。

＊

おやすみなさい。

Sweet dreams.

#夢 #意味 #メッセージ #隠喩 #寓意# ほのめかす #メッセージ #詩 #文章 #レトリック

03/12 「何か」に「何か」を

＊

「何か」に「何か」を

星野廉

2022年3月12日 08:25

「何か」に「何か」を見る。

このフレーズで連想するのは、壁の染み、天井の模様、雲、そして占いです。そのさまを思えばぐとぞくぞくします。このぞくぞくは懐かしさをともなうのです。

幼いころに、身のまわりのいろいろなものを見たり眺めていたとき、たぶん「何か」に「何か」を見ていた気がするのです。飽きませんでした。ずっと眺めていたかったという記憶がよみがえってきます。

空想や想像という言葉も連想します。見ているようで、何か別のことを考えている。別のものを見ている。別のものと重ねている。別のものがやって来ている。

見ることの難しさを感じます。「何かそのもの」を見ることの難しさのことです。必ず、「何か別のもの」を見ているのです。置き換えているのかもしれませんが。

＊

「何か」をその「何か」ではないものに置き換える。

こどものころから、落ち着きがない、ぼんやりしている、と言われてきました。「いま」と「ここ」が嫌だった気がします。

どこか遠くに行きたいとよく考えていました。「いつか」を夢見ていたようにも思いだされます。

あのころは、目の前のものや出来事をよく見ていなかった気がします。いまも、そんな気がしてなりません。

いま、身のまわりを見まわすと、やっぱり見ることは難しいと感じます。

*

「何か」に「何か」を見ると、前者の「何か」と後者の「何か」は違うはずです。異なるはずです。別のはずです。

見るだけにとどまりません。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

(拙文「世界の意味、意味の世界」より引用)

上のリストを眺めながら、そこに見えてくるものを、これからしばらく書いていこうと思います。

思い出 # 夢 # 空想 # 見る # 何か

03/12 見慣れたもの

＊

見慣れたもの

星野廉

2022年3月12日 13:23

山に囲まれた町で生まれ育ちました。そのわりには、山について無知です。まわりの人たちを見ていると、自分が驚くほど山を知らないことに気づきます。

こどものころには近くの里山みたいな山で遊んでいました。学校から帰るとさっそく山に行くのです。登るといっても、ただ行くという感じ。もうそんな勾配の緩やかな山でさえ登れない体になりました。

その反動か、高低関係なく山の映像がたくさん出てくるテレビ番組を好んで見えています。画面に吸いこまれるように見入っています。

＊

見慣れたものをよく見ているとは限りません。知っているとも限りません。見るとか知るの難しいとつくづく感じます。

私にとって「見た」とは、見たのちに目をつむってその光景が頭に浮かぶことです。頭に浮かんでいるものが視覚なのかどうかは分からないし知りません。

視覚のような気もするし、そうでない気もします。分けられないのですから、分からないのでしょう。

＊

最近、言葉と「見る」とのかかわりについてよく考えます。言葉を知ることで見えるようになるとか、逆に言葉が邪魔をして、ものが見えなくなるとか、そういう話です。

先日、山についてのテレビ番組を見ていて、その解説がとてもうまいので、思わずメモを取っていました。

山頂の標柱、山肌、山腹、峠、広場のような場所、○平、○原。

沢、岩壁、ほこら、お社、○側と○側、湖、連峰、灌木、植物の名前。

こうした言葉が新鮮に感じられたのです。聞いていてわくわくしました。

いま、上の言葉たちを眺めていると、その番組で見た映像だけでなく、自分が見てきた山の景色やイメージが断片的に頭に浮かびます。

景色やイメージという言葉を使いましたが、見えているような、見えるのとは違うような不思議な感覚です。

＊

とくに心がざわつくのは「山肌」という言葉です。山に肌、皮膚があるというイメージはぞくぞくします。いわゆる比喻です。懸け離れた山と皮膚が言葉として一瞬出会うわけです。

うちの二階の窓から近くの山が見えるのですが、いまは雪解け直後なので、広葉樹の多い部分はまさに山肌を露わにしています。どの木も葉を落とし地面が現れているのです。

無数の黒っぽい幹と枝たちが山を被う景色は線画のようです。一本一本の線が見える気さえます。あの枝をこの指で摘まんでみたい。そんな狂おしい気持ちに襲われることもあります。

葉の生い茂る季節には見えない山の形がくっきりと見えます。見慣れた山が、こんな形をしていたのか。目を見開く自分がいます。

頭皮を連想しました。誰かの頭を間近に見たときに見える、ちょっとグロテスクな模様というか「景色」です。不気味なので、よけいに惹きつけられて見つめてしまいます。

*

これは、山肌という言葉が久しぶりに聞いて、意識して目に映る、そして頭に浮かぶ景色なのでしょう。

山肌という言葉が、見慣れた景色を別の景色に変えたような気がします。よく見えるようになったのか、かえって何かを見落としているのか。よく分かりません。分ける必要などないのかもしれない。

そもそも「見る・見える」にこだわっていることが、「見る・見える」から遠ざかっているようにも感じられます。たぶん、そういうことなのです。

思い出 # 山 # 山肌 # 里山 # 見る # 景色 # 言葉 # 比喻

03/13 書き手の癖、読み手の癖

＊

書き手の癖、読み手の癖

星野廉

2022年3月13日 08:00

このところ吉田修一の小説を読みかえしているのですが、再読するのはぞくぞくするからです。わくわくよりぞくぞくです。

どんなところにぞくぞくするのかといいますと、吉田の諸作品に繰り返しかえし出てくる動作とか場面なのです。複数の作品に共通して見られる身振りや風景があるのです。

そこに差しかかるとため息が出ます。ああ、いいなあ、という感じ。

「何か」に「何か」を見る。

連日、このフレーズを念頭に記事を書いています。今回は「読む」にこだわってみます。

「何か」に「何か」を読む、です。

＊

同じような、似たようなことをあれだけ何度も何度も書いているのは、書き手側に何かこだわりがあるはず。意味と言うよりも癖だという気がします。

書き手が書くときの癖に惹かれて、そこが読みたいから読んでいるというのは、読み手側にも似たような何かがあるにちがいません。

「何か」に「何か」を読む。人は「何か」に自分が読みたいものを読むのです。

私はストーリーを追うのが苦手です。筋よりも細部に目が行くようです。筋を追わないので、途中から読むとか、読むのを中断して放置している小説がけっこうあります。

全体を読みとおしたという記憶のある小説はありません。断片的な記憶しかないのです。エッセイや学術書でも、そんな感じで読んできました。

＊

吉田修一の小説で気になる動作を挙げます。

・汗が流れるように出る。汗が吹き出る。汗でびしょ濡れになる。これはいちばん目につくシーンでしょう。吉田の作品では、水と火も特別な意味を持っている気がします。火と水があるから汗が出るわけです。

・他人の家に入る。留守番もあれば、居候もあるし、不法侵入もあります。ほとんどの作品にこの「テーマ」が出てくるのです。エロチックな意味も感じます。

・階上の窓やベランダから下を見る。眼下に道路を眺める動作が多いです。建物の一階にあるフロアから伸びる階段の上から見おろすというバリエーションもあります。吉田が書くこの身振りがじつにチャーミングなんです。

・誰かが誰かの背中を押す。背中を押しながら、前に進むようにうながすという行為です。同性同士だけでなく、男性が女性を、女性が男性の背を押す場合があります。不思議なくらいよく出てくる仕草です。

・ビデオカメラや写真のカメラで、目の前のものを撮影するシーン。ファインダーで覗いた映像と、撮影された対象である現場が同時に描写されることがあります。その対比を楽しんでいるような筆致を感じます。こういう場面を読んでいると軽い目まいを感じて好きです。

＊

似たようなシーンや動作が出てくるから興味を惹かれるのか、そもそもそういう身振りや場面が好きだから何度も読んでいるのか。よく分からないのですが、とにかく繰り返しかえし読んでいます。

寝入り際の夢うつつや夢で見ることがあります。楽しみにしてもあります。

自分の読書を振りかえると、私は読みたいものだけを読んでいるし、読みたいものの読みたい部分だけを読んでいる気がします。さらには、かつて読んでぞくぞくしたところを、何度も読みかえしているのです。

*

どうやら、書かれているものをまんべんなく読むのではなく、まばらに、そしてまだらに読み、結果としてすかすかな読書をしてきたようです。

結果として、そうしたまだらな読み方——細部を断片的に繰り返しかえし読むという意味です——に適した作家の作品を読んできたのかもしれませんが。

書棚や段ボール箱には、スティーヴン・キング、宮部みゆき、古井由吉の本がたくさん残っています。その中には、まだ読んでいないものもたくさんあります。

スティーヴン・キングの作品がホラー、宮部みゆきの作品がミステリー、古井由吉の作品が純文学だと思ったことは一度もありません。

#読書 #小説 #吉田修一 #繰り返かえす #テーマ #癖 #身振り #動作 #夢

03/13 「見る・見える」が「見る・見える」を
見えなくする

＊

「見る・見える」が「見る・見える」を見えなくする

星野廉

2022年3月13日 10:05

そもそも「見る・見える」にこだわっていることが、「見る・見える」から遠ざかって
いるようにも感じられます。たぶん、そういうことなのです。

(拙文「見慣れたもの」より引用)

上の文で「見る・見える」が二度出てきますが、前者と後者は異なります。さもない
と意味が不明ですし、異なる意味を込めて私が書いたからなのです。

ちょっと変えてみます。

「見る・見える」が「見る・見える」を見えなくする。

たぶん、こういうことなのです。

＊

前者の「見る・見える」は、「見る・見える」という言葉です。後者の「見る・見える」
は、「見る・見える」という行為です。

言葉が行為を見えなくする。

こうすると、いくらかは見やすくなるのではないのでしょうか。

＊

言葉、とくに文字は抽象性が高いです。つまり、すっきりしているのです。

すっきりしているというのは、多様で多義的で多層的なものを一本化しているわけですから、たくさんものを切り捨てているのです。

粗雑になっているとも言えます。正確かどうか疑わしいです。

処理しやすい、作業がしやすいのは確かです。多数の棒よりも、一本の棒のほうが持ち運びやすいのと似ています。軽いからです。

込みいったものよりも、すっきりと一本でまとめてあるもののほうが、見ていて気持ちがいいでしょう。

こみいってややこしいものを見ると、人はうんざります。いらいらもするにちがいません。

*

一方で、言葉が名指しているもの、つまり現実や現物はよく見ると複雑です。「よく見ると」です。

何となく見ている。ぼーっと見ている。考えるのをやめて見ている。価値判断を停止して見ている。そうすると、すっきりではなくても単純には見えます。

見落とす、見損なう、見損じる、無視する、看過する、見逃す、見過ごす、見外す。要するに、部分的に、あるいは全体的に「見ない・見えない」ことです。

見間違う、見誤る。これは、ある基準があって、それから外れた見方をしていることです。

*

「見る・見える」という行為を見直してみましょう。振りかえってみましょう。いま、こ

の時点でも、この文章を読んでいるのなら、見ているはずです。

完全に、完璧に、見ることは可能でしょうか。

見落とさないで、見損なわないで、見損じないで、無視しないで、看過しないで、見逃さないで、見過ごさないで、見外さないで、見間違わないで、見誤らないで、見ないことなく、見えないことなく、見る・見えることは可能でしょうか。

「見る・見える」というすっきりとした言葉が、「見る・見える」という現実を取りこぼしていないでしょうか。

こぼしてすくえなかった部分は意外と大きいかもしれません。

＊

「見る・見える」という言葉を見て、人はそういうすっきりとした行為があるように錯覚する。

ひいては「見る・見える」が完璧な「見る・見える」に見えてくる。つまり見誤る。錯覚する。

＊

「見る・見える」が「見る・見える」を見えなくする。

＊

見落とす、見損なう、見損じる、無視する、看過する、見逃す、見過ごす、見外す。見間違ふ、見誤る。見ない、見えない。見る、見える。

「見る・見える」とは、たぶん、こういうことなのです。

見逃した部分がなければの話です。見逃さないなんてことはありえないと思いますけど。つまり、これが錯覚である可能性があるという意味です。

言葉という現実や現物の代わり、言い換えれば現実や現物に似せたものを使う代償で
しょうか。

ややこしくて込みいった話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 見る # 見ない # 見える # 見えない# 視覚 # 文字 # 抽象 # 意味

03/14 「決める・決まる」の決め手

＊

「決める・決まる」の決め手

星野廉

2022年3月14日 08:48

「AはBである」とか「AだからBである」は決めています。「〇〇である」は「〇〇と決めた」なのです。

いま上で書いた文も決めたものです。誰が決めたのでしょうか。この文を書いた人でしょう。つまり、私です。

一方で「決まる」場合もある気がします。

「AはBである」とか「AだからBである」と決まったという場合です。誰が決めたかというより、決まったという感じがするのです。感じがするのですから印象であり、印象であるからには検証ができません。

雲をつかむような話で申し訳ありません。

＊

「AはBである」とか「AだからBである」が決まったと私が感じる時、その決め手は何なのかと私は考えます。根拠というより決め手です。根拠は建前っぽいのです。

嘘っぽいという意味です。何かを隠している気がします。都合の悪いこと、言えば体裁が悪いことを、隠しているのでしょう。

人には恥という感情があります。プライドと近い感情です。

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

句読点で区別はしていますが、便宜的なものです。重複する部分もある気がします。

なお、ここでは研究をしているわけではありません。できるわけがありません。お遊びですので無いものねだりはお断じます。

*

筋を通す、辻褃を合わせる、こういう言い方に興味があります。「〇〇と言った手前」とか「〇〇と言った以上」という言い回しもおもしろいです。

必死さとか無理を感じるのです。その意味で感情的な言い回しだと思います。

こうした言い回しは「決める・決めた」ときに、「決める・決めた」と言いたくないための方便に思えます。

「決める」は格好悪いのです。体裁が悪いので、体裁をつくろう必要があります。

それが「〇〇である」「〇〇だ」「〇〇ということになりました」です。つまり言葉の綾、レトリックの問題なのです。レトリックは保身のために使われることが多いのです。

「〇〇である」「〇〇だ」と言うと、どうしてそうなったのか、どうしてそうなのか、言い換えると誰がどういう経緯で決めたのかが不明になり不問に付されます。これは隠蔽であり保身でしょう。

＊

こうした事態が露呈するのは、世界が危機的な状況に陥ったときです。こうした事態は大昔から続いているのですが、平時にはなかなか感知できないのです。

危機的な状況を見聞きしながら、自分のまわりにも、似たようなことが、ささやかな形であったなあ、昔からずっと続いているなあと感じるのです。

＊

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

そんな気がします。

「決める」は人為とは、人が決めるという意味です。

「決まる」が人の領域ではないとは、ややこしいですね。言い換えてみましょう。非人称的とか、ニュートラルに近い気がします。

広い意味での「気・氣・き・け」だという気もします。人に深くかかわりながら、人が直接的にかかわっていないというイメージです。

たぶん抽象と具象を兼ねそなえていて、人の外にあり、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならない性質が、言葉、とりわけ文字に近い気もします。

とはいえ、まだ決めかねています。決め手を欠くということです。決められない気も

します。決まる気配も感じられません。

でも、わくわくするので考えてみたいです。

決め手を欠くことが「決まる」のもっとも注目すべき特徴だという予感があります。

雲をつかむような話で申し訳ありません。

#決める # 決まる # 気 # 隠蔽 # 保身 # 感情 # レトリック # 言葉 # 日本語# フロー
ベール # フロベール

03/14 自分を探して、愛を探して

＊

自分を探して、愛を探して

星野廉

2022年3月14日 12:04

自分を探す、愛を探す、真実を探す。

難しい話ではありません。私はややこしいことは好きですが、難しいことは苦手です。「自分とは」とか「愛とは」とか「真実とは」なんて考えたことはありません。

だいいち頭が痛くなります。いらいらもしてきます。

私は、身のまわりにある本、雑誌、新聞、最近ではネットで、その言葉の使われ方を見ます。それが私の自分探しであり愛探しであり真実探しなのです。

考える前に調べるのです。

＊

お薦めは、ネット検索です。note 内での検索ウィンドウもなかなか使い出があります。

他人とか他者が、多人であり多者であることが実感できます。ひとりで悩んで考えて一つに決めることなどないのです。人それぞれだし、人それぞれでいいのです。

パソコンやスマホなどの端末は多者＝他者とつながる窓口です。

＊

気になる言葉の用法（使われ方）を調べましょう。言葉は生きているのですから。

そもそも、私たちは言葉の使われ方の中で言葉を学んできたのですし、いまでも学び続けています。それを意識的にやってみようという話なのです。

たとえば、自分、愛、愛する、真実、哲学、犬、金魚、お茶碗、見る、読む、美しい、汚い、といった言葉たちの関係性を見ると言えば大げさでしょうが、そんな感じです。

「愛する」みたいに動詞で調べると、お腹にすんと来ます。頭ではなく。

＊

言葉の意味（言うまでもなく意味は一樣なものではありません）は、その使われ方の中にあるのです。

分かるとか悟るとか理解するなんて欲張るのはストレスになるだけですから、用法を見るにとどめます。

言葉の使われ方を見ることで、生まれてからまわりの人を真似て学んだ借り物である言葉の実態が大まかに見えてくるのです。

おさらいになるという意味です。これまでの復習はこれからの予習にもなります。

＊

多者（他者）や多人（他人）の生きた知恵を拝借するのです。

知らず知らずに使っているので忘れがちですが、言葉に関しては、誰もがスペシャリストなのです。これは他人を見るほうがよく分かります。自分では気づかないものです。

ひとさまの言葉の使い方を観察しているうちに、世の中には同じようなことを考え感じ書いている人が多いことに気づくでしょう。それが言葉のコンセンサスでしょうね。

一方で、「えっ！」と驚くような言葉の使い方をする人もいて、人生捨てたものじゃないという気持ちになれます。豊かになれるという意味です。

いろいろな言葉の使われ方を見ているうちに、人はぶれて揺れて移ろう存在である、という学びを得るかもしれません。ぶれていいんだと安心できるし自信がきます。

「とは？」といった使い方が目につけば、「そうか、みんな悩んでいるんだ」、「やっぱり答えなんて出ないんだ」と実感できます。肩の力が抜けるでしょう。

とはいえ、人それぞれです。

よし、私が正解を探して世界を救ってやろう、みんなに真理を教えてやるのだ、と張り切る人もいるだろうという意味です。

*

調べてから、自分はどうかと改めて考えるといいかもしれません。たくさん調べなくていいですよ。「こんなものかな？」をいう感覚を大切にしましょう。

ある言葉の用法を調べると、自分の日常生活の中で、その言葉がどう使われているかにも敏感になります。関係性（かかわりあい）の中で言葉や物を見るようになるでしょう。

たとえば、「愛」だけを切り取って「愛とは？」なんて変じゃありませんか？ 愛は人と人、人と世界の関係性です。

関係性を見るためには例文に接することです。その言葉の用法を見ることです。

生まれてから見様見真似で言葉を覚えてきたことを思い出しましょう。決して難しいことはないのです。「そうか、みんなそういうふうに使っているのか」という感じ。

「○○とは？」のほうが邪道とは言いませんが、不自然な言葉の覚え方でしょう。だいたい応用がききません。言葉は、どう使うかが大切なのです。使い方を学ぶことが言葉と世界との関係性を学ぶことですから。

権威——偉いとかすごいと言われている人のこと——に頼るのも安心できますね。自分で考えることが好きではない人はそれがいいかもしれません。

いずれにせよ、無理をしない、人それぞれ、これに尽きます。

*

グーグルは大きすぎるので、まず、note 内で検索してみませんか？ 言葉の用法、つまり使われ方を見る感じ。「○○とは？」じゃなくて。

ヒットした文書の全文を読むではありませんよ。つまみ食いでもいいんです。読むというよりもタイトルや一部を見ていくだけ（もちろん、気になるものは読みましょう）。

これがコツです。

#検索 # 言葉 # 日本語# 関係性 # 用法 # 愛 # 愛する # 自分

03/15 賭けたり、占ったり、決断するとき

＊

賭けたり、占ったり、決断するとき

星野廉

2022年3月15日 16:22

目次

賭けと占いの根底には格好悪さがある

なぜ、賭けと占いにはまるのか

信じる時、人は一瞬変になる

非人称的でニュートラルなものは、外にある

賭けと占いの根底には格好悪さがある

「賭け事や占いは好きですか？」と尋ねられたとしましょう。好きにしろ嫌いにしろ、答えるさいに、何か気おくれに似た気持ちをいだきませんか？

就職試験の面接、または、多くの人たちを前にした公の場で、「はい、好きです」と素直に答えられるでしょうか。

仮に好きだとしても、好きだと言うのには勇気が要りますね。どうしてなのでしょう。賭けは博打、占いは迷信といったイメージがあるからかもしれません。

ただ、それだけではなく、もっと深いところに「気おくれに似た気持ち」の源があるのではないかと考えています。賭けと占いとは、多分に似たところがあるように思えます。

＊

「賭ける」と「占う」の背後には、「負ける」つまり「降伏」と、「任せる」つまり「服従」があるのではないか、と考えています。要するに、格好が悪いのです。

では、何に「負け」、何に「任せる」のでしょうか？

これは、それぞれの人が何を信仰しているかにも、関係がありそうです。ただし、この国は一神教が生活・文化・政治などあらゆる面で、強い影響力をもつ濃密な風土にはありません。

年末年始に、キリスト教の教会、神社、お寺を平気で「はしごする」という、宗教的には希薄な風土が存在する国です。

とはいえ、欧米でも、占いに関しては、自分の信仰する宗教とは違ったレベルで接する人たちがほとんどですので、賭け、占い、宗教をあまり強く結びつけて考える必要はないかもしれません。

＊

賭けと占いにおいて、何に自分の身をゆだねるか？ この問いには、次のような答えが予想されます。

神、神々、仏、先祖、霊、教祖、超越者、天、イワシの頭、宇宙、宇宙の摂理、人知を超えた力、運命、カルマ、確率、あるいは「無」……。

詳しくはないのですが、たとえば、競馬、宝くじ、血液型占い、星占いを考えてみましょう。

お馬さん、数字、血液型、星の運行自体に、自分の身をゆだねるというよりも、そうした表面あらわれている現象や物事そのものではなく、その背後にある「何か」に身をゆだねているという気がします。

いずれにせよ、人は一瞬本気で身をゆだねます。賭けや占いですから、一瞬か短時間です。宗教ではないのです。

＊

本気に身をゆだねないのなら、賭けたり占ったりしなければいいのです。本気で賭けてなんぼ。本気で占ってなんぼ。ただし、一瞬です。

私は熱心な茶柱信者なのですが、馬鹿馬鹿しいとか、最近ぜんぜん当たっていないなあと思いつつ、占うときには一瞬信じます。全身全霊をもって茶柱に賭けています。

さもなきゃ、賭けなきゃいいのです。

一瞬ですよ。一瞬じゃなきゃ、アホらしくてやりません。「ああアホラシ」と我に返る寸前でとめるのです。

その一瞬は、本気だし真剣なのです。頭の中も真っ白のはずです。

なぜ、賭けと占いにはまるのか

賭けも占いもつねにかなうわけではありません。一瞬、本気で賭けたり、本気で占いを信じて占った結果、外れたということはよくあります。

そういうときには後悔します。馬鹿なことをしたと自己嫌悪を覚えることもあるでしょう。

でもまた賭けるし占うのは、なぜでしょう？ 一瞬、あるいは短時間、めっちゃくちゃ気持ちよかったからにちがいません。さもなきゃ、またやりません。

我に返ってからは忘れていても、めっちゃ気持ちよかったことを体が覚えているのです。

身も蓋もない言い方ですが、その行為に依存しているとか嗜癖しているとも言えますね。

＊

ここで、賭けと占いに近い行為である、決断について考えてみましょう。

この場合の決断とは、軽いものではなく、真剣な決断、つまり一か八かの瀬戸際に置かれたさいの決断です。

ほとんど賭けと同義であり、ほぼ占いに頼って任せるせっぱ詰まった決断だと思ってください。

こういう心理状態のときには、切羽詰まっていますから、「何か」に賭けています。「何か」は分からない知らないままに、「何か」にすがっています。

全面降伏しています。茶柱にすべてお任せするどころの話ではないのです。

＊

賭けたり、占ったり、何らかの決断をするさいに、背後にある「何か」に、身をゆだねるとするなら、これは大変なことです。「背後にある」のですよ。「何か」なのですよ。

これじゃ、「わけが分からない」ではありませんか？

人はこの「わけの分からない」「何か」に初めから負けっぱなし、全面降伏しているのです。圧倒的に「強い・崇高な」存在という意味です。

こうなると、対処するための切り札は一つしかありません。

信じるのみです。

信じる時、人は一瞬変になる

信じる時、人は一瞬、あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。忘我。頭の中が真っ白。

普通ではないのです。正常ではないとか、正気ではないとは言いませんが、尋常ではないことは確かでしょう。ただし、一瞬、またはごく短い間の出来事だと思ってください。

もしこういう尋常ではない心の状態におちいるとするなら、人が一瞬「外」にいるからではないでしょうか。「ここ」、つまり中にはいないのです。

意識だけが体から切り離されたようなイメージです。意識がどこかに飛んでしまっている感じ。

*

賭けたり、占ったり、決断するさいには、その直前には、多かれ少なかれせっぱ詰まった精神状態にあるはずで、苦しくて、つらいのです。重みに耐えている感じ。

その重荷を何かに預け、託したときの解放感を想像すると、さぞかし爽快で気持ちがいいでしょうね。

すべてお預け、すべてお任せ。全面降伏。好きなようにしてちょうだい。ああ、さっぱりした。ぷっふあーっ。

*

こうした解放された喜びは誰もが日常的に経験しています。

お酒を飲んでいるとき、喜怒哀楽がマックスに高まった状態、カラオケでいい気持ちになって心がぶっ飛んでいるとき、湯船に浸かって「はあっ」となっているとき、排泄が終わって「はあっ」となっているとき……。

超常現象とか、危ない薬物を摂取したときとか、神秘体験とか、憑依とか、そういう大げさな話ではありません。

こういうとき、人は外にいます。私に言わせると、非人称的でニュートラルなものに身をゆだねているのです。「外にあるもの」に身をゆだねる、身を任せる、徹底的に負けている。全面降伏です。

ワンコのへそ天のイメージ。

非人称的でニュートラルなものは、外にある

「何か」とか、「外である」とか、非人称的でニュートラルなものとは、たとえば言葉、具体的には音声と文字が挙げられます。あと表情や身振りといった視覚言語もそうでしょう。

誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉のほかには、筋書きや物語とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽にはぜんぜん詳しくないのですが、旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

この「何か」は人にとって、生まれた直後から経験している親しいものなのです。

このニュートラルな「何か」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、その抽象の側面が人の中に入ったり出るといった稀に見る特性があります。

そのとき、人はたぶん一瞬、あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。怪しげな言い方で恐縮ですが、そんな気がします。

人は、その「何か」に、日常的に経験する「賭ける」という行為をとおして接してい

る。また、この「賭ける」は、いわゆる「賭け」だけに起きる行為ではなく、さまざまな意識レベルにあるありふれた状態である。おそらく言葉（話し言葉、書き言葉、広義の歌、表情、動作）と深くかかわっているだろう。そんな気がします。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。

そんなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってもいるのですが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

#非人称 # ニュートラル # 賭け # 占い # 決断 # 任せる

03/16 赤ちゃんも賭けたり占ったりしている

＊

赤ちゃんも賭けたり占ったりしている

星野廉

2022年3月16日 08:09

目次

赤ちゃんは信号を発している

偶然と必然のからみとしての賭け

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

赤ちゃんは信号を発している

人は、その「何か」に、日常的に経験する「賭ける」という行為をとおして接している。そんな気がします。

その意味で「賭ける」は人にとって根源的な身振りであり行為と言えるでしょう。

そんなわけで、生後間もない赤ちゃんだって賭けているし、ある意味で占ってもいるのですが、このことについては、機会を改めてお話しするつもりです。

(拙文「賭けたり、占ったり、決断するとき」より引用)

今回は、上の記事の続きを書きたいと思います。

＊

健常者の赤ちゃんは、さまざまな形の「信号」を、おもに五感を総動員して、発信し、受信つまり知覚しています。

そのさいに、赤ん坊は、「賭け」と「占い」という行為のなかへと、否応なしに、いわば「投げ込まれている」と言えそうです。

それほど、ヒトの赤ちゃんという存在は無力なのです。

*

生後、あるいは孵化後数時間で、おとなのミニチュアのような容姿となり、立ち上がったり、動き回ったりする、たとえば、お馬さんの赤ちゃんや、イカさんの赤ちゃんを思い浮かべれば納得できると思います。

もちろん、程度の差はあります。ある期間中、お母さんの腹部にある袋で保護されているカンガルーさんの赤ちゃんや、巣の中で毛の薄い頼りなげな姿で巣立ちまで過ごしている鳥類の赤ちゃんも確かにいますね。

なお、ヒトの赤ちゃんのよるべなさや無力さには、ネオテニー（幼形成熟）という現象が関係しているという説があるそうです。

語弊を覚悟で言いますと、ヒトは「早産」し、子を「未熟児」として産むということらしいです。だから、自立するまでに長期間を要するという理屈みたいです。

偶然と必然のからみとしての賭け

ヒトの赤ちゃんが「賭けたり」「占っている」というのは、赤ちゃんが「信号」を合図として発することから始まります。

「オギャー」と叫んだり、笑みを浮かべたり、じっとまなざしを向けるという合図の「信号」を、おとなが期待や欲求というメッセージとして受け取るのです。

期待や欲求は、これから先の出来事に向けられていますね。このことから、「賭ける」と「占う」との関連が分かるでしょう。未来を指向しているのです。

＊

生後三か月の赤ちゃんに意志や意思があるかは尋ねたことがないので知りませんが、よるべない無力な赤ちゃんが泣いたり笑みを浮かべているのは、偶然と必然のからみの中に投げ込まれているようなものです。

偶然と必然のからみとは、賭けのことです。

赤ちゃんの泣き声と笑みがまわりの大人たちに信号を送る。その身返りとして、お乳をもらったりおしめを替えてもらうことができるかどうかは、赤ちゃんにとって賭けなのです。

＊

ここで大切な点は、赤ちゃんの泣き声と笑みはニュートラルな信号であることです。

信号がニュートラルだというのは、信号が無色透明かつ中立的な存在であり、赤ちゃんの意思や意志とは本来は無関係だという意味です。

言葉と似ています。というか、赤ちゃんの泣き声、笑み、表情は視覚言語の一部である、言い換えると言葉だというべきでしょう。

すべての赤ちゃんが、タイミングよくお乳をもらったりおしめを替えてもらっているわけではありません。

事故や育児放棄や虐待や貧困や災害を考えると想像できると思います。世界的なレベルで考えるとさらに分かると思います。戦争です。

願いや祈りは着実に届き、かなうものなのか

赤ちゃんは運と偶然の中で、その意志や意思に関係なく「賭け」ている、つまり「賭け」を余儀なくされているのです。

じつは、おとなもそうなのです。

あなたの日々の願いと祈り（赤ちゃんにとっての泣き声と笑みに相当するもの）は着実に届いているのでしょうか？ その願いと祈りは報いられ、身返りを得て、実現しているのでしょうか？

あなたは無意識のうちに、あるいは自分の意思に関係なく、賭けを余儀なくされてはいないでしょうか？ あなたは日々、賭けていないのでしょうか？

*

信号のになうメッセージが意味を持ち、ある特定の目的の実現に向かうかどうかは、きわめて不安定な基盤に立っているのです。

不安定な基盤に立っていなければ、メッセージはつねに然るべきところに届き、思いは実現しているはずですが。

なのに、願いや祈りや思いは宙づりにされます。宙ぶらりん。掛かって、懸かって、架かって、賭ける。

信号がニュートラルであるというのは、信号のメッセージが正しく然るべきところに届く保証はないという意味です。

ツバメのひなの泣き声や動作が、信号としてメッセージを持ち、それが然るべき相手、つまりツバメの親に届くかどうかは、偶然と必然のからみの中にあるのです。

ツバメのひなのそばにいるかもしれない、クモやスズメやダニには、その信号のメッセージは伝わりません。

天敵であるカラスや猛禽類には別のメッセージとして伝わるでしょう。食べ物です。

ヒトにも別のメッセージを与えるにちがいありません。これはヒトに似て複雑で気まぐれです。

信号の意味やメッセージは必然や当然のものでは、ぜんぜんないわけです。これをニュートラルとか非人称的と私は呼んでいます。

話し言葉である音声、書き言葉である文字、広義の視覚言語の一部である表情や身振りも、ニュートラルで非人称的なものと私はとらえています。

当たり前ではなく、むしろ賭けなのである

ヒトの赤ちゃんを例に取れば、現在の日本という国の比較的恵まれた好条件や好環境を基準にするかぎりにおいて、安定した基盤に立った信号のやりとりがおこなわれていると言えるにすぎません。

一方で、この惑星の圧倒的多数のヒトの赤ちゃんたちと、ヒト以外の生き物たちの赤ちゃんたちは、きわめて「きわめて不安定な基盤」に立っているのです。

赤ちゃんが泣けば、お乳をもらえる、そしておしめを替えてもらえるというのは当たり前でも必然でもないのです。

いわゆる生存率という確率を思い出してください。親がそばになくて放って置かれる、つまり無視されたり、逆に天敵に存在を察知される危険性の方が多かったです。

幸いな者だけが殖える、増える。それが幸いかどうか。これも賭けでしょう。

赤ちゃんの「賭ける」と「占う」が、いかに危ういものであるかが体感できるかと思っています。現在の日本を基準にすると体感しにくいかもしれません。

大切なことなので繰り返しますが、当り前が当り前ではないし、必然や自然や確実でもないという意味です。

むしろ、常時、賭けの中にいるのです。何がって、おそらくあらゆる存在が、です。

＊

いったん発信された「ニュートラルな信号」は確率に大きく左右されていると言えそうです。

信号のニュートラル性とは、信号がつねに確率に左右されている状態だとも言い換えることができるでしょう。

確率。この言葉のイメージから、赤ん坊も「賭けたり」「占ったり」していると私は思っています。

もちろん、おとなもです。おそらく、この惑星のあらゆる生き物がそうなのでしょう。

日々おこなっている、あるいはおこなうことを余儀なくされているものとして、ヒトの場合には、賭ける、占うに加えて、日常的な種々の決断も含めていような気がします。

「思う」は、ささやかな決意の不断の積み重ねではないでしょうか。意思決定などという大げさな話ではなくて。

意思は決めるのではなく、むしろ決まるのです。外の何かに助けてもらって決まるのです。

外に助けを求めるとき、たぶん人は一瞬気を失っています。一瞬ですから気づかないかもしれません。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれている

ニュートラルな「信号」を次のように言うこともできるでしょう。

誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振り）のほかには、筋書きや物語とか「賭ける」という行為とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽でいう旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

どれもが、決めるのではなく、決まるのです。決めているように見えて、決まっているのです。

*

このニュートラルな「信号」は、抽象と具象を兼ねそなえているため、その抽象の側面が人の中に入ったり出るといった稀に見る特性があります。

そのとき、人はたぶん一瞬、あるいは短時間乗っ取られるのです。あるいは、意識を失ったり意識が薄れるのです。

このように言うと、いかにも怪しげな言い方で恐縮なのですが、これは「何か」に身を任せて、賭けている結果だと考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「何か」が中に入ってくる、または「何か」にとらわれているのですから、一瞬あるいはごく短時間だけ、普通の心理状態でなくなることは確かだと思います。

(普通ではないという意味では発情とか性行為中と似ている気がします。そもそも特定の発情期のないヒトは、つねに発情しているのですたっけ？　いまのはレトリックであり比喻です。とっぴな言い方をして申し訳ありません。最近とても気になるのです。なぜ、人は我を忘れていいのか、と。自分のことです。)

何かが入ってきて普通ではなくなっている。これは、おどろおどろしいものではなく、むしろさまざまな意識のレベルにある、ありふれた状態である気がします。

#言葉 # 信号 # 非人称 # ニュートラル # 賭け # 占い # 決断 # 偶然 # 必然 # 赤ちゃん

03/16 遅れて気づく

＊

遅れて気づく

星野廉

2022年3月16日 09:53

目次

遅れる

ずれる

とほうもないずれ

何となく

遅れる

それは遅れて気づくのです。それが先にあったというのは、知識であり情報です。学習の成果でもあります。

自分の影に気づくのも遅れます。影より先に自分の体があるというのは、じつは後付けの知なのです。知はつねに遅れます。

＊

私たちの誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振り）のほかには、筋書きや物語とか「賭ける」という行為とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽でいう旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

こうしたものに、私たちは遅れます。

＊

それは私たちが生んだり作った。私たちがいるから、それがあつたのだ。

話は逆で、後になって気づいたことであり、気づくことです。

いま気づくのではなく、気づくのはいつも後になります。

むしろ、それらは既に「ある」のであり、自立しているのです。私たちの思惑とは関係なく「ある」し、おそらく「いる」のです。

それらはつねに先立つものなのですが、いつか先立つのは私たちのほうです。順番としては、そうなるはずですが、その時こそが、終りなのですから。

影のことです。

ずれる

私たちはずれてしまったようです。

ずれた者に、ずれは見えないのかもしれない。

「ずれた者に、ずれは見えないのかもしれない」と書けるのは、何かが気づかせてくれているのかもしれない。

これは知ではないでしょう。狂いと思なされることにちがひありません。

気づかせてくれる「何か」は、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、外なのです。

外ですから、私たちの思いどおりにはなりません。

＊

思いどおりにならないものを相手にして、私たちは賭けるしかありません。

宙づりにされている私たちは、何かに引っ掛かって賭けるしかないのです。

掛けて賭けた結果が、書けたであっても、これは賭けの結果でしかありません。占いには、裏はないのです。

騙る語るに落ちるといのは、このことかもしれません。

必然と呼ぼうと偶然と呼ぼうと、はたまた蓋然と呼ぼうと、当然とか自然と呼ぼうと、です。あと、啞然、呆然、愕然、漫然も同じでしょう。

*

言葉を獲得してしまった。これはずれたのでしょうか。

文字を得てしまった。これもずれたのでしょうか。

ほかの生き物にくらべて、とほうもなく動いている。移動せずにはいられない。これもずれたのでしょうか。

年中、二十四時間、生殖可能。もしそうなら、これもたぶんずれたのでしょうか。発情期の生き物は雄も雌も精神的に不安定だという説があります。常時であれば、とほうもないずれです。

*

恋愛小説、ミステリー、ビジネス書。演劇、映画、ゲーム。どこへ行ってもあります。二十四時間、どこかにあります。

発情、性愛、謎解き、殺し、犯罪、お金儲け。私たちは、こうした物語に取り憑かれています。

芸術、文化、文明。自画自賛。

とほうもないずれ

おそらく言葉を獲得したときに、とほうもなくずれたのです。

文字を得たときに、さらにとほうもなくずれたのです。

*

世界

上の文字をご覧ください。

これが世界です。これが「世界」なのですよ。

世界の代わりとは言え、よくできています。

世界に似ているもの、似せたもの、世界のにせものにしては、似ているどころか、そのものだと思ってしまう。

*

世界

これが世界なんだよ。

幼いお子さんに、これが世界だと言ってみてください。

一瞬、お子さんは言葉を失うかもしれません。「うっそー」と言うかもしれません。首を傾げて意味が分からない仕草をするかもしれません。うん、そうだね、と納得したかに見える子もいるにちがいません。

納得していないらしい子を笑えるでしょうか。成長を待たずに、あえて説明する気になるでしょうか。

納得していない子に学ぶこともできる気がします。

*

言葉、そして文字。これは、とほうもないずれを前提とした、とほうもない手品なのです。

この手品に驚くのは、ヒトのこどもしかいないでしょう。カバのこどもには無理です。おさるさんのこどもにもおとなにも無理でしょう。

思いだしましょう。私たちはみんな、こどもだったのです。

魔法なんかじゃありません。手品です。手にした品なのです。

でも、じっさいには手にしてなんかいないようです。人の手を離れた手品という感じがします。手に負えないのです。

*

言葉として立ち現われる、論理とパラドックスと物語は言葉の綾であって、現実の綾ではありえません。

人にとって魔法のように魅力的であることは確かです。

魔法の魔法は、ちょっとだけちょういと人に思わせることです。不可解だと、人は魔法だと錯覚してくれません。

魔法使いは人の格好をしていなければならないのです。人でなしのモンスターであってはなりません。

*

いわば隔靴搔痒の遠隔操作である、この手品にも有効性があります。

仲間を月に送りこんだり、この星の気温を何度か上げたりするほどの有効性があります。

戦車を動かし、ミサイルを飛ばせるほどの有効性もあります。

私がこの文字を機械で書き、みなさんがこの文字を端末の画面で見ているのも、手品の有効性があるからです。

この手品が、知と論理に支えられている——あるいはその逆——という証拠でしょう。

＊

世界

これが世界だと読むことが、人の知なのです。学習の成果です。したがって、おさるさんは、言葉と現実を混同しません。

何となく

ずれる。遅れる。遅れて気づく。

何となくずれて、何となく遅れて、何となくずれに気づいて、何となく手遅れになって、何となく終わる。

＊

何となくは、学習の成果であり、知の一つの到達点です。

＊

何となく、言葉を話している。

何となく、文字を使っている。

何となく、この星中を動きまわっている。

何となく、止まれなくなってしまった。

*

何となく、ずれてしまった。

何となく、とほうもないことをしている。

何となく、何となくをしている。

何となく、とほうもないことをしてしまった。

何となく、手遅れになる。

何となく、終わるのでしょ。

そのとき、物語も終わるはずですが、たぶん何となくは終わらないでしょう。

*

それらはつねに先立つものなのですが、いつか先立つのは私たちのほうです。順番としては、そうなるはずですが、その時こそが、終りなのですから。

影のことです。

いくら遅れて気づくとはいえ、消えた後に気づくなんて、それはかなわない夢しかないでしょう。

言葉を使えば、何とでも言えるにしてもです。

*

暗く終わって申し訳ありません。

外は晴れていい天気です。

#言葉# 影 # 文字 # 知識 # 情報 # 世界 # 物語 # 筋書き

03/18 世界

＊

世界

星野廉

2022年3月18日 08:21

世界（言葉）は「世界」（現実）に遅れる。

「世界」（現実）は世界（言葉）に遅れる。

＊

「世界」（現実）が世界（言葉）に先立つというのはいりふれたお話。

世界（言葉）が「世界」（現実）の前にあるというのはいりからあるお話。

＊

小さなこどもに、世界（言葉）が「世界」（現実）だと言っても、きょとんとするだけ。

小さなこどもは、世界（言葉）の中に生き、「世界」（現実）の生きているだけ。

＊

括弧を付けても、世界は世界。

格好を付けても、「世界」は「世界」。

＊

小さなこどもは名前という魔法の中で生きている。

大きなおとなは名前という魔法の中でてんてこ舞いしている。

何となくてんてこ舞いしている。

*

世界（言葉）は「世界」（現実）に遅れる。

いつも遅刻。

「世界」（現実）は世界（言葉）に遅れる。

いつも渋滞。

*

何となく遅滞。

何となく痴態。

#言葉 #日本語 #世界 #話 #現実

03/18 影

＊

影

星野廉

2022年3月18日 11:20

影が先立つ。

人に先立つ。

人が先立つ。

影に先立つ。

＊

影に気づくのはいつも遅れる。

影に気づいても影は見えない。

＊

「見る・見える」という影が影を見えなくしている。

影と影が重なり、どちらがどちらなのか見えなくなる。

声に声がかぶさり、どちらの響きなのか分けられなくなる。

文字が文字に重なり、どちらがどちらなのか読めなくなる。

綾が綾をなし、文目もわかぬ。あやめがあやまるさまのあやしさ。

＊

姿形の影、音声の影。

顔が消えて残る表情。身振りの身が消えて残る振り。なぞるしかない、なぞ。

鏡に映る像という影。ふるえてこだまする音の影。なぞるしかない、なぞ。

意味という影、筋書きという影、物語という影、旋律という影。なぞるしかない、なぞ。

＊

外にありながら中にもある影。

外にある影はすり抜けて入ってくる。気がついたときにはもう入っている。

中にある影はすり抜けて出ていく。気がついたときにはすでに出ている。

影が入り出るとき、人は一瞬我をなくし、おそらく一時的に乗っ取られている。

＊

中でどうなっているのかは不明。中にあるときにはその気配だけがある。その振りだけが
ある。

なぞるしかない、なぞ。

影はすくえない。すくいがたいほどすくえない。

手をかざしてみたところで、指をすするとすり抜けていく影。影の影をなぞるしか
ない。

＊

外にあっても中にあっても思いどおりにならない影。

影は外そのもの。外は向こう、外はかなた、外はなか、外はうち。

外はこっち、外はそっち、外はあっち、外はどこか。

なぞるしかない、なぞ。

*

うつろな影。

影はうつろう。

うつろな響き。

響きはうつろう。

*

影に気づくのはいつも遅れる。影に気づいても影は見えない。

人に先立ち消える影。影に先立ち消える人。

そのとき謎が残ったとしても、もうなぞる人はいない。

#言葉 #日本語 #影 #鏡 #文字 #音声 #意味 #旋律 #物語# なぞる # 謎 # 抽象
具象

03/19 世界の影 影の世界

＊

世界の影 影の世界

星野廉

2022年3月19日 08:03

世界の影 影の世界

世界の意味 意味の世界

言葉の夢 夢の言葉

言葉の影 影の言葉

なぞるしかない、なぞ。

＊

影がうながしてくれる。

意味が導いてくれる。

言葉が手を引いてくれる。

夢が手招きしてくれる。

なぞるしかない、なぞをなぞる。

＊

いつも先にいて導いてくれる「何か」。

生まれた時に既にあった「何か」。

目をつむるといつもある「何か」。

思うよりまえにあるらしい「何か」。

なぞをなぞる。

＊

なぞるしかない、なぞ。

なぞるしかない、なぞをなぞる。

なぞをなぞる。

＊

たぶん、なぞなんてない。「何か」なんてない。

なぞるといふ身振りの振りがあただけ。

振り。なぞり、なすり、すり。すりのすり。コピーのコピー。

この振りをなぞることが、世界とかかわること。世界と同期すること。

＊

なぞる。

手をかざし、指で空（くう）をなぞってみよう。

「何か」を求めるのではなく、「何か」をなぞろうとするのでもなく。

そうすれば、世界も言葉も意味も夢も影もなくなるはず。

赤ちゃんのとき、きっとあなたがしていたはずのこと。

きっと笑みが浮かぶはず。世界もあなたに微笑みかけるはず。

#言葉 #日本語 #影 #夢 #意味 #なぞる #謎

03/19 影は見えない

＊

影は見えない

星野廉

2022年3月19日 09:54

影に気づくのはいつも遅れる。
影に気づいても影は見えない。
(拙文「影」より引用)

人がいて影と陰ができる。たとえば木のように影と陰を作る。

影はかげの姿形で、陰はかげの作る暗い場所だそうです。大ざっぱに言えばそうらしいです。自分の中に納得する影がいて、納得しない陰があります。

おかげさまで、「かげ」という言葉の多様性を感じることができました。かげさまさま。かげはさまさまということですね。

いまのは影に助けられて出てきた駄洒落です。駄洒落とは蔑称であり、掛け詞の別称です。

＊

人は影が見えない。

芸術、文学、科学技術、生活必需品。こうしたものは、人が作ったものです。人は自分たちの作ったものは自分たちのものであり、自分たちの一部であると思いがちです。

自分たちがいて、そこにあるもの。自分たちがいたから、存在するもの。自分たちがそれよりも先だと思いこんでいる。

影のことです。

自分たちの思いのままになり、自分たちの手中にあると信じているわけです。

自分たちのしもべであり奴隷。

それでいて、作ったものが見えないのです。見えていないのです。見ているつもりがみえていないというのは、人の常態と考えられます。

＊

自分たちの作ったものが見えていないし、それを知ってもいないというのは、芸術作品、文学作品、科学技術の産物である製品をめぐるの、人びとの右往左往ぶりを見れば明らかでしょう。

見ても聞いても触れても、解釈できないのです。作品に振りまわされている場合も多々あります。また、持っているつもりが、持てあまして使えこなせないのです。逆に物にもてあそばれている例にも事欠きません。

作品をめぐるの、ああでもないこうでもない、ああだこうだ。わからない。わかった。いや、それは違う。やっぱりそうだよ。いやいや、そうかな。

製品や商品をめぐるの、何これ、なんでこうなるの、うまく動いてくれない、いやいやこれだけやってくれるんだから御の字、もっともっと、もっと品質と効率を向上させなきゃ、もっと増やそう、てか最近暴走してね？

＊

数ある影のうち、誰にとってももっとも親しいものである言葉で考えてみましょう。いつもあなたのそばにいてくれる影です。あなたの舌に乗り、あなたの指を動かすことでなぞることできる言葉。

世界とあなたのあいだにさす影。

目をつむっても来てくれます。臨終のさいにもきっとそばにいてくれるでしょう。こんな友が他にいますか？

音声、声、息、空気のふるえ、声帯のふるえ。

文字、形、模様、インクや墨の染み、黒鉛と粘土の染み、画素の集まり。

言葉はさまざまな有り様を示してくれます。抽象と具象を兼ねそなえているために、人の中に入り出ていくという稀に見る動きもします。これ以上の超能力、超現象、魔法を私は他に知りません。

出入りするというのが抽象としての働きです。それでいて物でもあるわけです。これが具象としての立ちあわれです。

*

山

どうしてこれが山なのでしょう。その必然性はないのに山だとされています。人が「決めた」のでしょうか、もはや「決まった」という感じ。「決まり」なのです。ルール、規則、慣習。

山という文字を見ていると、さまざまな山が思いだされます。山についての思い出だけでなく、山という漢字と音がさまざまなイメージを呼びさします。

山をかける。人生山あり谷あり。てんこ盛り。こんな言葉も連想しますが、これを邪念と退けては、山は見たことになりません。単なる抽象、つまり綺麗事であり絵空事であり嘘になるという意味です。

あなたは、山で何を想うのでしょうか。あなたの見えている山は、私には見えません。

それでも山が見えると言えるのでしょうか。山という影が見えると言えるのでしょうか。

*

そういえば、こんな美しい言葉がありました。

やまかげ、山陰、山影、山蔭、山景、ヤマカゲ、yamakage。

山影という言葉が発し、放ち、話し、送ってくれる、贈ってくれる、光と影と陰をながめているだけ。これだけで十分です。

とらえようとは思いません。すくい取ろうとする気にもなれません。山影という言葉が影になっている気がします。

言葉のおくってくれるものは、もらい切れないようです。私たちがつねにおくれているからでしょう。その気配はしても見えないのです。翳っている感じ。

かげる、陰る、翳る。

こんな美しい言葉が浮かんできました。思いがけない贈り物です。

影に気づくのはいつも遅れます。私たちは永遠の遅れの中にいるようです。

「おくれる」は「おくる」でもあったそうです。また、影に助けられました。

#日本語 # 影 # 陰 # 芸術 # 文学 # 科学技術# 作品 # 製品 # 商品 # 山

03/19 そっくりなものなら平気でその命を奪える

猫という文字が抽象的な記号として感じられないという意味です。犬やハムスターや、場合によってはイグアナも、そうでしょう。

＊

消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム、消しゴム

消しゴムは製品であり商品です。大量生産された製品であっても、ある特定の消しゴム、つまり自分が愛用していたり、いまも愛用している消しゴムであれば思い入れがあるでしょう。

たとえ大量生産されたものであっても、自分にとって「たった一つ」の愛しいものはあるという意味です。

とはいっても、やはり取り替えがきくとか、その他多数のうちの一つであるという思いはあるにちがいません。

消しゴムと同じく大量生産された自転車や車もそうでしょう。お店でずらりと並んで陳列されているスリッパや帽子もそうだと考えられます。

＊

サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ、サンマ

サンマも消しゴムやスリッパと同様に、お店にずらりと並べてあります。大量生産されたものではありませんが、大量に漁獲されたものです。

大量、これがキーワードです。つまり同じものが、そっくりなものが、似たものがずらりと並んでいる、これが、「取り替え可能」なのであり、「その他多数のうちの一つである」という意味です。

サンマをペットとして飼った方はいらっしゃいませんか？　まずいらっしゃらないでしょうが、万が一飼ったことがある人であれば、飼ったことがない人とは異なる見方をなさるにちがいありません。

食べられない人がいても私は驚きません。

これは、ニワトリ、ブタ、キュウリ、トマトでも同じでしょう。

ペットとして飼ったり、お仕事として飼育したり、園芸を趣味として栽培したり、お仕事として栽培したりという具合に、その経験によって、その動物や植物を表す文字に対する思いや思い入れは異なるはずです。

※特定のどなたかを責めているわけではありません。ご理解願います。

*

文字が文字どおりに取れないというのは、それくらいの意味です。文字が文字としてではなく、文字以上のものとして、個々人に立ち現われることがあるとも言えます。

そっくり、すっきり、かっきり

文字とはそっくりなものです。

人

いま私がこの画面に書いたこの文字は、パソコンやスマホなど数えきれない端末の画面に同時に閲覧されるはずです。しかも、私が削除しない限りは残ります。

私が上で書いた「人」という文字は私だけの専有物ではありません。誰もが使うことができるし、使ってきたし、いまも使っているし、これからも使われるでしょう。

他にも無数にあるという意味です。

それが「そっくり」です。

＊

そっくりはすっきりでもあります。世界中にいまいる人、これまでにいた人、これからいるであろう人を指します。

あっさり書きましたが、すごいことです。書いたものの、その意味を取りかねている自分があります。当惑し呆然としている部分が自分の中にあるのを感じます。

よく考えてみてください。無数の人を人という言葉が代表しているのです。代理なのです。似たもの、似ているもの、似せたもの、にせもの、偽物なのです。そっくりなのです。激似なのです。

考えれば考えるほど目まいを覚えずにはられません。

＊

文字はシンプルに見える。いくらでも複製・拡散可能。

これが「すっきり」です。

文字は知識であり情報でもありますから、シンプルであることに越したことはないのです。持ち運びやすく、さくさくと読めなければなりません。

＊

これが抽象です。抽象化とも言います。

個々人の個性を消し去って人という文字に換言し還元する。個性とその人の背景とその人の生の総体を切り捨てた結果が、人という文字です。

抽象という名の切り捨てとはこのように残酷なものだということに敏感でありたいと思います。

こんな恐ろしい抽象の産物である人という文字を文字どおりに取れるでしょうか。額面どおりに取るためにはある種の鈍感さを必要とするのではないのでしょうか。

顔面通りに取るわけにはまいりません。

*

誰々が悪いという話をしているのではありません。ある種の鈍感さと忘却という抽象化なしに、人は文字を読めないし文章も読めないし書けもしないからです。

この抽象化がなければ、人は人でないし、この文明と文化はないわけですから。

*

人は人なの、どこが違うと言うの？、いったいどういう神経をしているわけ？、あなたの考えこそ抽象でしょう、屁理屈はやめてよ、冗談は顔だけにしてくださいな。

たとえ、そう言われたとしても、額面どおりに人が「人かっきり」だなんて信じられません。「千円かっきり」じゃないんですから。「それ以上もそれ以下もその他もろもろも含んで人」なんです。

人は、そっくりでもないし、すっきりでもありません。そっくりですっきりでかっきりなのは、人という言葉であり、人という文字なのです。

人は言葉でも文字でもありません。これが屁理屈なら、屁理屈上等だと言いたいです。

そっくりなものを壊す、殺める、消す

人はそっくりなものなら壊せます。取り替えがきくし、その代わりや似たものが他にもたくさんあるからです。

人はそっくりなものなら平気で殺めることができます。そっくりなものであれば、その命を平気で奪うことができます。

そっくりなものには個性も顔も家族も見えません。すっきりして見えるのは、切り捨てたからです。

そっくりなものかっきり、つまりそっくりなもの以外の要素が切り捨てられたからです。

*

抽象化はきな臭く血生臭いものなのです。

切って血が出ないわけがありません。何があって、生身の人間のことです。また、家族や愛用する物たちやペットや友人や隣人たちと切り離されれば、涙が出るに決まっています。

*

数字と同様に、文字はそっくりすっきりかっきり。

顔が見えないものを人は平気で殺めることができるのです。破壊することができるのです。

いまは破壊したり殺めるためには、ボタンを押すだけの時代になりました。戦車もミサイルもボタン一つを押せば任務遂行のために動きます。

ボタンを押す人にとって、その標的に顔がないことは確かでしょう。その標的は、数字と同じく、そっくりすっきりかっきりな文字であるにちがいません。

いちばん文字を文字どおりに取ってはいけない人が、ボタンを押している気がします。

顔が見えない

上の文章で記事を終わらせようとして、はっとしました。

顔が見えないのです。ボタンを押す人の顔が浮かびません。その人物も、私にとっては人という文字にすぎないことに気づきました。抽象化された人という文字なのです。

人

これも、そっくりすっきりかっきりじゃないですか？ 私も同じ穴のムジナだということになりませんか？

誰もが、代理なのです。似たもの、似ているもの、似せたもの、にせもの、偽物なのです。そっくりなのです。激似なのです。

*

たとえば、例のあのボタンの中のボタンを押しそうな人、例のあのボタンを押す権利を握っている人たちが世界には何人もいますが、その人たちの写真や動画や名前は見たことがあっても、そうした映像や文字は「似たもの」「そっくりなもの」でしかありません。コピーのコピーなのです。

私はあれが「顔」だなんて思いません。「顔を知っている人」だなんて言えません。やはり私にとっては「人という文字」であり「文字という人」なのです。

自分も、自分以外の誰もが、です。私たちは、そうした「そっくりすっきりかっきり」に囲まれて生きているのです。

*

世界そのものが「そっくりすっきりかっきり」として立ち現われているとも言えるでしょう。

それぞれが区別できないそっくりなものからなる世界に、誰もが生きている。たとえ、もしそうであったとしても、それは自分に対する免罪符にはならないでしょう。

かといって世界を背負いこむわけにもまいりません。それこそ身の程知らずな見というものでしょう。セルバンテスの描いたドン・キホーテと同じです。相手が大きすぎます。というより、相手にされないというべきでしょう。

月並みな言葉ですが、いまの自分に何ができるか、それから考えていこう。まずは、顔が浮かぶ人たちと生き物たち、自分にとってただ一つの物たちを大切にしていこう。そう思っているところです。

#言葉#日本語#抽象#文字#数字#大量生産#個性#顔#ペット#農作物#製品

03/21 私たちは同じではなく似ている

＊

私たちは同じではなく似ている

星野廉

2022年3月21日 09:49

目次

そっくりなところがそっくり

愛着と興味がないものには残酷になれる

疑似物、疑似世界、疑似体験

似たものとしての世界

個性とユニークさ

似ているから愛着をいただける

初めて見る「似ている」の世界

そっくりなところがそっくり

スマホを使っている人はスマホに似てくる。

人は自分に作るものに似てくる。人は自分が使っているものに似てくる。そっくりに似てくる。シンクロにシンクロする。同期に同期する。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

人の顔や姿がスマホに似てくるという意味ではありません。

大量生産されてどれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくりなのです。

*

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるといのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

ある意味で、製品に合わせているのでしょう。人に便利なように、人の都合に合わせて、そして何よりも人の体や体の一部やその動きに合わせて、商品は作られているからでしょう。

人の体だけでなく、人の内にも合わせて作られているような気がします。内というのは、脳だったり、意識だったり、行動のパターンとか型だったり、ひょっとすると記憶

もそうかもしれません。

人が作ったものや、人が使っているものは、人に似ている気がするのです。

愛着と興味がないものには残酷になれる

私たちにはニワトリがそっくりに見えます。これは特別な思い出や愛着がないからでしょう。思い出や愛着がないものはそっくりに見えます。

ニワトリから見たら、ヒトはそっくりではないでしょうか。顔や姿ばかりでなく、仕草と表情、やることなすこと、そっくりではないでしょうか。

興味がないからです。

愛着や興味がないものには冷淡になれる。残酷にもなれるでしょう。もちろん、愛着と興味をいだけば、ペットにも家族にもなるでしょう。

※この部分は、ある特定の職業を批判するつもりで書いたわけではありません。どうかご理解をお願いします。

疑似物、疑似世界、疑似体験

私たちは世界や森羅万象と直接的に触れあい、対することができません。知覚や言葉という代理、そして似たものを通して触れるわけです。

私には言葉、とくに文字と世界が似ているとは思えないのですが、似たものとして私たちは使っています。不思議です。

言葉という疑似物を用いた疑似世界とか疑似体験という言い方が適切かもしれません。「言葉という偽物を用いた隔靴搔痒の遠隔操作」という言い回しよりは的確でしょう。

げんに私は言葉という疑似物をやり取りして人と交流し、言葉からなる文章を読んで疑似体験を楽しんでいます。これは学習の成果であり、想像力のおかげだと理解しています。

生まれたときから既に自分の外にあった言葉を真似て学びながら、同時に想像力を養った結果という意味です。

あっさりと書きましたが不思議でなりません。

＊

私たちひとりひとはそれぞれの疑似世界を持ち、疑似体験をしている。こう考えてみます。疑似（擬似）の「疑（擬）」が余分ですから、「似」にこだわりましょう。

私たちひとりひとはそれぞれの「似た世界」と「似た体験」をしている。同じではない。同一はありえないでしょう。似ているのです。似ているから通じ合えます。たぶん、ですけど。

似たものとしての世界

私たちは「似たものとしての世界」に生きている「似た者同士」ではないでしょうか。

あなたのいなく「似たもの」と私のいなく「似たもの」と、人の集まりである社会や集団がいなく（決めたということです）「似たもの」は似ているけど、異なるはず。ズレがあるのです。

それが個性ではないでしょうか。それがユニークさであり、掛け替えのなさではないでしょうか。

＊

話し言葉、書き言葉つまり文字、物語、フィクション、行動様式、表情、身振り、仕草、旋律、コード――。

こうしたものは各人、家族、集団、共同体、社会、国家、地域、文化によって異なりますが、似ています。だから伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈ができるのでしょう。

伝達や伝承や翻訳や言い換えや解釈は「うつす・うつる」です。移す、写す、映す、撮す、遷す。「うつす」には必ず何らかの誤差、ノイズ、エラー、変異がともなうそうです。

複製やコピーは同一を再生したり再現することではないようです。似せて作られるものは、当然のことながら、似ているもの、つまり「近似」なのです。

だから「疑似（擬似）」ともいうのでしょうか。百パーセントとか完全という言い方を避けているわけですね。

個性とユニークさ

そっくりに見えても、似たように見えても、似たり寄ったりであっても、そこには「異なる」個性があるのだと私は理解しています。

逆に「同じ」は不気味です。

「似ている」は印象ですから検証はできません。「同じ」や「同一」はヒトの知覚では確認できず、精度の高い機器や機械を用いてなら検証できるでしょう。

日常生活では「同じ」「同一」はありえないし、出会えないわけです。抽象であるとも言えます。その嘘くささが不気味さに通じるのかもしれませんが。個人的な思いです。

＊

そっくりがそっくりしている、シンクロがシンクロしている、同期が同期している世

界。百年前、いや五十年前の人なら、目まいを覚えるのではないでしょうか。

そんな目まいを覚える世界に徐々に入っていった私たち、そして生まれたときには既にそうであった世代の人たちは、もはや目まいを感じなくなっています。

逆に、太古の人たちがこの世界を見たらなんて想像すると、こちらが目まいに誘われますが、そうした想像力を大切にしたいと思っています。

当り前に見えるものは当り前ではないし、必然でも自然でもないという意味です。

とはいえ、私はこの「似たものとしての世界」つまり疑似世界に生まれ、生きていて十分に幸せです。満足もしています。

似ているから愛着をいだける

疑似物である言葉を持ち、さらには文字を持ってしまった人類は、疑似世界に生き、疑似体験を重ねてきたのでしょうか。

直接的に世界に触れているわけではない。これは確かでしょう。

仮想現実だなんて、何を今更という気もしますが、「似ている」と「そっくり」の精度と有効性は急速に高まりつつあるようです。

(私に言わせると、知覚機能と言語活動を介してとらえているこの現実こそが、既に「似たもの」つまり疑似物であり仮想物からなりたっているきわめて精巧でよくできた仮想現実なのです。)

それでも私たちひとりひとりのいだけている「似たもの」が異なるという事実は変わらない気がします。

つまり、「似ている」からこそ違いが生じ、個性があると言えます。「似ている」が個性を生むのです。

一方で、「同じ」は個性を消します。無視するだけでなく消すのです。

*

似ているものに、私たちは愛着を覚え、愛着をいただくことができます。

擬人化というのは、森羅万象に自分たち人間を見てしまうことです。

世界や森羅万象は私たちにとって直接触れあうことができない「何か」であるわけですが、名前を付け、自分たちと似た部分を見ることで親しいものに見えてきます。

自分たちと似ていると思いきみ、手なづけ飼いならしているのかもしれませんが。世界や森羅万象なんてチョロいとも思っているにちがいません。さもないと、科学技術はこんなに発展していないでしょう。

擬人化をとまなう想像によって、ただの物や景色や形が、人形や顔や絵に変わります。空の雲を思いうかべると分かりやすいと思います。

そうした想像力の結果が、映画であったり映像であったり、芸術であったり、おそらく音楽であったりするのでしょう。想像は創造であるという、例の駄洒落です。

*

生き物も人に似ていると感じることで愛着や愛の対象になります。物もそうです。自然にある物たち、そして人が作った物たち。

こう考えると、「似ている」が素晴らしい感覚に思えてきます。

一方で、「同じ」はどうでしょう。

「私たちは同じなんだ」「同じ人間なんだ」「地球に住む同じ生き物なのだ」「同じ〇〇国

民だから」「同じ〇年〇組なのですから」「同じ家族（会社、町内、病気、趣味、ファン、宗教、性、世代、出身地）なんだからさ」……

ちょっと待ってください。

「同じ」も素晴らしく聞こえ、美しくさえ響きますが、どこか嘘くさいのはやはり日常生活や体感から懸け離れている抽象だからではないでしょうか。妙にほのぼのとして美辞麗句っぽいのです。ほのぼの麗句。

さらに、「同じだから」という上の言葉に続けて言われがちなフレーズを想像してみてください。何らかの思惑や魂胆のあるフレーズが頭に浮かびませんか？

「私たちは同じ〇〇なんだから、△△するべきだ（△△して当然でしょう）」——こういう流れになります。

こうしたスローガンやプロパガンダが危険でもあるのは、歴史が教えてくれます。

私たちは同じではなく似ているのです。ひとりひとりが似ていながら違うのです。

＊

「同じ」という言葉が、特定の考えを説得するさいの方便や切り札として使われる場合がいかにも多いことか。

そう簡単に「同じ」だと括っていいもののでしょうか。

魂胆があるからです。言葉の錯覚を利用した心理操作かもしれません。レトリックのことです。

＊

これは個人的な思いなのですが、同じ姿や顔をしたものがずらりと並んでいると生きていくという感じがしません。平気で壊せる気がします。

生きていないと感じないのは、それらに人を感じないからかもしれません。

*

私たちは同じではなく似ているから、ひとりひとりが違うのです。

私たちを文字や数字に置き換えれば、同じどころか同一になるでしょう。

私たちは文字でも数字でもありません。私はそういう抽象には耐えられません。

ためらいもなく、人を文字や数字に置き換えて処理する、あるいは処分する人に強い嫌悪感を覚えます。その鈍感さと残酷さにです。そういう人は権力を持つてはならない、いや私たちが権力を委ねてはならないと思います。

あくまでも個人的な思いです。これだけ抽象にこだわるのは、性格や気質の問題かもしれません。

初めて見る「似ている」の世界

ずらりとそっくりに並んだものたちに掛け替えのなさを感じて、愛着を覚えるためには「似ている」が必要だという気がします。

この「似ている」の根っこには「人に似ている」があるように感じられます。

私は子を持ったことも、育てた経験もないのですが、近所で仲良くしている家族の赤ちゃんをよく目にします。かわいいし、愛おしささえ覚えます。

赤ちゃんを見るたびに、私はその目の動きと表情を観察します。残念ながら声は聞こえません。難聴が進行して高い音域が聞こえないのです。

＊

生まれたての赤ちゃんが目にした世界には「似ている」が立ち現われているのではないのでしょうか。それも「人に似ている」です。

その「似ている」に向かってほほ笑む、あるいは泣く。その「似ている」は必ずしも人でなくてもいい気がします。ガラガラやベビーマリーがそうですね。

物にでも赤ちゃんはほほ笑みかけ、泣いて見せる。それが赤ちゃんの想像力かもしれません。また、笑みと声が「届き」「達する」とも限りませんから、これは占いであり賭けだとも言えます。

さらに言うなら、赤ちゃんにとって、物と人のさかいはないのかもしれない。

物と人のさかいはない赤ちゃんが向きあっているのは、たぶん「顔」なのだと思います（この「顔」とは「意味の萌芽」の比喩と考えていただいてもかまいません）。

「顔」こそが、人にとっての最初の言葉であり文字だという気がします。

これも想像するしかありませんね。

「世界という本物」から永遠に切り離され、そこにたどり着くことができず、「世界という本物に似たもの」に囲まれて生きている以上、人は想像する以外に世界と触れあう手段はなさそうです。

「いま」「ここ」にいて「かなた・あなた」を想う。これで十分ではないでしょうか。

うつせみの あなたにいだく 夢の顔

#言葉# シンクロ # 文字 # 複製 # 模倣 # スマホ # 森羅万象 # 世界 # 愛着# 赤ちゃん
疑似世界 # 疑似体験 # 仮想現実 # 擬人化 # 想像力

03/22 意味が立ちあらわれるとき

＊

意味が立ちあらわれるとき

星野廉

2022年3月22日 09:21

目次

赤ちゃん

ペット

言葉をいじる

赤ちゃん

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはいられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。

信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。

この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？ こんなふうには解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

＊

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見てみると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

*

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。

人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

ペット

言葉は、話し言葉つまり音声と書き言葉つまり文字だけではない。表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚もまた言葉だ。そう思っています。

ペットとの間での言葉は何でしょう？ ペットとのあいだだから、愛だ。なんて言いそうになりましたが、この駄洒落はなかなか言えている気がします。

言葉の通じない相手とのあいだにある愛は交流でなければなりません。一方通行で

あってほしくないわけです。

「ほしくない」のですから、願いです。願いでしかありません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれないかもしれません。

愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がいます。愛おしいのです。

＊

話し言葉や書き言葉が通じない相手とは、表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚を動員して、触れあい、付きあうしかありません。

話し言葉が通じない相手との関係では、声は話し言葉ではなく、純粋な声や音声として立ちあらわれます。

犬や猫に話しかけた場合、相手は言葉ではなく音声としてとらえているにちがいありません。

抑揚、声の質、声の肌理、声の大きさ、声の色、声の長短。

まだ言葉を習得していない赤ちゃんとの間でも、そうでしょう。

＊

ある特定の音の並びがある特定の意味やメッセージを持つ場合もあるでしょう。その限りにおいて意味が立ちあらわれている気がします。

犬に対しての「待て」が「待て」であるかは、犬に聞いてみないと分からない気がします。聞けない以上分からない気がします。

その点、猫はマイペースです。こちらの信号をわざと逸らしているように見えることがしょっちゅうあります。

かまってちゃんの犬と超マイペースな猫のどちらも好きです。

ペットという他者との付き合いもまた、意味と無意味について考えさせてくれます。

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

言葉をいじる

世界の意味 意味の世界
世界の影 影の世界
言葉の夢 夢の言葉

私の記事のタイトルでは、上のようなパターンがありますが、もちろん故意にやっています。

故意に偶然をやっているのです。故意に偶然を招くのです。

いま書いた文に見られるレトリックもよく使います。撞着語法なのかもしれません。

レトリックを分類することには興味がないので、知りません。知りたいとも思いません。

*

自分で書いた文字なのに、自分を離れて「何か」に見える、「何か」を発してくる、「何か」を放ってくる、「何か」を話しかけてくるのです。

それが、私にとっての「意味が立ちあらわれる」です。「現れる・表れる・顕れる・洗われる・あら、割れる」という感じ。

意味は印象やイメージと同じで、個人的なものだと思います。多者である他者と通じるかどうかは賭けなのです。

各人がいなく意味は、多数の他者と重なる部分があれば、重ならない部分もあり、宙ぶらりんだという意味です。

#言葉#声#日本語#文字#赤ちゃん#意味#メッセージ#ペット#レトリック

03/22 「何か」と「何」から身をかかわす

＊

「何か」と「何」から身をかかわす

星野廉

2022年3月22日 15:05

目次

ニュートラル、非人称的、どっちつかず

「何に？」ではなく「何か」

「何」と「何か」はそっくりさん

ニュートラル、非人称的、どっちつかず

あなたの名前——発音やアルファベットで表記した文字のことです——が世界のどこかでは、笑いを誘うかもしれません。怒りを招くかもしれません。決して珍しい話ではないのです。

海外では、あなたのその仕草、目くばせ、眉の動かし方、手振り、身振り、その指の曲げ方が、引き金となってトラブルが起きない保証はありません。

逆に、そのために幸運が訪れないという確証もないでしょう。これも、よく見聞きする話ですね。

世界のどこかではなく、この国のどこかで、あなたのその言葉や言い回しや口調や声の質が、あなたを困らせたり、いい意味でも悪い意味でも思いがけない方向へとあなたを導いたことがなかったでしょうか。

個人的には、これまでに数えきれないほど経験しました。

＊

言葉、言葉遣い、口調、表情、仕草、動作、身振り。

こうしたものは、あなたの思惑どおりになるとは限りません。もちろん、意図したとおりになることもあるでしょう。

そもそも意図などなく、または自分にも不確かなままに、つまり何となく、人は、言葉、言葉遣い、口調、表情、仕草、動作、身振りを「発する」ことが多い気もしますが、これは私だけのことなのかもしれません。

そうした不安定な状態をニュートラルとか非人称的と呼ぶこともできるでしょう。どっちに転ぶか分からないという感じ。

どっちつかず、どっちに転ぶか分からない、どっちでもない、どっちなのだろう？

「言葉や表情や身振りのやり取りはキャッチボールだ」なんて美辞麗句ではなく（むしろ疑似麗句でしょうか、要するに嘘っぽいです）、「お互いにどっちにボールが飛んで来るか分からないどっちボールだ」と言いたくなります。

いまのは半分冗談、つまり半分本気ですが、「言葉や表情や身振りのやり取りはキャッチボールだ」（投げると受けるが着実におこなわれているという意味です）と感じて生きている方は、めちゃくちゃラッキーな人だと思います。

ところで、ドッジボールの dodge は「身をかわす」という意味です。「言葉や表情や身振りのやり取りはドッジボールだ」もなかなか言えている気がします。

キャッチボールよりは誠実で正確なたとえだと個人的には思います。

「何に？」ではなく「何か」

メッセージなり意図が伝わったかどうか不明なまま、事が進むというのが、案外当

り前で普通に起こっている気がします。

人生は綱渡りに似ています。いま無事に歩いた道はたまたま地雷を踏まなかっただけなのかもしれないのです。大げさに言えば、ですけど。

とはいえ、じつのところ、どうなのかは検証不能です。

個人的には、一瞬一瞬が結果オーライの積み重ねであっても驚きはしません。なぜオーライになったのかはぜんぜん分からないのです。

*

人はつねに占い賭けているのだとつくづく思います。赤ちゃんも占い賭けているのです。

あなたの、その思い、願い、祈りは届いていますか？ 達していますか？

いまの文では「何に」届いているのか、「何に」達しているのかは、あえてぼかしました。「何に？」は不明であるからです。

だから、占いであり賭けなのです。占いも賭けも、「何に？」が不明なのです。

たとえば、茶柱や水晶や星の運行の背後にある「何か」に身をゆだねて占い、賭けているという意味です。

「何に？」ではなく「何か」ですから、相手や対象は分からないのです。だからこそ、占いであり賭けだと言えるでしょう。

「何？」と「何か」は日本語では似ていますが、それぞれが英語の what と something に相当しますから、頭の中で置き換えるといいかもしれません。

「何？」は疑問を追求する感じで、「何か」は疑問を保留するのです。

＊

「何か」(保留)ではなく、「何に？」(追求)を指向するものであれば、それは占いで賭けでもなく、宗教あるいは哲学でしょう。

私はそのどちらにも詳しくなく興味もないので、これはあくまでも個人的な思いだとしてご理解願います。

どちらにもかかわりたくないという意味です。

「何」と「何か」はそっくりさん

あなたの、その思い、願い、祈りは届いていますか？ 達していますか？

いまの文では「何に」届いているのか、「何に」達しているのかは、あえてぼかしました。「何に？」は不明であるからです。

「何に？」(追求)と問うことは、得体の知れない「何か」(保留)に挑戦することです。

その「何か」(保留)は、世界だったり宇宙だったり真理だったりするでしょう。運命や神だと言う人もいますでしょう。

保留を追求するなんて、眠っている子をわざわざ起こすようなものです。

本気でやろうとすれば、世界を背負うことに匹敵します。大昔とか昔に、超エリート中のエリート(いわゆる「昔の」「偉い人」のことです)が世界を背負おうとしました。現在古典と呼ばれているものを書いた人のようです。

いまはどうなのかは知りません。というか、いまは、世界を背負おうとする「偉い人」は必要とされていないもようです。古典で十分みたいです。

いずれにせよ、「何に？」や「何？」(追求)と問うのはしんどいということでしょう。半端じゃなくしんどいにちがいありません。

＊

話をずらしします。

じつは「何に？」（追求）も「何か」（保留）も似たようなものだという話に移ります。

「何か」（保留）を不明なままにして、その「何か」（保留）に負けた振りをするという話にもなります。保留のさらなる無力化です。

＊

「何か」（保留）に「何か」（保留）を見る。

何かに何かが見えてしまうのはつらいことです。世界を背負いこむようなもの、こっちに落ち度があるようなものだからです。

どうして見えるわけ？（じつは、これは「どうして見えないの？」ときわめて近いのです） どういうわけ？

これでは自分を追いこんでしまいます。

「何か」（保留）にこだわってしまうとか、「何か」（保留）に意味を取らずにはいられないという傾向の人は、自分を追いこんでしまいます。じつは私がそうなのです。

わざわざ保留を追求に変えているのですから。

とはいえ、something を what と混同しているなんて言い方はしません。日本語と英語は別個の言葉です。ですから、それぞれ別の言葉の綾があります。

ここでは、日本語における言葉の綾を問題にしています。「何（なの）か」（追求）と「何か」（保留）をめぐる言葉の綾です。

＊

この言葉の綾というのも、意味やイメージと同じくきわめて個人的なものです。ニュートラル、つまり「どっちつかず」でもあります。

たとえば、私は哲学というと鉄学や徹学や徹我苦を連想して、何かお堅いとか硬いものを感じてしまうのです。英語の philosophy とはほど遠い語感なのです。

ですから、「何か」と「何」をめぐる話も個人的なものかもしれません。

もっとも私は交際がきよくたんに薄く、こんな話ができる友達がいないので、誰にも話したことがありません。

＊

「何か」に「何か」が見えるだけには、とどまりません。強迫観念が被害妄想のように訪れるのです。私のことです。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。

それだけではありません。

「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。

こうなると、もう勘弁してほしいでしょうね。

「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

ここまで来るとかなり危ういです。

保留が追求に変わっているばかりか、その追求がエスカレートしているのですから。

どうしたらいいのでしょうか？

＊

まかせる。「何か」（保留）にまかせればいいのです。すると、「何か」が消えます。それくらい徹底的にまかせるのです。

「「何か」（保留）とは「何」（追求）なのか？」なんて考える必要はありませんよ、ふつうは。考えなくても生きていけます。しかも考えることは他にいっぱいあります。

まかせる。まかせるはまけること。全面降伏すればいいのです。負けるが、じつは勝ちですから。

負けたと言っても、じつは任せただけ。わざと負けることで、身を任せただけ。要するに、身をかわしたということなのです。

「何か」（保留とも追求とも取れる：something の「何か」とも、what の「何（なの）か」とも取れるという意味です）から身をかわす。これがいちばん大切なことではないでしょうか。

＊

「何か？」と問うたり「何か？」と考えることは、悩まなくてもいいこと。答えは出ないし、出した人もいないのです。答えを出したと自分で決めた人はいます。それに追随してきた信者やファンはいます。

「何か」とか「何か？」なんて要らないのです。だいいち「何か」なんて得体の知れないものにまともに体当たりすると壊れますよ、ぶっちゃけた話が。

わざと負けて身を任せる。身を任せることは身をかわすこと——。

ドッジボールみたいに生きてみましょう。「何か」（保留だったり追求だったりする）と

か「何か?」(追求)というボールから身をかかわすのです。

なにしろ、「何か」と「何?」は日本語ではそっくりさん同士なので、勘違いしやすいのです。

かといって、「何か」と「何?」とは何かなんて考えては、身をかかわしたことになりません。放っておくのです。

＊

「何か」と「何」という言葉を使わないほうがいいという話ではありません。いままで通りに使いましょう。

ただし、文字どおりに取ると馬鹿を見るので控えましょう。深く追求しないのです。深追いしないのです。世界を背負いたい人は別ですけど。

「何か」と「何」に見られる日本語の言葉の綾を整理したうえで使うといいかもしれない。それくらいに取っていただければうれしいです。

#言葉#日本語#妄想#任せる#負ける#ニュートラル#占い#賭け#ドッジボール#言葉の綾

03/23 影を見る

＊

影を見る

星野廉

2022年3月23日 08:38

目次

言葉の影、現実の影、知覚の影

立つと「立つ」

立ちあらわれる「立つ」と立つ

言葉の影、現実の影、知覚の影

何かではなく、何かの影しか、私たちは見ていないのかもしれませんが。個人的な思いなのですが、私は何を見るにつけ、それが見えている気がしません。

自分だけかとも思うのですが、まわりの人を見てみると、どうも見えているように感じられないのです。失礼な話ですけど。

私が勝手に「見る・見える」の敷居を高くしているだけなのかもしれません。わざわざ自分で見えなくしているのかもしれませんが。

人と交わらない性格の私には、この種のことが多い気がします。

いずれにせよ、ひとさまの「見る・見える」は、そのひとさまにしか見えていないのですから、想像するしかないようです。

＊

言葉が見えない。言葉の影が見えるだけ。現実は見えないから、現実の影を見ている。

現実なんて言っても、私たちは五感というまだら模様のカーテン越しに「見ている」つまりとらえているだけ。まだら状の知覚の影を見ているだけなのかもしれません。

私の言う見えないとは、そういう意味です。

立つと「立つ」

意味が立ちあらわれる。

このフレーズについて昨夜寝入り際に考えていました。とりとめのない思いに浸っている時間です。一日のうちで、寝入り際がいちばん楽しいです。

意味が立ちあらわれるのに立ちあうと、意味が立ちさわぐ。

うとうとしながら、こんなふう言葉にいじります。舌で転がしている感じです。

＊

立つ。

視覚的なイメージが浮かぶときと、言葉が言葉を誘いだすように言葉が浮かんでくるときがあります。

学校時代に「起立！」と声が掛かって、みんなして起立したときのもようが頭に浮かびます。その姿の記憶から、「直立不動」という言葉が呼びさまされます。

立つが「立つ」に変わる瞬間です。イメージが言葉に変わると言えばお分かりいただけるでしょうか。

立ちあらわれる「立つ」と立つ

意味が立ちあらわれる。

このフレーズを見ているうちに、「立つ」に興味が出てきました。

「立つ・立てる」というふうに変がしてみます。

「建つ・建てる」もあったなあと思いだし、「たつ」で辞書を引いてみることにしました。

「立つ、建つ／起つ、発つ／経つ／絶つ、断つ、裁つ、截つ」

わくわくします。頭の中にいろいろな言葉や情景やイメージの断片が浮かんでいきます。

*

「立つ・立てる」に絞ります。

立つとか立てるといって、不安定な感じがします。立ったのはいいが、立てたのはいいが、大丈夫なの？ 心配なのです。

そもそも人にとって立っているのは不自然な気がします。落ち着かないのです。座っていたり寝っ転がっているほうが楽です。

ヒトがあるいは、ヒト以前のサルが立ちはじめたのはいつなのだろう。考えても仕方ありません。調べるのは面倒です。

とにかく大昔はヒトにとって立つのは稀な体位だったようです。四つ足歩行をしたり、木の枝につかまっていたのでしょう。

*

立つ（立てる）と、いつかそのうちに倒れるというイメージがあります。立っている（立っている）間は緊張して体に力が入っているような感じもします。

立つのは一時的な体勢なのです。いつまでも立っているわけではない気がします。

立っているためには力が要りますから、元気なのでしょうね。元気でなければ立ちませんし、立てません。

＊

前立腺を連想しました。漢字の組みあわせとして見ると不思議な字面をしています。英語では prostate (gland) ですが、漢字の語感と一致します。ヨーロッパの言葉からの翻訳語のようです。

pro には前という意味があります。state は、「立つ」にこじつけると立ち位置という感じでしょうか。似た言葉に status があります。

stand、statutue、static、stop、stay、start、stay、station、step、stray、stroll ……

st は移動と静止をあらわすと、昔習った記憶があります。そんなふうには単語を覚えたのです。

こういう st みたいなものを語幹とか語根と言った記憶があります。語源的な裏づけがあるのか不明ですが、個人的には、ただつながればそれでいいのです。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。

＊

そう言えば、トイレに立つと言いますね。小用に立つとも言います。おもにおしっこなのでしょうか。

立ち小便という言葉も思いうかびました。いまでは男性も座っておしっこをする場合が増えました。

立つ、座るは、生理現象や排泄と関係が深い動作です。寝るはずばり性行為を指すことがあります。

おもしろいですね。

*

そそり立つ、そびえ立つ——。立ちあらわれましたね。威勢がいいです。立派です。

風立ちぬ。風が立つとはどういう状態なのでしょう。匂い立つような美しさなんて言い回しがあります。

香りが立つ。これも美しい語感の言い回しです。響きも字面も綺麗です。においや香りはいかにも影という感じがします。見えないからでしょうか。

五感のうちで見えるのは視覚だけだと気づきました。考えれば当たり前ですけど、不思議な気もします。

四対一なのに、視覚の優位は揺るぎません。なかなかしぶといのです。

暗闇での「立つ・立てる」は、明るいところでのそれとは異なる気がします。どうなのでしょう。想像するとわくわくしてきました。いつか試してみます。

五感、語感、語幹、互換、交感。

脇道に逸れそうになりました。

*

影を見るのも楽しいものです。

#言葉 #日本語 #影 #五感 #語感 #現実 #知覚 #英語

03/24 血液と水分がみなぎる春

＊

血液と水分がみなぎる春

星野廉

2022年3月24日 08:02

目次

筋というつながり

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする

血液と水分がみなぎる春

掛けることで言葉と世界がシンクロする

筋というつながり

何かに運ばれていく感じを筋と、とりあえず呼んでみましょう。

そうした筋がシンクロしているのではないか。シンクロとは筋の動きなのではないか。
今回は、そんな話をします。

世界や言葉には、それぞれになんらかの筋のようなものがある気がします。

筋というのはつながりみたいなものです。

Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……。

こんな具合に、つながっていく、続いていく感じ。動きなのです。移動のほうがいい
かもしれません。

うごき、うつっていく。「うつる」は「移る」だけでなく、映る、写る、遷る、伝染る
も含まれます。呼応とか反響とか転写とか、共振や共鳴や交感も含む感じ。

いま言葉を転がしましたが、まさにそれが筋です。何かに運ばれていく感じで言葉が浮かんでいきます。

これはたまたまの動きであって、これしかないというものではないでしょう。

人によっても異なるし、同じ人でもその時々気分や環境によって変移するはずですよ。

いずれにせよ、つながる、つづく、うつろう、人はその流れに運ばれていくだけ。それが私の考えている筋です。

この筋とは、「AだからBだからCだからDだから……」という論理っぽいものではなく、また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして」という物語っぽいものでもありません。

あくまでも、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」という流れを想定しています。

AとBとCとDは、並列や並置であり、どれもフラットな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないのです。

このつながりとはレトリックのことではないでしょうか。

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする

春夏秋冬と煙に共通する点は何でしょう？

立つことです。

立春、立夏……。なぜ立つのか、あるいは、どうやって立てるのかは調べれば分かるかもしれません。

私は想像を楽しむほうを選びます。わくわくしたいからです。横着なのでしょうね。

*

春は「張る」だと勝手に思っています。たしか、そういう説もあるみたいですが知りません。忘れたのかもしれませんが。

いまここにあるもので済ませます。寝入り際や死に際と同じ心境で、ああでもないこうでもない、ああだこうだを楽しみたいのです。

寝際に辞書を引いたり検索するのは面倒です。ましてや死に際には無理でしょう。際にはいろいろなものが訪れます。それで十分なのです。

春になると、いろいろなものが張ります。木々や草花の芽やつぼみが膨らむのは張っているからでしょう。

山の奥でも雪解けが進み、川面が膨らんで見えます。道を歩く人たちの頬も上気したかのように見えます。

山川草木、そして人が膨らみ張って見えます。膨張するのです。

*

私は花粉症なのですが、症状が出るたびに、鼻の奥や喉や気管支の粘膜が腫れているような気がしてなりません。

細かい血管に血液が送りこまれて腫れているのでしょうか。腫れるのも膨張です。

身のまわりも、身のうちも、張っている、それが春。水や血液で張っているイメージです。

やっぱり、春は張るだどつくづく思います。

春、張る。世界と体が同時に張る。世界と身体がシンクロする。

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする。世界と身体と言葉がシンクロする。

言葉のレトリックと世界のレトリックを強引に重ねました。

血液と水分がみなぎる春

春は始まる季節です。とくに日本はそうです。会社も学校もお役所も春に始まります。新年度が春なのです。

「たつ」に「発つ」や「起つ」があるのに気づいて、はっとします。

東京を発つ、旅立つ、風が立つ、席を立つ、鳥が飛び立つ、民衆が立（起）ちあがる。

どれも、始まるわけです。

＊

春に張って始まる。

水分や血液がみなぎって、何かが始まる感じがします。眠っていた生命が息を吹き返すイメージでしょうか。

生命を感じさせる「張る」は、生殖や性ともつながっている気がします。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。（拙文「影を見る」より引用）

回春という言い方がありますが、春には人生における春という意味あいもあるようです。

発情期がはっきりしないというか、常時発情しているかに見えるヒトも、春にはうずうずするのもかもしれませんね。

掛けることで言葉と世界がシンクロする

春に張って始まる。

このように言葉に端を発するかたちで、まわりの世界を見たり思いえがくと、動物も植物も、そして人間も春には張り切るようすがうかがわれます。

言葉のレトリックと世界のレトリックが重なりシンクロしているようです。

こじつけっぼいですね。

というか、こじつけや掛け詞や駄洒落や比喩は、言葉と世界をレトリックつまり綾でつなぐという点では同じ仕組みだと思えます。

言葉同士をからめ、言葉と言葉が指すものをからめ、言葉と世界をからめ、ひいては世界と世界をからめる。これが可能なのは、言葉も世界も多層的で多元的であるからでしょう。

レトリックの基本的な身振りが「からめる」であるとするなら、レトリックの根っこには同期があるように見えます。

「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」というつながりであり、ながれです。引っ掛けていくのです。

大切な点は、上でも述べたように、AとBとCとDは、並列や並置であり、どれもがフラットな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないことです。

この関係がフラットなのは、引っ掛け引っ掛けられる、つまり引っ掛け合うそれぞれの

要素がニュートラルである、つまりどっちつかずで、どっちにも転ぶからだと思います。

掛けることで言葉と世界がシンクロするのです（このときには、身体もシンクロしているような気がします）。たぶん、この掛けるは賭けるとシンクロしている気がします。

さらに言うなら、賭けもシンクロも、きわめてニュートラルな要素のあいだで生じるニュートラルな身振りだという気がします。

どっちつかずで、どっちにも転ぶし、うつるのです。

言葉 # 日本語 # 春 # レトリック # 言葉の綾 # 影 # シンクロ # 掛け詞 # 駄洒落
比喩

03/25 ことばの綾、うつつの綾

＊

ことばの綾、うつつの綾

星野廉

2022年3月25日 08:07

春夏秋冬と煙に共通する点は何でしょう？

立つことです。

立春、立夏……。なぜ立つのか、あるいは、どうやって立てるのかは調べれば分かる
かもしれません。

(拙文「血液と水分がみなぎる春」より引用)

＊

上の文章ではレトリックの話をしながら、レトリックを用いて、しらっと煙に巻いて
いますが、誤魔化しています。

立春、立夏、立秋、立冬、ここまではいいです。立煙はありません。というか言いま
せん。そういう言い回しが無いのです。

「煙が立つ」とか「煙を立てる」とは言います。これも言い回し、つまり慣習として熟し
た句という意味の熟語でしょう。

「火のない所に煙は立たぬ」ということわざもあります。

＊

「春が立つ」とか「春立つ」とは言うそうです。後者は昔の言い方ばいです。どちらも、
私は使ったことがない言い回しです。

春を立てる、は聞いた覚えがないです。でも、そういう人がいても驚きません。

詩だとありそうです。詩では何でもありです。それくらいの気持ちなければ、詩は書けないでしょう。萎縮した詩は死んでいます。詩の死でしょう。

詩人は私人でいてほしいと思います。職業でもステイタスでも名称でもなく、ただ詩を書く私人でいてほしいのです。

こういう余計なレトリックを書くので、途中で読むのをやめる人が多いようですが、無駄を除くと私の文章には何も残りません。

というふうに、またレトリックに走ってしまうのです。申し訳ありません。

＊

「立春」、「春（が）立つ」、「煙が立つ」という言い方、言い回し、言葉はあるという話でしたね。

ところで春が立つのを見たことがありますか？

「春が立つ」はたぶん比喩的な言い方です。つまりレトリックです。

「春が立つ」は視覚的にイメージしにくいのではないのでしょうか。それは、レトリックだからでしょう。言葉の上だけの話という感じです。

一方で「煙が立つ」のは見たことがあります。誰かの煙草の煙とか、焚き火の煙とか、煙突から出てくる煙はのぼります。

これを「煙が立つ」と言うのは擬人ぽいですが、絵になります。立ちのぼる感じです。

＊

ここで整理します。

「春が立つ」はレトリック、つまり言葉の綾です。言葉からなる世界の話です。違和感を覚える人が多いだろうし、一つ間違えると荒唐無稽やナンセンスや矛盾になりえます。

「赤ちゃんが立つ」は描写とか写生と言えそうです。これをうつつの綾と呼んでみましょう。現実の世界を言葉にうつしたものです。いちおうというか、ほぼ整然として見えます。違和感を覚える人はきわめて少ないと思われます。

※うつつの綾もレトリックなのですが、今回はこれ以上深入りしません。

＊

言葉の綾を言葉どおりに（文字どおりに）取る、つまり言葉の綾をうつつの綾として取ると楽しいです。私はしょっちゅうそんなことをして遊んでいます。

たぶん遊ばれているのだと思います。何にって、言葉にです。

ひょっとすると「何か」によって、とも思いますが、いまは体調が悪いので、深入りするのはやめておきます。

たとえば、「へそが茶を沸かす」を文字どおりに取って、思いえがくと、つまり頭の中で絵にするとぞくぞくします。

ここで言う「文字どおりに取る」とか「言葉のとおりに取る」というのは、リテラリズム（literalism）という言葉で、文学や美術の世界で使われているものと近いでしょう。

リテラリズムはルイス・キャロルなどの書いたナンセンス文学でも多用されています。原語で読むとぞくぞくします。

＊

アルミカンの上にあるミカン。

この駄洒落が有名なのは、語呂がいいし、綺麗に決まっているし、しかも視覚化するとシュールだし、写生文に徹した自由律俳句みたいだからかもしれません。

ものすごく好きです。

この駄洒落を言葉どおりに取る、つまり言葉の綾をうつつの綾として取ると、「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」のように、シュールな絵として決まるし、字面だけで見ても綺麗なのです。

アルミ缶とミカンという懸け離れたもの同士が、音の類似や一致という共通点に支えられて、言葉として出会う。

言葉とうつつがシンクロする。言葉と現実が同期する。

言葉がキューピッドのように一瞬だけ懸け離れたもの同士をつないだのです。

つながるのは、それぞれのもものが多様で多元的であるからです。その多様と多元のうちほんの一部だけを、言葉が一瞬だけすくい取って、つないだと言えそうです。

はかない美しさ——普遍の美ではないのです——、それが駄洒落の美なのです。蜃気楼や陽炎のように、ごく短い間に立ちあらわれるだけだと言えば、綺麗すぎでしょうか。

*

言葉の綾とうつつの綾が一瞬絡みあったのです。必然なんてありません。当然のことでもありません。普遍でもありません。

一期一会、たまたま出会っただけ、偶然の出会いなのです。

レトリックでの出会いにおいては、その言葉も、その言葉が指ししめす事物も、ニュートラル（どっちつかず）なものとして立ちあらわれて、一瞬だけからみ合うのです。

*

「春が立つ」を言葉どおりに取るためには、春を擬人化する必要があるかもしれません。

なかには春さん（春という名前の人）が立ったさまを、思いうかべる人がいても驚きませんが、それよりも春が始まったとか春が始まる気配を感じたという意味で取る人が多いにちがいありません。

クロッカスの芽を見て、あるいは強い風が吹いて、あるいは、鼻がぐしゅぐしゅし始めて、あるいは沈丁花の香りを嗅いで、「春が立つ」を感じる人も多いでしょう。

「春が立つ」というふうに、「人が立つ」を連想させる「立つ」という言葉が使われているわけですから、「春が立つ」にはどこかに擬人っぽいものがあるという意味です。

「立つ」なんて、本来は人に使う言葉を用いているわけですから、クロッカスや強い風や鼻のうずきや沈丁花の香りに、「よく来たね」とか「また会えたね」なんてふうに、話しかけたくなるような思いをいだくのではないかという意味です。

＊

人形や玩具を撫でたり、話しかける。愛用の物（カバンとか靴とか、生きていない物です）を思わず撫でたり、それに話しかけている自分がいる。

人は何かを愛でたり愛したりするためには、その対象に「人」を感じていなければならぬ気がしてなりません。

春が立つ。

私はこの言い方に、私は、人、あるいは人の気配を感じます。

春に人を感じるとすれば、それはきわめて人的ないとなみであり、この星のヒト以外には通じないギャグであり駄洒落であり比喻であるにちがいありません。

「春が立つ」の春に限らず、あらゆる擬人化に言えることだという気がします。擬人は一方的で一方向であり、それゆえに強引で孤独ないとなみではないでしょうか。そのありようは人そのものだという感じがします。

#言葉 # 日本語 # 春 # レトリック # 言葉の綾 # 煙 # 擬人化 # 駄洒落# 比喻 # 掛け詞
詩 # リテラリズム

03/25 赤ちゃんが立つとき

＊

赤ちゃんが立つとき

星野廉

2022年3月25日 11:01

目次

生きていない物が立つとき

赤ちゃんが立つとき

私が立つとき

描写なのかレトリックなのか

生きていない物が立つとき

生きていないものが「立つ」というのは、人や生き物にたとえているわけです。

煙が立つ、陽炎が立つ、風が立つ、蜃気楼が立つ、茶柱が立つ、蚊柱が立つ、江頭が立つ、(人柱が立つ)、火柱が立つ、卵が立つ。

どれも絵になります。そのもようやさまが目映るようです。綺麗な絵も身の毛がよだつ光景もあります。

いずれにせよ、言葉の綾と、うつつの綾とが比較的うまくからまっている感じがします。

風のように見えないものでも、見える気がしてくるのは、言葉がイメージや想像を喚起するからにちがいません。

風が立つなんて、耳に綺麗に響くので、「ま、いっか」という気持ちになるのです。

風立ちぬ。今は春。春立ちぬ、

＊

家が建つ。

この言い回しは漢字を使うと「へえーっ」とか「ふーん」とか「うーむ」「で?」とか「知るか」とか「そだね」という感じでしょうか。

しゃべっているぶんには「たつ」なので、いちいちこれを頭の中で漢字に置き換えている人はいない気がします。

でも世の中にはいろいろな人がいますから、いても驚きはしません。

家はたてるのであって、勝手にたちませんから、「家がたつ」は擬人化ばい気がします。「家を建てる」は別です。

＊

「立つ・立てる」はほぼ垂直方向への動きです。

「あの人が（は）立つ」とは言っても、「あの人の手が立つ」とは言いません。「手があがる」でしょう。

「指があがる」というと、怪我をした指があがる感じになり、垂直に指をあげることは「指を立てる」と言います。「見て見て、あの人の親指が立っている」とは言いそうですね。

「指が立つ」は擬人化なのでしょう。どうでもいいことですね。そう言ってしまうと、この記事ぜんぶがどうでもいいことになります。

そうなる立つ瀬がない。私の顔が立たなくなります。べつに立たなくてもいいので

すけど。

赤ちゃんが立つとき

「春が立つ」はレトリック、つまり言葉の綾です。言葉からなる世界の話です。違和感を覚える人が多いだろうし、一つ間違えると荒唐無稽やナンセンスや矛盾になりえます。

「赤ちゃんが立つ」は描写とか写生と言えそうです。これをうつつの綾と呼んでみましょう。現実の世界を言葉にうつしたものです。いちおうといか、ほぼ整然として見えます。違和感を覚える人はきわめて少ないと思われます。

(拙文「ことばの綾、うつつの綾」より引用)

*

赤ちゃんが立つ。

これは言葉による描写（写生文の写生）であると同時に、現実世界では特別の意味を持ちます。つまり、

「たち」とか「あんだよ」のことです。

「お父さんが立つ」とはちょっとニュアンスが違います。変な意味に取らないでください。stand のことです。

ところで、この文は純粋な写生になりうるのでしょうか。語弊というか垢がつきまとうのです。

それに対して「赤ちゃんが立つ」は写生だけではなく、おめでたい、祝福すべき出来事だという意味です。いい意味での「垢」がつくのです。

*

「立つ」はただ垂直の動きを示すだけではないようです。語弊や垢がありますが、使い方によっては語弊や垢を招くという意味です。

文字どおりに取れない、言葉どおりに取れないということですから、一種の比喻みたいにレトリックになってしまう。言葉の綾になってしまうとも言えます。

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたたり、横になっていたらしいのです。

＊

みなさんはいま、どんな格好をなさっていますか？ 座っていたり、横になっていたり、何かに寄っかかっているのではないのでしょうか。

直立不動の方は少ないと想像しています。直立不動は、意外とつらいものです。歩いているほうがまだましです。

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。

瞑目合掌。

＊

立っていると、あるいは立って歩いているときに覚える緊張感は、大昔のヒトの時代から蓄積された記憶から来ているのかもしれませんが。

立った状態で何かをしていると、びくびくする自分の一部を感じます。襲われるかもしれない恐怖と言いましょか。何にって、敵です。

「立つ」は非常事態なのです。そのときの人の神経は普通じゃないのです。

いろいろな意味で。

私が立つとき

年を取ってくると足腰が弱くなるというのは、年を取って体感して初めて分かるものである気がします。頭で分かるものではありません。

こういうのは、今という時代だから感じるのでしょうか。昔の人はもっと足腰が強かったのではないかというイメージを持っています。

私はストーリーや謎解きには興味がないので——両方とも人生だけで十分なのです——、どんな小説でも好きな箇所だけを断片的に何度も再読するのですが、先日次のような部分を読んでいてはっとしました。

”（前略）いましも、ある老作家が、この会場に遅れて馳はせつけたところだった。しかし、馳せつけたという言葉は適当ではない。大家は老いている。（中略）大家は七十ぐらいい見た。人びとは尊敬と阿諛あゆをまじえた笑顔でおじぎをした。老作家は、それに会釈えしゃくしながら、よちよちと赤ン坊のように歩いていく。”

場面は、大きな新聞社主催のカクテルパーティで、著名人が集まっている会場です。

私が驚いたのは、「七十（歳）ぐらい」で「よちよち」とは、いまの感覚だとちょっと

早いのではないかと思ったからです。

*

心当たりがあるだけに、こういう部分には敏感に反応してしまうのです。たとえば、自分に年の近そうな人が歩いていると必ずその足元や歩き方に目が行きます。

立っている姿にも密かに注目してしまうのですが、そのときの目は必ず自分と比較しています。

上で引用したのは、松本清張作『砂の器（上）』（新潮文庫・pp.108-109）なのですが、「この作品は昭和三十六年七月光文社より刊行された。」とあります。

当時（1961年）から高齢者の「よちよち」があったのですね。しかも七十歳くらいで。高齢者とはいえ、まだ若いですよ。それとも、そのころの七十と今の七十ではだいぶ違うのでしょうか。

それとも運動不足のまま年を取った文化人である「老大家」を揶揄しての表現だったのでしょうか。

いずれにせよ、複雑な気持ちになります。

描写なのかレトリックなのか

「立つ」は一筋縄ではいかない気がします。言葉どおりには取れないのです。

「語弊」というか、言葉にまどわりついた垢を感じます。

「立つ」は「立つ」でしょ」なんて具合に文字どおり取れないニュアンスとかイメージがくっついているようだという意味です。

詳しく言うと、「〇〇が立つ」の〇〇が生きていない物であって、擬人化っぽいレト

リックを感じるだけの話にとどまらないみたいなのです。

＊

「〇〇が立つ」の〇〇が人間である場合には、その人の年齢や立場や性別や、その人の背景のほかに、その行為がおこなわれている状況や場面によって、意味が付け加わるという感じがします。

「生後八か月の孫が立った」、「生後十か月の孫が立った」、「彼が来た。みんな一斉に立った」、「彼女は席を立った」、「お願い、席を立たないで」、「名前を呼ばれて、私は立った」

「先生が教壇に立つ」、「先生が窓際に立つ」、「患者が病室の窓際に立つ」、「崖の上に立つ」、「木の上で立つ」、「バレリーナが舞台中央に立った」、「母が台所に立つ」、「父が台所に立つ」、「こどもが台所に立つ」

こうした例は必ずしも描写や写生ではないという意味です。かといって、レトリックとくくっていいものか、ケースバイケースなのか、べつに「立つ」だけの問題ではないのか、角を立てるのはやめて寝っ転がっていたほうがいいのか、考えすぎなのか.....。

ことばの綾とうつつの綾のあいだで揺れている気がするのです。言葉の綾はまだしも、うつつの綾なんて自分語を作って揺れていけば世話ないですけど、もう少し考えてみたいです。

#言葉 #日本語 #レトリック #言葉の綾 #擬人化 #赤ちゃん #比喩#描写 #写生文
松本清張

03/26 意思表示としての動作

＊

意思表示としての動作

星野廉

2022年3月26日 07:51

目次

「立つ」は疲れる

横になる、寝る

意思表示としての動作

「立つ」は疲れる

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

(拙文「赤ちゃんが立つとき」より引用)

＊

立つのは不自然な姿勢なのかもしれません。立っていると、とにかく疲れます。まだ歩いているほうがいいくらいです。

緊張するのです。衛兵みたいに直立不動でいるなんてすごいと思います。これはやってみると分かります。

私には無理です。最近歩くのもつらいのです。

外に出ると、立っている人はあまりいません。立つのは一時的な体勢で、長い間立っているというのは異様であり、異常でもある気がします。

職業なら別ですけど、衛兵を除いて、じっと立っているだけの仕事も珍しいようです。

立ち仕事なんて言い方もありますが、たぶんレトリックであり、立つ以外の作業もけっこうあるみたいで、他人事とはいえほっとします。

立っている人には同情してしまうのです。

＊

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。

(拙文「影を見る」より引用)

とはいえ、立つの反対は萎えるばかりではないようです。

横になる、寝る、座る、なんかも反対と言えるかもしれません。

というか、立つのに疲れて、気持ちも体も萎えるから横になったり座るのかもしれない。

なぜか、最近、立つにこだわっています。立つに憑かれて疲れている自分があります。勝手にしろ、ですよ。

＊

立つの反対とは？　なんて考えるのではなく、立つの前には何をしているのかと具体的に考えてみました。

自分やまわりの人やテレビに映っている人を観察するのです。

横になる、寝る、座るのほかに、寄っかかる、飛ぶ・跳ぶ、宙返りする、這い上がる、のぼる、あがる、転ぶ、倒れる、よろける、殴られる、押される、なんてのもあるのに気づきました。

スポーツを見ていると勉強になります。スポーツは動作から成りたっていることに今更ながら気づいてほしいです。

*

こうやって「立つ」に注目すると、動作を表す語彙にいかにか自分が乏しいかが実感できます。

動詞はわりと好きなのですが、選り好みが強すぎて、「見る・見える」とか「分かる・分ける」なんかに偏っているという気づきも得ました。

そう言えば、アナウンサーはスポーツ中継で言葉による描写力を養うという話を思い出しました。

あのう、あれが、ああなって、こうなりました、なんて言っているわけにはいきませんよね。

いまの私なんか、言葉が出なくて、「あれ」、「なに」、「あそこ」と口にするのが多くなりました。

いやね、あそこで、あれが何してね。

文字にしてみると、何だかいやらしくないですか？ 声に出しても、いやらしいですね。

状況とかコンテキストが大切という意味でしょうか。

話が逸れて申し訳ありません。万事この調子なのです。

横になる、寝る

立つはきわ立った言葉だという気がします。

ヒトにとって、立位とか二足歩行というのは、やはり画期的な動作の獲得であり、言語の獲得や文字の獲得と同じくらい大きな意味を持っているのではないか。

そんな気がしてなりません。

そのため、「立つ」という言葉を使う場合には、そのフレーズやセンテンスが単なる描写や写生にとどまらず、何らかの象徴的な意味を帯びたり、特別なメッセージを発する信号や記号になりうるようにも思えます。

*

単純に考えましょう。

人は生まれるとたいてい横になっている。死ぬときも、横になって死ぬときが多い。

この「横になる」とか「寝る」に注目してみます。

*

「立つ」行為は、人に見せるためにある気がします。人に見せるために人は立つのです。

「ほら、立ったよ」、「見て、立派でしょ」、「ね、こんなぐあい」、「どうだ」、「頑張っています」、「いいでしょ」、「きりっ」

人が立っている姿を見ていると、そんな言葉が聞こえてくるようです。

立っているのを見ているほうも、「見せている」の人に応えている節が見られます。

「おお、すごい」、「やったね」、「リスペクト」、「あら、まあ……」、「素敵すぎます」、「頑張っていますね」、「元気をもらいましたよ」

＊

一方で、「横になる・寝る」は、ひとさまにお見せする姿ではない気がします。

人は人のいないところで寝っ転がります。人のいるところで横たわると何らかの特別な意味やメッセージを持つという意味です。

「ねえねえ、見て」とか「ほらほら」という感じで寝ている人や横になっている人の姿は想像しにくいのです。

それも無きにしも非ずですが、特殊な場合でしょう。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

強いて言えば、ワンコやニャンコのへそ天くらいでしょうか。あれはかわいいですね。そのさまを想像してにやけている自分がいます。

意思表示としての動作

横になる・寝ると言えば、あれです。

ジョン・レノンとオノ・ヨーコの「ベッド・イン (Bed In)」です。大事件でした。

詳しいことは検索してください。たぶん動画もあるはずですが、ここでは割愛させていただきます。

とにかくお二人が高級ホテルでベッドに寝て、平和を語ったのです。

1969年の出来事ですが、私は最初その報道写真を見たとき、いったい何が起きている

のか理解できませんでした。少年だった私の目が点になっていた記憶があります。

「寝る・横になる」という動作が、大事件として報道されたのです。ありえない話でした。

あの事件は見せ物ではありませんでしたが（たぶん）、見せるため、それも世界中の人びとに見せるために、「寝た・横になった」のですから。

＊

ベッド・インといえば、ダイ・イン（die-in）です。

これも「寝る・横になる」を人に見せる行為ですが、おもに集団で地面に横たわって死んだ振りをするのです。

抗議のためです。確固とした信念に基づく意思表示だったのです。

同じく抗議のための行動である、座り込み（sit-in）も忘れてはなりません。

「立つ」の反対である「寝る・横になる」（この動作や体勢が生殖と死の両方と関係があるのが興味深いです）と「座る」が抗議行動の身振りとしてあるわけですね。

象徴的な話に感じられます。

＊

「寝る・横になる」はヒトの乳児期と最期の動作であるだけに、「立つ」に匹敵する大きな意味がありそうです。

ヒトは生まれ落ちて横になり、やがて立ち、歩き、座り、再び横なって亡くなる。

そういうふうにも言えそうです。

＊

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰りかえされてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

望み、願い、祈り、意味、メッセージは届くのでしょうか。

#言葉 # 動作 # 身振り # 表情 # ジョン・レノン# オノ・ヨーコ # ベッド・イン # ダイ・イン # 座り込み

03/26 世界にシンクロする

＊

世界にシンクロする

星野廉

2022年3月26日 09:48

目次

動作と表情と言葉にシンクロする

真似ないで真似ている

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

抽象、具象、生命

二つの横たわるのあいだで

届いていますか、通じていますか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

道具ではなく友だち

顔

動作と表情と言葉にシンクロする

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰りかえされてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

(拙文「意思表示としての動作」より引用)

私たちは、知らず知らずのうちに、同じような動作や身振りや仕草や表情をしている気がします。

しかも世界中で太古から繰り返されてきた、動作や身振りや表情なのです。

*

音声や動作や身振りや表情はヒトだけのものではありません。

あくびを考えてみてください。ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをします。サルやゴリラだと、しかめっ面もします。

四つ足で立つ、四つ足で歩く、二つ足で立つ、二つ足で歩く、寄っかかる、座る、腰かける、走る、投げる、跳ぶ、泳ぐ、這い回る、体を掻く。

ヒトに特権的な動作に見える「立つ」に注目すると、鳥が二足歩行できることに気づきます。

言葉が通じる相手であれば、言葉と言葉以外の言葉——身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）——、言葉が通じない相手であれば、言葉以外の言葉。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる、だく・だかれる。

（中略）

いやし、安らぎ、怒り、悲しみ、よろこび、楽しさ、いらいら、もどかしさ、ままならさ、苦しみ、しあわせ、安心感、ただいっしょにいるという充実感。言葉にならない感情。

半年だけいっしょに暮らした犬のことを思い出します。言葉ではない言葉のやり取りがたくさんたくさんありました。こちらが話し言葉で話しかけても、それが相手に言葉として伝わっている保証はありません。

それでもこっちは伝わっていると勝手に思うこともありました。後付けで考えると、言葉以外の言葉も、外にあって、外から来るものなのですね。自分の中に入るのかもしれませんが、それは必ずしも思いどおりにならないという意味では、外なんです。

(拙文「言葉ではない言葉」より引用)

＊

生き物の最大の目的とされている生殖を考えてみましょう。子孫を残し殖やすために、鳴き、叫び、見つめ、耳を傾け、嗅ぎ、触れあい、動き、探し、獲り、食べ、飲み、戦い、競い……。

ヒトを含む生き物たちは互いに同期しているのではないのでしょうか。

私は詳しくないので立ち入れませんが、全生物が地理学的レベル、生物学的レベル、遺伝子的レベルで、シンクロし合っているような気がします。

生き物はこの星レベルで互いに同期している。地球レベルで互いにシンクロしている。そう言ってもいいのではないのでしょうか。

真似ないで真似ている

ヒトの目に見えるレベルで言えば、生き物たちは動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。

まるでお互いに見て真似し合っているように見えますが、まさかそれはないでしょう。ありえません。

同族の同集団内なら、親やまわりを真似て学習するというのはありえますが、異族の異集団同士でそっくりなことをしているのは説明がつきそうにありません。

こういうことには、諸説ありという感じで、いろいろな分野の人がいろいろ言っているにちがひありませんが、私は私なりに考えてみたいです。

＊

真似ないで真似ているとしか言えないのです。

このシンクロというか、模倣の反復というか、「似ている」の「増える」と「広がる」と「うつる」を動かしている、あるいは促し導いている「何か」を想定したくなります。

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

話をヒトに限定します。

私たちは、お互いの動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。覚えている場合もあるでしょうが、誰を真似たかはたいてい記憶になく不明でしょう。

その点では言葉に似ています。言葉の習得に似ています。言語や方言を限定すれば、言葉はそっくりなものです。文字であれば同一と言えます。

言葉は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

言葉が、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、言葉は自立しているのです。

この点でも、身振りや表情は、言葉にそっくりです。

＊

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージ

は、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいです。

人によっても、場所によっても、場合によっても、その時の気分によっても変わるし異なるでしょう。変異し変移し偏移し変位するのです。

どっちつかず、どっちにも転ぶ。こうした性質はニュートラルであり非人称的であるとも言えるでしょう。

人から離れているのです。人の外にあるのです。

*

それでいて言葉も表情も身振りも、具象と抽象の両面を備えています。

文字で考えてみましょう。

文字はある意味で抽象ですから形だけでは存在できず、インクや墨や掻いた跡や画素の集まりという物質をともなうことによって、はじめて目に見えるのです。

電子的な複製の処理については知りませんが、文字として見る場合には、物質でもなければならぬと言えます。文字には抽象と物質の両面があるということですね。これが書き言葉つまり文字の二面性です。

話し言葉つまり音声も、声帯の振動、空気の振動、鼓膜の振動という形で伝わるわけですから、声帯、空気、鼓膜という物質と、振動や波という抽象の両面があると言えます。これが話し言葉つまり音声の二面性です。

表情と身振りは広義の視覚言語です。様子つまり形を目で見て認識します。

顔を含む身体という具象があり、その動きとしての形つまり抽象が視覚的に認識され

るわけです。

言葉においても、表情と身振りにおいても、意味とメッセージは、具象と抽象の織りなすからみ合いとして、人に立ちあらわれるのではないのでしょうか。

抽象、具象、生命

言葉と表情と身振りがヒトを含む生き物を離れていながらも、つまり生き物の外にありながら、人の中に入ったり出たりする。そして、人の思いどおりにならないニュートラルなものとしてある。

たぶん、それは具象と抽象の二面を備えた言葉と表情と身振りの抽象のなせるわざだという気がします。

だからシンクロの対象にもなるのであり、シンクロそのものでもあるのではないのでしょうか。

情報としての複製拡散と、生殖としての複製拡散も、その抽象の側面があって可能なのではないのでしょうか。

*

ヒトと生き物たちという、具象としての生命体が消えたとき、抽象もまた消えるのだろう。

言い換えると、抽象は具象を場として、形をあらわすのではないか。ただし、その具象という場は物であってはならず、生命でなければならない。

これは、生命という具象を遺伝子レベルでの情報という抽象に置き換えてみると分かりやすいかもしれません。

いまはそんなふうに考えています。

二つの横たわるのあいだで

ヒトは生まれ落ちて横たわり、やがて立ち、歩き、座り、再び横たわって亡くなる。

最初の横たわると最後の横たわるという動作のあいだに、さまざまな動作や表情があるはずです。無数の言葉があるはずです。

世界中で人びとが、それらの動作と表情と言葉にシンクロする。シンクロが時空をまたいで繰り返される。これが歴史です。

人はそれらを真似たり、無意識にしたり、それらに何かの意味やメッセージを込めたりするのでしょ

うか。誰かの動作や表情を見て、何かを受け取ったり、その意味を考えたり、迷ったり、受け損ねたり、見過ごしたり、無視したりするのでしょ

届いていますか、通じていますか？

あなたの望み、願い、祈りは、届いているでしょうか？ 通じていますか？

というか、誰に届くのでしょうか？ 何に届いて通じることがあるのでしょうか？

あなたの言葉、表情、身振りや手振りは、届いているのでしょうか？ 通じていますか？

あなたは、誰かの送ってくれているものを受け取っていますか？ 受けとり損ねたり、そもそも見ていなかったり、無視したり、気づかなかったりしませんか？

あなたのしているその仕草はどういう意味なのでしょう。何となくですか？ 考えたこともない、ですか？ 「意味って何？」ですか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

それはそっくりです。みんながそっくりなことをしています。そっくりなものを口にしたり文字にしています。

それは誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

それが、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないのでしょうか。ひょっとすると、それは自立しているのです。

人の道具でも、しもべでも、ましてや奴隷でもない自立した存在なのではないでしょうか。

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージは、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいのです。

道具でも奴隷でもないからです。

道具ではなく友だち

そっくりなのです。でも、それが間近にあったり、自分の中にあるときには、そっくりには見えません。そっくりにも思えません。

見えたり見えなかったりする、そっくり。

自分の中にあったり、外にあったりする、そっくり。

そっくりは、いまもあなたの中にあるのです。たぶん、いるのです。これからもいるでしょう。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

*

最後に大好きな歌を紹介します。キャロル・キングの You've Got a Friend です。

(動画省略)

歌詞を知ったとき、そんな虫のいい話があるのかとか、そんなに軽々しく請け合っているものかとか、そんな素晴らしい友だちがいるだろうかと思ったのを覚えています。

いま改めて聞くと、これは話し言葉や書き言葉、そして身振りや表情という言葉のことではないかと思えてなりません。

顔

さいごの光景を想像します。

言葉、表情、身振りのある光景です。

その光景の中で、いまが消えていき、かなたがその領域を広げていく。同時に、かなたが消えていき、いまがその領域を広げていく。そこには物語も条理もないでしょう。

いまとかなたは言葉なのです。

人にとってもっともはかない意味とメッセージは、まっ先に消えてなくなる気がします。

話し言葉と書き言葉が失われ、音の記憶と、音としての声の記憶と、表情の記憶と、身振りの記憶の織りなす光景です。

ニュートラルな、つまりどっちつかずの音と形だけが、しつように、おそらく断片的に断続的に浮かんでいる。

あえて言うなら、それはおそらく顔ではないでしょうか。

*

とりとめのない、常軌を逸した、雲をつかむような話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉# 話し言葉# 書き言葉# 視覚言語# 動作# 身振り# 表情# ニュートラル# 意味# メッセージ# キャロル・キング# 洋楽# 音楽# シンクロ# 顔

03/26 「何か」が立ちあらわれるとき【引用の
織物】

＊

「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】

星野廉

2022年3月26日 11:44

「何か」が立ちあらわれる。

この何だか不穏な響きのするフレーズを、「何か」、「立つ」、「あらわれる」というふうに分けて考えてみます。

これまでの記事のダイジェストです。

目次

立ちあらわれる

あらわれたものは、しつこく居直り居続ける

「立つ」は非常事態

「何か」が立ちあらわれるとき

何って何？

意味禍が終わるとき

立ちあらわれる

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

(拙文「意味が立ちあらわれるとき」より引用)

「意味が立ちあらわれる」というフレーズを書いたのが切っ掛けで、「立つ」に興味湧き、連日記事を書いていました。

「あらわれる」はおもしろい働きをする言葉です。それにくっついている「立つ」はどんな働きをするのか、と気になったのです。

あらわれたものは、しつこく居直り居続ける

「あらわれる」を「出る」とくらべて見てみましょう。

・出たものは「静止」してはいない。

(拙文「【小話】出たものは「静止」してはいないという話」より引用)

この点に、注目していただきたいのです。「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。まず、「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「○○は出る」という言い方をする「○○」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、出家したおじさんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「○○はあらわれる」という言い方をする「○○」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、○○の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

*

このように「あらわれる」は、つぎに「しつこく居続ける」という展開になりやすい

のではないかと思います。

「立つ」は非常事態

「立つ」はただ垂直の動きを示すだけではないようです。語弊や垢がありますが、使い方によっては語弊や垢を招くという意味です。

(拙文「赤ちゃんが立つとき」より引用)

文字どおりに取れない、言葉どおりに取れないということですから、一種の比喩みたいにレトリックになってしまう。言葉の綾になってしまうとも言えます。

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたりと、横になっていたらしいのです。

*

みなさんはいま、どんな格好をなさっていますか？ 座っていたり、横になっていたりと、何かに寄りかかっているのではないのでしょうか。

直立不動の方は少ないと想像しています。直立不動は、意外とつらいものです。歩いているほうがまだましです。

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。

瞑目合掌。

＊

立っていると、あるいは立って歩いているときに覚える緊張感は、大昔のヒトの時代から蓄積された記憶から来ているのかもしれませんが。

立った状態で何かをしていると、びくびくする自分の一部を感じます。襲われるかもしれない恐怖と言いましょうか。何にとって、敵です。

「立つ」は非常事態なのです。そのときの人の神経は普通じゃないのです。

いろいろな意味で。

＊

「立つ」は、人にとって特権的な意味を持つ動作のようです。

「何か」が立ちあらわれるとき

「何に？」（追求）と問うことは、得体の知れない「何か」（保留）に挑戦することです。

（拙文「「何か」と「何」から身をかかわす」より引用）

その「何か」（保留）は、世界だったり宇宙だったり真理だったりするでしょう。運命や神だと言う人もいるでしょう。

保留を追求するなんて、眠っている子をわざわざ起こすようなものです。

本気でやろうとすれば、世界を背負うことに匹敵します。大昔とか昔に、超エリート中のエリート（いわゆる「昔の」「偉い人」のことです）が世界を背負おうとしました。現在古典と呼ばれているものを書いた人のようです。

いまはどうなのかは知りません。というか、いまは、世界を背負おうとする「偉い人」は必要とされていないもようです。古典で十分みたいです。

いずれにせよ、「何に？」や「何？」（追求）と問うのはしんどいということでしょう。半端じゃなくしんどいにちがいありません。

＊

「何？」（追求）にしろ、「何か」（保留）にしろ、「何（か）」を保留している点は同じです。

要するに、ぼかしているのです。「何」という代名詞は「ぼかし」であり、映像に施す例のモザイクと同じだという意味です。

ベールに包むという言い方もできるでしょう。

あえて見ない、無視する、深追いしない、すっとぼける、曖昧放置、「さあね」、「そう言えばそういうのがあったけど知らない」という感じ。

なぜでしょう？

怖いからです。

下手に手を出せば噛まれるどころか、襲われてひどい目に遭うことを本能的に察したときに、「何（か）」を使うのです。

＊

何かが立ちあらわれる。

「何か」（ぼかし・保留）

が

「立ち」(非常事態)

「あられる」(しつこく居続けます)

*

怖いものを、ぼかしておいて、それがしつこく居直り居続けますよ、と非常事態宣言をしているのです。

この怖いものは何だか分かりません。正体不明だからこそ、よけいに怖いのです。

しかも、どうやら、いたるところにいそうなのです。いろんな姿と形をしてあられそうなのです。

とりあえずは、「何か」としか言いようがないのです。

めちゃくちゃ怖いものが、あられていますよ、その後いつまでもずっと残るのです、気をつけましょう。

それがこのフレーズのメッセージです。

何って何？

何って何なのでしょう？

気になりますよね。

めちゃくちゃ怖いものって何でしょう？ ぼかしを入れなければならないほどヤバイものなののでしょうか？

それがあられているなんて、気味が悪すぎます。後を引くみたいだなんて、気になってなりません。

06/26 「か」が立つらうわいってし 【お用の職人】

*

何なのでしょう？

知りません。なんて言うと、叱られそうなので、言いますけど、意味なんです。異味であり、忌みであり、齋であり、イミです。

*

世界中の図書館に必ずある本は何でしょう？

聖書ですか？ たしかに世界のベストセラーといわれています。なにしろ翻訳という武器があるために、その言語および方言別バージョンがめちゃくちゃたくさんあります。

でも、文化や地域によって異なるでしょうね。

辞書なんです。これはどんな小さな図書館にもありそうです。各家庭にあっても驚きません。

辞書には何が書いてありますか？ そうですね、意味です。正確には語義ですけど、意味です。

意味にも意味があります。手元の辞書でお調べください。ちなみに、無意味にも意味があります。辞書に載っています。

恐ろしいですね。

え？ ぜんぜん怖くない、ですか？

*

意味の恐ろしさと重大性を体感するのにいい方法があります。

note のカテゴリの一覧をご覧ください。

項目がたくさんありますね。

どれも、意味を求めたり、考えたり、知ろうとしたり、分かってほしいとしたりしていませんか(カテゴリは分かれています、あれは分かってほしいからにほかなりませんか)？

なぜでしょう？

得体が知れないからです。分からないし(分けられないし)、答えが出ないから(誰か出していますか)、です。不明なのです。

しかも、いつどこでどういう形を取るかは分かりません。特定できないのです。

要するに怖いのです。でも、怖いことはふつう隠します。ぼかします。かっこ悪いからでしょう。

分からない、知らないと同じく、怖いというのは体裁が悪いのです。ヒトはプライドが高い生き物です。だから隠します。自分を見ているの感想です。

あと、忘れていたり、気づかないこともよくあります。忘れていました。

意味禍が終わるとき

人は意味に取り憑かれています。

意味禍はヒトが言葉を持ってしまっただけでずっと続いています。

文字を持って、意味禍に拍車がかかりました。

まさに、あらわれて、しつこく居直り居続けいるではありませんか。

それなのに、「何(か)」としか言えないのです。分からないままなのです。

さっき「意味」だって言ったじゃないか？　そうおっしゃるのも当然ですが、意味には意味がないのです。ナンセンス。ここだけの話ですが、そういう不条理で荒唐無稽で

理不尽とも言える話なのです。

でも、ナンセンス、無意味ほど怖いものはこの世に——ヒトの世のことです——ないので。無意味という深淵を覗きこむと危ういことになるからです。覗いちゃ駄目です。

そんなわけで、意味とか無意味と名指したところで——どちらも同じです——意味はないのです。「何か」と保留したほうが何かと都合がいいのです。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

名づけて、手なずけたつもりになったときがいちばん怖いのです。チョロいものだと、気が緩み警戒を解いてしまうからです。

そうです、お察しの通り、判断停止と思考停止のことです。これが、おそらく、相手よりも怖いのです。

＊

「何かが立ちあらわれる」——これはいまもいたるところで起きているのです。その意味では、私たちの友だちでもあるのです。

でも、舐めてはいけません。本質は怖いものですから。しかもその姿形はうつろい、変わるのです。いたるところで姿を変えてあらわれるというのです。

そんなどっちつかずの性質を持っていますから、逆に言うと、特定するのは賢明な方法ではありません。「何か」と保留したまま、備えるのがいちばんです。

意味禍は終わりそうもありません。いや、終わる危険に、いまさらされています。この星からヒトがいなくなれば、意味は消えます。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

(拙文「世界にシンクロする」より引用)

この意味はお分かりになりますよね？

しつこく居直り居続けるものが立ちあらわれた以上、立ちあがる時は今だと思います。非常事態です。

※連日長い記事を投稿して申し訳ありませんでした。今回のダイジェスト記事が、いちばん言いたかったことです。

取り組んでいるテーマを外さないように努めた上で、できるだけ分かりやすく書いたつもりです。お読みいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 意味 # メッセージ # 辞書 # 代名詞

03/26 純粹な描写

＊

純粋な描写

星野廉

2022年3月27日 08:13

学生時代の話ですが、純文学をやるんだと意気込んでいる同じ学科の人から、純文学の定義を聞かされたことがありました。

ずいぶん硬直した考えの持ち主でした。次のように言っていたのです。

- ・描写に徹する。
- ・観念的な語を使わない。たとえば、神、愛、心、魂、真理、真実、心理、(哲学的な意味での) 存在。
- ・固有名詞、とくに著名人や名所の名前はできるだけ避ける。
- ・決まり文句と定型を退ける。
- ・比喩を使わない。

たしかこんな観念的なことを熱っぽく語っていました。

＊

いまこうやって思いだして書いてみると、魅力的なスローガンに見えてきます。そんな文章を書いてみたいという気持ちになるのです。

それどころか、自分の中で理想とする文章があるとすれば、まさにそうしたものではないかとすら、思えてくるのです。

透明な文章、零度の文体、純粋な写生文、なんていう言葉とイメージが浮かんできます。

＊

そういえば、その人について思いだしたことがあります。

「神」という言葉を使わないで、神を書いてみないか？ 家族を登場させないで、家族を描いてみないか？

そういう意味の誘いを受けたこともありました。もちろん、受け流しましたが。

面白い人であることは確かでした。いまどうしているのでしょうか。会ってみたくて仕方ありません。

＊

note ではタイムラインに「あなたへのおすすめ」という記事の紹介が出ますが、マッチングアプリみたいでときどきします。

あれをたどって記事を見に行くことがよくあります。あと、ぜんぜん知らない人からスキをもらおうと見に行くのですが、そのときに最近心惹かれるのが、上で述べた純粋な写生文なのです。

淡々と行動をつづった記事、風景や物を簡潔に描写した記事、製品や仕組みの説明文に惹かれます。

上記の私が気に入り感動した記事には共通点があります。スキが少ないことです。

残念な気持ちと、それいいのだという思いの両方をいただきます。

＊

レトリックだけでなりたっているような文章を書きたいと思う時があります。

内容なんて無い様なもので、物と事の有り様がきわだつ。ただ言葉の形と模様と動きだけがきわだつ文章。そんな文章は「ありえない文章」と言うべきでしょう。

(拙文「言葉の綾を織っていく」より引用)

レトリックだけでなりたっているような文章を書きたいと思う一方で、レトリックをできるだけ排した描写文を書きたい気持ちがあります。根強くあるのです。

いま書いた文ですが、「根強くあるのです」は不要です。これが私の言うレトリックの一例です。でも、そう書いてしまうのです。削除しません。

気質なのでしょう。か。「気質」のように観念的な言葉で片づけてはならない気もします。自己暗示にかかるからです。

*

明治時代以前の日本の伝統的な絵画では、絵画の絵画という描き方があったそうです。

物を見て描くのではなく、自分の属する流派の先行する作品を見てそれを真似て描くという方法らしいのです。

西洋の絵画でもこうした描き方があったようですね。詳しいことは知りませんが、興味深い話です。

文章でも、先行する文章や同時代の既存の文章を読むことで書き方を真似て覚えるということがあります。

読まないことには詠めない。読まないことには書けないのです。

*

絵画の絵画というのは、文学でもあるという意味です。

私は詩を書けず、詩には詳しくないのですが、note に来てから読むようになりました。

詩でいうと、詩の詩みたいな詩があるように感じます。詩というもの感、詩っぽさ、詩らしさが漂う作品のことです。

概念や観念が先行するという言い方がありますが、イメージが先行している気がするのです。

やってる感だけといえば、失礼ですが、その感は否定できません。

詩が書けない、詩を知らない者が外から見た感想ですので、ご勘弁願います。

＊

詩に限らず、小説でも、エッセイでも、評論、批評などあらゆるジャンルで言えるのではないのでしょうか？

私なんか、その最たるものです。偉そうなことを言って申し訳ありません。

私はレトリックだらけのエッセイの他に小説を書くことがあります。

小説ではレトリックは極力避けるのですが——ここで笑わないでくださいね、本心で言っています——、小説っぽさ、文学っぽさというやっている感に満ちた自分の文章に嫌気がさすことがあります。

小説の小説、文学の文学になっているのです。

＊

小説っぽさ、小説感、詩っぽさ、詩感、文学っぽさ、文学感、哲学っぽさ、哲学感、芸術っぽさ、芸術感。

「ぽさ」と「感」だけに感じられる文章があります。感じるだけですから、印象です。個人的なものですから、検証不能です。

似たもの、似せたもの、似せもの、にせもの。区別不能。

コピーのコピー、複製の複製、振りの振り、刷りの刷り、引用の引用、陰陽の陰陽、フリフリ、スリスリ。

複製拡散時代では、本物と偽物のさかいが不明。起源や本物の意味も消失。

世界同時同期。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

名前と名詞は恐ろしいです。たとえば、哲学という言葉がちりばめられた文章、哲学というタグのついた文章があると、そこに哲学があると感じてしまうのです。

必ずしもそうであるとは限らないのにです。たとえば、日記というタグの文章に哲学を感じることに私はよくあります。

タグやジャンルは、ある意味罪なものです。レットルの強さにはなかなか勝てません。

書いているものが文章ではなく、ぼさ、らしさ、的になってしまうのは、レットルつまり名詞と名前のとてつもない強さがあるからです。

*

あなたがいま何かを書いているとします。

これを書いたら詩らしくない(小説らしくない、文学らしくない)のではないか。

こういう書き方をしたら、詩的ではない(小説的ではない、文学的ではない)ではないか。

そんな思いがあるとき、イメージとレットルに流されているのではないのでしょうか。

ものを見る、考える、言葉を選ぶ、言葉をつづる。そうした地道で具体的な作業から離れているのではないのでしょうか。

イメージやジャンルの名称や顔の見えない誰か（たち）に忖度して、ものが書けるのでしょうか？

以上は私が自分に言い聞かせている言葉です。

＊

小説っぽさ、小説感、詩っぽさ、詩感、文学っぽさ、文学感、哲学っぽさ、哲学感。

「ぽさ」と「感」はイメージであり印象です。イメージや印象はコピーのコピーなのです。

そこには本物と偽物のさかいはありません。起源や本物も意味をなしません。これが複製拡散時代なのでしょう。

よく考えると今始まったことではなく、人が言葉を持ったときにもう始まっていた気がします。

＊

事物や光景を見て、それをその場で言葉にする。あるいは記憶をたどり定型を退けながら、それを言葉にしていく。

まさか。それは抽象でしょう。共有物である言葉には既にさまざまな垢がこびりついています。しかも、その垢は見えません。

それだけでは済みません。他者（多数います）は言葉ではなくその垢を読んでしまい

ます。それが「読まれる」です。ままならないのです。

純粋な描写。これは理想でないでしょうか。その意味ではありえない文章だという気がします。

私の言う純粋な描写とは、たぶん、小説っぽさ、文学っぽさから遠く離れたものであるかもしれません。夢なのです。

#言葉 #日本語 #文学 #純文学 #小説 #詩 #エッセイ #描写 #絵画

03/27 文章のたたずまい

＊

文章のたたずまい

星野廉

2022年3月27日 09:44

事物や光景を見て、それをその場で言葉にする。あるいは記憶をたどり定型を退けながら、それを言葉にしていく。

まさか。それは抽象でしょう。共有物である言葉にはさまざまな垢がこびりついています。しかも、その垢は見えません。

それだけでは済みません。他者（多数います）は言葉ではなくその垢を読んでしまいます。それが「読まれる」です。ままならないのです。

純粋な描写。これは理想でないでしょうか。その意味ではありえない文章だという気がします。夢なのです。

（拙文「純粋な描写」より引用）

＊

たたずまいという言葉が好きです。佇まいという表記は好きではありません。やっぱり「たたずまい」のほうがいいのです。

「たたずまい」は、なにか、こう、すっと立った感じがして、その字面をながめていると敬虔な思いにさえなるのです。

言葉の持つ、音としての響きや姿形としての字面を無視するわけにはいきません。少なくとも私にはそうです。

＊

たたずまいを辞書で調べると、たたずむから来ているとあり、納得しました。ずっと立っているという意味です。

辞書で「たたずみ歩く」という言い回しを知ったのも収穫でした。

辞書を引くと必ず例文を見ます。言葉はその使い方で覚えていきたいのです。

「たたずみ歩く」はたぶん使わないと思います。「たたずむ」と「たたずまい」はこれからも積極的に使ってみたいです。

＊

すっと立ったような文章に憧れます。説明しにくい気もしますが、何とか言葉にしてみます。

すっと立って自立していて、何かに寄っかかっている。姿勢はいいのですが、直立不動とは違います。

たたずまいは自然なのです。

立つ、そして立ちつづけるためには、力が要ります。筋肉に力が入って、それを維持していないと立ってはいられません。

立つという動作と姿勢は、ある意味不自然なのです。緊張が走り、神経が張りつめた状態で立っている気がします。

さもないと力が抜けて倒れそうです。

また、「立つ」は見せる行為でもあります（一方の「横になる」は人前でする行為ではありません）。

立って、見てもらいたいのです。できれば褒めてもらいたいのです。

＊

ずっと立った文章も、ある意味不自然なのです。無理をしているところがあります。

それを緊張感という言葉で呼んでもいいかもしれません。緊張感のある文章というわけです。

文章に緊張感が漂っていれば、読むほうも緊張するのではないのでしょうか。「読む」は「書く」をなぞることだという気がします。

とはいうものの、文章は読み飛ばされるのが普通ですから、きちんと読まれるとすれば、それは幸せな文章だと思います。

ずっと立った文章というのは印象です。私の個人的な思いでしかありません。それだからこそ、なぞるようにきちんと読みたいのです。

＊

ずっと立った文章の例としては、志賀直哉の短編と夏目漱石の晩年の随想的な作品を挙げたいと思います。

具体的には志賀直哉の『焚火』と『流行性感冒』、漱石の『硝子戸の中』と『永日小品』です。

直哉の文章には純粹な描写を感じます。ずっと立ちすぎてその意味が消えてしまうのです。ただ言葉にされているという感じ。危ういのです。

漱石の文章は知的です。書きなれているし、計算もされている気がします。うまいのです。見事なのです。

直哉の文章のたたずまいは、きりっとしています。一方の漱石の文章のたたずまいはというと、じつは漱石は寝ています、横になっているのです。「横たわる」こそが、漱石の文章の身振り、つまりたたずまいです。

漱石の小説では、主人公または主要人物がやたら横たわります。横たわって初めて出来事や事件が起こり、物語が進行するのです。そして、その物語を伝達する役割をになった人物（※あるいは動物）が登場します。

このことに気づかされたのは、一昨日からこのブログに書いている「あの人」の文章を大学時代に読んだ時でした。

（拙文「08.12.26 横たわる漱石」より引用）

上の引用文で「あの人」とあるのは、蓮實重彦先生です。私は蓮實先生からは大きな影響を受けました。いまも影響下にあります。読み書くとき、その「影」と「声」をつねに感じるのです。

＊

描写を感じる文章をもっと挙げてみます。

川端康成の『山の音』は点描という点で素晴らしいと思います。要所要所を簡潔に言葉にしているのです。無駄のない職人芸を感じます。

東野圭吾の『白夜行』の文章も好きです。他の作品も読んだことがありますが、この小説の文章は手本にしたくらい描写がしっかりしていると思います。

あと松本清張の『砂の器』の文章も優れた描写が多いと感じます。清張の作品では初期の短編である『張込み』の文章は何度も読みました。これは、まさにすっと立ってい

るのです。

吉田修一は欠点だらけの普通の人たちを描くのがうまいのですが（文学っぽい人があまり出てこないのです）、長編『怒り』に見られる多視点の描写が好きです。伏線として回収されるかどうかを無視して、細部を自由自在に読んで楽しんでいきます。

＊

私の言う純粋な描写とは、たぶん、小説っぽさ、文学っぽさから遠く離れたものであるかもしれません。

（拙文「純粋な描写」より引用）

私はジャンルにはあまり関心がないのですが、いわゆるミステリー作品とされている小説にずっと立つ文章や優れた描写があると感じます。

ミステリーにくくられる小説を、ストーリーや謎解きとか伏線には注意を払わず、部分的に好きな箇所を何度も読んで楽しんでいきます。

たぶん、ミステリーと呼ばれている作品には「小説っぽさ」や「文学っぽさ」というか、いかにも「これは小説ですよ」とか「ね、文学っぽい内容（テーマあるいは文体）でしょ」という要素が少ないから、そこに純粋な描写を感じるのかもしれない。

感じるだけですから印象です。個人的な思いでしかありません。

＊

ここまで書いてきて、ずっと立った文章とは、語っていない文章であり、歌っていない文章ではないかと思えてきました。

書き手の声を感じられないとも言えます。声はレトリックです。書き言葉での描写には、ときとして声が邪魔になります。

声とは、〇〇節（ぶし）という感じの雰囲気とかイメージとか〇〇っぽさのことだとも言えます。

文章に節（ぶし）とか節回しとか口調があるのです。私にはこれが邪魔でならないのです。

*

私には描写ができません。これは私の文章を読めば、一目瞭然なのです。

歌うな、語るな、節をつけるな、節と筋に流されるな、筋に運ばれてはいけない。

いまはそう自分に言い聞かせるしか方法を知りません。

#言葉#日本語#文章#文学#小説#描写#夏目漱石#志賀直哉#川端康成#松本清張#東野圭吾#吉田修一#ミステリー#イメージ#蓮實重彦

03/28 世界に同期する、しかめっ面

＊

世界に同期する、しかめっ面

星野廉

2022年3月28日 08:09

目次

しかめっ面恐怖症

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

ニュートラルなシンクロ

しかめっ面恐怖症

テレビをつけた瞬間に、ぜんぜん見たこともない人の顔が映しだされることがありますね。

顔を思いきりしかめているのですが、それが号泣しているのか爆笑しているのかとっさに判断できないことがあります。

字幕とか音声の解説を聞いて初めて状況がつかめます。それまでは、宙づり状態に置かれます。どっちなんだろう？

けっきょく、泣いているのか笑っているのか不明なまま、画面が変わるなんてこともざらにあります。

その人の涙の意味もメッセージも、私には分からないままで終わりました。他のどれだけの人に分かったというのでしょうか？

＊

歌を歌っている人が、いきなり顔をしかめる場合がありますが、私はあの瞬間が苦手です。

怖くなるのです。こんなことを感じるのは私くらいかもしれません。

もし、しかめっ面恐怖症というものがあるのなら、それは私のことです。

よくテレビで見るミュージシャンで、サビのところに来るといきなり顔をしかめる人が何人かいるのですが、ついついその映像を見てしまう自分がいます。

まさに怖いもの見たさなのです。

＊

来るぞ来るぞ……。

来たあ！

そんな感じで見ています。

でも、なんで見てしまうのでしょうか？

しかめっ面に慣れようなんて殊勝な気持ちからだとは思えません。やっぱり怖いもの見たさに近い心理だという気がします。

それだけではない気がします。

＊

あと、最近、スポーツ選手がパフォーマンスの直前に、大きく口を開けた後に歯を食いしばるような顔芸を、一瞬だけするのをよく見掛けるのですが、あれも気になって仕方ありません。

めちゃくちゃ顔をしかめますよ。

どのスポーツにも見られます。お相撲さんの中にも取り組みの前に必ずやる人がいます。

気合いなのでしょう。ルーティーンなのでしょう。おまじないっぽいです。瞬間芸です。どれも似ています。

初めて見たときには、びっくりしたし心配もしました。どこか痛むのかとか、外れかけた入れ歯を直しているのかとか、いろいろ想像してしまいました。

*

しかめっ面は喜怒哀楽ぜんぶでありえます。ということは、どれでもないとも言えます。

赤ちゃんなんてしょっちゅうしかめっ面をしていませんか？ しかも喜怒哀楽ぜんぶ。どっちとも言えないときもあるし。

おとなでも本人が分からないままにしかめっ面をするというのも、よくある気がします。

メッセージは見た人が決めるのかもしれませんが、誤解があっても、たいていそのまま進んでいくのです。

何が進んでいくって、世界がです。

しかめっ面はニュートラルなのです。

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

私は朝の連続テレビ小説をほぼ毎日見ているのですが、あのドラマはよくできています。とても分かりやすいのです。

表情や仕草や身振りを含めた演技が、型にはまっているからかもしれません。

また連載が変わるごとに話が変わっても、どこか似ている気がするのですが、そうした定型っぽさが分かりやすさにつながっているようにも思えます。

演技も表情もどちらかというと大げさです。

中途難聴者の私はテレビは字幕といっしょに見ていますが、演技が大げさなせいか、字幕なしでもストーリーや状況がつかめます。

＊

このあいだ、過去の朝の連続テレビ小説の再放送をたまたま目にしたのですが、いまのものよりも、ずっと大げさな演技をしているのでびっくりしました。

しかも、状況や筋がめちゃくちゃ分かりやすいのです。初めて見たのにですよ。途中から見ているのにですよ。

分かりやすすぎて、感動すらしました。こんなに分かっていいのかしら――。

そのときに気づいたのですが、どうやら私はテレビを見ながら、注目している人の表情を真似ているようなのです。

＊

しかめっ面を目にしたときに、自分も思わずしかめっ面になっているのは薄々知っていましたが、表情一般にイえる性癖だとは知りませんでした。

いま思わず性癖という言葉を使いましたが、こういうのはやっぱり性癖ですよ？

それ以来、その性癖が気になって仕方ありません。気がつくと、ニュースで見る政治

家、お笑い芸人、アイドル、アーティスト、俳優を問わず、その表情を真似ている自分がいます。

つい合わせてしまうのです。

これをシンクロと言わずして何と云えばいいのでしょうか。

*

ニホンザルもゴリラも台湾カニクイザルもしかめっ面をします。しているのをこの目で見たことがあります。

犬と猫については……。よく分かりません。もっと観察を続けてみます。

あ、してるわ。

あくびです。ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをします。サルやゴリラだと、しかめっ面もします。

あくびはしかめっ面ですよ？

しかもうつります。うつるんです。

昔、ハムスターのあくびがうつったのを思い出しました。ワンコでもありました。生き物に等しく「うつる」のではないのでしょうか。

あくびは時空を超えています。テレビのニュースで相撲を見ていて、客席の人のあくびがうつったこともあります。

あれは中継ではなかったなので、やっぱり時空を超えていると思います。私だけのことでなければ。

*

世界中でしかめっ面がシンクロしていることはたしかです。

まさか同じ意図で同じメッセージを送っているなんて考えられません。これがニュートラルです。意味やメッセージは決められないのです。どっちかずでどっちなのかも分からない。また、意味やメッセージが不在ということも十分に考えられます。

しかめっ面だけはないでしょう。ありとあらゆる表情、目つき、仕草、身振りがニュートラルだと考えられます。

検証しようがないのです。受け手のほうも、印象として受けとめるのですから、検証不能です。印象をどうやって検証とか確認すればいいのでしょうか。

だいいち検証している間に世界は進みます。世界はそんなに暇でもないし、そんな余裕がないみたいなのです。世界はどんどん進んでいませんか？ 世界は人知も感知も超えているもようです。

私たちは世界に遅れつづけているようです。

ヒト世界に置いてきぼりされ説。

ひょっとすると、それが世界がニュートラルであることの意味なのかもしれません。

世界どっちかずであれよあれよ説。

ニュートラルなシンクロ

なぜシンクロしているのか分からない。

何となくシンクロしている。

何にシンクロしているのか分からない。

何をシンクロしているのか分からない。

以上がシンクロの特徴ではないでしょうか。

無自覚、無意識、無目的。三無主義です。

＊

正体不明、意識不明、原因不明、出所不明、行先不明。

無自覚、無意識、無目的。

言葉に似ていませんか？

コピーのコピー。複製拡散時代。あなたの使っている言葉の出所と行先が分かりますか？ 特定できますか？

無自覚、無意識、無目的に言葉を使っている。言葉の流れに運ばれている。言葉に身を任せている。

これは言葉がニュートラルであり、シンクロであるからです。

＊

いま、あなたが涙を流しているとします。

その涙の理由は、他人にも多人にも分かりません。

本人にもよく分からないケースもありますよね。それがいちばん困ったケースですが、意外によくあるケースなようです。

＊

最後に大切なメッセージを送ります。というかメッセージを込めます。

世界に同期する、笑顔！

どうですか？ シンクロしましたか？

強面の私が笑うと、よく凄んでいると勘違いされます。

勘違い平行棒。二線が交わるとことはないようです。

#言葉 # 視覚言語 # 動作 # 身振り # 表情 # ニュートラル # 意味# メッセージ # 音楽
シンクロ # 顔

03/28 たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ

＊

たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ

星野廉

2022年3月28日 11:25

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたりと、横になっていたらしいのです。

(拙文「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】より引用)

＊

立つというと竜を連想します。発音が同じだからというのがありますが、空にのぼる竜というイメージが浮かぶからだという気もします。

いま「空にのぼる竜」と書いたのは「のぼる」に当てる漢字に自信がなかったからです。

当て字のことです。宛て字というふうに「宛」をあてる場合もあります。あてじは当てになりません。根本にこじつけ（故事付け）があるからです。

私は漱石のあて字が大好きです。自在な連想と遊び心を感じます。硬直した表記は屈でなりません。

＊

「のぼりりゅう」を辞書で調べてみました。

広辞苑では「昇り竜」と「登り竜」の両方の表記が載っていました。

「のぼる・上る・登る・昇る」というわけです。「りゅう」も「竜」と「龍」があります。それぞれ「たつ」とも読みます。

「竜」はまさに絵ですね。こんな分け方をしているのか知りませんが、頭と胴と尻尾まで見えます。具象と姿を感じます。こっちを「たつ」と呼びたいし読みたいです。

「龍」はかっこいいですね。偏と旁があっても文字らしく（文字だから当たり前ですけど）、「たつ」と「りゅう」の抽象と概念を感じます。あえて、こちらを「りゅう」と読みたい気分です。

「のぼる・上る」といえば、「あがる・上がる・揚がる・挙がる・騰（が）る」を思いだします。

＊

「たつ」と「のぼる」と「あがる」は、基本的に上への垂直運動ですが、「たつ」には上昇運動以外の動作があります。

「立つ、建つ・起つ・勃つ、発つ・経つ・絶つ・断つ、裁つ、截つ」となりますが、発音の同じものを並べただけで、意味や語源につながりがないものも含めてあります。

語源や語義よりも、連想を大切にしたいのです。

連想は蘊蓄とか含蓄とは遠いものです。連想は傾けたり垂れるものではありません。漏れる感じですか。気がつくと出ているのです。

＊

「Aだから、Bだから、Cだから、Dだから……」という論理っぽいつながりではなく、

また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして……」という物語っぽい流れでもなく、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」という運ばれ方に惹かれます。

どっちつかず、どちらでもない。フラットでニュートラルな関係です。

何ものかに身をゆだね、まかせるのです。

*

こういうのは、私のような凡才が仕組んだり企むとうまくいきません。

仕組んでうまくいくのは才能だと思います。

天才とは言いません。というか言えません。天才を見抜くには天才が必要だからです（私は「〇〇は天才だ」と言ったことはありません、あと「〇〇は△△の神だ」もそうです、両方とも重い言葉です）。

ただまかせるだけです。

*

たつ

立つ

竜

のぼる

あがる

こうやって言葉を並べてながめているのが好きです。わくわくします。

漏れ出る気配も覚えます。もよおすのです。

*

いろいろなイメージが浮かびます。視覚的なイメージであったり、音としての言葉の断片であったり、文字であったりします。

竜ではなく龍という文字が墨で書かれた凧（たこ）があがるさまも目に浮かびました。

凧揚げと書きますね。

凧が上がる、凧を揚げる。

こうなるみたいです。

＊

蛸を揚げる。

つまり、「たこをあげる」という音（おん）と、蛸の天ぶらを揚げる光景が同時に浮かびました。

こういう「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」を大切にしたいと思います。

＊

凧を揚げると言えば、竜田揚げを挙げないわけにはまいりません。

たったいま気づきました。

唐揚げのことですね。からあげ、空揚げ、唐揚げ。

空揚げで凧を揚げるに戻りました。

＊

大した意味はありません。落ちもないです。

凧が落ちてくる光景が目には浮かびましたが、気のせいでしょう。

#言葉 # 日記 # 日本語 # 漢字 # 連想# イメージ # 宛て字 # 当て字 # こじつけ

03/29 凧を揚げる

＊

凧を揚げる

星野廉

2022年3月29日 08:12

春の空 田の上に竜 風強し

＊

「竜」はまさに絵ですね。こんな分け方をしているのか知りませんが、頭と胴と尻尾まで見えます。具象と姿を感じます。こっちを「たつ」と呼びたいし読みたいです。

(拙文「たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ」より引用)

#漢字 # 掛け詞 # 多義性

03/29 あえて名前を呼ばない

＊

あえて名前を呼ばない

星野廉

2022年3月29日 08:20

今回は、代名詞を使うと気持ちが楽になったり、気持よくなるというお話をします。これまでに書いた記事を織りませたダイジェストです。

肩の凝らない読み物を集めてみましたので、楽な気持ちで読んでみてください。

目次

代名詞は、ぼかし、モザイク

代名詞は気持よくしてくれる、ぞくっとさせてくれる

「何か」は保留する

責任を背負わず、保留すればいいのです

代名詞は、ぼかし、モザイク

代名詞は文字どおり、名詞の代わりです。つまり、名前の代わりです。

人は得体の知れない怖いものを手なずけるために名付けます。

生餌——なまえと読みます、新鮮な餌のことです——を与えることで、怪物を手なずけ、飼いならさうという知恵です。諸説あり。(いまのはレトリックを使った冗談です。)

名前つまり名詞は、おまじない（お呪いとも書きます、のろいと似ていますね）ですから、パワーと光を放ちます。

その力と光をまともに浴びないように、ぼかしてくれるのが代名詞なのです。ぼかしのモザイクをかけるようなものです。

あえて、名前を呼ばないのです。わざと、名指さずにおくのです。

代名詞は気持よくしてくれる、ぞくっとさせてくれる

「こそあど」というおまじないような言葉を小学校で教えているそうです。

これ、それ、あれ、どれ。ここ、こっち、そこ、そっち、あそこ、あっち、どこ、どっち。

「こそあど」は代名詞の帽子みたいなものです。唱えているだけで楽しいし、なぜか、ぞくぞくとか、こそばい感じがしてきます。下半身に来る皮膚的な感覚なのです。

ぼかしているために、想像力が刺激されるのでしょうか。ぼかしがあったほうが、萌えるのです。もよおすのです。

あえて名前を呼ばないことで気持よくなります。

＊

this、that、it、what、which、here、there、where

英語ではこうなりますが、それぞれがどこか似ています。

しかも一音節ですから、発音して短いです。

それだけ日常生活でよく使われるという意味でしょうか。

＊

あなたは「あれ」が好きですか？ あなたは「なに」が好きでたまらないでしょう？
とうとつに意味深な質問をして、ごめんなさい。いろいろ想像してしまいますよね。

あれ、それ、これ、なに。

何だかいやらしくないですか？　こういうのは、恐怖や不安という感情でも同じです。スティーヴン・キングの大作『IT』を思い出しましょう。

スティーヴン・キングの長い長い小説『IT』のタイトルは、アルファベット二文字です。日本語の「それ」に当たる語ですね。日本語でも二文字です。あえて「それ」を名指さないことが、タイトルにあらわれているのです。

なぜでしょう？

そのほうがぞくぞくするからだと思われます。さすがキングらしい選択であり方法ですね。

夏目漱石の『我輩は猫である』では、猫の名前がありませんが、これもまた漱石らしい企みだと勘ぐることができます。意味深に思えてきます。

また、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』（原題：Frankenstein: or The Modern Prometheus）に出てくる怪物にも名前がありません。フランケンシュタインとは、複数の死体のパーツをつなぎ合わせて怪物を創造した人物の名前なのは、みなさんご存じのとおりです。

あえて、名付けない。これが謎を生んで意味ありげに見えたり、恐怖と不気味さをいや増すのです。

*

まとめます。

アルファベット二文字の it（一音節）がすべてを語っているのです。日本語でも「あれ、それ、これ、なに」というふうにした二文字（二音節）ですね。

ずばり名指すよりも、あるいは長々と言葉を費やすよりも、「あそこ」とか「ちよめ

ちよめ」とほのめかすほうが、ずっと〇〇いのです。「それ」としらーっと言うほうが、ぞくっとするのです。

(拙文「【小話】短い反対は長いではないという話」より引用して加筆しました。)

「何か」は保留する

「何か」も代名詞です。具体的な名詞の代わりに「何か」とぼかしておくのです。

なぜ、ぼかすのでしょうか？

嫌なものだったり、気味が悪かったり、怖いものだったり、気になって仕方がないものだからです。

かかわらないほうが賢明なのです。

「何か」は人によって違います。要するに、オーダーメイド、あなただけのものなのです。うれしいですね。

自分の好きなように使えます。

＊

「何か」(英語の something) は保留する言葉です。真っ向から向きあうのを避けて、曖昧に放置しておくのです。

不安や恐怖や気になるものは、あえて名指さない、あえて「何か」とぼかしておけばいいのです。

名前を呼んではいけません。

＊

「何か」はあえて言うなら恐怖であり不安でしょうが、本来は言葉にならないはずのものです。

眠っている怪物の名前を呼んで、わざわざ起こす必要はありません。あえて言葉にする必要はないのです。

「何か」くらいにしておきましょう。

*

放っておくのです。

「何か」って何だか知らないけど、何だか分からないけど、不明なままで、特定しないでおくのです。

「何か」さん、こんにちは。また会いましたね。

追い払っても、また来ます。そのときには、「何か」さんと気楽に呼びかけて、お引き取り願います。

「何か」さん、では、またね。

間違っても、特定しようとしてはいけませんよ。名前を呼んではいけません。ぼかすのです。

「それ」とか「何か」は、名付けて、手なづけられるようなものではないのです。

*

いつか、元気が出たら、その名前を呼んでみてください。

(拙文「【夜話】夜になると「何か」を手なづけようとする」より引用して加筆しました。)

責任を背負わず、保留すればいいのです

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ているのかと申しますと、天井の染みなのです。二十年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、不意に出あってしまうという体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人間をやっている以上は、あります。何かにか何かを見る。これって、人である限り、仕方がないみたいです。

たとえ、不意をつかれたとしても、正々堂々と出あってしまえばいいのです。そういう体験の恥ずかしさとか後ろめたさとか格好悪さを薄めるためのいいおまじないの言葉があります。それは、「あらわれる」です。

「〇〇が見える（見えた）」の代わりに「〇〇があらわれる（あらわれた）」とするだけでいいのです。「見える（見えた）」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁する。それだけで、だいた、気が楽になりませんか？

＊

このように言葉は、時として、人を助けてたり救ってくれます。あの天井の染みの中に見える人の顔は、「あらわれている」のだ。そう思うと、気持ちがいくぶんやわらぎます。

ところが、同時に「ぞくっとくる」のです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではいいです。じゃあ、なぜ？　でも、なぜ？　なぜ、あらわれるの？

責任だか何だか分からないものを押しつけたのはいいけれど、その「押しつけられた

もの」とか「押しつけたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうなっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。

*

保留すればいいのです。

名づけえぬものを前にして、人は保留すればいいのです。責任を転嫁するどころか、すっとぼけて責任を保留すればいい。

もともと責任なんてないのですから、背負う必要はありません。

壁の染み、スマホの画素。そこに見える、それ。見えますね。

見えますよね。それでいいんです。みんながそうなんですから。気にしない、気にしない。

あらわれているだけです。なぜなんて、考えなくていいですよ。あなたに責任はありません。

(拙文「【夜話】夜になると「何か」を手なずけようとする」より引用して加筆しました。)

#言葉# 意味# 代名詞# 名詞# 名前# 夏目漱石# スティーヴン・キング# メアリー・シェリー# 保留

03/30 「何？」ではなく「何か」

＊

「何？」ではなく「何か」

星野廉

2022年3月30日 08:09

目次

「何か」で保留して、とにかく書いてみる

「何？」は「ない」

「何？」ではなく「何か」

「何？」は判断停止と思考停止をもたらす

名詞ではなく動詞、定義ではなく用法

保留しながら、警戒を解かない

「誰？」と「誰か」もあります

最後に

「何か」で保留して、とにかく書いてみる

今回は、「何か」と「何」についてお話しします。

とはいえ、漠然としていますから、たぶんみなさんが日々実践なさっている「書くこと」とからめて話を進めていきます。

＊

何かを書きたいと思っている。でも、何を書けばいいのか分からない。

いま使った「何か」と「何？」は違います。日本語では似ていますが、英語では「何か」は something に、「何？」は what に相当しますね。

「何か」は保留の言葉で、「何？」は追求の言葉だと考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「〇〇とは何なのか？」なんてしんどいです。エスカレートすると哲学とか宗教になります。

しかも答えはたいてい出ません。哲学や宗教でも文学でも出ていません。「出た」言っている人と、それを信じる人と、「出た」と思っている人と、それを信じたい人がいるだけです。

人はまず「〇△X」という言葉を作り、その次に「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だからです。

後手に回って、ああでもないこうでもない、ああだこうだをやっています。「〇△X」をめぐっての堂々めぐりをえんえんとやっているのです。

正確に言うと、「〇△X」という言葉はあっても、その意味は決まっていないのです。

意味は「ある」のではなく「決める」ものです。「ない」から決めるのですが、「ない」ものを決めるのですから、これだけいろいろな人がいれば争いが起きるに決まっています。

「何？」は「ない」

「何？」は、じつは「ない」なのです。

「ない」から「何？」と問うわけですが、「ない」ものを「何？」なんて考えるのは、アホらしくありませんか？

「何？」なんて、やっかいなものを背負う必要はありません。「何か」というぼかしの言葉であり、保留の言葉を使いましょう。

＊

とはいうものの、人はなんで書くのでしょうか。気になりますよね。

「何か」を使って保留しながら考えてみましょう。

「何？」ではなく「何か」

ものを書いている人なら、誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか。その「何か」は人それぞれですから、自分の好きな、あるいは信じている「何か」を意識したり目指すのだろうと考えられます。

でも、なんで書くのでしょうか。

それがわからないから書く。これもありだと思いますし、げんにそういう気持ちで書いているらしき人がいます。

＊

私はといえば、たぶん、自分の中にある「何か」のために書くのだという気がします。それは自分にしかわからないというよりも、自分にもわからない予感があります。

誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか——この「何か」でありたいの「何か」も、「何か」を書きたいの「何か」も、外から来るものです。借り物なのです。

たとえば、作家や詩人という名称も、小説や詩というジャンルも——あるいは、たんに書き手やユーザーであったり、たんに作品や記事であったとしても——、それは誰にとっても生まれたときにすでにあった「外」なのです。だから、借りるしかありません。自分のものではなく占有できないという意味です。言葉と似ています。いや、まさに言葉なのでしょう。

その外から来る「何か」を、自分の中にある「何か」が迎えるのではないのでしょうか。

迎え入れ、ひょっとすると迎え撃つのかもかもしれません。自分の中にあっても、その「何か」はふつうは不明だという気がします。何なのかわからないのです。心や魂に似ています。たぶん、それなのでしょう。

書いてみないとわからない。書いた結果、書けたものを見てもわからないかもしれません。内容はどうであっても、何かが書ければ書いたという達成感はあるにちがいません。

とにかく書いてみないとわからない。書いた者勝ち。

「何？」は判断停止と思考停止をもたらす

ここでいったん整理します。

*

「何か」という言葉を使って保留して、扎扎实り行動だけするのです。「何？」にこだわっていると、行動ができません。

じつは「何？」にこだわると思考停止と判断停止におちいるのです。おちいつている本人は気づきません。

頑張っている感にとらわれているからです。やってる感の虜（とりこ）になっているという意味です。

一方、「何か」で行動している間は、思考も判断も生きています。体が動いているからです。

試してみましよう。

「何？」「何なの？」（what? でもいいです）と口に出してみてください。緊張して、体が動かなくなります。追求しているからです。

今度は「何か」(something でもいいです)と言ってみてください。体から力が抜けて、楽になります。保留しているからです。

*

大切なことなので繰り返します。

眉をひそめて、「〇〇とは何ぞや?」とか「〇〇とは何か?」なんていうふうに、「何?」と「とは」にとらわれている人は、じつは考えていないのです。

動いていないからです。詳しく言うと、身体が動いていないからです。身体に力だけが入り、動いていないのです。

「何か?」を使って保留して、楽な気持ちで動きつづける。これが、「考える」です。

保留するのですから、名詞ではなく、結論や帰結ではありません。動詞であり、過程であり、絶え間ない動きの中にある、うつろいなのです。

動いていると、つぎつぎと考えが浮かびます。まとめる必要はありません。まとめようとすると止まります。動いていることが大切です。

*

何でもいいです。好きなものを書きましょう。そうすれば「何か」がぜったいに書けます。その結果として書けた「何か」が「何か」なのかは他人が決めるのですが、書いた者勝ちです。

ペンを動かしましょう。キーボードを叩きましょう。あなたの「何か」のために。それは、たぶん、あなたの中の「何か」のためなのです。

疲れたときには、何も決めないでいる、あるいは何も書かない。これも大切です。

名詞ではなく動詞、定義ではなく用法

そう言われてもね、やっぱり「愛って何だろう？」って考えちゃうの。

その気持ちはよく分かります。愛という名詞ではなく、「愛する」という動詞で考えたらどうでしょう？

愛する、愛さない、愛します、愛するとき、愛せば、愛せよ

こういう活用がありますが、活用を活用しましょう。これを使って作文をするだけでも思考停止から行動に移せます。

動詞は文字どおり、動きです。思考を固定しないことがコツです。

「愛」「愛する」を検索して、その定義ではなく使われ方を見るのもお勧めです。

詳しくは、拙文「自分を探して、愛を探して」と「名詞的なもの、動詞的なもの」をご覧ください。

保留しながら、警戒を解かない

まとめます。

*

得体の知れないもの、何なのか分からないけど怖いもの、とにかく不気味なもの、不思議なもの、気になるもの——。

こうしたものは、とりあえず「何か」と呼んで保留しましょう。

「何なのか？」と追求してはなりません。追求している間に、動けなくなるからです。金縛りみたいなものです。

＊

ところで、冒頭近くで述べたように、そもそも「何？」は「ない」なので、堂々めぐりになるだけです。

「何？」は、じつは「ない」なのです。

「ない」から「何？」と問うわけですが、「ない」ものを「何？」なんて考えるのは、アホらしくありませんか？

(※この辺のお話に興味がある方は、拙文「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】の「何って何？」と「意味禍が終わるとき」をお読みください。)

「ない」ものを「何？」と問い、考えるという堂々めぐりに依存している人はいます。

つらそうな顔をしてじつは嬉々としてやっているようなので、本人が幸せならば、それでいいとは思いますが、本当につらい人には、依存を絶つという選択をお勧めします。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

「誰？」と「誰か」もあります

そうそう、もう一つ付けくわえたいことがあります。

「何？」をお仕事になさっている人もいます。お金になるからです（誰もができるわけではなく非凡な商才が必要ですし、プレゼンと演技力がうまくなければなりません）。

その人に本気で付き合うと馬鹿を見ます。下手をすると自分が壊れます。もちろん、お金もかかります。

誰でしょう？

誰とは申しません。ご自分で考えてみてください。

組織や集団の場合もあるでしょう。

そういう人たちは演技がうまいですから、眉をひそめてもっともらしい顔つきをしているかもしれません。考えているポーズが得意なのです。やってる感ですね。

よく観察してください。観察することは考えることでもあります（「観察」という文字を見てください、ぼーっと見ることはありません）。

*

「何？」は商品ですから、「何？」をつぎつぎと生産します。

本人が考えているわけではありませんから、つぎつぎと「何？」を引用し、継ぎ接ぎします。まとめるだけですから、日替わりメニューも珍しくありません。

そう言えば、無料で「何？」を配っている人もいます。なぜかは不明です。引用しまとめて配るという行為に依存しているのかもしれませんが。いつかいいことがあると夢見ている節もあります。

「誰？」ではなく「誰か」さんですよ。「何？」と「何か」の人間バージョンです。

保留して考えてみればいいのです。というか考えるのではなく観察しつづけるのです。決めることはないです。どんどん姿を変えるかもしれなせん。

いっしょにいて苦しくなるとか、付き合っていてつらい人かもしれませんね。

人それぞれですから、商品としての「何？」が生き甲斐になる人もいます。大切なことは、それが自分にどう働きかけるかでしょう。自分の体に聞いてみてください。

最後に

話を戻します。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

名づけて、手なずけたつもりになったときがいちばん怖いのです。チョロいものだと、気が緩み警戒を解いてしまうからです。

そうです、上で述べた判断停止と思考停止のことです。これが、おそらく、相手よりも怖いのです。

意外と、敵は自分の中にある、またはいるのかもしれないね。

さあ、動きましょう。体を動かしましょう。考えが浮かびますよ。

お読みいただき、ありがとうございました。

※この記事は、以下の記事を編集したものです。

- *【小話】自分の中にある「何か」のために書く
- *「何か」と「何」から身をかかわす
- *【小話】あえて「何か」を決める、あえて「何か」を決めない
- *「とは」は、永久に
- *「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】 ←おすすめします

#言葉 #意味 #代名詞 #名詞 #判断停止 #思考停止# 行動

03/31 樹影、言影、幻影

＊

樹影、言影、幻影

星野廉

2022年3月31日 08:09

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

＊

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

記憶の風景、記憶のかたち

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

＊

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、読みかえてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの困難を実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉によるデッサンでしょう。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

05/01 小説、日記、詩集

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えないという写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。)

その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っているといともなみなのです。影には

影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械やA Iにも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいは外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいありません。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 描写 # 写生 # デッサン # 文字 # 幻# 夏目漱石
複製 # 拡散 # AI

04/01 文字化する人

＊

文字化する人

星野廉

2022年4月1日 08:01

目次

文字を持ったことで、人は文字化したのではないか

文字は映像に似ている

文字を読むのではなく見る

人は文字を読むのが好きではない

文字が書かれなくなっている

複製が容易な文字

文字化する人

文字化した人は見るだけの存在になる

数字も文字

処理される、処分されるということの意味

いけにえ

文字を持ったことで、人は文字化したのではないか

ヒトが話し言葉をなぜか持ってしまった。つぎに書き言葉である文字をなぜか持ってしまった――。

こんな話がありますが、文字を持ったことで人は文字化しているのではないかと、最近よく思います。

今回は、そうした思いについて書いてみます。そのためには、人と文字を観察する必要があります。

＊

文字と人を観察した結果を以下に並べてみましょう。

人は文字に似ている。文字は人に似ている。人は文字になりたがる。人は文字になっている。人は世界を文字として見ている。人はありとあらゆるものに文字を見ている。文字は擬人かもしれない。文字は顔だろう。数字は文字であり、その意味は大きい。

以上は、どれも私の個人的な印象です。

文字は映像に似ている

次に、上に並べた文を見ていて、思いついたことや、以前に書いて思いだしたことを並べます。

文字は線からなる。文字はなぞるもの。文字はなぞり書くものから入力するものになってきている。文字は人の外にあって、人の中に入りしなから、外であり続ける。

以上は、私のオブセッションです。

＊

文字は映像に似ている気がします。というか、両方とも視覚の対象ですから、似ていて当然なのでしょう。

映画を短く編集した動画が違法に制作されているそうです。私も見たことがあります。

見ていて連想したのは「読む」です。本であれ、新聞・雑誌であれ、ネット上の文書であれ、人は速読します。読むのではなく見ている感じです。

それだけ読む物が多くなっているのですから当然です。

個人が自由にできる時間は限られています。どれだけでもたくさんの情報に接するた

めには、触れる時間を短縮する必要があります。

話し言葉が話されている間、人はその話し手に時間を拘束されます。話し終わるまで待っていただけないという意味です。

もどかしいですね。ままならさにいらいらすることもあるでしょう。録音した音声であれば、早送りできるでしょうが、現実的な解決策ではありません。

文字を読むのではなく見る

一方、書き言葉である文字であれば、はしよることができます。見るだけでも大丈夫です。

聴覚が時間に拘束されるのに対し、視覚は時間にわずらわされることなく、対象を「はしよる」、つまり短縮して省くことができる点が優れています。

この軽快さ快適さを覚えるとはまるでしょうね。つぎからつぎへと対象を変えることができるのです。取っ替え引っ替えできます。

ますます文字からなる文章は読まれなくなり、見る対象になってくるのは当然であり人情だという気がします。

*

とくにパソコンやスマホの液晶画面に表示されている文章は、ますます読むのではなく見る対象になる気がしてなりません。

印刷物にくらべて、端末の画面上の文章は、いかにも軽いのです。存在感が薄いのです。

note で書いていらっしゃる方々が、自分の記事をまとめて書籍化したいと思うときに、電子本ではなく、紙の本を望む場合には、「見られる」のではなく「読まれたい」という気持ちがどこかにあるのかもしれないね。

*

人は何かにはまるとエスカレートする傾向があります。依存とか嗜癖とか脳内物質の分泌という言葉で説明できそうです。

文字を読むのではなく見るようになる。私はこれを人の文字化と呼びたくなります。人が文字に似てくるからです。

文字は見るものです。現実問題として、見られている文字のほうが、読まれている文字よりも、はるかに多いのではないのでしょうか。

さらに言うなら、読まれも見られもしない文字のほうが、もっともっと多いかもしれません。いわば捨てられる文字です。

いま上で述べた「文字」ですが、じつはぜんぶ人のことなのです。今回は、そういうお話をしています。

人は文字を読むのが好きではない

ここだけの話ですが、そもそも人は文字を読むのが好きではないのです。

話し言葉を持ってしまったというアクシデント（偶然）は、人類にとってそこそこありえる展開でしたが、文字を持ってしまったというのはいりえないアクシデント（事故）だったのです。

言葉（話し言葉と書き言葉の他に、表情と身振りといった視覚言語を含みます）は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。真似て覚える必要があります。

抽象と具象を兼ねそなえているから、こんな不自然で不可思議なことが起きるわけですが、文字には、話し言葉や表情や身振りにはない特徴があります。

文字は残るのです。保存できます。一方の音声、表情、身振りは一瞬で消えます。

＊

音声と表情と身振りを、録音し録画をして再生するという手はありますが、再生したところで、再生する時間がかかって効率的ではないのです。複製と拡散も面倒です。

残り、保存ができて、複製が無限にできて、瞬時に拡散できる。しかも、読むのではなく見るだけでも大丈夫。

こんなものが、文字の他にありますか？

人は楽をしたい生き物です。

本来なら、文字は読みたくないのです。文字を見たい、ぱっと見るだけで済ませたい。これが人の本音です。

表情と身振りは、習得するのにそれほど苦勞しないでしょう。

ところが文字の習得と学習にはとほうもない時間と苦勞が必要なことは、みなさんご承知のとおりです。しかも、学習は一生続きます。

うんざりしませんか？ 疲れませんか？

文字の読み書きを学習するために、人がこれだけ苦勞し、これだけ大々的な制度とメソッドを築きあげたのは尋常ではありません。

この星にとっての非常事態だったと言っても言いすぎではないでしょう。

ぶったまげて腰を抜かしても罰が当たらないほどの大珍事なのです。

*

とはいえ、いったんできてしまったものは仕方ありません。ここまで来たのですから、後戻りもできません。

半分冗談はさておき、(文字からなる)文章を見ることと、(文字からなる)文章を読むことのさかいに線引きをすることは難しい気がします。

両者の違いは掛ける時間でしょうか。理解度でしょうか。集中力でしょうか。気合いでしょうか。既に知っているか初めて目にするかでしょうか。気分でしょうか。好き嫌いもある気がします。体調も大いに関係ある気もします。

要するに、曖昧なのです。検証不能なことは確かでしょう。

できることなら、文字は読まずに見るだけで済ませたい、学習も勉強もしないで済ませたい——これは本音だと思います。

自分を基準にして人類を語って、申し訳ありません。人それぞれですよ。

文字が書かれなくなってきている

文字と、文字からなる文章は、ますます読まれなくなってきています。見る対象に近くなっていると言えそうです。

それだけではありません。

文字と文章は、手と指を使ってペンなどで紙に書くものから、手と指を使って入力するものになってきました。その傾向はますますエスカレートしてきています。

人が文字に合わせるようになってきている。しかも、手と指を使ってペンなどで紙に

書いた文字ではなく、機械に入力された文字（液晶上の画素の集まり）に合わせるようになっているのです。

*

文字を書くのではなく入力している人が、文字を読むのではなく見るようになるのは、分かりやすい展開だと思います。

どれだけでも、楽したい、早く済ませたいという意味です。

文字は書かれなくなる（つまり入力されるようになる）、文字は読まれなくなる（つまり見られるようになる）。

これは、人が文字に合わせるようになる、ひいては人が文字になる、と同期（シンクロ）しているのではないのでしょうか。

後に触れますが、文字は軽くてさくさくして、効率がいいのです。その文字には人は憧れてなろうとしています、じつはもう人は文字になっているのです。（このまま読みつづけてください）

複製が容易な文字

文字の最大の特徴は、複製が容易だということです。写本、写経は大変だったでしょうが、印刷術が発明されて、魔法みたいに飛躍的に複製がさらに容易になりました。

複写機が現れると、一般人でも簡単に複製ができるようになりました。しかも複製できる数が飛躍的に増加しました。

そして、パソコン、インターネット、スマホが、さらに複製を容易にし、容易どころか、ネット上であれば入力して即座にそれが無数の端末で複製される、つまり拡散されるという状況が生まれました。

入力＝複製＝拡散。この三つが同時に起こるわけです。こうした状況で入力され、複製され、拡散された文字からなる文章を読むことが可能でしょうか。読むが見るに限りなく近づけば、可能と言えるでしょう。

＊

人はそうした文字の状況に自分を合わせるようになります。合わせざるをえないのです。それが日常生活になっているのですから。

これを人の文字化（文字に擬態するでもいいです）と言わずに何と云えばいいのでしょうか？

ちょっと無理のある言葉じゃないの？ 大げさじゃないの？ 論理の飛躍というものでしょう？

そんな声が聞こえてきましたので、べつの意味での人の文字化についてお話しします。

文字化する人

人は文字化しています。まわりをよくご覧になってください。よく考えてみてください。

あなたはフランツ・カフカに会ったことがありますか？ 見たことがありますか？ マリリン・モンローでもいいです。アンディー・ウォーホルでもいいです。平野歩夢さんでもいいです。バイデン大統領でもいいです。

ぜんぶ、文字で知っているのではありませんか？ つぎに映像（正確にいうと映像の記憶です）で知っているが続きます。まず、文字なのです。

あなたの知っている人の大半が、文字なのです。つぎに映像です。

文字も映像も、見るものです。視覚に訴えているイメージ（像）だという点では同じです。

*

映像としてイメージできなくても、文字として知っている人、場所、事物がいかに多いことか。

人間関係は文字と映像でなりたっているのです。

きょくたんな言い方をすると、「世界（人にとって世界とは人間関係に他なりません）という関係性」を構成している要素は文字と映像とだということになります。

これは、驚くべきことではないでしょうか。本気でびっくりして、腰を抜かしてもいいほどの事実です。

なぜなら——何度も繰り返かえて申し訳ありませんが——人が文字化しているということなんですから。

あなたが文字だという話なのです。

あなただけではありません。

知人であるか、家族であるか、会ったこともない無名人であるか、会ったことも見たこともない有名人であるか、会ったことも見たこともない歴史上の人物であるか、まったく関係なく、みんな文字になっているという話です。

ぶったまげて腰を抜かしても罰は当たらない気がします。

文字化した人は見るだけの存在になる

あなたは固有名詞、とくに「人名を読む」ことがありますか？　読むとすれば、どれ

くらいの時間を掛けますか？

人名を「見ているだけ」ではないでしょうか。

二度目、三度目と、何度も見たことがある固有名詞、とくに「人名を読む」ことがあるのでしょうか？

見るどころではないくらいに「瞬時に処理している」のではないのでしょうか。

人名は人命なの입니다。

それが抽象です。

あなたを責めているわけではありません。誰もが抽象と無縁でいるわけにはいかないと言いたいのです。

言葉、とりわけ文字の抽象性はきわめて高いと言いたいのです。

抽象とは残酷なものです。その基本に「切り捨てる」があるからだと言えます。

余分なものを切り捨てたから、スリムですっきりしているし、軽くてさくさく読めるどころか、見るだけで済ますことが可能になるのです。

それが抽象なのです。

数字も文字

さらに恐ろしい衝撃の事実があります。

数字です。

数字も文字です。

よろしいでしょうか。あなたは、既に何かの番号、つまり数字という文字として処理されています。

学級、学校、同窓会、自治会、自治体、政府。そうした組織において、あなたという人間を生身で扱うわけにはいきません。

生の人間は重すぎるからです。容量が半端じゃなく大きすぎるのです。

人を名前という文字、データという文字、番号という数字——ぜんぶ文字です——にすれば、超軽量化されます。さくさく処理できます。

パソコンでも、大型コンピューターでも、インターネットでも、複製＝伝達＝拡散＝流通が即時に可能になります。

処理される、処分されるということの意味

数字として処理される。

たとえば、死者〇〇名、重傷者△△名——という意味です。患者数、検査陽性者数、新規感染者数、給付金対象者数……もありますね。

数字として処分される。

処分は不祥事を起こして処分されるだけではありません。婉曲的に使われる言葉でもあります。

たとえば、殺傷処分がそうです。似た言葉に駆除もあります。排除するや非難させるも、そうでしょう。要するに「消す」のです。

非常事態下や災害時や有事（この言葉自体が婉曲語です）のさいに「処分される」が具体的にどういう意味なのかを考えてみてください。

*

人は言葉に似ていない。人は言葉に似てくるのだ。

人は言葉になる。人は文字になる。人は数字になる。文字として数字として処理される。大量に処理することが可能になる。処分も可能。げんにされている。

人は「自分に似ていないもの」として処理される。だから処分もされるのだろう。そうとしか思えない。

そっくり、すっきり、かっきり。過不足なし。可もなく不可もなし。すっきりだから超軽量。大量の処理や処分に最適。さくさく、迅速、すみやかに、スピード感をもって。

(拙文「シンクロにシンクロする」より引用)

*

大切なことなので、繰り返します。

既にあなたは文字なのです。好むと好まざるとにかかわらず。

いや私は生身の人間です。切れば血も出る生き物なのですよ。

たしかにそうです。でも、あなたはげんに文字として扱われています。

世界の圧倒的多数の人があなたを認識するとすれば、文字と映像でしか認識できないからです。

*

数字は恐ろしいです。文字どころではありません。

あなたは既に何らかの数字としてカウントされています。あなたの知らないところで。

それを政府が保管していることは確かです。さもなければ、あなたには戸籍も国籍も

ないことになります。

あなたは数字なのです。あなたは文字なのです。

しかも、あなたは、その数字と文字に合わせて生きざるをえない状況に投げこまれているのです。

いけにえ

文字と数字は、いわば生身の人間の「影」です。はかなげで、かげろうのようです。

そりゃあそうです。生身の人ではないからです。文字と数字は影だからです。影の影が薄くて当然なのです。

一方、文字としての人、つまり文字化した人は、いまや「見る対象」になっています。単なる見る対象となった人ははかなげで、かげろうのようです。

これは悲しいことです。生身の人が文字化するなんて、悲しすぎます。

人の文字化が、もはや比喻やレトリックでなくなっていることは恐ろしくもあります。いまや人は文字どおり文字なのです。

*

文字と数字は人の代わりに処理されます。処分もされます。あなたの身代わりに処理され処分されるなんて、「いけにえ」じゃありませんか。

いけにえ、犠牲、生け贄。こう書きます。

処理し、処分する人にとっては、ただの文字と数字です。さくさく作業を進められます。

文字と数字があなたの代わりに処理され処分にされているようでいて、じつはあなた自身が処理され処分されていることを忘れてはなりません。これは、私が自分に言い聞かせている言葉でもあります。

文字と数字が、「生身の人間」を「抽象」と錯覚させる装置であることは確かなようです。

遠く離れた場所から報道という形で届けられる映像と文字と数字が、単なる影でも生け贄でもなく、犠牲者であること、つまり切れば血の出る人間であることに敏感でありたいと思います。

偉そうなことを言って、申し訳ありませんでした。

※関連記事：文字化と擬態と擬人は似ている（シンクロしている）気がします。いつか同期させて記事を書きたいです。

#言葉 #日本語 #数字 #文字 #映像 #複製 #抽象

04/02 ピクピクでシンクロする世界

＊

ピクピクでシンクロする世界

星野廉

2022年4月2日 07:56

目次

小動物のピクピク

相場のピクピク

世界中でピクピク

姿と形を変えるピクピク

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

似ている

小動物のピクピク

株については何も知りませんが、ニュースで株式市場の大きな動きが報道されるたびに頭に浮かぶのがハムスターです。

昔飼っていたことがあり、そのときにピクピク体を動かすのを不思議な気持ちで眺めていたのを思い出します。

小動物は短命なので悲しい思い出もあるのですが、ときどきこうやって記憶の中にやってくるあの小さな動物を愛でています。

自然と手と指が動いて、あの子を撫でていたときの感触がよみがえりはっとします。

テレビで動物の生態を撮った番組を見るのが好きなのですが、小動物を見るとそのピクピクやビクビクやキョロキョロやタタターという仕草に魅了される自分がいます。

やっぱり株に似ています。正確には株の値動きというのでしょうか。

相場のピクピク

株式や商品の相場では、値動きをリアルタイムで表示するわけですが、それは数値であったりグラフであったりします。

新聞での表示は静的なものですが、ネットでの表示はまさにピクピク、ビクビク、キョロキョロ、タタターなのです。

デジタル化された数字がまばたくように細かく点滅することがあります。グラフの線もよく見ると微かに点滅していたりします。

生き物を見ているような錯覚におちいりますが、これは錯覚ではなくひょっとしてまさに生き物を目にしているのかもしれない。

＊

数値もグラフも何かを指しています。

ピクピクというと、針が数字を指すアナログ式の量りや、ガスのメーターのような測定器を連想しますが、ああいう針は指しながら振れます。大きく振れる場合もあれば、小刻みにピクピクすることもあります。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

やっぱり株式の値動きはピクピクでありビクビクです。つまり震えということですね。ビビっているとはか思えません。

あの動きは誰かのおびえであったり、驚きであったり、喜びであったり、思考停止とか判断停止であったり——あの動きの前にどんな思考や判断が可能だというのでしょうか、

任せるしかないのではないのでしょうか（何に任せるのかも分からないままに）、全面降伏です、まかせ、まけるのです——、錯乱であったりするのではないのでしょうか。

世界中でピクピク

やっぱり生き物です。生きてるとしか思えません。世界でみんながピクピクしている。指すを見て、ふれるのです。そしてふるえるのです。

擬人化する生き物であるヒトにとって、その目に映って動くものすべてが生き物であり、森羅万象という名の自分の身体のふるえなのです。

ピクピクという身振りだけがひとり歩きをしているかのよう。ピクピク、ピクピク、ドキドキ、きょろきょろ、おろおろ。

*

ピクピクが世界を動かす。世界がピクピクにシンクロする。動悸に同期する。

音楽の世界で使われている、指揮棒、メトロノーム、録音スタジオなんかにあるピクピクと針の動く機器、波形で表示されるピクピク。

ピクピクは波でもあるのですね。

小刻みな振動、音声の波、うねり。

上下運動として表示される波は、ジグザグでもあるように思えます。

右往左往、千鳥足、蛇行、蛇の動き。

風に揺れる植物、日光や雨風に左右されながら成長する植物なんかも、見る位置を変えたり、見ている時間を速めたり、逆に遅くすると、それぞれ似ているように見えます。

姿と形を変えるピクピク

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、ぴくぴく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん。

いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

＊

音と振動と波と光。これって、同じなんでしたっけ？ 物理では。

詳しいことは知りません。ただイメージと言葉に身を任せるだけ。

幼いころに見たレコードとプレーヤーを思い出します。保育園のプレーヤーを隠れていじっていたのです。

電源を落としたプレーヤーの皿にレコードを載せて、こっそり回してみる。かすかに音がする。旋律は聞き取れませんが、音がするのです。ぞくぞくしました。

＊

いま思うと、あれは針がレコードの溝を走る音なのですね。ぎざぎざで凹凸のある溝を、針が動き、針ががったんごっとなと揺れて振れる。

がったんごっとなという上下運動が、なぜかきいきいとかしゃーしゃーという音になる。

どういうわけか、針の上下運動が、空気の振動となり、それがさらに耳の鼓膜を震わせて、こどもが心を震わせる。

ぴくぴくと、ごっとなごっとなと、きーきーと、しゃーしゃーがシンクロする。

シンクロが姿と形を変えて、シンクロする。

なぞるがなぞるをなぞる。

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

ぶるぶる震える生き物たち。ぴくぴく動く生き物たち。ぶるぶる震える内臓。ぴくぴく動く器官。どくどく流れる血液、しゃーしゃー流れる、リンパ液、〇〇液。

たらたら流れおちる汗。ぼたぼた落ちる体液。ぼとぼと、じゃーじゃー、ぽっとな、ぽつり。ぷーっ。ぶーっ。ぷすーっ。出る、出す。漏れる、漏らす。排泄。生理現象。

はあはあ、ひゅーひゅー、あはん。おお、ああ、うーん。あゝー。呼吸。声。うめき。

*

ごっくん、ごくり。むしゃむしゃ、もぐもぐ。くちゃくちゃ。やむやむ。食事。摂食。入れる、入る。

箸やフォークやスプーンやナイフを使えば、もっとにぎやかでしょうね。しゃべりながらの会食もあるでしょう。黙食もあるでしょう。個食や孤食もあります。

わいわい、がやがや、しーん。

*

何をするにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、往復運動、ピストン運動があるようです。音もします。お供します。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。こうした動きや姿は、生き物の内部での動きとしても、生き物自身の動きとしても、おこっています。

こじつけです。そう思うと何でもそう思えてきます。そう見えてきます。被害妄想み

たいにしつこくつきまといいます。

固定観念、強迫観念、オブセション。疑心暗鬼。壁の染みの模様や顔。天井の模様、雲の形。

そうなっているのか。そう見えるだけなのか。

そう見える。そう感じられる。そう思われる。そう考えられる。

それが意味なのでしょうね。人は森羅万象に、模様と形と顔と自分を見るのでしょうか。見えてしまうのでしょうか。見ずにはいられないのかもしれませんが。

似ている

シンクロや同期の基本は「似ている」だと思います。「同じ」とか「同一」でなく、あくまでも「似ている」です。

似ているは印象ですから、検証できません。特定も確定もできません。

(※「似ている」を基本とする私の考えるシンクロとは、普遍や客観や真理といった壮大な大風呂敷とは遠いものです。大風呂敷を広げてはいますが、すけすけ、すかすか、ぺらぺらなので、無いものねだりはなさらないでくださいね。)

厳密な意味での「同じ」はヒトの知覚では無理でしょう。精密な機器を使えばできるかもしれませんが、誤差やエラーがつきものらしいです。

しかも最終的に「見る」のはヒトの知覚ですから、危うさは消えません。

「同一」はその語義からして、世界に、あるいは宇宙にたった一つしかなさそうですけど、私にはその意味が分かりません。

一個人として、つまり一匹のヒトの端くれとして大切なことは「似ている」です。こ

れしかないのです。高望みはしません。贅沢は申しません。

*

病院にはたくさんの機器があります。入院すると分かりますが、ぴくぴくの親戚に満ちているのです。信号に満ち満ちています。

点滅は危険信号です。ぴかぴかが急かせます。「見て見て」と言っています。

信号は断続的な0と1、○とX、白と黒でないと、生き物には通じません。断続でないと、そもそも注目しないのです。

断続はノックなのです。こつこつ。シロクロシロクロ。通じると生き物もシンクロします。シロクロにシンクロするのです。

どきどきします。心臓バクバク。動悸に同期。

大きなランプが、ばかばかし出したら、大事です。避難しなければなりません。

入院してベッドで寝ていると、遠くでピーポーピーポーが聞こえることがあります。

院内に緊張が走ります。

スタッフの動きも活発になります。ばたばたと歩く音、何かを引きずっている音もします。

ぴくぴく、びくびく。自分の中にある動きに耳を澄まします。

*

病室の窓から、空が見えます。

晴れもいいですが、雲が見えるとほっとする自分がいます。

雲は動くからです。表情があります。あれはあれだ。あれに見える。あれに似ている。

似ているは人をなぐさめてもくれます。

雲が見えないときには、目をつむります。そこにも「似ている」があります

自分がびくびくそのものであること、自分がびくびくの一部であることを感じる一瞬です。

びくびくはやさしい言葉。

似ているとは、何かとつながる気持ちのことです。自分が何かに「うつる」気持ちでもあります。移る、映る、写る、です。

それ以上、何も要らない。そんな気持ちになります。

#言葉# 日本語# 株# 相場# 動詞# 小動物# 値動き# ピクピク# オノマトペ# シンクロ# 同期

04/02 影の落とし物

＊

影の落とし物

星野廉

2022年4月2日 09:03

目次

作文

慣用句、決まり文句、定型を外す

文字どおりに取る

ありえない描写

落とし物

作文

影という言葉を使った言い回しはたくさんあります。どれもがぞくぞくするようなイメージをいだかせてくれます。

「影を落とす」という言い方が好きです。作文してみましよう。

久しぶりに庭に出ると、伸び放題になったヤツデの茂みが、これまた伸びた雑草の上に黒く大きな影を落としていた。

夕日が舗装された道路に影を落としている。私はまぶしさに目を細めた。

戦争の記憶がいまも彼の日常に影を落としているのは間違いない。

＊

最初の例文は、そのまま文字どおりに取れます。ヤツデに日が当たって、その下に影

が映っているという物理的な現象を言葉にしたものです。余計な飾りを取れば、純粋な描写だと言えそうです。

「夕日が影を落とす」という場合には、「光がさす」という意味になるのですが、個人的にはこの言い回しを使ったことはありません。初めての作文です。

三番目の例文の「影を落とす」はネガティブな影響を与えるという意味ですから比喩的な言い方だと理解しています。

慣用句、決まり文句、定型を外す

「影を落とす」という言い回しほどの辞書でも、「影」の語義の例文としてではなく、別の扱いになっています。いわゆる慣用句とか成句であり、決まり文句とか定型とも言えそうです。

大きく分けて、上の作文で見た三つの使い方ができるようです。

つぎの例文を見てください。

彼は影を落とした。気がつくとな自分の影がなくなっていたのだ。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がない。

稚拙で理屈に合わない描写もありますが、小説であれば、ありえる文章ではないでしょうか。小説という言葉は言い訳の材料になりますから。小説では何を書いてもいいのです。詩もそうかもしれません。

「そこのあなた、忘れ物です。影を落としましたよ」

こんな言葉も浮かびました。

＊

「影を落とす」という慣用句を文字どおりに取る。こういうことを私はよくやります。

へそが曲がっているからか、もっと深刻な意味あいのある何らかの症状なのかは分かりません。

「へそが曲がる」も文字どおりに取ると、なかなか面白い光景が頭に浮かびます。「へそで茶を沸かす」は、これまでに何度も視覚化してにやにやしたことがあります。

文字どおりに取るという意味のリテラリズム (literalism) という言葉や、美学・文学関連の用語があることは知っていますが、その意味を調べたことはありません。

文字どおりに取る

影を落とす、影が落ちる、影は落ちる、影に落ちる、影と落ちる、影で落ちる

こういうふうには、言葉を転がすことが好きです。寝入り際にやるルーティーン of 定番です。眠れない夜にも、この遊びをよくやります。

文字どおりに取って、そのさまを思いえがいて楽しむのです。もう少しやってみましょう。

影が影を落とす、影に影が落ちる、陰に影が落ちる、「影を落としたことが、その後の影の生き方に影を落とすことになった」

*

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、日常生活でよく目にします。いまも見えます。

居間のテーブルでパソコンを使っているのですが、目の前にあるモニターの背後には、窓からの光で薄く長い影ができています。そこに頭上の蛍光灯を浴びたモニターが、濃

い影を落としているのです。

輪郭のあいまいな長く四角い影に、くっきりとした長方形の濃い影が落ちているわけですが、陰の中に影があるとも言えそうな気がします。

*

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っただけのいとなみなのです。影には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

（拙文「樹影、言影、幻影」より引用）

言葉の世界には独自の論理と文法がある。

この考え方は私にはとても魅力的に感じられます。人は無意識のうちに、こうした言葉の世界の論理と文法に従ったり、それと戯れたり、楽しんだり、裏切られたり、それによってもどかしい思いをしている気がします。

その一例が、「文字どおりに取る」です。文字どおりに取るとは、現実の論理を退けて言葉独自の論理に従うことでしょう。

そんなことをすれば無理が生じるのは当然です。誤解や曲解になることもあるでしょう。争いの原因になることも十分に考えられます。

その一方で、結果としてポジティブに働くなんてこともありうる気がします。

どっちに転ぶかは予想不可能だと思います。どっちに転んだかが、そもそも確定も特定もできないのではないのでしょうか。なにしろ、曖昧模糊としたものを相手にしている

のです。

すばっと割りきれないわけがありません。割りきれると考えるほうが不合理です。

＊

文字どおりに取ることが、洒落にならない場合もあります。

人の文字化が、もはや比喻やレトリックでなくなっていることは恐ろしくもあります。いまや人は文字どおり文字なのです。

(拙文「文字化する人」より引用)

＊

影が影を落とす——その光景を思いえがく。ありえないことや、ありえない姿や形、ありえない光景を思いえがく。

幼いころに歌い覚えた歌に、「もしもしかめよ、かめさんよ」があります。

月にいるウサギがカメさんに電話をしているさまを本気で思いえがいていました。いまでも、そのさまを思いうかべることができます。

ウサギといえば、勘違いの定番である「うさぎおいし、かのやま」を思い出しました。

あれは視覚的には浮かびません。でも、おかしくて、こどものころには何度も口にしていました。いまでも、ときどき浮かんできます。

ありえない描写

この章の冒頭で、ジジエクはヒッチコックの「海外特派員」を取り上げ、チューリップ畑が続くオランダの田舎で「風車の一つが風向きと逆に回っている」ことに主人公が気づく場面に注目するのですが、次のように要約できるでしょう。

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである。

（拙文「人は存在しないもので動く」より引用）

ありえない描写とは、言葉の世界の論理と文法に従っている描写です。現実世界とは異なるの論理と文法で書かれ描かれていると言えます。

言葉を読む人は、いったんその言葉を信じないことには、読むことができません。評価、判断、否定は、後付けになります。一瞬だけでも、人は言葉の世界の「住人」になるのです。

言葉の世界ではどんな荒唐無稽も不条理も肯定されます。夢に似ています。夢ではすべてが肯定され、あれよあれよと進んでいくのです。

映画もそうですね。見ているもの（銀幕上の影です、現実ではありません）を信じないことには映画は見えません。

ヒッチコックはそのことに意識的であるだけでなく、そのことを映画という作品で具現するだけの、映画という世界での「論理力」と「文法力」を備えていた作家だと言えるでしょう。

レトリックはトリックなのです。いったん騙されないことには読めません。

落とし物

五時半が過ぎたところで、坂の上にある喫茶店を出た。外はまだ明るい。ブラックで飲んだコーヒーは美味しかったが、頭のぼんやりとした感じはまだ去らない。

夕日が影を落としている坂道をゆっくりと下っていくと、先の方に男の姿が見えた。
長い影を引きずりながら坂を上ってくる。

日を背にした男の影が、長い影を従えてやってくる。

男性が苦手な私はどきどきする。できるだけ距離を置いてすれ違おうと考え、歩きつづけながらも道の端へとわずかに寄る。

坂の下から吹き上げる風のせいか、生臭いにおいが鼻をつく。息をとめ、目を伏せたまま、男とすれ違った。

「あとう」背後から男の声がした。「落とし物です。影を落としましたよ」

振り向こうとした私は、足元を見るわけにもいかず、かといって後ろを見る気にもなれず、息を詰めたまま空を仰いだ。

作文 # 小説 # 掌編 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # リテラリズム # レトリック # 夢 # ジジエク # ヒッチコック # ジャック・ラカン

04/02 気づくものには必ず遅れる

＊

気づくものには必ず遅れる

星野廉

2022年4月2日 10:42

影に気づくのはいつも遅れる。影に気づいても影は見えない。

人に先立ち消える影。影に先立ち消える人。

そのとき謎が残ったとしても、もうなぞる人はいない。

(拙文「影」より引用)

日差しの強い日に、山の陰になった場所を目指して歩くのが好きです。くっきりと山の影が見えます。先端の鋭角や全体の丸みを帯びた形が、濃く地面に映しだされています。

そのまま、陰の中に入っていきます。陰は入るもの、影は見るもの。入った瞬間に、そんな思いがします。もっとも、これは後付けです。いま、家の居間で回想しているから、そんな言葉が浮かぶのです。

描写は創作だと気づきます。写生や再現ではありえないのです。言葉の世界に入っている、言葉の論理に従ってのいとなみだと痛感します。いま私が相手にしているのは言葉なのです。当り前のことですけど。

陰に入り、そのまま奥へと進んでいきます。足元に目をやると、さっきまでの濃い影は姿を消し、薄い影がついてくるのが見えます。これも影です。私の影。いつもいてくれる愛おしい存在です。

空を仰ぐと、太陽は見えません。光をはらんだ薄い青が冷たく広がり、その下には黒い山の影があります。一種の間接照明なのでしょうか、あたりの影はいかにも頼りなげに見えます。

木や建物の陰、屋内も、こんな感じなのでしょうか。光はあちこちから差してきます。光はあちこちにあり、うつり、まわりつき、はなれ、とび、ゆれているかのようです。光は静ではなく動なのです。

＊

陰に入り、陰の中であたりを見まわすと、影の薄い分だけ濃淡の階層が綾としてはっきり目に映るような感じがします。いたるところにかげがあるのです。影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。

そのさまを見ていると、かげがさす、かげるという言葉が浮かんできて、その比喩的な意味が、意味というよりもそこに立ちあらわれた形として、こちらにうつってきます。心と体にさしかかり、かげるのです。

どのかげも、光と闇の織りなす濃淡の階層であることにも気づきます。光と闇を分けることの無理にも気づきます。いまになって気づくとは。かげに遅れている自分がいます。気づいても、また忘れるのでしょうか。

世界がいかに気づくもの、気づくべきもの、気づいてもいいものに満ちているかに気づきます。「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。

＊

” 谷には二つの池があった。

下の池は銀を溶とかして湛たたえたように光っているのに、上の池はひっそり山影を沈めて死のような緑が深い。”

(川端康成作「骨こつ拾い」(『掌てのひらの小説』所収)より引用)

この川端の掌編では、光と闇、光と影、日向と日陰、表と裏、そして陰陽が美しく、また哀しく描かれていて、とても好きです。描写が多義的なのです。何度も読みかえて

います。

*

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。

(先立つ相手を敬い、先に行かせる(逝かせる)つまり送ることで、自分が遅れる(後れる)感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。)

なるほど。分けても仕方がないのに分けようとしている自分に気づきます。

いずれにせよ、気づくものに、人は必ず遅れているようです。

(その最たるものが、言葉ではないでしょうか。言葉が言葉であることを忘れるという意味です。言葉は私たちの後から来ながら、つねに先にあるものです。外にある外なのです。)

よく考えれば当り前のことなのです。当り前だから気づけるのであり、当り前だから忘れるのです。目の前にあるから、先に行くから、気づかないものでもあります。つまり、後れる、遅れる。影や言葉のように。

(かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。先立つは前に立つや先に起こると、先に亡くなるの両義があります。)

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

(ことのはに さきだつひとを おくるかげ)

#言葉# エッセイ# 日本語# 気づく# かげ# 陰# 影# 描写# 多義性# 川端康成

04/03 先立たれる

＊

先立たれる

星野廉

2022年4月3日 09:11

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。
(先立つ相手を敬い、先に行かせる(逝かせる)つまり送ることで、自分が遅れる(後れる)感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。)

(ことのはに さきだつひとを おくるかげ)

(拙文「気づくものには必ず遅れる」より引用)

＊

ヒトがいつ表情や身振りを言葉として持つようになったのか。いつどのようにして、話し言葉を持つようになったのか。文字を手にしていく過程はどんなものだったのか。

こうしたことはたどることができません。想像するしかないわけです。その想像はスリリングなだけでなく、どこか甘美でもあります。ノスタルジーをとまなうからでしょう。

＊

視覚言語の一部である表情や身振り、話し言葉としての音声、書き言葉である文字は、人の体から発せられるものであり、放たれ一瞬離れた後に、別の人に届き、今度はその人の身体に染み入ります。

自分から見ると、自分の外にいる相手の身体から、中である自分の身体に入りこんでくるわけです。そして、今度はそれに反応した自分の中から身体を通して言葉にして、それがいったん外に出たうえで、相手の身体に入りこんでいきます。

こんな不思議なことが起きるのは、言葉が外にあるからだと思います。言葉を確認できるのは外にあるときだけなのです。私たちが目にし耳にし触れることができるのは、自分の外にあるときの言葉だという意味です。

＊

一方で、外にあるからこそ言葉は、なかなか自分の思いどおりになってくれません。相手の思いどおりにもなりません。ままならないのです。

自分と相手が歩み寄るしか、「伝わる」とか「通じる」は起こらないのかもしれませんが。ままならさは、それでしか解消できないようです。

必ずしも伝わり通じないのであれば、「分かった」という言葉よりも、じっさいに相手に歩み寄ってみせる行動が大切だと思います。

ままならさに対する唯一の方策は、歩み寄る行動しかないのかもしれませんが。それは面子を捨てる勇気だという気がします。

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる。これが面子をたもつことです。現実に沿うのではなく筋を通そうとして、言葉のままならさに屈しているのです。相手に屈しているわけではありません。

＊

いま述べたことが露わになるのは、戦争や大災害が起きているときです。目の前の現実よりも、言葉の上での辻褃合わせが優先されます。

言葉を崇め、言葉にひれ伏しているのです。

誰がそうするのかというと、人びとの上に立っているリーダー（たち）です。たった一人の場合もありますね。たった一人の辻褃合わせのために、地域だけでなく、世界が危機に瀕しているのです。

辻褃合わせの「辻褃」、筋を合わせるの「筋」、こうしたものは人が発し、いったん放たれたため、人から離れた外にあります。外にあるからままならない、つまり思いどおりにならないのです。

ままならない言葉を前にしてリーダー（たち）も途方に暮れているにちがひありません。現実よりも言葉にとらわれて右往左往しているのですが、その素振りは見せません。面子があるからです。

＊

あの人（たち）は現実を見ていません。辻褃と筋を見ています。辻褃も筋も言葉です。言葉として複製拡散されます。情報やプロパガンダは言葉として流通します。

どんどん人の外に出ていく言葉は、ますます人の手を離れたものになっていきます。

言ってしまった以上、文字になってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかないのです。これが辻褃であり、面子なのであり、要するに言葉なのであり、しかも思いどおりにならない、つまり訂正も撤回もできない言葉なのです。

その結果として、自分（たち）が招いた非常事態下に、リーダー（たち）が、さらなる辻褃合わせ、つまり面子をたもつことに血道を上げ、現実への対応がないがしろにされるのは、みなさんをご承知のとおりです。

いま、げんにそれが起きています。

＊

自分の外にあって思いどおりにならない言葉を思うとき、人の後に来たはずの言葉が、人の前に立っているような気がします。言葉に先立ったはずの人が、いつの間にか、言葉に先立たれているのです。

人は目の前にいる言葉になかなか気づきません。自分こそが前にいると思っているか

らかもしれません。これも面子にとらわれているからだという気がします。言葉は道具であり従者だと人が思っているという意味です。

事態は真逆なのに、です。

ひょっとすると言葉は自立しているのではないのでしょうか。自分で立っているのです。さらに言うなら、生きているのです。そんな荒唐無稽な思いに駆られます。

＊

”物に立たれたように、自分が立つ。未明の寝覚めとかぎらず、日常、くりかえされることだ。日常はその取りとめもない反復と言えるほどのものだ。”
(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』) 所収より引用)

「十二月六日、日曜日、雪のち曇。」で始まる日記体の部分から引用したのですが、『仮往生伝試文』では説話とその解説風の文章よりも、日記体の記述が好きです。その描写は身体に染み入ってきます。

＊

表情、身振り、音声は、一瞬で消えます。文字は残ります。そのまま保存することも可能です。

この文字の特徴は特異とも言えるもので、思いだすたびに考えこんでしまいます。こんな不思議なことがあっていいものなののでしょうか。

当たり前なこととして、繰り返されている日常の出来事なのですが、当たり前という言葉で考えるのを止めるわけにはいかないのです。きっと飲み込みが悪いのでしょう。

＊

ヒトが言葉をいつどのようにして持ったのか。これは永遠にたどれそうもありません。

しかし、ヒトが言葉に先立つとき、つまりヒトがこの星からいなくなったときを想像することが、それほど荒唐無稽な話ではない世界情勢と地球の気象に直面しているいま、私は人に先立たれたときの言葉の行方を考えずにはいられないのです。

言葉の終焉、つまり人の終焉は、私にとってオブセッションにすらなっています。

*

文字は何らかの形で残る気がします。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるのでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ことのはに さきだつひとを おくるかげ

この想像は、言葉の発生という絵空事よりも、はるかにリアルな——つまり間近に迫っている——気配として私の前に立ちあらわれます。悪夢なのです。

その悪夢が現実とならないように、いま自分に何ができるのか。それを考えていきたいと思います。

#日本語 # 影 # 文字 # 表情 # 身振り # 話し言葉 # 書き言葉 # 古井由吉

04/04 投げた影に影を重ねて見る

＊

投げた影に影を重ねて見る

星野廉

2022年4月4日 08:05

目次

影をうつす、影がうつる

一対一に対応する

作文

正確に、細かく

現実をうつす

もっともっと

作られた影

筋書き

影に影を投影する

筋書きも、目的も、意味もない影たち

影をうつす、影がうつる

影といえば、映画や写真を避けて通るわけにはいきません。

幼いころに映画館で見た映画を思い出します。映画館が真っ暗なのです。いまの映画館は明るいのです。

真っ暗な中で見る映画に惹きつけられ魅惑された記憶がかすかにあります。かすかで断片的なのですが、強烈なわくわくをとともう思い出なのです。

映画も本来は銀幕上に投げられた「影」なのですね。その影に、人はいろいろなものを投影し重ねるわけです。影に影を重ねる映画の鑑賞はじつにスリリングな体験だと思います。

＊

写真も影ですね。

私は映画にも写真にも疎いので、知っていることだけを頼りに書いてみようと思います。この記事のためにあえて調べ物はしないという意味です。

できるだけ、いまここにあるもので、ああでもないこうでもない、ああだこうだを試みるつもりです。

映画、写真、映画用のカメラ、写真を撮るためのカメラ、望遠鏡、顕微鏡、影絵、幻灯、スライド、複写機。

思いつくままに並べましたが、広げすぎたみたいです。それぞれの仕組みについてはよく知りません。まったく知らないものもあります。ただわくわくします。

私は研究者でも探求者でもないので、分からないという気持ちと不思議だという思いを大切に、楽しみながら書いてみます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうがずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

(拙文「気づくものには必ず遅れる」より引用)

分からないときには知ろうとしたり分かってもらうのではなく、気づかないものに目を向ける。これが私には合っているようです。横着なのでしょうね。

一対一に対応する

話を映画と写真に絞ります。ざっくりと両方とも影だという前提で話を進めます。映画と写真で思いだすのが、写像という言葉です。中学か高校か覚えていないのですが、たしか数学の授業で聞きました。

ぼんやりとしたイメージは、AというグループとBというグループがあって、それぞれの構成要素が一对一で対応しているとか、多対一とか、そんな話だったと記憶しています。

調べれば真偽が明らかになるのですが、あえて調べずに、いま述べたイメージに沿って書いてみます。

大切なのは、一对一で対応するという話です。とても刺激的なイメージです。

昔の写真で、すごい解像度のものをテレビで見たことがあります。モノクロで見るからに古い写真なのですが、細部が半端じゃなく鮮明なのです。鉱山の写真だった気がします。

集合写真もあったのですが、百人近い人たちが会しているのです。その一人ひとりの顔がそれなりにはっきりと写っていました。

作文

ここで作文をします。

写真に姿が写る。母と写っている写真はこれしかない。このページに裏ページの絵が写っている。

板書をノートに写した。写本。写経。筆写。書写。複写。写生。

鏡に顔が映る。水面に木の姿が映る。影が壁に映る。障子に人の影が映る。この辺はテレビがよく映らない。テレビにあなたの家が映ったよ。目に映る像。

プロジェクターを壁に直接投影する。プロジェクター映像を白い壁に映す。映写機。

＊

難しいですね。こういうのは苦手です。辞書や用字用語集を参照しないと作文できません。

大ざっぱな表記と言葉の使い方がつかめたので、これでよしとしましょう。

正確に、細かく

上の作文を見ていると、話が大きくなり、どんどん広がりそうな予感がするので、なるべく広げないようにします。

私にとっていちばん大切というか興味深いのは、一対一に対応するということなのです。

映画も写真も一対一に対応させるのが目的で作ったものだという気がします。言い換えると、風景や物を正確に、しかも細かく、そのままに「うつす」ということでしょう。

「そのまま」というのは曖昧な言い方ですが、今回は深入りしないでおきます。これを本気で考えるのは素人には無理だという気がします。わくわくしないし、楽しくもなさそうです。

現実をうつす

物や風景と写真を一対一に対応させる。

あっさり書きましたが、すごいことです。気が遠くなりそうになります。現実を「うつす」、つまり写し映し移すわけです。そんなことが可能とは思えないだけに、すごいなあと感心してしまう自分がいます。

像度の問題でしょうか。

これくらい鮮明なら、ま、いっか。ここまでそっくりなんだから、ほぼ同じっぼい。いや、もっともっと、くっきりはっきり、リアルに。

欲張れば切りがないと思います。贅沢を覚えるとエスカレートしそうです。これ以上を望みたいとは思いません。

作られた影

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。そっくりを見るためではないでしょうか。

そっくりを見るためには、正確で細かくなければなりません。解像度を高めるわけです。これは切りがありません。もっともっとになります。

(何にそっくりなのかといえば、現実にそっくりなのであり、同時にそれは人にそっくりであり、自分にそっくりなのだという気がします。このことについては、いつか記事として書いてみたいです。)

*

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

無限に広がった紙やスクリーンにうつすわけにはいきません。人間、そこまで欲張ってはならないでしょう。

映画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間ですが、これは長

いものを編集したもののようです。たとえば、ディレクターカットとか言いますよね。完全版も聞いたことがあります。トレーラー（予告編）もあります。

いろいろな編集が可能だけど、最終的にとりあえず作られ配給されたのが「作品」みたいです。それぞれ、長さ、つまり上映時間が異なると考えられます。

いずれにせよ、作られた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいありません。

やはり作りものなのです。うさんくささがつきまといます。

筋書き

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

写真であれば目的やテーマです。つまり記念写真だとか、エロ写真だとか、可愛い動物とか、報道写真とか、ブロマイドとか（死語ですか？）、カボチャの成長の記録とか、指名手配とか、漠然と「涼しげな風景」とか、キャプションみたいなのです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック……、あとが続きませんが、いろいろありそうです。とにかく、目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。

ネットなんかの動画であれば、情報カメラによる映像とか、お笑いとか、ユーチューバーの動画とか、PVとか、MVとか……、あとが続きませんが、目的やテーマやジャンルや用途があります。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的やストーリーがあって作られているわけです。

＊

鏡像というのも、じつは作られた影ですね。そもそも鏡は作るものです。丹念に磨きあげて作ります。作られたものに映る影は特別なものであるはずです。

水面を覗きこむのとは一線を画してしかるべきだと思われま

鏡には枠があります。何らかの目的があって、作られているし、それぞれの目的があって各人が枠のある鏡を覗きこむわけです。目的があるのですから、その始まりと終わりという時間的な枠もあります。

お化粧、試着、顔色を見るため、歯磨き、うっとりするため、白髪を確認するため、毛の残り具合を確認するため、口内炎の状態を見るため、鼻毛を抜くため……。

ぱっとしない目的とストーリーですけど、ドラマがあることは確かです。じつに人間くさいドラマです。

＊

作られた影には作られたストーリーとドラマがある。

なんてまとめることができるかもしれません。したがって、筋書きがあるとも言えますし、フィクションであるとも言えそうです。

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのです。ドキドキもするのです。ぞくぞく、あらら、まあ、おーまいがっ、という感じです。

影に影を投影する

作られた影には、作られたストーリーがあるという話でしたね。そう考えると、やっぱり現実ではないわけです。作った物ですから当然です。フィクション、虚構です。

ましてや、一対一に対応しているなんて、まさにフィクションでしかないわけです。

＊

現実とは現実。現実と写真は違う。現実と映画は違う。写真は写真。映画は映画。ですよ。

現実とは現実。現実と絵画は違う。絵画は絵画。ですよ。

現実とは現実。物は物。言葉は言葉。言葉は現実ではない。言葉は物ではない。ですよ。

＊

とはいうものの、写真や映画という人工的な影に、人は自分を投影したり、現実を投影したり、世界を投影したりするのでしょう。影に影を見ているとも言えそうです。

影に心を投影する。影に心を投げて、そこに心の影を見る。

わくわく、ぞくぞくする話であることは間違いありませんね。

筋書きも、目的も、意味もない影たち

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きっていると疲れることがあります。

外に出て、たとえば木々が地面や水面に落とす影たちを見るとき、ほっとする自分がいることも確かです。その影たちには意味がないのです。ストーリーも目的もありません。ただそこに「ある」あるいは「いる」だけです。

*

外に出なくても、屋内でまわりを見まわせば、意味のない影たちがいます。さまざまな家具や製品という人工物の影のことです。いま私のいる居間にはいろいろな光源があり、いろいろな物たちがあちこちに影を投げたり落としています。

映ったり写ったり移ったりする影たちもいます。誰かが動けば、何かが動けば影は移ります。揺れます。時の経過とともにもうつります。そうでなくても、つねにかすかに震えているのが分かります。

そこには筋書きもドラマもありません。

意味に疲れているからでしょうか。私は最近、意味のない影たちの意味のない揺らぎに心を動かされます。ほっとするのです。

とりとめのない話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 影 # 映画 # 写真 # 意味 # 蓮實重彦

04/04 陰に光を当てる

＊

陰に光を当てる

星野廉

2022年4月4日 18:32

目次

影の薄い陰

作文

岩陰で二人がすることは

ネガとポジ

陰と隠でイメージの韻を踏む

陰の隠然たる存在感

一樹の陰

影の薄い陰

影ばかり見てきたので、影の薄い陰にも光を当ててみたいと思います。複数の辞書で陰を見ると、陰は影の陰に隠れているようで、じっさいにはなかなか興味深い存在感を漂わせていると気づきます。

陰に光を当てることで、その影が薄まるどころか、濃くなりそうな気配を感じるのです。「隠然たる」という言い回しがありますが、陰には隠然たる存在感があると言えます。それは淫靡でもあります。

陰獣、陰湿、陰険、陰画、隠微、隠喩、淫蕩、淫乱。

後で触れることになるでしょうが、このように陰と隠と淫は音読みをすると韻を踏んでいるだけでなく、イメージにおいても韻を踏んでいる気がしてなりません。

ぞくぞくするのはです。

作文

まず作文を試みましょう。

＊

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

岩の陰に身を潜める。

物置の陰でこっそり煙草を吸う。

二人は岩陰に身を隠した。

陰は「休む」や「隠れる」と相性がいいようです。

「岩陰」というのはなかなか意味深な場を感じられます。岩に普通ではない「何か」を感じるからかもしれません。

「木陰」とは違った「何か」が漂ってきませんか？ 私は「岩陰」に「におい」を感じます。湿ったにおいです。木陰と違って風がないからかもしれません。ああいうところには、苔が生えていてもおかしくないのです。

後ほど触れますが、岩や大きな石を信仰や崇拝の対象としている例が多いことも、そうしたしっとりしたイメージに結びついている気がします。

岩陰で二人がすることは

ところで、上の最後の例文で岩陰に身を隠した二人は何をするのでしょうか。

この二人を男女として読んだ方は多いと思われます。べつに男女じゃなくてもかまいませんが、隠れた二人が何をするのかが気になります。

ふたりの間には「何か」があるはずです。「あれ」でしょうか。「なに」でしょうね。そ

うです、「それ」ですよ。

このように代名詞という名詞の代わりに使う言葉は、モザイクでありぼかしです。いやらしく感じて当然なのです。

今回は、そういう「なに」の話もすることになります。陰、隠、淫、韻ですから、当然なのです。

＊

「二人は岩陰で愛を確かめた」。上品な言い回しですね。

「二人は岩陰で愛を誓い合った」。愛を誓い合うとは遠回しですが、やっぱりあれでしょうか。

「二人は岩陰で愛を交わした」。かなり核心に近づいた表現ですね。交は「かわす」だけでなく「交わる・まじわる」も連想させます。「まじわる」となると、辞書にはそのものずばりの語義が出てきます。「愛をかわす」が「愛を躲す」になると、いま述べたのとは真逆の意味になりそうです。

「二人は岩陰で愛をささやき合った」。遠回しなだけにかえっていやらしく響きます。陰で唇が動くさまが目浮かぶようです。露骨に書いてごめんなさい。

以上の各文は「二人は」と「岩陰で」と「愛を」という三つの要素に、「動作と様態」がからまり、絶妙な雰囲気醸成したセンテンスと言えそうです。

まさに陰と隠と淫のハーモニーです。

ネガとポジ

陰の反対は陽だと言われています。

陰陽、山陰、山陽、陰画（ネガ）、陽画（ポジ）、陰性（negative）、陽性（positive）、陰気、陽気、陰極（-）、陽極（+）、陰暦・太陰暦（月）、陽暦・太陽暦（太陽）

いわゆるネガとポジの関係性が、こうした対をなす言葉にあらわれているのは、みなさんご存じのとおりです。

日が当たるか当たらないかから、イメージがうつり変わるわけですね。とても興味深いです。勉強になります。

＊

さきほど岩陰の話をしました。岩が崇拜されたり、信仰の対象になる場合には、岩の形が大きな役割を果たしているようです。形には両方あります。

両方というのは男女のことです。男性のあそこそっくり形状の大きな岩は見事なものとして尊敬されます。パワーのシンボルという感じです。

女性のあれにもそっくりな奥行きのある岩も崇められます。これも出産や子沢山など豊かさのシンボルとして敬われるみたいですね。奥行きがあるのですから湿り気を帯びていそうです。

どちらもよく分かる気がします。頭で分かるというよりも体感的に分かる感じ。下半身にぬるま湯を掛けられたように、じわっとくるのです。変な譬えをしてごめんなさい。

写真で見るとよく分かります。ヒトとしての太古の遠い記憶が呼びさまされるのかもしれません。手を合わせたくなるのです。

＊

陰部という言い方も興味深いです。男女共通です。隠す場所というイメージでしょうか。「女」と「陰」を組みあわせる言い方もありますね。「陽」と「物」をくっつけると男性のシンボルになります。

女性を陰、男性を陽とする分け方がおこなわれてきたと言えそうです。「君は月、僕は太陽」とか「あなたは太陽、わたしは月」と言う一方で、「君は僕の太陽だ」とも言うフレーズもあります。

英語になりますが、「You are my sunshine.」がタイトルの曲もありますね。「日向・ひなた」という名前が女性に付けられている例も、よく見られます。

陽子さん、月子さん、月と書いて「るな」と読ませる場合もありますが綺麗ですね。

広がりすぎました。話を陰に戻しましょう。

陰と隠でイメージの韻を踏む

陰を使った言いまわしをみてみます。

お陰さま、陰の実力者、陰で支える、陰ながらご成功を祈ります、彼女の人生には陰がある、陰に回る、陰で悪口を言う、事件の陰に女あり、陰で取り引きをする、陰で糸を引く、草葉の陰から見守る

ポジティブにもネガティブにもなりえますが、基本は「隠れて」とか「人目につかない形で」のようです。陰と隠のイメージの韻を感じます。やや無理はありますが、こじつければ、淫に傾いた例や場合も想像できますね。

「陰の実力者」で連想するのは、「影の内閣 (shadow cabinet) ですが、これは英語からの訳語だそうです。野党が陰で「組閣」して牽制するのでしょうか。

影武者も思いだします。陰にいて敵をあざむく場合と、黒幕として陰で首謀する場合の二つの意味があるようです。

陰の隠然たる存在感

ひらがなの「かげ」はなんて頼りなげな字面をしているのでしょうか。そのはかなさは、まさにかげではありませんか。かげろうのように心もとないのです。

一方で漢字の「影、陰、蔭、翳、景」はなんと堂々としていることか。厳めしく偉そうにさえ見えます。

日本語において、漢字は「ない」を「ある」と錯覚させる装置ではないかと言いたくなります。

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまいます。無い無い、無無なんていくら言っても、あるあると暗にほのめかしているのです。

（拙文「【小話】存在と無が、存在と存在に見えるという話」より引用）

＊

個人的な印象ですが、「影、陰、蔭、翳、景」でいちばん陰の薄いのは陰だという気がします。蔭のほうが画数が多いだけ、まだ存在感があります。

「影 15、陰 11、蔭 14、翳 17、景 12」というふうに画数で見ると、やはり陰は負けています。一画違いの景はシンメトリーによるプロポーションがダントツです。立ち姿が綺麗ですね。翳はまさにかげっていませんか？ 影はバランスが取れて美しい。

やっぱり陰は見劣りします。

＊

それでも陰には隠然たる存在感があります。

何か、こう、じめっとしてるし、じととした湿度が感じられるのです。おそらく、陰、隠、淫とイメージの韻を踏んでいるからではないかと踏んでおります。

それが露わになるのは漢字を使った熟語です。

陰獣、陰湿、陰険、陰鬱、陰気、陰膳（かげぜん）、陰謀、陰蔽（隠蔽）、夜陰、陰囊、陰萎、陰惨、陰間（かげま）、陰舞（かげまい）、陰子（かげこ）、陰（いわかげ）、木陰（こかげ）、緑陰、山陰、陰雲、涼陰、藪陰（やぶかげ）、陰生植物、陰陰、陰陰滅滅

こうやって見ていると陰の姿形という意味での陰影には、湿度、不気味さ、曖昧さ、得体の知れなさ、涼所感、低温感、いかがわしさ、卑猥さ、背徳感が漂っています。

いい味を出しているではありませんか。素晴らしいと思います。私は好きです。

＊

なお、上の熟語の最初に挙げた「陰獣」は江戸川乱歩の中編小説のタイトルでもあるのですが、「陰性のけだもの、特にキツネ。」と、ネット上の「精選版日本国語大辞典」では説明されています。

ぞくっとする字面と音の響きのある言葉ですね。江戸川乱歩の『虫』という小説にも使われているので紹介します。私の大好きな箇所です。

彼と彼以外の凡すべての人間とは、まるで別種類の生物である様に思われて仕方がなかった。この世界の人間共の、意地悪の癖に、あつかましくて、忘れっぽい陽気さが、彼には不思議でたまらなかった。彼はこの世に於おいて、全く異国人であった。彼は謂いわば、どうかした拍子ひょうしで、別の世界へ放り出された、たった一匹の、孤独な陰獣いんじゅうでしかなかった。

（青空文庫より引用）

こういう厭人癖のある、エクセントリックを突っ走って突き抜けた人物を描くのが、乱歩はうまいですね。筆がさえます。同傾向の『鏡地獄』もお薦めしたいです。

一樹の陰

影の薄いと思われた陰に光を当ててみましたが、陰は意外と影が濃かったことに気づきます。「影、蔭、翳、景」には感じられない独特の存在感もあります。

とくに淫と通じる陰影は他の「かげ」たちにはないものです。また陰陽という対比が見せる壮大な構図は宇宙観に通じるものがあります。影が薄っぺらくみえるほどです。

*

最後に、陰の出てくる「一樹の陰（蔭）」という言い回しを使った文を引用してみます。

縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍ろぼうに餓死がしたかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云いったものだ。この垣根の穴は今日こんにちに至るまで吾輩が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている。（夏目漱石作『吾輩は猫である』・青空文庫より引用）

新潮文庫版の注解では、次のようになっています。

たまたま同じ木の陰に宿るのも前世の因縁、という意味。

「一樹の陰」自体には隠や淫とのイメージの韻もなく、「木（の）陰」と同様に写生と書いていい純粋な描写の趣があり、故事への言及が暗にあるだけのすっきりした言い回しです。

この一呼吸の短い引用箇所には、この作品の長いスパンが要約および凝縮されていて、見事な点描を感じます。いつもいただく印象なのですが、漱石の自然描写には艶があります。この部分の、垣根、破れ、蔭、穴、（雌猫に会うための）通路という連鎖にも、艶やかな象徴を感じます。性愛（生殖でもあります）の象徴です。

（こう感じるのは、今回陰を見てきたからかもしれません。影が見るものなのに対し、陰は入るものだという気がします。陰は足の裏で踏みしめ、皮膚で感じるものなのでしょう。こうやって陰に光を当てるのは無粋というものです。）

引用文では、風景描写、動き、時の経過、交友関係、人生（猫生）の奥行きが、いわば一筆でさっと描かれています。さらりとつづってありますが、なかなか書けない文章だと思います。

#日本語 # 陰 # 漢字 # 陰陽 # 語感 # 夏目漱石 # 江戸川乱歩

04/06 「そっくり」という、まぼろし

＊

「そっくり」という、まぼろし

星野廉

2022年4月6日 08:44

みなさん、猫を思いうかべてください。犬でもでもいいです。

思いうかべましたか？

今度は、「猫、ねこ、ネコ、neko」と「犬、いぬ、イヌ、inu」という文字をご覧ください。

次に、「ねこ」と「いぬ」を発音してみてください。

＊

「猫、ねこ、ネコ、neko」と「犬、いぬ、イヌ、inu」という文字は、あなたの思いえがいた猫と犬に、それぞれ似ていますか？ 文字は事物に似ていますか？

「ねこ」と「いぬ」という音声は、猫と犬にそれぞれ似ていますか？ 音声は事物に似ていますか？

今回はそういうお話をしたいと思います。

＊

私は文字と音声が事物に似ているとは思いません。むしろ、ぜんぜん似ていないと思います。とはいえ、似ていると言う人がいても驚きません。世の中にはいろいろな人がいます。人それぞれです。

文字と音声は事物に似ていないという前提で話を進めます。

文字と音声は事物にぜんぜん似ていないにもかかわらず、文字と音声を使って人はコミュニケーションをしています。不思議です。不思議すぎて、腰を抜かしそうになります。

*

錯覚なのでしょうか？ 例の条件反射なのでしょうか？ いわゆる「学習の成果」でしょうか？

私たちは文字と音声に騙されているのでしょうか？ まぼろしなののでしょうか？ 何らかの学問的な説明があるのでしょうか？

この不思議を「錯覚」とか「条件反射」とか「学習の成果」と名づけて、手なづけようとしても、不思議さは残ります。「うちら、言葉に騙されてるんだ」と腹を立てて悪態をついたところで、不思議さは解消されません。

「まぼろし」という言葉で思考停止をしても、「神」や「神秘」を持ちだして判断停止をしても、「〇〇説」とか「〇〇現象」みたいに学問的な説明をされて「ちょろいもんだ」「解決済みなの」と思ったところで、不思議さは去りません。

不思議さに気休めは役に立たないのです。素直に不思議さを認めたいというのが、私の生き方です。

*

私は研究者でも探求者でもないのです、勝手に考えてみます。

身のまわりのもの、いまここにあるものを観察して、ああでもないこうでもない、ああだこうだをするのです。それがわくわくして楽しいからです。

話を戻します。

文字と音声は事物にぜんぜん似ていないにもかかわらず、文字と音声を使って人はコミュニケーションをしています。

たぶん、ぜんぜん「似ていないもの」が、「似ている」ものとか「そっくり」なものを喚起する、つまり誘いだすからだという気がします。

文字と音声は、まぼろしを誘いだすという意味です。

*

猫や犬という言葉で私たちが頭に浮かべるものは、猫や犬に「似ている」ものとか「そっくり」なもの、つまり印象なのです。印象ですから、検証はできません。

印象ですから、思いうかべているものは他人に伝えられません。「あれよ」「ああ、あれね」という感じなら伝えられるでしょう。人それぞれが頭の中で「あれ」を勝手に思いうかべるとい意味です。

それが印象です。まぼろしとも言えるでしょう。自分を観察してみると、猫や犬という文字を見て、あるいは音声を聞いたり発音してみても浮かぶ、まぼろし、つまり印象は一定していません。

次々と姿と形を変えます。揺らぎ、ぶれます。ずれもします。

*

パソコンやスマホで「猫」や「犬」を検索するときに、「画像」を検索するといろいろ「猫」や「犬」の画像が出てきますが、あんな感じは、あれほど多様で広範囲ではなく、あれの私家版とか自分版という感じです。

一定していないのです。すっきりもしていません。むしろ曖昧模糊としてとりとめがないのです。まぼろしであり、印象の特徴ではないでしょう。

＊

不思議です。それにしても不思議です。

猫とか犬という言葉、つまり音声や文字で、まぼろしが浮かぶのです。そのまぼろしを各人がうかべながら、コミュニケーションをしているのです。

コミュニケーションには、コミュニケーションの失敗や誤解や錯誤や不全も含めるべきだと思います。それが正確なとらえ方ではないでしょうか。すべてがうまくいくわけがありません。

自分のまわりを観察すると、コミュニケーションというのは、綱渡りであり、努力目標の言葉だどつくづく感じます。私たちはコミュニケーションをするだけでなく、コミュニケーションし損なってもいるのです。

「ちょっと、あれはそれじゃないじゃない！」「え？ それってあれじゃなかったの？」「ちがうわよ、これはあれじゃないってっば」「ごめんごめん、これがあれだと思ってた」

まわりを見ていると、こんなことがしょっちゅう起きています。みなさんのまわりはどうですか？

＊

ところで、最近のはやり言葉はこれです。

「それはフェイクだ」、「フェイクニュース！」、「それはねつ造だ」、「現在は何でもどれだけでもねつ造できる時代です」

ますますコミュニケーションではなく、コミュニケーション不全が蔓延しています。

「言葉」と、「言葉」によって喚起される「まぼろし」との間の機能不全がピークに達し

ているようです。

*

話を戻します。

ぜんぜん「似ていないもの」が、「似ている」ものとか「そっくり」なものを喚起する、つまり誘いだす——。

ぜんぜん「似ていないもの」とは音声と文字という物です。震え（振動）をともなう空気、形をともなうインクの染みや画素の集まりという物です。つまり具象です。

同時に、音声も文字も意味やイメージという抽象をともなってもいます。その意味で、音声と文字は具象と抽象の両面を兼ねそなえていると言えるでしょう。

一方の「似ている」ものとか「そっくり」なものとは、印象でありイメージです。つまり、まぼろしであり、抽象です。

要するに、具象と抽象を兼ねそなえたものが、抽象であるまぼろしを誘いだしていると言えます。

不思議でたまりません。不思議すぎて、腰を抜かしても罰は当たらないのではないかと思うほどです。

言葉でまとめてみたものの、その不思議さはいっこうに去りません。

#日本語 # 文字 # 音声 # 錯覚 # 印象# コミュニケーション

04/06 見える言葉、見えない言葉

＊

見える言葉、見えない言葉

星野廉

2022年4月6日 13:35

目次

見えない言葉

イメージ、印象、記憶、像、響き、感触

変換、交感、照応、共感覚

見えない言葉

表情や身振りという視覚言語、話し言葉、書き言葉。このうちで、見えないものは、話し言葉、つまり音声です。

不思議です。

上で挙げたどの言葉も、誰もが生まれたときに既にあって、私たちはそれを見様見真似で覚えていきます。真似て学ぶわけです。

音声だけが見えないのですね。ふだんは気づかないし、考えもしませんが、やっぱり不思議です。

＊

覚える順番からすると、表情、身振り、音声、文字という感じがします。順番なんて言いましたが、それぞれを真似て学ぶ過程は、一生続いていると思います。

どの言葉も「はい、これは卒業しました。おめでとうございます」というものではありません。だいいち、人は忘れる生き物です。覚えても忘れます。これが続くのです。

覚えていられる容量は決まっているようです。そのため、学び直しが、しょっちゅうあります。

*

「ねこ」と発音したり、「ねこ」と言われて耳で聞く。「猫、ねこ、ネコ、neko」という文字を見る、あるいは読む。

音声は見えませんが、見える文字と比べて、大きな違いはあるとは思えません。

少しは違う気がしますが、頭の中に浮かぶイメージ、つまり印象は似たようなものです。

これも不思議です。

イメージ、印象、記憶、像、響き、感触

いまイメージとか印象と言いましたが、これは記憶でもあるし像（映像）でもあるし音の響きとか感触でもあります。

猫とか犬と聞いたり、その文字を見たりすると、思い出が浮かびます。その思い出は、映像つまり視覚的なイメージでもあるし、鳴き声やうなり声つまり聴覚的なイメージとか響きだったりするし、撫でたり引っかけたときの触覚の記憶だったりするのです。

少なくとも私はそうです。

私は、においと味を思いだせと言われて思いだすことはできませんが、あるにおいを嗅いだとき、ある味を感じたときに、あれと同じだと思いだすことはあります。

記憶には二通りあるということでしょうか。興味深いです。というか不思議でなりません。

においや味を自由に思いだすことができる人がいても驚きません。不思議はどんなにあっても不思議ではないという意味です。

変換、交感、照応、共感覚

言葉によるイメージの喚起力にはすごいものがあります。

上で述べたように、猫という発音をして、あるいは発音を耳にして、猫を撫でたときの感触が思いだされるときがありますが、それをいま改めて考えると不思議です。

音声が触覚に変換されたような気がするからでしょうが、こういうことは猫という文字を見ているとも起きます。猫の表情を真似てみても、猫の仕草を真似てみても起きます。

猫や犬といっしょにいるときに、その表情や仕草や鳴き声を真似て、コミュニケーションを試みることはありませんか？ 私はそういうのが大好きです。

犬や猫を相手にしているときには、書き言葉は完全に忘れます。その存在すら頭にはありません。話し言葉は別です。相手に話しかけている自分がいますが、通じているかどうかは分かりません。むしろ通じていないほうが多い気がします。

犬や猫の表情や仕草や鳴き声を真似るのは意外と難しいものです。真似たところで、これもまた通じていると思えないほうが多いです。ひとり相撲をしていると感じます。でも、めげずに頑張ります。愛おしいからです。

猫や犬にとっての「似ている」と、ヒトの「似ている」は違う気がします。大きく異なるようです。つながっていないのです。

ヒトである自分が「似ている」という言葉で、無理につなげようとしているだけ。そんな思いに駆られます。言葉は、ヒト以外の生き物にはまず通じません。言葉の喚起するイメージでの共通点すら感じられないのです。

*

話はずれますが、視覚、聴覚、表情や身振りという身体の動き、触覚、嗅覚、場合によっては味覚は、「似ている」という感覚でつながり、それがイメージの記憶という形で溶けあっているように思えます。

もちろん、人においての話です。話は変わりました。

フランスの詩人シャルル・ボードレールの詩に「交感」とか「万物照応」と訳されているものがあります。原題は Correspondances なんですけど、簡単に言うと「五感が響き合う」ような感覚について歌っているみたいです。

(拙文「言葉は交響曲【言葉は魔法】」より引用)

「五感が響き合う」ような感覚——ですか……。

変換、交感、照応、共感覚といった言葉で、「似ている」とか「そっくり」という不思議な感じを分け、名づけ、手なづけようとするのがむなしく思えます。不思議さの前には、どんな小賢しげな言葉も無力だからです。

言葉で説明した気になったところで、ちょろいどころか、感覚という身体の「思い」はすくい取れない気がします。言葉はあくまでも言葉なのです。

#言葉 #日本語 #文字 #音声 #表情 #身振り #触覚 #味覚 #視覚 #聴覚 #嗅覚
#犬 #猫

04/07 相手を人として呼ぶ

＊

相手を人として呼ぶ

星野廉

2022年4月7日 08:00

目次

ひとり相撲

ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき

大きなもの

小さなもの

森羅万象を名づける、手なづける、飼いならす

ひとり相撲

まず、以下に拙文「見える言葉、見えない言葉」から引用します。

＊

猫や犬といっしょにいるときに、その表情や仕草や鳴き声を真似て、コミュニケーションを試みることがありませんか？ 私はそういうのが大好きです。

犬や猫を相手にしているときには、書き言葉は完全に忘れます。その存在すら頭にはありません。話し言葉は別です。相手に話しかけている自分がいますが、通じているかどうかは分かりません。むしろ通じていないほうが多い気がします。

犬や猫の表情や仕草や鳴き声を真似るのは意外と難しいものです。真似たところで、これもまた通じていると思えないほうが多いです。ひとり相撲をしていると感じます。でも、めげずに頑張ります。愛おしいからです。

猫や犬にとっての「似ている」と、ヒトの「似ている」は違う気がします。大きく異なるようです。つながっていないのです。

ヒトである自分が「似ている」という言葉で、無理につなげようとしているだけ。そんな思いに駆られます。言葉は、ヒト以外の生き物にはまず通じません。言葉の喚起するイメージでの共通点すら感じられないのです。

＊

引用は以上です。

身も蓋もないことを書いて、ごめんなさい。でも、本心なのです。

今回は、ヒトが、ヒト以外の生き物と無生物を相手にするときを使う言葉について考えてみます。

ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき

人はつねに意味とイメージとともに生きていますが、意味とイメージを意識することはありません。人にとって当り前の存在だからでしょう。意味とイメージは空気みたいなものだという言い方もできると思います。

ところが、ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき、意味とイメージが立ちあられます。

正確にいうと、ヒト以外の生き物や無生物を相手にするとき、ヒトは意味とイメージについて考えないではられないのです。

意味とイメージが通じない存在を相手にしているからです。ヒトにとっての絶対的な他者を感じるとも言えるでしょう。ヒトにとっての絶対的な他者とは、意味とイメージを共有できない相手です。

話しかけたり、表情や身振りで何かを訴えたとしても、それが通じているかは確認できません。ましてや検証など不可能です。相手の反応を見て、勝手に想像したり決めつけるしか方法はないのです。

たとえば、「この子と私は心が通じている」と信じるしかないという意味です。

＊

「この子」とはペットであったり、人形であったり、物であったりしますが、「この子」という言い方は人によって異なるでしょう。「この人」や「あなた・おまえ・きみ」の場合も考えられます。

いずれにせよ、話しかけるのであれば、人と見なしている部分が多かれ少なかれあるはずです。擬人とも言いますね。

人はありとあらゆる目に見えるものや目に見えないものを言葉にしています。名づけている、つまり名前を付けているわけですが、「品詞」という誰かが決めた分け方を無視すれば、あらゆる言葉が名前と言えます。

名前を付けた時点で人は、その対象を擬人していると私は思っています。ひとさまのことは知りません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれないかもしれません。

(拙文「意味が立ちあらわれるとき」より引用)

＊

名前を付けるという行為は、その対象を呼んでいるのです。「ねえ、〇〇さん（ちゃん・くん）」という感じでしょうか。呼び捨てとも考えられますけど、話しかけるのですから、呼び捨てはここでは考えません。

名づけるのは、相手を手なずけて、できれば飼いならそうという魂胆があつてすることだと思われるからです。名づけるまでは下手に出ているのです。ところが名づけたとたんに、人は相手を見くだします。

ちょろいものだ、と。後に復讐されることもあるのは、みなさんご存じのとおりです。相手は、ぜんぜんちょろくはないのです。

大きなもの

海は大きいですね。しかも、地球上を被っています。つながって被っているのですから、とてつもなく大きいです。

その海を「海、うみ、ウミ、umi」と二音節、漢字で一文字、ひらがなとカタカタで二文字、ローマ字で三文字で名づけ、呼んでいることに本気で驚いても罰は当たらないと思います。

いまのは半分冗談ですが、半分本気で言いました。日本語でも英語もフランス語でも、どんな言語でもいいですけど、あれだけ大きなものをたぶん短い言葉で呼んでいるはずですよ。

人間にとって基本的な言葉ほど短い傾向があるからです。難しい話ではなく、辞書を見ると分かります。読むのではなく見るのです。短い言葉ほどたくさんの語義や例文があります。長い言葉ほど、語義や説明は短いのです。

辞書を目を細めてばらばらめくると一目瞭然ですので、ぜひお試してください。電子辞書ではなく、紙の辞書です。

＊

海というあれだけ大きなものを、ひとまとめにして海という小さな言葉で名づけているわけですが、海はいろいろな部分からなっています。

さまざまな状態の波、さまざまな状態の海水、さまざまな状態の潮の流れ、さまざまな状態の風、さまざまな地形の海底……。

私は生まれてから海を見た経験が十回以下なので、海について実感できることはきわめて少ないのですが、海のさまざまな部分には名前がついていて、それぞれのさまざまな状態にもそれを表す名前や言い方があるようです。

山も川も湖も平野も何でもそうにちがいません。

＊

海という言葉、つまり名前が抽象的なものであることが分かります。言葉では現実がすくい取れないからです。言葉は現実に追いつけないからです。

数でも重さでも大きさでも深さでも、圧倒的に言葉は足りないし欠けているからでしょう。言葉は軽く、すっきりしていますが、すかすかということです。中身がないから当然です。言葉は空っぽの器なのです。

その器に何かが入っていると、一杯だと考えるのは人だけです。これは、ギャグなのです。ヒトにしか通じないギャグです。

小さなもの

小さなものはどうでしょう。たとえば、米粒、砂粒、ダニ、プランクトン、ごま粒……。

詳しくないので、言葉に詰まっていますが、小さなものにも部分があり、その小さい状態はたまたまそうなのであって、数日前、数か月前、数年前、数十年前には、異なっ

ていたにちがいありません。

そもそも存在していなかった、つまり原子や分子レベルで別のものであった可能性が大きいです。

小さなものも馬鹿にできないという意味です。万物は流転するという言葉を思い出します。

名前とは、たまたまのもの、一時的な状態を指していることが分かります。小さなもの、言葉ではすくい取れません。

森羅万象を名づける、手なずける、飼いならす

人はありとあらゆるものを部分に分けて名づけたり、ある一時的な状態だけをとらえて名前をつけているようです。

勝手にやっているだけです。ひとり相撲なのです。ヒトにしか通じないすべりまくりのギャグをやっているとも言えるでしょう。ヒトは地球では孤独な存在ではないでしょうか。

なんで名づけるのでしょうか。やっぱり手なずけて、飼いならすためだと思えませんが。平たく言えば、ちょろいものだと思いたいのです。それとも寂しいのでしょうか。

何をちょろいものだと思いたいのかと言えば、森羅万象であり、世界であり、ひいては宇宙でしょう。ヒト以外のすべてをひっくるめて、言葉にしたいのです。

＊

言葉にすれば、辞書や事典や図書館やパソコンのハードディスク内に収めることができます。

ちよろいものだ。

ちよろいものだと思うためには、自分つまりヒトと似ていなければなりません。自分の土俵に呼ばないと、人は相撲が取れないのです。

*

これは持論なのですが、人には人つまり自分に似たものしか見えない気がしてなりません。森羅万象を目にしたとき、聞いたとき、嗅いだとき、触れたとき、口にして舌で味わったとき、人はそれが「何か」であってはならないのです。

その「何か」に出会ったとき、人はとりあえず、ある部分だけを見て、ある一時的な状態だけに注目して、とっさに名指すのではないのでしょうか。

名指すとは「何か」に呼びかけることなのです。それが擬人の第一歩だという気がします。

名を呼んだとたんに、「何か」が「何か」ではなくなるのです。これほどほっとすることは、人にはないだろうと思います。

人は言葉の世界にいるのではないのでしょうか。人だけが、とすべきなのかもしれません。言葉を手にすることで、人はこの星でひとりっぼっちになったのかもしれません。

うみやまと あいてをなづけ ひとひとり

#日本語 # 意味 # イメージ # 名前 # 森羅万象 # 擬人 # 表情 # 身振り# ペット # 犬 # 猫

04/07 人の作るものは整然として美しい

＊

人の作るものは整然として美しい

星野廉

2022年4月7日 11:31

目次

すぐに消える言葉、すぐには消えない言葉

保存するために枠に収める

人の作る整然とした美しいもの

人の作るものには枠と境がある

人が作るものには意味と筋書きがある

逸脱

言葉は外にあるときにしか確認できない

言葉に気づく

すぐに消える言葉、すぐには消えない言葉

視覚言語である表情と身振りと、話し言葉としての音声は、放たれた瞬間に、つまり発せられたとたんに消えます。現れる、消える、現れる、消える。これがずっと続くわけです。これが「見る」であり「聞く」なのです。

よく考えると不思議なことが起こっています。

時間に拘束された表現だと言えるでしょう。送り手も受け手も時間に拘束されます。時間という枠の中で表現されるという言い方もできそうです。始まりと終りが枠です。

書き言葉つまり文字は書かれてもすぐには消えません。残り保存することさえ可能です。時間には制限されず（後でまとめて、はしょって読めるからです）、むしろ空間という枠の中で表現されます。紙面や画面という枠に収めなければなりません。

改めて考えると、これまた不思議なことが起こっています。

紙切れや巻物やノートには枠があります。あらゆる印刷物にも枠があります。そこに収めるという意味です。

なんでなのでしょう？

不思議です。言葉を観察していると、じつに不思議なことが起こっているのに気づきます。考えれば考えるほど不思議であり、不気味にも感じられます。不気味というのは、私のことです。

保存するために枠に収める

音声であれば録音、表情や身振りであれば録画という手段で残し保存はできます。

げんに代表的な表情と身振りをを用いる言語である手話は、フィルムやビデオで保存されています。たとえば、米国にある聴覚障害者のための大学である、ギャローデット大学の図書館には、アメリカ手話を録画した膨大な資料が保存されているそうです。

録音と録画は、枠に収めることです。音声であれば、始まりと終わりという枠のある発話を、アナログのテープであれ、デジタル化された音声であれ、始まりと終りのある枠に収めて録音します。

表情や身振りであれば、始まりと終わりという枠のある「発話（動き）」を、フィルムであれ、デジタル化された映像であれ、始まりと終わりだけでなく、画面であるフレームというのある枠に収めて録画します。

表情、身振り、音声、文字のうちで、文字が容易に消えず、容易に保存できることは驚くべきことに思えます。考えれば考えるほど不思議でもあります。

また、表情、身振り、音声、そして文字を残し保存するためには、枠が必要であり、その枠に収めなければ保存できないことは興味深いです。これも考えれば考えるほど不思議です。

人の作る整然とした美しいもの

外に出て、海、山、川、草、木に目をやると意外と長方形や四角がないのに気づきます。長方形が見えるなあと思うと、たいてい人がつくったものなのです。そして、そうしたのものには角があるのです。当たり前ですね。

真っ暗な山中の道路で人家を見ると四角い形をした光を目にしてほっとすることがあります。窓が四角いのです。その窓が人の目に見えて、その目を中心にして人の顔が浮かびあがってくるような気持ちになることもあります。そこには表情があります。

四角や長方形は人の印であり、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。一方、人体はどうかというと、あまり四角い部分が目につきません。長方形も感じません。角（かく・かど）も直線もないのです。曲線、いびつな形、丸みを帯びた角が目につきます。

人は自分に似たものや自分の中にあるものに似たものを無意識につくっているのではないか。つくっているうちに自分のつくったものに無意識に自分を似せ、それに似てくる。そう考えることがあるのですが、長方形や四角については、どうやらそうでもなさそうに思えてきました。

眠れない夜に考えるのにふさわしい、荒唐無稽な話だと思います。

＊

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自

体がまねなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

＊

もちろん、音楽をふくめての話です。

楽曲にはたいてい始まりと終わりという枠があり、聞くためには時間に拘束されます。楽曲を手に入れるためには、たいていは長方形の枠のある機械や端末がないと難しそうです。

(めっちゃくちゃ言ってごめんなさい。)

楽曲が四角いという話は聞いたことがありませんが、川のせせらぎや野鳥のさえずりに比べると整然としています。楽曲には計算され体系化された美を感じます。

(必死でこじつけています。)

音なのに楽譜みたいに絵っぽいのです。人の作ったものである音楽は、絵のように美しい。音も旋律も整然として美しいのです。

(ようやく「整然とした美しさ」にたどり着きました。)

CDやレコードは丸いですけど——(よけいなことを話しはじめました)——、CDやレコードを収める容器、つまり枠はたいてい正方形か長方形です。要するに不自然なのです。CDも、その中身の音楽もです。

(悪いけど、そろそろ……。)

パッケージは自然にはない形をしているし、中身は自然にはない音をしているし、整然とした美しさがあります。

(駄目押しをしないと駄目な性格なのです。悪い癖です。)

※この章は、拙文「【夜話】直線で切りとり分ける」から引用し若干の加筆をしたものです。

人の作るものには枠と境がある

人の作るものを影として考えてみましょう。人は森羅万象に影を見ているからです。そのものとして見ることはできません。必ず知覚器官や言葉というフィルターを通して見ます。

映画を見ているようなものです。人にとって世界とは影からなり影が乱れ舞う映画なのです。

人の見ている映画に映る影は、自然界にある影とは違い、枠があります。この枠を意味とか物語とか論理とかイメージの比喻だと考えていただいていっこうにかまいません。

*

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも枠がありますが、枠とは境でもあります。

枠も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、枠と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然な
のです。

＊

自然界には枠と境はないにもかかわらず、人は自然界に枠と境を作ることで、言葉の
世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に枠と境を作ることは、世界の言葉化
でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と
世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褃合わせと筋を通すこと
に血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても
事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレト
リックです。

＊

自然には枠も境もありませんが、人が「ある」と想定しているのは言葉を持ったから、
そしてたぶん文字を持ったからでしょう。

話し言葉や表情や身振りと異なり、文字が残るだけにとどまらず、いまや無限の複製
と拡散が可能になっていることは、人が作るものが残るだけでなく、大量生産され、自
然に帰らないことと軌を一にしていると思われまます。

人は無意識に世界と自然界を文字化しているのかもしれませんが。もちろん、人自身も
文字化しています。これも、たとえ気づいたとしても、すぐに忘れます。きっとこれは人
の知恵、人知なのだと思います。

＊

枠と境をなぞる、文字はなぞるものです。なぜ人はなぞるのでしょうか。なぞです。

自然にはなぞるものも、なぞるべきものもありません。自然には謎はないのです。なぞは人がいだき、なぞるものだとしか考えられません。

人は孤独なのです。自然界で孤立しています。

人が作るものには意味と筋書きがある

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

(拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用)

＊

人の作るものは残りますが、自然に帰りにくいという特徴があります。人はそれに気づき、気になり始めたようですが、手遅れにならないことを祈るしかありません。

人の作ったものは、人がこの星からいなくなっても残るでしょう。自然に帰りにくいからです。生身の人は消えて自然界に帰るのに、人の作ったものが残りつづけるとすれば、皮肉です。

文字も残るでしょう。読む者がいないのに、です。

逸脱

ヒト以外の生き物たちは、ひたすら子孫を殖やし残して存続してきたようです。それだけが目的で生きているかのようです。

ヒトも殖やしますが、増やしもします。殖やすと増やすは違います。後者は逸脱です。

それに加えて、人は物を作り、増やし、捨てるという形でそのまま残すか、保存するという形で残してきました。物を残すのも逸脱です。

人が作った物が容易に自然に帰らないのは、人の作った物に枠と境があるからかもしれません。

これは逸脱です。

意味と筋書き、枠と境は、自然からの逸脱です。人の作る物には、意味と筋書きと枠と境があります。これも逸脱です。それを残すとなれば、さらなる逸脱です。自然に帰らないものを残すとなれば——、もう何も言いたくありません。

(誰に残すのかだけが気になります。もちろん、あの後にです。残してもらっても困るものってありますよね。遺される者たち——絶対他者たち——のことも考えなければなりません。思い遣り。最後の擬人でのご奉公です。立つ鳥跡を濁さず。)

逸脱とは過剰のことです。不要であり、やり過ぎだという意味です。

言葉は外にあるときにしか確認できない

誰もが生まれたときに、既にあるもの。人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、つねに人にとって「外」であるもの。

何のことでしょう？

表情、身振り、話し言葉（音声）、書き言葉（文字）、影（人が作った事や物）——のことです。広い意味での言葉のことです。

言葉は、どれもが、外にいるときにしか確認できないという特徴を備えています。確

認するのは人です。しかも、中にいる人、「中の人」なのです。 中的人是生身の人ではありません。

中的人が、外にある言葉を見ている。これが最大のジレンマかもしれません。このジレンマのために、後戻りできないからです。

(人は、言葉を持ったために分裂した、文字を持ったことで分裂がさらに加速している。そうも言えます。しかも、後戻りできないほど、加速化している気がします。)

＊

生身的人是、死にます。死ねば自然に帰ります。

言葉を使っているのは中的人です。文字を使っているのも中的人です。物や事を作っているのも中的人です。

外的人是、ヒト以外の生き物たちと同様に、子孫を殖やし残して存続してきました。いまもそうしています。

これからもそうできるのかは、中的人しだいという気がします。

言葉に気づく

言葉は謎です。謎だらけで訳が分かりません。これまで私は言葉について記事を書いてきましたが、それは言葉がどういうものか分からないからです。

私は分からないことについてしか記事を書くことはないのですが、分からないままに記事を書きます。それでいて記事を書きおえたときには、依然として分からないままであることに気づくのがほとんどです。

それでまた次の記事を書くことになります。

＊

私は分からないときには、分かろうとしたり知ろうとしたり悟ろうとはしません。気づこうと努めます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。

目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

＊

言葉はいまここにあります。いつもいてくれます。おそらく死に際の間近までいてくれる気がします。言葉は、物心のつきはじめたころから、いっしょにいてくれる友なのです。

誰々が言葉について何と言ったか。何々という本や作品や文章に、言葉について何と書かれているか。そういうことには、私は興味がありません。

自分のまわりにある言葉を観察する、自分のまわりにいる人がどう言葉と向きあっているかを観察する。このほうが私にははるかに大切です。

＊

言葉を知ろうとする、言葉を分かろうとするのではなく、いまここにある言葉のありように気づきたいのです。

具体的には、どうしたらいいのでしょうか。

繰り返して恐縮ですが、自分が言葉にどう向きあっているのかをひたすら観察し、自分のまわりにいる人たちが言葉にどう向きあっているのかをひたすら観察する。

観察すると、不思議なことが起こっているのに気づきます。当たり前だと思っていたことが、不思議だと気づきます。

*

誰もが生まれたときに、既にあるもの。人の外にあって、人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、つねに人にとって「外」であるもの。

言葉は外にあるときにしか確認できません。外にある言葉を見る。

見ると言うより、言葉に気づく。

これほど難しいことはない気がします。難しいのは外にあるからだと諦めるわけにはいきません。

*

目に見えないものは目の前にある。宙や彼方にではなく、目の前にある。私はそう思います。

#日本語 # 意味 # 逸脱 # 観察 # 気づく # 音楽 # 製品

04/11 うつる人、人をうつす

＊

うつる人、人をうつす

星野廉

2022年4月11日 09:54

目次

うつるんです

作文

人がうつる、人をうつす

うつるんです

うつる、写る、映る、移る、遷る、伝染る、流行る、孫引る、引用る、模倣る、写本る、写経る、印刷る、翻訳る、映画る、写真る、複製る、放送る、網路る、偽造る、剽窃る、盗作る、広告る、宣伝る、布教る、革命る——。こうしたものは、ぜんぶ、うつるんです。ですから、ぜんぶ「うつる」と読んでください。よくご覧ください。人類の歴史そのものでもあります。

(拙文「【夜話】ぜんぶ「うつる」と読んでください」より引用)

＊

「うつる・うつす」について考えてみようと思います。

話が広がりすぎる予感がするので、基本的な「うつる・うつす」から見てみましょう。

複数の辞書を見ながら、辞書の語義として挙げられている「うつる・うつす」を使って作文を試みることにします。

作文

彼が東京から名古屋に移って二年が過ぎた。(移住、移動、異動)

テーブルを日の当たらない奥へと移した。

都を移す計画がある。(遷都)

病人を故郷へ移すという案が出た。(移送)

情が移って面接のさいに差し障りが出た。

花に見入っていた彼女は視線を移した。

注意を別のものに移すにはどうしたらいいか。

柔軟剤の匂いがシャツから上着にまで移って困る。(移り香)

その案を実行に移すのはかなり難しい。

猫のあくびがうつった。

その疫病は空気うつるという話だ。(感染、伝染)

炎がつぎつぎと周辺の木々にうつった。(延焼)

時が移り、人も変わった。(経過)

時を移さず実行に移せ。

壁にあなたの姿が映っている。(人影)

鏡に姿を映したところで見えないものは見えない。

水面に映る建物の影が黒く広がった染みのように見える。

最近テレビがよく映らない。

スクリーンいっぱい人の顔が映った。(映画、テレビ)

フィルムの画像が映写機を用いてスクリーンの上に映しだされたものが映画だ。(映写)

光景が目映るようです。(目に映ずる)

あなたの心に映っている思いを見ることができればいいのに。

CMにはその時期の世相が映しだされる。(反映)

ガラス越しに写る川面がきらきら輝いている。(透けて見える)

その写真の隅っこに写っているのが、弟です。(写真)

大教室では板書をノートに写すのに双眼鏡が必要だった。

その暗い時代の空気を写した小説だと言われている。

写真を写す。写真を撮す。(撮影)

(神仏・霊魂などが) 乗り移る。(取り憑く)

「映れば変わる」(源氏物語より)

人がうつる、人をうつす

例文を見ているとわくわくするだけでなくぞくぞくします。「うつる・うつす」には独特のわくわく感を覚えるのです。

「うつる・うつす」がこちらにうつってくるような気配を感じます。

人が移る、人が映る、人が写る
人を移す、人を映す、人を写す、人を撮す

「人」と組みあわせたシンプルなフレーズですが、これだけでも十分にぞくぞくします。

人は移動する生き物です。これだけ移動する生き物は、この星にいないでしょう。渡り鳥や魚の中には一生の間にかかなりの距離を移動するものがいそうですが、人の場合にはその目的が「生」から逸脱しているのです。

その逸脱した移動が、文明であり文化だと言えそうです。

＊

現在、何百万という人たちが移動し、移送されています。難民や避難民としてです。これもとほうもない、「生」からの逸脱です。戦争は「生」からかけ離れた非日常に人びとを放りこみます（その非日常は、日常としてさまざまな形でその人たちの一生のあいだ続くにちがいありません）。

たった一人のために、これだけたくさんの人たちが意に反して、移り、移されているのです。

あの人の目には何が映っているのでしょうか？ 心には何が映っているのでしょうか。

＊

そうそう、アーネスト・ヘミングウェイを忘れるわけにはいきません。ヘミングウェイの主要な作品群は祖国アメリカを離れて書かれたものです。ヘミングウェイが長期滞在していたフランスのパリにおけるガートルード・スタインと彼女を取り巻く人物たちにも注目したいところです。

ヘミングウェイとガートルード・スタインの国籍はアメリカ合衆国ですが、ヨーロッパおよび英国となると、地続きであったり、海峡で隔たっているだけですから、祖国を離れて活動する作家や音楽家や芸術家の例は枚挙にいとまがないと言うべきでしょうね。

そういえば、今集中的に読んでいるパトリシア・ハイスミスも祖国を離れて創作していた作家だと気がつきました。英仏両語での著作もあるサミュエル・ベケットもそうです。多言語に通じたナボコフ。ルーマニア語だけでなくフランス語で書いていたシオラン。同じくルーマニア出身のエリアーデもいたなあ。英語でも書いたウィトゲンシュタインも、そうなのか。そうだ、フランス語で書いたアゴタ・クリストフがいた。

話がいつの間にか非母語で書く作家へと越境してきました。人は移動し越境する生き物なのだとつくづく感じます。このテーマは奥が深そうで、收拾がつかなくなってきたようなので、この辺でストップします。

(拙文「もう一つの言葉」より引用)

上の引用で挙げた人名は作家や学者ですが、その基本に「書く」があります。「書く」とは「うつす・うつる」と重なる部分が大きいです。

「うつる」で連想する英語は pass です。作家、詩人、学者、芸術家、音楽家で移動しつづけた人は多いですね。pass した人たちです。そうした人たちは、いまもたくさんいます。

passenger として pass しながら、移動した場所の事物と風景の passage を眺め、それを言葉や、絵・彫刻などの視覚作品や、旋律にうつす人たちです。

pass しながら目にした passage という影に、自らの内なる passage を重ねて、言葉や作品という影を創ってきたにちがいありません。

pass は、まさに、うつる、移る、写る、映る、遷る、だと思えます。

＊

上述の人たち以前の passport のない、とほうもなく長い時代から、人は pass つづけていたのですね。作家や芸術家に限りません。交易、狩猟、漁、戦（いくさ）……。

もちろん、私たちの祖先のことです。やはり、ヒトは pass する生き物だと言えそうです。

そして、最後は pass away する運命にあります。最近、人というよりも、ヒトの pass away がオブセッションになり頭から去って——pass——くれません。夢に出てくるのです。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。私の文章からこじつけを除くと何も残らないのです。

あ、「こじつける」も「うつる・うつす」と重なりますね——。

考えれば考えるほど、めちゃくちゃ重なるじゃないですか。ぞくぞくします。

＊

この間までは「かげ・影・陰・蔭・翳・景」を見てきましたが、そのときから「うつる・うつす」の影を感じていました。

で、いま、「うつる・うつす」にうつってきたというわけです。

「うつる・うつす」は、「枠・境」とも重なりますね。

とりあえず、しばらく、うつり、うつしてみたいと思います。

いま気づきましたが、「とりあえず」と「しばらく」は、pass や「うつる」と親しい言葉のようです。時間的な枠と境がある、つまり過渡的だという意味です。

イメージが膨らみます。こうした符合を大切にしたいです。

#日本語 # 映画 # 写真 # 芸術 # 描写 # 作家

04/11 なぞる、なする、さする、なでる

＊

なぞる、なする、さする、なでる

星野廉

2022年4月11日 15:18

目次

ガラスになぞる

写、射、斜、車、シャ、射る、入る

Sにとって極端な場合には相手は物（比喻）でもいい

なぞる、なする、さする、なでる

ガラスになぞる

透明ではなく透明感のある文体として、川端康成『雪国』の冒頭近くの文章を挙げてみます。特に取り上げたい例は、主人公の島村が、曇った汽車の窓ガラスに指で線を引く場面なのですが、ちなみに川端の作品は青空文庫に入っていません。日本国内での著作権保護期間がまだ満了になっていないからです。ここで引用するのも遠慮し、以下に私の要約を挙げます。

——汽車の中で主人公の島村が左手の人差し指をいろいろ動かしたり、その指にまつわる記憶にふけったり、指を鼻につけてその匂いを嗅いでみるという、かなりエロティックな描写（猥褻な感じさえする）の後に、向かい側の座席の女（娘）が窓ガラス（手で押し上げて開ける窓）に映る。窓ガラスが鏡になるのだ。その窓ガラスの向こうに夕闇の中の景色が流れていく。窓という鏡に映った娘。窓の向こうに流れる風景。娘の顔に、野山のともし火がともる。映画の二重写しのよう。

ガラスが透明であることとガラスが鏡でもあることをこれほどまでに、美しく象徴的に描いた文章はほかにない気がします。エロチックで濃密な筆致の直後に、こうした透明感のある描写を持つところが、川端の凄さです。

対比の妙というか、この書き方は錯覚を利用した一種のトリックなのです。文章がテーマ（ガラス、鏡、こちら側と向こう側、ここにあるものところこないもの）を模していて、しかもきわめて複雑であり、私流にいうと、これは「書かれている言葉が書かれている内容を擬態している文章」にほかなりません。

言葉が言葉に擬態する。

言葉が言葉を真似る。

シニフィアンがシニフィエに擬態する。

シニフィアンがシニフィエを真似る。

言葉は擬態。

文体が文章の内容を模倣する。

文章が内容を模倣する。

文体が文章の内容に擬態する。

文章が内容に擬態する。

言葉は魔法。

言葉は魔術。

擬態とは錯覚を利用する行為にほかなりません。生き物においても、文章においても、言葉においても。

川端の『雪国』におけるあの場面の描写——。淀んだ性愛行為と、ガラスと光によって織りなされる透明感のある美という、かけ離れたものをわざと隣り合わせにするのだから、これはまさに錯覚を利用した魔術的な文章の手法であると言えます。両者が別々に書かれていたら、その描写の効果は半減したにちがいません。対比の妙。対比の効果。

(拙文「透明な文章【言葉は魔法】」より引用)

写、射、斜、車、シャ、射る、入る

上で触れた川端康成の『雪国』における描写ですが、文字と音声とイメージの韻を感じます。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。

もちろん個人的な印象にすぎないのですが、説明させてください。

以下は、新潮文庫版『雪国』の、8ページの6行目から12ページの7行目を対象にしたメモです。

*

- ・人差し指 8 - 6、指 8 - 7・8 - 9・8 - 11
- ・その指で窓ガラスに線を引くと 8 - 11
- ・向側の座席の女が写ったのだった 8 - 13
- ・それで窓ガラスが鏡になる。8 - 14
- ・指で拭くまでその鏡はなかった 8 - 15 - 16
- ・掌てのひらでガラスをこすった。9 - 2
- ・娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので 9 - 8
- ・なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて 9 - 9
- ・夢のからくりを見ているような思いだった 10 - 5 - 6
- ・鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのよう
に動くのだった。10 - 7 - 8
- ・窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので 10 - 16 - 11 - 1
- ・この鏡の映像は窓の外のともし火は窓の外のともし火を消す強さはなかった。11 -
7 - 8
- ・ともし火も映像を消しはしなかった。11 - 8
- ・窓ガラスに写る自分の姿は見えず 11 - 14 - 15
- ・島村が葉子を長い間盗見しながら 11 - 16
- ・夕景色の鏡の非現実な力 11 - 16 - 12 - 1
- ・もう鏡はただ闇であった。12 - 4
- ・鏡の魅力も失われてしまった。12 - 5
- ・葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども 12 - 5
- ・鏡の曇って来るのを拭おうとしなかった。・鏡の曇って来るのを拭おうとしな
かった。

この作品では、窓にうつるは「映る」ではなく「写る」と表記されています。私が興味を惹かれるのは、「シャ」とも読める「写」が使われていることに尽きます。

『雪国』（1935年～47年に雑誌に分掲）と『山の音』（1954年刊行）と『みづうみ（みづうみ）』（1954年に掲載）だけを比べてみます。

電車の窓にふと赤い花がうつって、曼珠沙華まんじゅしゃげだった。

（新潮文庫『山の音』p.295より引用・太文字は引用者）

女の姿は窓ガラスにうつっていた。

（新潮文庫『みづうみ』p.23より引用・太文字は引用者）

みづうみを見ながら歩いていると、水にうつる二人の姿は永遠に離れないでどこまでも行くように思われた。

（新潮文庫『みづうみ』p.25より引用・太文字は引用者）

以上は印象的なシーンでたまたま覚えていたので、探して見つけたのですが、ひらがなで表記されています。その意味は分かりません。作者の意図など、どうでもいいのです。作品は「読まれるために」ただ「ある」だけですから。

一つ言うなら「うつる・うつす」には「写る・写す」にあるような、サディスティックな「さす」感がない気がします。やさしいのです。

＊

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。さきほど、こう書きましたが、この車窓の場面を読むたびに、私は映画のカメラの舐めるような連続した眼差しではなく——これはむしろ谷崎潤一郎の眼差しではないでしょうか——、写真機のシャッターをカシャッカシャッとつぎつぎと押しながら写した、差しこむような視線を感じます。

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。サディスティックなのです。

川端の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

大切なことなので繰り返します。

この場面での「島村の」視線は、ただ見るのでもなく、ながめているのでもなく、「さす、指す、差す、刺す、射す、挿す」のです。しゃしゃしゃと、音を立てて。

さらに言うなら、人差し指（親指でも小指でもありませんよ）で、「さし」、なぞり、なでるのです。しかも容赦なく一方的に有無を言わず。

そうです、とっても暴力的で（視線はその本質が暴力なのです、知らずに見られる暴力もあります）嫌らしいのです。

この場面では、「長い間盗見」されていることに注目しましょう。

川端の作品においては、この「さす」サディズムが、窓ガラスや水面や鏡に向かうことは救いであり、たぶん川端の企み（技巧）なのでしょう。意図ではなく。無意識に巧むということは作家ではよくあることです。それが才能だとも言えます。

むしろ、作品的の構造からして、なるべくしてそうなっているのです（その意味で、ポルノでもホラーでもないのです）。レトリックだとも言えるでしょう。

さもなければ、以下に書くような危うい事態になりかねないからです。

Sにとって極端な場合には相手は物（比喻）でもいい

*Mの世界：

基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯。要するに、プレイ。

Mはどんな人？：

教育者（自分が気持ち良くなるためのストーリーと方法を相手に教える教師）。しつこい、根気強い。かまってちゃん。自己中だけど、快感を得るためなら少々のことは我慢する。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。主導権は自分が握る。要するに、めんどくさい。最も重要なポイントは、Mはじつは「ご主人」であること。

Mの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康体であることが望まれる。Mのお願いや注文（実は命令と指示）に根気よく従う良き生徒。要するに、Mの奴隷。必然的にMの協力者や「共犯者」に仕立てあげられてしまう。なお、Mの相手をMがするという状況は珍しくない。

Mの相手に最も向かないのは？：

S。

*

* Sの世界：

基本は暴力。しかも一方向（一方的）。要するに、攻撃。

Sはどんな人？：

自己中で相手に有無を言わせない。忍耐強くない。快感を得るためのストーリーはなく、計画性は希薄で衝動的。ある意味、単純。主導権という観念すらない。とは言え、もちろん、知性や知力とは必ずしも関係があるわけではない。

Sの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康である必要はない。相手が人間であることは言うまでもないが、極端な場合には相手は物（比喩）でもいい（たとえば、相手は比喩的な意味での切断された四肢であったり、比喩的な意味での死体であったりしてもいい）。なお、被害者や犠牲者になる可能性が高い。したがって、Sの行為は犯罪との親和性が高いと言えよう。

Sの相手に最も向かないのは？ :

M。

*

以上の説明から、「SとM」とか「SM」と一般に呼ばれている言葉やそれにまつわるイメージや思い込みの粗雑さがお分かりになったと思います。なお、以上の図式が図式である以上粗雑で杜撰なイメージと思い込みであることは言うまでもありません。正しい視点などでは毛頭ないという意味です。そもそもメタな視座などあり得ないのです。

*

ところで、みなさんもお感じになるでしょうが、谷崎潤一郎はMですね。健康かつ元気でかまってちゃんな女性に振り回されるのを喜んでいます。たとえば『痴人の愛』や『鍵』や『瘋癲老人日記』を読むとよく分かります。

一方、川端康成はSだという気がします。かなり自己中で強引で有無を言わせないところがありますよね（『みづうみ（みづうみ）』ではストーカーまでします）。しかも、『禽獣』のように相手が「か弱すぎ」たり（相手が人間とは限りません）、『片腕』のように相手は切断された腕と手であって、いわば物ですが、これは幻想であり暗喩または換喩と解すべきでしょう、あるいは『眠れる美女』のように眠っている（ある意味死体や物と同じです）場合もあるので、怖い、怖すぎます。

江戸川乱歩はたぶんかなり偏ったMでしょう。Mというだけでは済まされないという意味です。乱歩は変化球をばんばん投げましたよね。奇想とも言います。これでもかこれでもかという具合に。あれはすごいです。Mというより、M寄りのH（辞書に載っているHという意味です）というべきかもしれません。

私がすごいと思って何度も読み返したのは、短編では『人間椅子』と『鏡地獄』と『芋虫』、長編では何と言っても『孤島の鬼』（とりわけ秀ちゃんと吉ちゃんが出てくる部分の妖しさと悲しさ）です。

乱歩の作品は、谷崎と同様にその主要なものが青空文庫に入っているのです、まずはネッ

トで目を通してから本を読むのもいいかもしれません。「いやだ、こんなの無理みたい」とお感じになれば、バイバイということです。

＊

なお、谷崎も川端も乱歩も、MだのSだのHだのも、その作品の傾向がですよ。ご本人については知りませんので、誤解なきようお願いいたします。作品だけを前にして、その作品を書いた人について語れるわけがありません。騙るなら別ですけど。

つまり、「谷崎潤一郎」も「川端康成」も「江戸川乱歩」も、「言葉」であり「記号」なのです。それでしかありえないのです。あなたも私もそうだと言えます。note という場にいる限りにおいては、生身の人間ではないわけです。私はあなたに触れることはできません。でも、あなたの言葉になら「触れる」ことができます。それ以上でもそれ以下でもありません。

それ以上とそれ以下にかかわるのが、「読む」であり批評であり文学研究なのです。この文章もそうです。「言葉」と「記号」と出会うのは稀な出来事であって、それはもはや事件というべきなのでしょう。言葉はそこにあるのになかなか読めないし、出会えません（つい書かれていないものを読んでしまうのです、この文章も例外ではありません）。

そうなのです。ここでは、あなたも私も言葉ですね。嘘じゃありません。こ・と・ば。いま、私たちはめちゃくちゃリアルな話をしています。

(拙文【小話】「谷崎」も「川端」も「乱歩」も、「言葉」であり「記号」なのです)より引用)

※以上の怪しげなSとMをめぐる図式は、ジル・ドゥルーズ著『マゾッホとサド』蓮實重彦訳を参考に作ったものです。

なぞる、なする、さする、なでる

「うつる・うつす」や「なぞる」は言葉です。音声であり文字でもあります。同時に、仕

草や身振りでもあります。表情で表すこともできるかもしれません。

音声、文字、表情、身振りは、音や視覚的な像として確認できます。外にあるからです。外にある形でしか確認できないのです。

一方で、それらが喚起する、つまり呼びさますイメージや意味は、各人の中にあり、確認できません。言葉として説明すれば、他人に通じるかもしれませんし、通じないかもしれません。

「写す・映す・移す」を身振りで示してみるとどうなるでしょう？ その動作は人それぞれかもしれないし、共通点があるかもしれません。手話であれば、共通点があるはずです。手話は日本語と同じく言語だからです。

ただし、日本で使われている手話と、たとえば米国の手話とでは「写す・映す・移す」が異なる可能性は高い気がします。残念ながら私は知りません。

＊

「写す」（トレースするとか文字を書写する場合です）と「なぞる」は動作として演じてみると——手話の話ではありません——、近い気がします。

「なぞる」を複数の辞書で調べると、「なする・なぞる・なすって書く・たどってかく・そっくりまねる・かきうつす」という言葉が出てきます。

「なぞる」を動作や仕草でなぞる。「なぞる」を、他の言葉で置き換えて、つまり移り変わらせてみる。

つまり、すこしずつずれていくわけです。ずれがあるのですから、「同じ」とか「同一」とは言えないでしょう。むしろ、「似ている」とか「そっくり」を追求していく作業に見えます。

「似ている」を基準とするのですから、要するに印象なのです。

＊

ここでの「似ている」は視覚的なものです。見た印象が「似ている」という話です。

もう一つの「似ている」があるような気がします。

うつす、なぞる、なする、さする、こする、ぬる、なでる。

なんだか嫌らしくなってきましたが、それなんです。

音としての言葉と、文字としての言葉に加えて、ぞくっとくるものを感じませんか？

皮膚に来るような感じとか、触覚的なイメージと言いましようか、頭ではなく身体にくるような、からだに訴えてくるような感覚のことです。

文章を読んで感じるむずむず感については、ロラン・バルトが、*Le Plaisir du texte* (1973) で似たようなことを書いていた記憶があります。

＊

言葉では、こうした感覚がとても大切であり、誰もが日常生活で感じているはずであるのに、ないがしろにされている気がしてなりません（文学作品の鑑賞でも、この感覚が重要な役割を果たすのに、です）。

ないがしろにされているとすれば、なぜなのでしょう？

たぶん、恥ずかしいからではないでしょうか。人には隠しておきたい感覚があるような気がします。あまり口で言ったり、文字で書いたりするものではないのでしょうか。

それは外では確認できない「何か」なのです。各人の中であって、他人に通じないかもしれない「何か」なのです。きわめて個人的なもの、あなただけのものなのです。

＊

言葉の語義や意味ではありませんから、もちろん、辞書に書いてはありません。公認されていないという意味です。

でも、言葉にとって大切な要素なのです。ひょっとすると語義よりも大きな影響力を持って人に働きかけると考えられます。

ニュアンスとか、語感とか、語のイメージと名づけたところで、手なずけられるものではありません。解消もされません。

あえて、わざわざ、ひとさまにお見せしたり聞かせたりするものではないからです。

こっそりとひとりだけでにやにやしたり、にたにたしたりするたぐいのことなのかもしれないですね。

そのことに敏感だったのが、川端康成であり、谷崎潤一郎であり、江戸川乱歩であった。そんな気がしてなりません。

#日本語 # 読書 # 小説 # 川端康成 # 谷崎潤一郎 # 江戸川乱歩 # 描写# 作家 # 擬態
触覚 # イメージ # レトリック # ジル・ドゥルーズ# ロラン・バルト # 蓮實重彦

04/12 綾にからまれる、綾をなでる

＊

綾にからまれる、綾をなでる

星野廉

2022年4月12日 08:49

「うつる、移る、写る、映る、遷る」、「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」。

こうやって眺めてみると、ずいぶんいろんなものが「うつる・うつす」に詰まっているなあと感じます。とくに、「移る・移す」と、「写る、映る・写す、映す」の間に落差を感じます。

えっ、こんなのがいっしょにされているわけ？ そんな意外な気分になります。それぞれの言葉の例文を見ると、なるほどと納得するものもあります。

たとえば、「匂いが移る」というのは「影が映る」とか「写真に写る」と近い気がします。投影される感じですが、あるものの特性が、別のものに投影される感じ。

いいですね。うっとりするイメージです。

＊

- ・移：移動、転移
- ・写：写真、転写、複写、複製、描写、模写
- ・映：映画、映写、反映、反射、幻灯、影絵

移、写、映という漢字のイメージで連想する言葉を並べてみました。漢字や漢語は造語に優れているという話を思い出します。今ひとつ分からない話なのですが、なるほどと思う部分もあります。

文字列を見ていると、うっとりします。こういう連鎖は快いものです。

漢語は知的です。頭が熱くなり、知的興奮を覚えます。

＊

・移す・移る：「テーブルを奥へと移した」、「病人を故郷へ移す」、「ここに移って三年になる」、「シャツの匂いが上着に移る」

・写す・写る：「ガラス越しに写る景色」、「板書をノートに写す」、「写真の隅っこに妹が写っている」、「暗い時代の雰囲気をよく写している小説」

・映す・映る：「壁に影（姿）が映る」、「鏡に姿を映す」、「光景が目映る」、「CMにその時代の世相が映しだされる」

動詞としての使われ方で分けてみました。これもなかなか興味深くてわくわくします。文やフレーズの情景やイメージが頭に浮かびます。視覚的なイメージです。

上の漢字や漢語で見たイメージとは少し違う気がします。漢字のほうは、頭で理解している感じで、和語の動詞の例文では絵で見ているとか状況で見ている感じです。

和語はすっと入り、漢語は入るのに少し時間がかかります。

例文を作る時には、同時に動詞の活用をしますが、その活用という運動が心地よいのです。動きを感じます。心が動いたり揺れたりします。

和語はやさしいのです。からだにやさしく、すっと入ってきます。

＊

漢字には漢字の言葉の綾があり、和語には和語の綾があります。それぞれの綾がからまって、いまの日本語があるのでしょう。

綾というのは、模様であり、形であり、姿です。動きであり、ありようでもあります。

言葉にはそうした綾があります。綾を無視して、意味とか論理とか、はたまた書いた人の意図という絵空事に走る気にはなれません。

言葉は人の外にあります。人の中から出て外にあるのですから、寂しそうです。その綾と向きあうことで、寂しげな言葉に接したいと私は思います（もちろん、そんなときの言葉は、すでに私の中に入っているのでしょう）。

言葉の綾に寄り添い、綾をなぞり、さすり、撫でていきたいのです。

#日本語 # うつる # 綾 # 漢字 # 和語 # 大和言葉

04/12 決めるとき、決まるときの決め手

＊

決めるとき、決まるときの決め手

星野廉

2022年4月12日 14:18

目次

異、違、移

音（おん）の韻、イメージの韻

曖昧模糊とした「論理（的）」という言葉

意思決定という名の疑似麗句

やっぱり

異、違、移

ところで、上の中条省平先生の文章からの引用を読み、お気づきになった箇所はありませんでしたか？

「あれっ？」という感じで違和感を覚えませんでしたか？　いまのはヒントです。

そうです。「異和感」という表記が使われています。「違和感」ではなく。

この表記に対して私は異議はありません。異和感のほうが違和感より、違和をいだかせないとすら感じますが——特に上の異物じみたカタカナの使用には異和感のほうがぴったりの気もします——、個人的には違和感と書いています。人それぞれです。私は夏目漱石の宛て字というか感字というか表記が大好きであり、また表記については割と流動的なので、異和感を使う可能性を否定できません。

ちなみに、村上春樹も「異和感」派みたいです。ファンの方ならご存じかもしれませんが、私が目にしたのは『1973年のピンボール』（講談社文庫）のp.12で、そこには三つ続けて出てきます。これは医療の世界で使われている「異和」なのかもしれません。

あと、古井由吉の『槿』にも「異和感」という語が出てきます。講談社文芸文庫版ですと p.10 です。吉田修一もそうです。『東京湾景』新潮社文庫の p.13 をご覧ください。

私も「異和感」派になろうかな。

(拙文「透明な文章【言葉は魔法】」より引用)

*

いま私は迷っています。異和感に鞍替えするか、違和感を使いつづけるか。

迷うほどのことではない気もしますが、いちど気になると、なかなか抜けだせない性格なのです。

異、違、移。

移和感なんて言葉が頭に浮かびました。語呂がいいし、字面もまあまあだから、自分語だけど、これにしようかな。

音（おん）の韻、イメージの韻

陰に光を当てることで、その影が薄まるどころか、濃くなりそうな気配を感じるのです。「隠然たる」という言い回しがありますが、陰には隠然たる存在感があると言えます。それは淫靡でもあります。

陰獣、陰湿、陰険、陰画、隠微、隠喩、淫蕩、淫乱。

後で触れることになるでしょうが、このように陰と隠と淫は音読みをすると韻を踏んでいるだけでなく、イメージにおいても韻を踏んでいる気がしてなりません。

ぞくぞくするのです。

(拙文「陰に光を当てる」より引用)

＊

異、違、移。

異：ことなる・異なる。事成る、事馴る。異和、相異、異動、変異、異界、異物。

違：ちがう・違う、交う・違える・交える。違い、互違い、間違い。違和、相違、違反、違約、違憲。

移：うつる・うつす、移る・移す、移り変わる。移動、転移、変移、移転。

こうやって見ていると、異、違、移は、音読みしたときに同音で韻を踏んでいるだけでなく、イメージでも韻を踏んでいる感じがします。感じですから、印象と同じく個人的なものです。つまり、検証ができないということです。

音の韻は検証できても、イメージの韻は検証できません。これは、音は人の外にあって確認でき、イメージは人の中にあって確認できないからでしょう。

＊

異、違、移がイメージの韻を踏んでいるというのは、「ことなる」、「ちがう」、「うつる」には共通して、二つの（あるいは複数の）要素の間に「距離がある」という意味です。和語を使うと、「隔たりがある」とも言えます。

そんなイメージから、移和感もありかな、自分で作った語で愛着もあるし、「いわかん」と読むし、こっちにしようかな、くらいの乗りで、移和感に気持ちが移りつつあるわけです。

どうでしょう？ この決定に「いわかん」がありますか？

曖昧模糊とした「論理（的）」という言葉

上で私が述べた決定の理由について、意思決定が論理的ではないと感じた方がいても私は驚きません。私はこれまでに「論理的はない」と言われたことが数えきれないほどあるからです。

「論理」とか「論理的」という言葉の使い方をネットで検索してみると、その用法が一定していない気がします。つまり、その語義や意味やイメージがまちまちであるという意味です。

辞書や用語事典で調べても建前が書いてあるだけで、役に立ちません。

なにしろ、人は「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

「作る」が先にあって、「決める」が後に来るわけですから、「決める」をめぐる争いが起きるのは当然でしょう。じっさい、そうなっていますよね。

現在は、「真実」「事実」「侵略」「平和」といったきわめて重要な言葉をめぐって熾烈な争いが起きているのは、みなさんご存じのとおりです。

人は「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物——この事実が露呈するのは、戦争や大災害といった非常時であるのは悲しい皮肉です。そんな余裕はないのに、言葉と文字にひれ伏して、必死で辻褃合わせをしているではありませんか。

しかも、個人的な辻褃合わせと筋を通すのに血道を上げているのです。たった一人が。ああ言ってしまった以上、ああ言ったことが文字になって拡散してしまった以上……なんて具合に。

ところで、あの人はちゃんと自分の意思で決めているのでしょうか。辻褃合わせというのは、自分の意思で決めることなのでしょうか。

「決める」のではなく、人の外にある言葉によって「決まっている」のではないでしょうね。後で触れますが、「決める」ではなく、「決まる」になっているという意味です。もしそうであれば、人の領域を超えているのです。「決まる」は、もはや人が決めているのではない状態なのですから。

これを考えると、恐ろしくなります。悪寒が来そうです。私事ですが、あまりにも悲しく恐ろしくて、このところなかなか眠れない日が続いています。

＊

検索してその使われ方を調べると、「論理(的)」だけでなく、「客観(的)」、「普遍(的)」、「真理」、「真実」という言葉についても、未だに決まっていなことが分かります。

辞書は建前であり、一つの意見のようですから、当てになりません。

「論理(的)」に関して言えば、各人が「論理(的)っぽさ」「論理(的)らしさ」「論理(的)感」「論理(的)というイメージ」を、それぞれ勝手にいただきながら、ああでもないこうでもない、ああだこうだをやっているのが現状のようです。

ある意味平和です。一本化が苦手な私はほっとします。

検索してその用法を見ると、どれもが「論理(的)」という、人の外にある言葉についての印象だと分かります。「論理(的)」なんてものはないという意味です。印象は各人の中にあるものですから、確認も検証もできません。

「論理(的)」とは曖昧模糊としたものだ、と言えそうです。「っぽい」「らしさ」「感」「イメージ」ばかりがあって、空回りしているのです。

意思決定という名の疑似麗句

半分冗談(半分は本気です)はさておき——こんなことを大真面目で本気に議論できる技量は私にはありません、役不足です——、どうやって物事が決められるのか、または決まるのかを考えてみましょう。

厳めしいというかもっともらしい言葉を使うと、どうやって意思決定がなされるか、です。

その前に、以下のグーグルでの検索結果をご覧ください。

- ・“違和感”：約 66,600,000 件 (0.42 秒)
- ・“異和感”：約 515,000 件 (0.56 秒)
- ・“移和感”：約 3 件 (0.43 秒)

ちゃんと、" "でくくって検索をしたヒット数ですが、圧倒的に違和感の使用が多いです。異和感については、違和感とどちらが適切かという議論が多いです。

やっぱり、違和感がいいかなあと思っています。

あみだくじや、鉛筆倒しで決めるのも一つの手ですが、ネット検索も有効な決め手ではないかと、ふと思ったので検索してみたのですが、こうやって数字を見てビビり、違和感に傾くというだらしのない自分の性格が露呈された結果となりました。

ここで過去の記事を引用させていただきます。

*

「AはBである」とか「AだからBである」が決まったと私が感じる時、その決め手は何なのかと私は考えます。根拠というより決め手です。根拠は建前っぽいのです。

嘘っぽいという意味です。何かを隠している気がします。都合の悪いこと、言えば体裁が悪いことを、隠しているのでしょう。

人には恥という感情があります。プライドに近い感情です。

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

句読点で区別はしていますが、便宜的なものです。重複する部分もある気がします。

なお、ここでは研究をしているわけではありません。できるわけがありません。お遊びですので無いものねだりはお勘弁願います。

(拙文「「決める・決まる」の決め手」より引用)

＊

意思決定というもっともらしい美辞麗句、いや疑似麗句の代わりに、「決める・決められる・決まる」で考えてみます。

持論——自論と表記したいと前から思っているのを思いだしました——ですが、人には「決める」ことなどできず、「決まる」があるだけではないのでしょうか。自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

何かが決まったとして、本当に誰かが決めたのかが特定できないという意味です。「決める・決めた」は人の中であって、「決まる・決まった」は人の外にある気がするからです。どう決まったかは検証できないのではないのでしょうか。

つまり、ある人が何かを「決めた」とき、その人が鉛筆を倒して決めたとして、確認

も検証もできないように私には思えます。

平たく言えば、「私は論理的な手続きを経た上で、こう決めたのです」なんてご立派なことを誰かが言ったとしても、「そう言ったという言葉」だけは確認できますが、その意思決定の過程など確認も、ましてや検証もできないくらいの意味です。

ハードルというか敷居が高すぎたら、ごめんなさい。

*

半分冗談はさておき、鉛筆倒し以外に考えられる決定要因は、上の引用文で列挙したものが想定されますが、そのうちのどれが要因なのかを特定するのはきわめて難しい気がします。

やっぱり

話が広がりすぎましたので、話を戻します。

やっぱり違和感にします。違和感をこれまでどおり使います。

なんでそう決めたのか？ 分かりません。疲れてきたからかもしれません。買物に行く時間が近づいてきて、早くけりをつけたいからだという気もします。鉛筆を倒した結果でないことは確かです。

*

以上、とりとめのない話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

文字どおりに、または本気で取らないでくださいね。なにしろ、私はぜんぜん論理的な人間ではありません。これだけは確かなようです。一目瞭然というやつです。

この記事を書きながらも、なんていい加減なやつなんだと思う瞬間が何度もありました。

では、これからスーパーにお豆腐と納豆ともやしを買いに行ってまいります。

#日本語 # 決める # 決まる # 違和感 # 異和感# 古井由吉 # 村上春樹 # 吉田修一 # 中
条省平

04/13 言葉と向きあう

＊

言葉と向きあう

星野廉

2022年4月13日 09:18

目次

日本語の言葉のイメージ

言葉のイメージ

「わかる」のイメージ

ローカルな言葉

普遍性、共通性、一方的な文化的影響の結果

母語の駄洒落を他言語で説明する

言語活動、駄洒落、掛け詞、比喩の根底には、こじつけがある

言葉と向きあう

日本語の言葉のイメージ

「うつる、移る、写る、映る、遷る」、「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」。

こうやって眺めてみると、ずいぶんいろんなものが「うつる・うつす」に詰まっているなあと感じます。とくに、「移る・移す」と、「写る、映る・写す、映す」の間に落差を感じます。

(拙文「綾にからまれる、綾をなでる」より引用)

こうしたイメージは日本語での話になります。「うつる・うつす」の普遍性を目指しているわけではありません。

「うつる・うつす」の普遍性を目指す——そもそも、これは矛盾です。日本語である「うつる・うつす」を対象とした時点でローカルなものを目指すことになるからです。

「愛とは何なのか?」「真理とは何ぞや?」「海とは何か?」も同様に、言葉を使う以上、その言語の枠の中での「話」、つまり言葉を使って作った話という意味での「フィクション」になります。お話なのです。

ある程度の検証が可能な数学や科学や技術という話——私に言わせると、これも言葉を使った物語であり「フィクション」です、言葉は言葉であり事物ではないからに他なりません——とは、話が違うのです。

言葉のイメージ

「うつる、移る、写る、映る、遷る」「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」という日本語の言葉と向きあうとき、その言葉の音（おん）や文字という、人の外にあってある程度確認と検証可能な部分に注目するのは、わくわくする体験です。

なぜわくわくするのかと言えば、そうした人の外にある要素が、人の中にイメージを呼びさますからでしょう。

この場合のイメージとは、辞書に載っている語義（これはすべての人が知識として持っているわけではありません）の一部や、音と文字によって喚起される視覚的なイメージ（映像）の断片や、聴覚的なイメージ（音や声や振動）の断片や、触覚、嗅覚、味覚といった知覚的なイメージのことです。

こうしたイメージは各人が勝手にいただくものですから、人それぞれでしょう。確認や検証は、言葉による証言や絵に描くという形でしかありえません。つまり心もとないわけです。検証不能と言えるでしょう。もちろん、ハードルを低くすれば検証可能となるでしょうけど。

「わかる」のイメージ

以前に「わかる」という日本語の言葉を使って、ああでもないこうでもない、ああだ

こうだをやっていたことがあります。

そのときには、「わかる」に相当する、あるいは類似の英単語の語義や語源を見たり、日本手話やアメリカ手話における、類似の単語の身振りを調べたりしました。

「わかる」のイメージを探ろうとしていたわけですが、「うつる・うつす」でも同様のことをやれば、楽しいだろうと思います。とはいうものの、いまではそんな元気もありません。だいいち体力がついてきません。

いずれにせよ、こうした日本語以外の言語の類似表現を見る場合には、間違っても普遍性などという世迷い言の誘惑に乗らない慎重さが大切だと思います。

抽象という切り捨てをすればするほど、言葉の実相からは離れていくという意味です。絵空事になります。

ローカルな言葉

言葉はあくまでもローカルな（局所的な）ものなのです。ローカルな言葉を使う以上、普遍はありません。「世界史」があるローカルな（空間的にも時間的にも）視点に立ったものでしかありえないのと事情は同じです。

※「世界史」とは努力目標なのかもしれません。

また、普遍や真実を目指すためには、過去の人たちの証言（残っている資料やいわゆる古典だけでは絶対的に足りません）も必要ですから、タイムマシンが発明されるまで待たなければなりません。

超ローカルな視点である個人レベルでの言葉のイメージとたわむれることが、もっとも現実的な方法だと思います。

普遍性、共通性、一方的な文化的影響の結果

私にとって普遍性はとても重い言葉です。

たとえば、二国間あるいは複数の文化圏や地域レベルでの共通性を、普遍性と呼ぶのに躊躇します。

また日本のある芸術作品が（あるいは欧米のある芸術作品が）欧米において（あるいは日本において）評価された場合も、その共通性や評価の高さを理由に普遍性を語るのにも疑問を覚えます。

日本が欧米の影響をほとんど一方的に受けてきたという歴史的な背景があるからです。日本は欧米の植民地にはなりませんでしたが、アジア、アフリカ、中東、南北アメリカには、かつて植民地だった国や地域がたくさんありますね。

そうした地域の文化が欧米と似ている、あるいは共通しているのは、文化的侵略の結果であり（本来の文化は抹殺されたのです、抹殺された言語も数えきれないほど多くあります）、一方的な影響の結果であり、普遍とは言えないと思います。

以上の理由から、普遍性という言葉を使うさいにはハードルを高くしています。

ご理解いただければうれしいです。

母語の駄洒落を他言語で説明する

母語である日本語の駄洒落を、他言語を母語とする人に説明するさいの苦勞を想像してみてください。

私はかつて学生時代に、米国人とフランス人と中国人に、日本語の数語の単語の意味と語源、漢字の成り立ち（解字みたいなものです）を説明したことがありました。

ものすごく大変でした。私の力不足もあるのですが、私も相手もぐったりしまし

た。漢字の成り立ちでは、フランス人が大笑いをしました（解字を冗談だと思ったようです）。米国人は笑いをこらえていました。中国人は初耳だと言いました。

そのとき、私は日本語の駄洒落を説明している気持ちになり、はっとしました。あらゆる言葉の用法とありようは、その言語における「ギャグ」ではないかと思ったのです。だから、通じないのではないかと、と。

ローカルでしかありえない言語のローカルな現象を、やはりローカルな他言語を母語とする人に伝えるのは至難の業です。機会があるようでしたら、ぜひ試してみてください。体感するのがいちばんです。

言語活動、駄洒落、掛け詞、比喩の根底には、こじつけがある

よく考えれば無理はないのです。

ねこという発音と猫は似ていますか？ 猫という文字と猫は似ていますか？ catと猫は似ていますか？ 似ても似つかぬもの同士を結びつける行為が言語の根っこにあります。

似てもいない、事物と音声と文字をつなぐ行為をこじつけと呼ばないで、何と呼べばいいのでしょうか？

必然はないのです。たまたまそうなっているだけです。言語学を持ちだすようなたいそうな話ではありません。単純明快な話なのです。

だから、別の言語のギャグは説明してもなかなか通じないのです。こじつけが通じたら、そのほうがよほど不思議です。

奇跡と言っていいでしょう。不思議すぎて超越者の存在を感じてしまいます。

*

似ても似つかぬもの同士を結びつけるというのは、駄洒落や掛け詞や比喩の根っこにあるものです。

凧と蛸と豚臍は似ていますか？ 猿と去るは似ていますか？ 川と皮は似ていますか？ どれも同音なんです。たまたまそうになっているだけです。

「それは「きて」じゃなくて、カイトって読むの。たこのことよ」「どのたこ？」「……」

……。

猿が逃げた。去る者は追わず。

なんちゃって。

「川にカワウソの皮が流れて行く！」「うそーっ！ かわいそう！」

なんちゃって。

大変失礼しました。

いまの萎えるほどくだらない駄洒落を英語に直せますか？

言葉と向きあう

言葉と向きあう。多くの人にとっては母語と向きあうことが日常的に体験できる言葉との付き合いだと思います。

その付き合いでは、ローカルな部分、つまり抽象ではなく、具体的に音や文字に接して、そこから呼びさまされるイメージや記憶と徹底的に付き合うことが、いちばん現実的な言葉との触れあいではないか。そんなふうに私は感じています。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 母語 # イメージ # 駄洒落 # 掛け詞# 比喩

04/13 鏡に移る

＊

鏡に移る

星野廉

2022年4月13日 14:37

目次

「移る・移す」、「写る、映る・写す、映す」

記憶をたどる

写す、なぞる

ふたり、二人、二人の自分

「移る・移す」、「写る、映る・写す、映す」

「うつる、移る、写る、映る、遷る」、「うつす、移す、写す、映す、撮す、遷す」。

こうやって眺めてみると、ずいぶんいろんなものが「うつる・うつす」に詰まっているなあと感心します。とくに、「移る・移す」と、「写る、映る・写す、映す」の間に落差を感じます。

(拙文「綾にからまれる、綾をなでる」より引用)

＊

いまでも、上で書いた「落差」を感じます。

どうしてなのでしょう。不思議だけでなく、わくわくもするので、考えてみます。

＊ 「移る・移す」：本体、移動

* 「写る・写す」：像、写真、転写、模写、複写、複製、コピー

* 「映る・映す」：像、影、鏡、映画、映写、反映、反射

本体が動いて移る、つまり移動するか、本体の像が写ったり映るのか。落差を感じるのは、この違いがあるからのような気がします。

そうだとすれば、かなり違いますよね。あるものがそのまま移動するのと、その像や姿形が転写されたり、映しだされるのとは根本的に異なるように思えてなりません。

それを「うつる・うつす」でひっくるめてあるのですから、不思議です。何かの間違いではないかと思うほどで、いろいろ想像してしまいます。

想像するといっても、根拠が薄いというか無いのですから空想とか妄想なのかもしれません。

記憶をたどる

でまかせを言うしかなさそうです。

昔の人は、「移る・移す」も「写る、映る・写す、映す」も似たようなものだとか、同じだと考えていたのかもしれませんが。

初めて水面に映った自分の姿を見たときの人は、さぞかしびっくりしたでしょうね。初めて鏡みたいなものを覗きこんだときも、です。

こういうときには、自分の記憶をたどるしかありません。よく覚えていないのですが、鏡はこどものころによく見ていました。不思議でした。ぞくぞくもしました。

*

見てはいけないものを見ているような変な気分になったこともあります。小学校に入

る直前に、母が毛筆で書いてくれた名札を鏡で見たときにはぶったまげで声を上げたことを覚えています。左右が反対になるのをそのとき初めて気づいたのです。

雨の後の水たまりに映った空を見るのが不思議で好きでした。青い空や空で動く雲を、おしっこを漏らしそうな気持ちで眺めていた記憶がよみがえります。

「映る・映す」は、私の中では身体のとくに下半身にくるぞくぞくとかわくわくなのです。なぜなのかは分かりません。あまり追求したくない気がします。

あえて言うなら、自分が二人いるからかもしれません。ちなみに、母子家庭で育った私はひとりっ子でした。友だちは多くありませんでした。

変な話になって、ごめんなさい。

写す、なぞる

「写す」は自分の中では「なぞる」です。

いちばん遠い記憶としての、「写す」は「撮す」ではありません。私の幼いころには写真は撮るものではなく、見るものでした。

その意味では写真と鏡はそんなに違いません。

いや、そうでもないかもしれません。鏡に向かうのは個人的な体験であり、秘密に近いプライベートな体験であるのに対し、写真は誰かつまり他人が撮ったもの、写したものであることが、異なる気がします。

この違いは大きいです。少なくとも私にはとても大きいです。

いまでも写真を撮ることは、ほとんどありません。私には縁遠い行為なのです。

*

で、幼いころの私が何をなぞったのかというと、絵であり、文字です。私のいちばん遠い記憶では、「絵は絵を見てなぞった」であり、「文字は文字を見てなぞった」なのです。

真似たということですが、真似るというよりも、なぞるのであり、なぞるのであり、撫でるのです。何だかこじつけっぼいですね。嘘っぼいですね。

文字をなぞるといっても、たしか小学校高学年で始まった書道とも違う気がします。

書道ではぞくぞくはあまり感じなくなっていました。退屈なだけでした。

そう言えば私には絵心もありません。興味があるのは言葉による描写くらいでしょうか。あと写生文とか。

残念ですが、いまの私は「写る・写す」にはぞくぞくをあまり感じないようです。

ふたり、二人、二人の自分

気になるのは、「映る・映す」です。

いまはどうかと言えば、鏡を見ることはめったにありません。お化粧をする習慣がありませんし、朝シェーバーを使い、顔を洗った後にちょっと覗きこむくらいです。

＊

「あえて言うなら、自分が二人いるからかもしれません。」

上でこう書きましたが、もう少し追求してみます。

幼いころの記憶を呼びさましてみます。

自分が二人いる。自分一人だけで、もう一人の自分を見ることができる。会うことができる。二人っきりになれる。ぜったいに自分を裏切らないもう一人の自分に会える。

そんな気がします。言葉にすると、嘘っぽいのですが、あえて言葉で言えば、そんな感じだった気がします。

＊

さらに嘘っぽい話になりそうですが、鏡に映った自分の姿や、鏡を覗きこんで自分の姿に見入る自分を思うとき、「移る・移す」がなんとなく分かったような気分になります。

「移る・移す」と「映る・映す」が近いものを感じられて、両者の落差が消えるのです。

さらに言うと、鏡の中の自分は映っているというよりも移っているのです。反映というよりも移動を感じるのです。

＊

嘘っぽいですね。言葉の綾、つまり言葉の世界の論理と文法に染まって、言いたい放題になっている自分を感じます。

言葉の綾にとらわれて、言葉の喚起するイメージ（像や絵）がすくい取れなくなっています。

レトリックに走っています。

ひょっとすると「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」であることに、ビビって、うろたえているのかもしれませんが。とても気になることは確かです。よく考えると怖くないですか？

この辺で言葉から、いったん離れたほうがよさそうです。避難します。

では、失礼します。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 鏡 # 写真

04/14 鏡に移る【引用の織物】

＊

鏡に移る【引用の織物】

星野廉

2022年4月14日 09:38

さらに嘘っぽい話になりそうですが、鏡に映った自分の姿や、鏡を覗きこんで自分の姿に見入る自分を思うとき、「移る・移す」がなんとなく分かったような気分になります。

「移る・移す」と「映る・映す」に近いものを感じられて、両者の落差が消えるのです。

さらに言うと、鏡の中の自分は映っているというよりも移っているのです。反映というよりも移動を感じるのです。

(拙文「鏡に移る」より引用)

＊

「鏡に映る」というよりも「鏡に移る」という気がしてきました。過去の記事で「鏡」が出てくるものを読みかえしてみたいと思います。

お付き合いいただければ、うれしいです。

目次

一人でいるべき場所

トイレ同盟

プライベートな場所

言葉は交響曲

そっくりという、まぼろし＊
 S、M、そしてM寄りのH
 捨てられた名前たち
 動画を視聴しながらとりとめなく考える
 目まいのする読書

一人でいるべき場所

人間には一人であるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。一人でいるのがいちばん楽、一人でいる時がいちばん幸せ。家や学校や社会で、トイレこそが彼女にとって一人でいられる場所であり、安らぎを得られる空間だった。

男とホテルに入ることが終わるたびに、里沙はトイレに閉じこもった。便座やバスタブの縁に腰かけてスマホをいじったり、壁やドアの模様や染みを眺めながら考えごとをしたり、壁に寄りかかってうとうとしながら帰る時間を待ったものだった。

相手の意向にかかわらず、ホテルに行くことでその関係は終わった。トイレに閉じこもらなければならぬことに、うんざりした。

(拙文「一人であるべき場所」より引用)

トイレ同盟

川端康成の『掌の小説』(新潮文庫)にはいろいろな形式の掌編が多数入っていて、どこからでも手軽に読めるのでファンが多いと聞きます。詩のような小品、物語調、説話風、童話風、心理小説、幻想小説、ミステリー、私小説、随想、怪談、ヴィリエ・ド・リラダンの意味でのコントといった具合です。

”私の家の厠の窓は谷中の斎場の厠と向かい合っている。

二つの厠の間の空地は斎場の芥捨場である。葬式の供花や花環が捨てられる。”

(川端康成作「化粧」(『掌の小説』所収)より引用)

こうして、向かい合ったトイレの窓に見える「老婆」の化粧をする様子や、「十七八の少女」が涙を流した後に「小さい鏡を持ち出し、鏡ににいと一つ笑う」のを観察する「私」の辛らつで残酷な眼差しを描く掌編『化粧』の筆致は見事です。こういう視点から

文章が書ける川端を恐ろしく思います。

ただし、この作品をたとえばショートフィルムとして映像化した場合を想像してみると分かるように、単なる「覗き」の話なのです。でも文章で読むと、そういう印象は受けません。少なくとも私にはそうです。引きこまれてしまうからでしょう。川端の小説は、見方を変えると単なる「〇〇」——あえて書きませんが、ここにはいろいろなレットが入ります——だと思われるものが多い気がします。

たとえば『雪国』の冒頭の「指」が出てくる場面や、『眠れる美女』、『片腕』、『みづうみ』を思い出してみてください。よく考えると変であったり、エロかったり、反社会的な行為が描かれますね。でも美しかったり綺麗だったり哀しかったりして、ぐんぐん読ませるし人を感動させるのです。私のいう川端の恐ろしさとはそういう意味です。言葉の魔術師だからでしょうね。

川端康成の作品において「指」と「手」は重要な意味を持ちます。一方、谷崎潤一郎においては何といても「足（脚）」でしょうね。

(拙文「トイレ同盟」より引用)

プライベートな場所

隣人のストーン夫妻が車で旅立つのを手を振って見送った後、妻のアイリーンは自分たちも休暇を取りたいものだと夫に漏らします。

”そして彼の腕をとって自分の腰に回し、アパートの入口の階段を登った。”

(引用はすべてレイモンド・カーヴァー作『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER 1)』村上春樹訳 (中央公論社刊) による)

この描写は、後の展開を知っていると象徴的な仕草に見えます。つまり、伏線とも取れるのです。

夕食を終えると夫のビルがストーン夫妻の住まいに入り、頼まれたとおりに猫に餌をやった後に、バスルームに入る。そして鏡に映った自分の顔を見る。ここまではいいのですが、次に薬品戸棚からハリエット・ストーンに処方されている薬の瓶を見つけて、それを何とポケットにつっこむのです。

この神経は尋常ではないにもかかわらず、抑制された文体で淡々と描写されているために、あれよあれよと読んでしまうとすれば、レイモンド・カーヴァーの術中におちいったことになるでしょう。さらにビルは、居間で植木に水をやったその手で酒の入ったキャビネットを開け、奥にあるウイスキーを取り出して、瓶からふたくち飲みます。

ビルがストーン夫妻の部屋から出るところを引用してみます。

”彼は明かりを消し、そっとドアを閉め、鍵のかかっていることを確認した。何か忘れものをしてきたような気がした。”

何気ない描写ですが、短編や掌編を書き続け、さらには何度も書き直したという職人のようなカーヴァーの作品を目前にしたときには、書かれている言葉を舐めて味わうようにして、ゆっくりと読み進めたいです。「何か忘れものをしてきたような気がした。」というセンテンスが気になります。意味不明というか不可解なので、不気味でもあります。

(拙文「プライベートな場所」より引用)

言葉は交響曲

想像してみてください。性行為は五感を総動員した体験であり出来事ではないでしょうか。

交響楽にたとえてもいいと思います。書き言葉や話し言葉以外の広い意味での言葉を相手（人間であったり物であったりします）とやり取りしたり、あるいはひとりの時にはいわば鏡の中の「他者」（空想であったり想像や記憶であったり画像や音声であったりします）とやり取りするわけです。

言葉は交響楽。

言葉は交響楽団。

言葉は管弦楽。

言葉は管弦楽団。

言葉はセッション。

言葉はジャム・セッション。

(拙文「言葉は交響曲【言葉は魔法】」より引用)

そっくりという、まぼろし*

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがいません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いただすような親しい相手がいらないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

(拙文「そっくりという、まぼろし*」より引用)

S、M、そしてM寄りのH

しつこくて申し訳ありません。ただいま繰り返した、以上の文章なのですが、何かに似ていませんか？ 言葉です。言葉ほどMの資質を備えているものはこの世にないと思っています。とはいえ、言葉のせいではありません。言葉はヒトがつくった鏡なのです。鏡の国、そして不思議の国に住んでいるヒト。したがって、こういう状況を自業自得とも言います。

そうなのです。ヒトはMの世界に生きているとも言えそうです。それを看破したジル・ドゥルーズはすごいです。特に『意味の論理学』のドゥルーズです。

音であり文字でしかない、つまりきわめて抽象的な存在でもあり、言い換えると「外からやって来ている」言葉に、意味やイメージをになわせているのは、ヒトなのです。

(拙文「S、M、そしてM寄りのH」より引用)

捨てられた名前たち

小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされた。母の真剣な表情が怖くて緊張した。緊張するために、うまく書けない。書いてもすぐ忘れる。すぐに忘れる自分に苛立ち、不安にも感じた。それは母の感情そのものだったにちがいない。ふたりだけの家庭。ふたりの関係は濃密なものだった。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時、緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告の上に何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に立った。私は声を上げた。奇妙な

虫が名札にへばりついていて、真っ黒でくねくねした虫だった。その様子を見ていた母が笑った。鏡に映った物が左右に見えることを、私は知らなかったのである。文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

今、私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」というふうに、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名がある。結局は、捨てられた名前たち。みんな、どこかで生きている気がする。

(拙文「【掌編小説】捨てられた名前たち」(「音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」所収)より引用)

動画を視聴しながらとりとめなく考える

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本っぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだと

も言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつつづつながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはずですが、自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡（この鏡を比喻と取っていただいてかまいません）に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かは何なのかは分からない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいてかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあそばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。

（拙文「動画を視聴しながらとりとめなく考える」より引用）

目まいのする読書

パトリシア・ハイスミスの小説 The Talented Mr. Ripley については、近いうちに記事にするつもりです。この小説を原作とした映画は邦訳と同じく二つのタイトルで二種類あります。興味を持たれた方は、小説でも映画でもいいので、ぜひお楽しみください。いい意味での目まい感のある作品です。

ここでは、アラン・ドロンのトム・リプリーを演じ、ルネ・クレマンが監督した「太陽がいっぱい (Plein Soleil)」を紹介します。

長時間じっとしてられないために映画を見るのが苦手な私は、短時間で見られる映画のトレーラー（予告編）が大好きなのですが、数種類あるトレーラーでは以下の動画

がいちばん「まとめ」的で面白かったです。「似ている」→「似る・似せる・真似る」→「なりきる」→「なりかわる」という、この作品のスリリングなテーマがよく分かる作りになっています。

とりわけ好きなのは、アラン・ドロンが鏡にへばりつき唇を寄せるシーンと、筆跡を真似る有名な場面です。

以下は、他人に「似る・似せる・真似る」と「なりきる」を超えて「なりかわる」（偽造も出てきます）身振りに的を絞った編集の珍しい動画です。何度見てもわくわくします。

拡大された署名をアラン・ドロンがなぞるシーン（動画では2:40から始まります）はとりわけ象徴的です。活字ではなく本人がペンでなぞった（書いた）文字を偽者がなぞる。その身振りは愛撫にも見えます。誰を愛撫するのかといえば自分なのです。なろうしている自分というべきでしょう。

（拙文「目まいのする読書」より引用）

＊

この記事を読みかえし、「鏡に映る」というよりも「鏡に移る」という感覚がさらに身近なものに思えてきました。

自分の中に起こりつつある「映る」から「移る」への心の移行を感じます。

この記事には「写す」「なぞる」「似ている」「なりかわる」も出てきます。

「うつす、映す、写す、なぞる、似る、似ている、似せる、なりかわる、かわる、なる」「本物、偽物、本体、写像、影」という、一連の「つながり」と「うつり」が見えてきた気がします。あくまでも個人的なテーマですけど。

今回、過去の記事を振りかえり、気づいたことがいろいろあり収穫がありました。お付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 鏡 # 映る # 移る # ジル・ドゥルーズ# 川端康成
パトリシア・ハイスミス # アラン・ドロン# レイモンド・カーヴァー

04/14 「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」世界

＊

「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」世界

星野廉

2022年4月14日 14:52

”ぐん、ぐん、ぐうん、落ちること落ちること。いつになったらおしまいなんだろう。”
(レイス・キャロル作『不思議の国のアリス』矢川澄子訳より)

目次

心変わり、心移り

「鏡に移る」としたら、怖くないですか？

作文

魂や心に移る

「何か」に「何か」や「誰か」を見てしまう

「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」

心変わり、心移り

自分の中に起こりつつある「映る」から「移る」への心の移行を感じます。

この記事には「写す」「なぞる」「似ている」「なりかわる」も出てきます。

「うつす、映す、写す、なぞる、似る、似ている、似せる、なりかわる、かわる、なる」
「本物、偽物、本体、写像、影」という、一連の「つながり」と「うつり」が見えてきた
気がします。あくまでも個人的なテーマですけど。

(拙文「鏡に移る【引用の織物】」より引用)

「うつる、移る、写る、映る」の中で「移る」が浮いたもの、つまり他の「うつる」とは

ちょっと違うのではないかという、違和感および異和感があったのですが、いまでは「移る」と「写る、映る」のつながりと重なりがリアルに感じられます。

心変わりをした気分です。数日前に辞書を見ていて知ったのですが、「心移り」という言い方もあるんですね。何かで読んだ記憶も、自分が使った記憶もありません。

「うつる・うつす」に興味を持たなかったら知らずに終わった言葉かもしれません。会えてよかったと心から思います。ぜひ使ってみたいです。

「鏡に移る」としたら、怖くないですか？

辞書の中に並んでいる言葉たちは死体に似ています。体の中心にピンを差しこまれて陳列されている昆虫の標本みたいなのです。

綺麗だけど動きが感じられないもどかしさがあります。

言葉は文の中で生きます。作文をすることで、その生きざまをなぞることができます。

「写る・写す、映る・映す」寄りの「移る・移す」を意識的に使って作文をしてみましょう。

＊

作文の前に整理します。

- ＊「移る・移す」：本体、移動
- ＊「写る・写す」：像、写真、転写、模写、複写、複製、コピー
- ＊「映る・映す」：像、影、鏡、映画、映写、反映、反射

「移る」では、「本体」が動いて移る、つまり移動します。「写る・映る」では、「本体の像」が写ったり映る、つまり転写されたり映写されるのです。

そうだとすれば、かなり違いますよね。あるものがそのまま移動するのと、その像や

姿形が写されたり、映しだされるのとは根本的に異なるように思われます。

鏡で考えてみると、「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」となりますが、こんなことが起きたら怖くないですか？ 鏡に移るんですよ。文字どおりに取って想像すると、不思議だし不気味に思えます。

では、「鏡に移る」的な「写る・写す、映る・映す」寄りの「移る・移す」を使って作文をしてみます。

作文

※つながりのない例文を続けて読むのは苦痛でしょうから、ざっと目を通していただくだけでも、かまいません。

彼が別の女性に心を移したために、婚約者は心身ともに病むようになった。
情が移って面接のさいに差し障りが生じた。
花に見入っていた彼女はとつぜん視線を息子に移した。
敵の注意を他のものに移すには、どうしたらいいだろうか。
柔軟剤の匂いがシャツから上着にまで移り、染みついてしまった。(移り香)
次から次へとあくびがうつり、ほとんど同時に合わせて二十人の聴衆が手で口を被ったり、下を向いてあくびをかみ殺す事態となった。
その疫病は空気うつりという話だ。(感染、伝染)
炎がつぎつぎと周辺の木々にうつった。(延焼)
時が移り、人も変わった。(経過)
時を移さず実行に移せ。

壁にいまはもういないあの人の姿が映っているように見えた。(人影)
鏡に自分の姿を映したところで、見えないものは見えない。
いま、あなたの心の鏡に映っているものは何？
水面に映る建物の影が黒く広がった染みのように見える。
あの事件が起きてから、テレビがよく映らなくなった。
スクリーンいっぱい人の顔が映り、館内が騒然となった。
フィルムの画像が映写機を用いてスクリーンの上に映しだされただけなのに、初めて映画を見たその子は、大声を上げて手がつけられなくなった。
あの光景が目映るようです。(目に映ずる)

あなたの心に映っているその思いを見ることができればいいのに。
その動画には、事件当時のその場の空気が映しだされているかのようだ。(反映)

ガラス越しに写る樹林がどこか不自然な輝き方をしている。(透けて見える
その写真の隅っこに写っている人物が誰なのか、私たちには心当たりがない。(写真)
彼は今年に入って般若心経を五十回も写したらしい。(写経)
その作品はその凄惨な光景を克明に写した小説だと言われている。

村人たちは、写真を写されると(撮られる)と魂が取られると信じている。(撮影)

息子が失踪したのは、狐の霊が乗り移ったからだと言っている。(取り憑く)

魂や心に移る

「写る・写す、映る・映す」寄りの「移る・移す」の例文だけでなく、「移る・移す」寄りの「写る・写す、映る・映す」の例文も書いてしまいました。

*

自分で作った例文ですが、要するに姿や像だけでなく、魂や心に移るというイメージの文だと気づきました。自分で勝手に書いて気づいていれば世話ないですね。

「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」は、かつてはリアルな感覚でありリアルな体験だったのでないでしょうか？

それが二十一世紀のいまでは「鏡に移る」ではなく「鏡に映る」になっている。テレビ、映画、ネット上の映像のことです。

そう考えると、ぞくっとします。自分で勝手に考えて、勝手にぞくっとしていれば世話ないですけど。

「何か」に「何か」や「誰か」を見てしまう

水面に見た自分の姿を見て、恋をして水面に落ちた。そんな神話が西洋にありましたね。

映った形や影に、「誰か」や「何か」を見てしまう。あるいは自分を見てしまう。

壁の染みや空の雲に、「誰か」や「何か」を見てしまう。月の模様に、「何か」を見てしまう。

自分が、あるいは誰かが描いた形や模様に、「誰か」や「何か」を見てしまう。

自然界にあるものにせよ、人が作ったり描いたものにせよ、映った形や姿に、「誰か」や「何か」を見てしまう。これをもう一歩進めれば、そこに魂や心を見てしまうになりそうです。

「鏡に映る」ではなく「鏡に移る」

原始的ですか？ 始原的ですか？ いかにも大昔の人っぽい行為に思えますか？ 現代人のすることじゃない気がしますか？ あるいは、こどもっぽいですか？

「何か」に「何か」や「誰か」を見てしまうは、二十一世紀に入って二十年を過ぎたいまも、続いているようです。

人形や玩具だけでなく、漫画、絵、アニメ、映画、テレビ、スマホの画面、パソコンのモニターに、うようよ像が映しだされています。

物や、影や、絵の具やインクの染みや、画素の集まりに、「何か」や「誰か」を見るだけでなく、魂や心や気持ちを見ているのです。

さもなければ、話しかけません。笑みを浮かべたり涙を流したりしません。ましてや、愛の対象になどしません。夢うつつや夢にまで見ることもないでしょう。

＊

繰り返します。

像だけではなく、魂や心や気持ちが映しだされているのです。だから、話しかけます。アイドル（偶像）として崇めます。愛や恋愛の対象にもなります。

キャラクターや絵やCGだけではありません。そこそこ古くから人気のある人の写真や映像や動画も、いまだに人気があります。

ゲームなしでいられない人がたくさんいます。ゲームに実体がなくてもかまわないのです。

むしろ、実体がないから楽しいし熱狂できるのかもしれませんが。影ほどわくわくするものはないようです。大昔に洞穴で影にわくわくしたのと同じです。

熱狂するというのは、はまることです。依存とか嗜癖とも言えるでしょう。それなしではいられないということです。

仮想現実では、自分自身、自分の分身がまぼろしとなって、動いてくれます。こうなると、それは自分なのか、自分ではない「誰か」なのか、自分ではない「何か」なのかさえも不明になります。

自分が影になるのですから。体といっしょに魂も影になるのですから。

べつに神秘体験とか、超常現象の話をしているわけではありません。誰もが日常で経験しているリアルな話なのです。

＊

こういう世界では、「本当」と「本当じゃない」、現物と複製、複製と複製の複製、本物と偽物の区別もできなくなります。

戦争が起こると、いま言ったことがリアルに立ちあらわれます。現にそうになっていませんか？

すべてがまぼろしであり、すべてが影なのです。

＊

これは「鏡に映る」どころではなく「鏡に移る」ではないでしょうか？

いまも大昔も、「映る・写る」と「移る」の境が曖昧で不明になっているし、なっていたのではないのでしょうか？

もう移っているのです。とうの昔から。移るんです。うつるんです。

安心して楽しめそうです。いま始まった話じゃないんですから。いまさら悩む話でもありません。

人は初めて水面や鏡を覗きこんで以来、心変わりも心移りもしていないもようです。

これが人なんですね。これでいいみたいです。

鏡に映る世界ではなく、鏡に移る（鏡に移った、かもしれません）世界に、私たちは住んでいるのです。

ただし、鏡に移ったのはいいけれど、落ちこちないように気をつけましょう。むこう側に移ったのはいいけれど、戻るのを忘れないように気をつけましょう。

” つぎの瞬間、アリスは鏡をくぐりぬけて、むこう側の部屋にかかるがるととびおりていた。”

(ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』矢川澄子訳より)

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 鏡 # 影 # 映る # 移る # ルイス・キャロル # 矢川
澄子

04/15 うつるとうつすで影を編む

＊

うつるとうつすで影を編む

星野廉

2022年4月15日 13:25

目次

映る、移る

移る、移す

撮る、撮す、写す

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

影絵、幻影、「いる」

言葉を編む、影を編む

幻灯、幻影、映写

移っている

映る、移る

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの文で描写されている影は自然界に見られるものです。この場合の「木の影」は木の姿が映った影、つまり像のことであり、木そのものでも、木の姿形でもありません。

影が地面と池に映っています。太陽に照らされた物の姿、つまり像が光の現象として、地面と水面に映っているわけです。

これを「移っている」と考えることもできるでしょう。大昔の人（大ざっぱな言い方で恐縮ですが）は「移っている」と考えていたのではないのでしょうか。私の偏見かもしれませんが。

こどものころの自分は、「移っている」に近い気持ちで影を見ていたような気がします。

移る、移す

上の二文を少しだけいじってみます。

木の影が地面に移っている。

木の影が水面に移っている。

影が「映っている」ではなく、影が「移っている」にしました。「移る」というと、物の影や姿ではなく、本体が動くというイメージを普通はいただきますね。つまり移動です。

影が実体のように、つまり物として地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

影が自立しているのです。本体の木とはべつに生きているのです。

*

もう少しいじます。

木が地面に移っている。

木が水面に移っている。

上の二文を見ていると、比喻のようにも感じられます。ただ、文字どおりに取って絵として頭に浮かようとすると、ちょっと戸惑います。すんなりとは視覚的なイメージにならないのです。

そこをうんと踏んばって、物としての実体が、地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

なんだかシュールですね。不思議な世界、ファンタジーのような絵が目には浮かびます。

夢の光景のようでもあります。夢では何でも肯定されます。ありえないだけに、怪しげで妖しげでもあります。

とはいうものの、いったん、思いえがいてしまうと、不思議なもので、それもありかなという気分になります。当初の躊躇は消えて、いまでは難なくイメージできます。

慣れは恐ろしいものです。というか、想像力は大したものだと思います。想像力とは夢の片割れではないでしょうか。人の想像力は過剰で過激なのです。

撮る、撮す、写す

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの光景を絵に描いたらどうでしょう。写生です。

カメラで撮ったらどうでしょう。写真です。または映画とか動画です。

*

木の影が地面に移っているのを絵に描く。写す。写生する。

木の影が池に映っているさまをカメラで撮る。写す。撮影する。

これは「移っている」ではないでしょうか。影という実体のないものではなく、紙と鉛筆の粉、印画紙、フィルム、画素に形や模様として存在しているわけですから、「移った」という気がします。

気がするどころか、移った影は人の外にあって物として確認できるのですから、「移った」と言わざるをえません。しかも残るんです。

すごすぎます。こんなことをしているのは、この星でヒトだけです。人はとんでもないことをしているのです。

「写す」は「移す」であり「残る」。

何かに似ています。

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

分かりました。あれです。

後で触れることになるとと思いますが、文字に似ています。文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。

こんなものは地球上に文字以外にないのではないのでしょうか。人はこの時点でも、せつせつと写し、移し、残しています。

「なぞる」から、「写す」、「移す」、「残る」。ここまで出世した文字に感動しないではいられません。それにしても、なんでなのでしょう？　なんで、こんなことが起こっているのか、私にはさっぱり分かりません。

やっぱり「なぞる」は謎です。

影絵、幻影、「いる」

話を木に戻します。

木の影が壁に映っている。

これは影絵に近いですね。綺麗です。たしか、こんな景色を見たことがあります。長い塀に木々が映っているさまが目には浮かびます。記憶の中の風景なのでしょう。どこで見たのかは思い出せません。

木の影が障子に映っている。

この光景を見た記憶はありませんが、目に浮かびます。これも綺麗です。目に浮かぶというのは、勝手に「絵」を思いえがいている、つまり作っているのでしょうか。偽の

記憶みたいなものです。

壁や扉に映る木の影も、障子に映っている木の影も、影絵と似ています。同じではありません。影絵は、人が意識して作った影、つまり人工的なものです。

影絵、つまり人工の影の延長上に、写真や映画や動画があるとも言えそうです。

＊

人工の影は、「映った」よりも「映した」であり、要するに「写した」であり、さらには「移した」ではないでしょうか。

物を移動させるという意味ではなく、影をわざと作るという意味の「映す」、つまり「写す」は「移す」に思えてなりません。

「写す」と「移す」は人工であり人為であり、「映る」は自然界の現象だなんて、図式的にまとめたくなくなります。

人工の影は何を移すのでしょうか？ イメージ、意味、物語が考えられます。どれもが人の中にあって確認も検証もできないものである点に注目したいです。

でも、人はその確認も検証もできないものによって動きます。

これも確認も検証もできませんが、人工の影は心や魂も移すのではないのでしょうか？

あなたは、愛する人の写真を踏めますか？ 尊敬する人の動画がいたずらに修正や加工されて平気ですか？

人の想像力は想像を絶します。

＊

話を戻します。

影絵は自宅でも簡単に楽しめます。光源と手と指と壁があれば楽しめます。あと、必要なものは想像力でしょうか。

(さきほど述べたように、想像力は夢の片割れです。過剰で過激な想像力があるから、人は人なのです。人からこれを取ったら、何も残りません。)

手と指を動かして、壁に影を映してみる。いまちょっと居間でやってみましたが、わくわくします。懐かしさでいっぱいになりました。

まぼろしです。幻影です。影が動いているさまを目の当たりにすると、「移っている」を体感します。そのリアルさは「映っている」どころではないのです。

さらに言うなら、「移っている」どころか、そこに「ある」のであり、そこに「いる」のです。動いて「いる」のです。

言葉を編む、影を編む

言葉は事物の影

言葉は現実の影

言葉は幻実という影

言葉は事物の影であり、現実の影だと考えることができます。

事物も現実も容易にいじれないから、影である言葉を人はいじるわけです。言葉はある程度、簡単にいじれます。現実のままならさに比べれば、はるかに思いどおりになる気がします。

言うことを聞いてくれそうな影、それが言葉です。もちろん、人工の影です。

*

言葉をいじり、作文する。

作文では、書くというよりも編むのです。編んで模様や形や姿を作るのです。それが影です。

あくまでも言葉という影なのにもかかわらず、現実や事物の影に思えてきます。人には、とほうもない想像力があるからです。

表情、身振り、話し言葉、書き言葉のうち、書き言葉である文字こそが人の作った最強の影であり——絵や映画や動画なんて目じゃありません——、人の過剰で過激な想像力と相まって、この文明をここまで築きあげたのです。

上でも述べましたが、文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。最強の人工の影と言わざるをえません。

*

言葉をいじり、作文する。

文章を書くことは、影を編むのに似ている気がします。

いま、私は、うつるとうつすという言葉を使って影を編んでいます。いじれない自然界の影（現実）の代わりにいじれる人工的な影（言葉）を編んでいるのです。

空しくないとさえ嘘になります。影は空っぽなのですから。

その空っぽを満たすのが想像力です。人の想像力の過剰さと過激さを感じます。

幻灯、幻影、映写

話を木に戻します。

窓ガラス越しに見える木を指でなぞる。

窓ガラス越しに見える木をマーカーでなぞる。

指でなぞるくらいならいいでしょうが、ガラスにマーカーで線を描いたり、塗りつぶしたら、叱られるでしょうね。そんなお子さんがいても不思議ではありません。

これが車の窓だったら大変なことになりそうです。

*

ガラス越しに見える木を、いろいろな色のある水性のマーカーで描き写したとすれば、それはスライドではないでしょうか。適切な光源と、壁かスクリーンがあれば、立派なスライドであり、立派な幻灯になりそうです。

想像しただけでぞくぞくしてきました。小学生のころに、学年別の学習雑誌の付録で幻灯セットがあったのを思い出しました。スライドはセットに含まれて用意されていました。

説明の絵を読むのが待ちきれず、息をはずませながら、紙製の幻灯機を震える手と指で組み立てた記憶があります。たしか、懐中電灯を光源にするものでした。

昼間なのでカーテンを閉めて、白い壁をスクリーンにして幻灯を見たのです。なにか悪いことをするような、後ろめたい気持ちが湧いて、よけいにぞくぞくはらはらしたような気がします。

移っている

あのときのあれが、どんなスライドだったのかは忘れました。

色つきのかさかさぺらぺらした透明のセルロイドかプラスチックのようなものでした。その紙みたいなものが、壁にうつりました。思いだそうとしているのですが、スライドの絵はぜんぜん覚えていません。

気が遠くなりそうなぞくぞくした思いだけが、いまここによみがえっています。息が苦しいくらいです。

あれは「映っている」ではなく「移っている」だったといまになって思います。それが、いまここに「移っている」気がします。

ただ、いまここに移っているものが何かのはさっぱり分かりません。移っているという思いだけがあるのです。

この思いは心地よいです。官能的ですらあります。しばらく浸っていたい気分です。

これを言葉で影と呼ぶ気にはなれません。いたずらに手なずけたくないのです。名づけずに、そっとしておきたいのです。意味もストーリーも要りません。

#日本語 # 影 # 幻灯 # 写真 # 記憶 # 思い出 # 幻影 # 映写 # 文字

04/16 写される、撮られる、奪われる

＊

写される、撮られる、奪われる

星野廉

2022年4月16日 10:40

目次

写真をとる、とられる

手で「と」る

作文

とる、うつす、うつる

奪われる

写、射、斜、車・指す、差す、刺す、射す、挿す

「見る」は暴力

映像に囲まれた世界

写真をとる、とられる

写真を写す、写真を移す、写真を撮す、写真を撮る。

私はふだんは「写真をとる」と言いますが、そのときに「撮る」という漢字は浮かびません。「写真を撮る」と書いた記憶がほとんどないのは、写真を撮る機会がないからでしょう。

撮ってもらったことのあるところや若いころの写真はたくさんありますが、自分で撮ったものは少ないです。スマホで撮ることもめったにありません。写真は私にとっては「とられた」ものなのです。受け身の過去形です。

手で「と」る

「とる」が気になって辞書を見てびっくりしました。二つのことに驚いたのです。

一つは、「とる」を辞書で引いたことがないのに気づいたこと、もう一つは、「とる」の語義と例文の多さです。

「とる」は私にとってはわくわくする言葉ではありません。だから、辞書で調べたことがないのだと思います。うすうす感じてはいましたが、言葉に関して自分がかなり「偏食」していることに気づきました。

＊

「とる・取る・採る・捕る・執る・撮る・盗る・撰る・獲る・録る・（照る）」

「手」と同源という記述が衝撃的でした。

手でとる、「て」で「と」る。

言えています。わくわくします。

＊

たしかに「手でとる」場合が多いですね。手で何かをわしづかみにする、手にぎってとる、手でつかんでとる、指を曲げて引っ搔くような手つきでとりよせる、手で引っ搔いてとりのぞく。

そのときの手の形が見えるようです。文字につられて無意識にその手つきをしている自分がいます。

作文

言葉は文の中で生きます。「とる」はたくさんありますが、気になった「とる」を使って作文をしてみます。

ネズミをぜんぜん捕らないうちの猫がスズメを捕ってきた。

手取り足取りでやり方を教えてもらった。
免許を取って、何年になるの？
お互いに年を取ったものだね。
痛みを取る薬の服用には気をつけたい。
それは明かりを採るための天窓だよ。
文字どおりに取ると馬鹿を見る。
舵を取るのがうまい人とへたな人がいる。

この数年間写真を撮ってもらっていない。
この書類のコピー（写し）を二部とってください。
ねえねえ、あの番組を録ってくれた？

＊

なかなか面白いですね。初めて辞書で引いた「とる」がこんなにわくわくするものだとは思いませんでした。きょうの収穫です。

たしかに手を使つての「とる」が多いので唸ってしまいました。

とる、うつす、うつる

当たり前ですが、「とる」とその瞬間に、あるいは次の動きとして何かが移ります。移動するのです。当たり前ですが、感動してしまい、さらには考えこんでしまいます。

話がどんどん広がりそうなので、「写真を撮る」に絞ります。

＊

村人のこどもの写真を観光客が撮ったことが大騒ぎの原因となった。

いま即席に作った文ですが、何かで見聞きした話です。

写真を撮ることがタブーの社会があるそうです。これは何となく分かる気がします。

とる、取る、捕る、盗る。

「とる」とは、何かを「奪う」ことである場合があります。何を奪うのでしょうか？大切なものですね。それも、かなり大切なものです。

命、心、魂、未来、財産。

奪われる

人の写真を撮る、その人の姿を捕る、その人の姿を写す、その人の何かを写す、その人の何かを撮る、その人の何かを録る、その人の何かを盗る、その人の何かを奪う。

大ごとですよ。大変なことになりそうです。私もとられたくないです。うつされたくないです。うばわれたくない。

この気持ちには始原的なものを感じます。頭で理解できると言うよりも、体で分かるたぐいの感覚ではないでしょうか。

*

何者かに拉致され、連れて行かれたところで、写真を撮られた。

これは怖いですね。でも、ありえます。いまの世界情勢を見ていると、ありえるし、似たようなことが起きているようです。

カメラは手に持って撮ります。カメラには目があります。レンズのことです。その目が盗るのです。奪うのです。

写、射、斜、車・指す、差す、刺す、射す、挿す

カメラの中にはレンズの部分が長いものがあります。銃を連想します。

英語では写真を撮ることを「shoot」と言う場合がありますが、「射撃する」という語義もある単語です。ツーショット (two-shot) は、ここから来ている映画用語だったよう

です。shot は過去分詞でしょう。

発射する、矢を射る、爆破する、突く、注射する、放射する、シュートする、芽を出す、言葉を連発する。

shoot には、こんな語義もあります。そうです、あえて書きませんでした、あの意味もあります。あらためて見ると、圧倒されますね。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。

(拙文「なぞる、なする、さする、なでる」より引用)

「写真を撮る」に相当する英語としては、take pictures や動詞の photograph が浮かびますが、shoot の生々しさと激しさには圧倒されます。sh という子音と oo という長母音の組み合わせが恐怖をそそります。

なお、sh という摩擦音については、蛇が動くさいに出る「シュシュ」という音を連想させるという説があるそうです。恐怖を覚えるとすれば、ヒトの遠い記憶が呼びさまされるのでしょうか。

そういえば、蛇も銃も望遠レンズもあれも長いですね。足のことですよ。いまのは蛇足ですが。

「見る」は暴力

ドSな目とか、ドSな眼差しという言い回しがありますが、「見る」行為にはサディズムの匂いがします。

しかも、一方的に見る行為は、相手を傷つけます。相手が見られていると知っていても分かっている、盗見られているの知らなくても、傷つけていることに変わりはない

りません。

「見る」は、暴力なのです。「見る」は、奪うことであり、奪われた相手は萎えます。弱るわけです。何かを吸い取られたと感じる人もいるにちがいません。やっぱり「とられる」のです。

連想するのは、いわゆるポルノなどの性的な映像ですが、それだけではありませんね。どんな映像にも暴力の匂いや力関係（マウントを含めて）がともなうと言えそうです。

あと、いわゆる不祥事を起こした芸能人に向けられるレンズの長いカメラの放列や刺すような視線も暴力でしょう。

そうした映像を視聴することで、暴力や犯罪に加担する場合もありうるのです。（※偉そうなことを言って申し訳ありません。はい、私も見ていました、ごめんなさい。）

被写体という言葉が痛々しく見えてきます。

映像に囲まれた世界

みる（目）、とる（手）、うつす（移動）、うばう（消える・無くなる）。

うつす、写す、映す、移す。

*

これは「移っている」ではないでしょうか。影という実体のないものではなく、紙と鉛筆の粉、印画紙、フィルム、画素に形や模様として存在しているわけですから、「移った」という気がします。

気がするどころか、移った影は人の外にあって物として確認できるのですから、「移った」と言わざるをえません。しかも残るんです。

すごすぎます。こんなことをしているのは、この星でヒトだけです。人はとんでもないことをしているのです。

「写す」は「移す」であり「残る」。

何かに似ています。

分かりました。あれです。

後で触れることになるとと思いますが、文字に似ています。文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。

こんなものは地球上に文字以外にないのではないのでしょうか。人はこの時点でも、せつせと写し、移し、残しています。

（拙文「うつるとうつすで影を編む」より引用）

＊

私たちは映像に囲まれて生きています。持論なのですが、文字も映像ではないでしょうか。漢字の象形文字的な性質とは別にです。

文字を見て、私たちは像（イメージ）を思いうかべたり、思いえがきます。これは、文字を学習した成果とも言えますが、よく考えると驚くべきことに私には思えます。謎なのです。

映像であれ、文字であれ、その根っこには「うつす」があるようです（文字は書き写して覚え学習します）。「うつす」があれば「うつされる」もあるはずです。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。

＊

みる・みられる、うつす・うつされる、とる・とられる、うばう・うばわれる。

単なる「見る」が「奪う」に容易に移り変わる世界に、私たちは生きているのではないのでしょうか？

テレビやネット上には、連日祖国から身を移す人たちの映像が映しだされています。奪われた姿を撮られていると言えます。それを私たちは自宅で見ているのです。あの人たちも、少し前までは見る立場にいたのです。

私たちは、必ずしも「する」側にいるのではなく、「される」側にいるもいる。このことに敏感でありたいと思っています。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 文字 # 鏡 # 写真 # 映像 # 映画# 動画

04/16 地球は大きな日時計

＊

地球は大きな日時計

星野廉

2022年4月16日 15:45

目次

時を見る

時を知る、時を見る

「時を聞く」から「時を見る」へ

鐘（かね）のある所には金（かね）があった

長短二本の針の組み合わせとして、時を「見る」

フランス語とドイツ語での「時計」

時間（時刻）が気になるのは、この世に未練があるから

機械や計器によらない「とき」

地球は大きな日時計

時を見る

あなたは時（とき）を見たことがありますか？ 聞いたことがありますか？ 触ったことはあるでしょうか？ 嗅いだことは？ 舌で味わったことは？

今回はそういう話をします。

＊

私はこの星が大きな日時計ではないかと思うことがあります。日が照っていれば影があちこちに見られます。影は刻々と動いているみたいです。

なんで動くのかはよく分かりません。お日さまとこの星の動きが関係していると学校で習った記憶があります。理屈はよく覚えていません。

影が刻々と動くのは、太陽と地球の動きと連動しているようですが、時（とき）と連動しているとも言えそうです。

その意味で、地球全体が巨大な日時計に思えます。

＊

いま居間にいますが、窓から差しこむ日の長さ、つまり日の当たっている部分の長さは季節によって変わります。日の当たっている部分の位置は時刻とともに移ります。

とはいうものの、日の当たっている部分や影を見て時を知ることはありません。時計を見ます。

大昔の人たちは、太陽の位置や、日向や影を見て時を知ったと学校で習った記憶があります。日時計というものを頼りにしていたとも教わりました。

要するに、時を見て知ったらしいのです。いまも私たちは時を見ていますが、時計を見ているというのが正確な言い方でしょう。

時を見る——同じですが、その意味は大違いみたいですね。

時を知る、時を見る

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

(拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用)

大昔の人たちが太陽や日向や日陰や物の影を見て時を知った。これはその通りだと思うのですが、ちょっと違うという気がします。

いまの私たちだと、たとえばお日さまがほぼ頭上にあるのを見て、ほぼ正午、つまり昼の十二時だと知りますが、大昔の人たちは、十二時だとは思わなかったはずです。

「十二時」とは、時計を見て時を知ること慣れていて人でなければ、出てこない発想だと思います。

＊

日時計はどうでしょう？ 日時計がどれだけ一般的なものだったのかは知りません。大昔の上流階級から庶民（あるいは奴隷）に至るまで、日時計による時を日々意識して生活していたのかを知らないという意味です。

どうなのでしょうね。

日時計が一般的なものではなかった。つまり時を十二とかその他の数字で分けて認識することが人びとの間で共有されていなかったと考えてみます。

その場合に、太陽や日向や日陰や物の影を見るという行為は「時を知る」とは異なる認識だった気がします。

時という概念を身につけている私たちには想像しにくい感覚で生活をいとなんでいた。そんなふうに私には思えてなりません。

当時は時という枠がなかったのではないかという意味です。それは、人びとが見ていた影が、人工のものではなく自然のものだったからだという感じがします。

枠を心に持ってしまった私たちには、知りえないことなのかもしれませんね。

「時を聞く」から「時を見る」へ

日時計の他にどんな時計が大昔にはあったのでしょうか。砂時計が頭に浮かびましたが、大昔っぽくないですね。水時計はどうでしょう。

高校時代に英語の先生が教えてくれた話があります。結論から言うと「とき」は「聞くもの」から「見るもの」へと変わったということです。英語で「時計」にあたる単語を挙げましょう。

* clock： 置き時計や掛け時計のたぐい。語源は「鐘」。「なぐる、打つ」の意味もある。

* watch： 懐中時計や腕時計のたぐい。語源は「眠らずに起きている」。「じっと見る、見張る、不寝番をする」の意味もある。

こんな話でした。

鐘（かね）のある所には金（かね）があった

英語の先生から習った話を続けます。

「とき」とは、次のような順で、人の日常生活において活用されるようになったらしいのです。大昔は別にして、この国やヨーロッパの中世くらいからのお話だと思ってください。

教会やお寺や集会所など、共同体のセンター（本部）で、鐘を打って「とき」を共同体のみんなに知らせる。たぶん、そのセンターには、当時は非常に高価で珍しいものであったと思われる、置き時計や掛け時計のたぐいがあったらしい。

ふつうの人たち（庶民）にとって、「とき」は、遠いところにある「鐘の音」として「聞くもの」であった――。

どうやら、「鐘（かね）のある所には金（かね）があった」、と言えそうですね。現在でも、東西を問わず、鐘と金が同居する宗教施設が多いような気がします。

話を続けます。

長短二本の針の組み合わせとして、時を「見る」

経済的余裕がある人たちは、自分の家で、おそらく一台だけ高価な置き時計や掛け時計のたぐいを設置するようになった。

一部の人たちにとって、「とき」は、ボーンボーンとかチャリンチャリンとかいう具合に、時計に付属する小型の「鐘の鳴る音」が家のなかで響くという形で、「聞くもの」となったと同時に、「長短二本の針の組み合わせ」として、「見るもの」にもなった。

しかも円を描き、サイクルのある時間です。毎日毎日同じ時刻がめぐってくる、毎週毎週同じ曜日がやってくる。ほぼ毎月毎月同じ日がまわってくる。毎年毎年同じ月と日がめぐってくるのです。

直線ではなく円環状の「とき」と言えます。ヒトは次の世紀を迎えることができるのでしょうか。

果たして、こんな「かたち」の「とき」でいいのでしょうか？ 納得していない自分がいます。

＊

以上は、高校の英語の先生から聞いた話と、その後に得た知識を組み合わせで即席でつくった、素人の思いつきです。詳しいことをお知りになりたい方は、どうかお勉強なさってください。

私の述べたことは思いつきとはいえ、それほど的外れなお話ではないかと思えます。

フランス語とドイツ語での「時計」

ちなみに、フランス語でも、懐中時計や腕時計のたぐいを意味する語 *montre* は、「見

せる」という意味の語 *montrer* と同系です。

一方の置き時計や掛け時計のたぐいの *horologe* は、英語の *hour* と同系の語です。*horologe* (「オルロージュ」みたいに発音します) と *hour* (「アウアー」みたいに発音しますね) って、何となく似てませんか。

両方とも、*h* を発音していない点に注目してください。英国が、かつて、フランスの北にいた民族に征服されて(「ノルマン・コンクエスト」と高校時代に「世界史」で習いました)、フランス語が英語に混じったさいの名残だそうです。*honest* (「オネスト」)、*honour* = *honor* (「オナー」) なんかも、そうらしいです。

＊

ドイツ語では、この英語の *hour* と同系の語 *Uhr* (「ウーア」みたいに発音します) が、置き時計や掛け時計のたぐいと、懐中時計や腕時計のたぐいを意味する語の両方で使われています。

区別するさいには、前後に何かをつけて造語しているようです。*hour* と *Uhr* も似ているような気がしませんか。

＊

ヨーロッパの諸言語は、方言ぼくって、おもしろいですね。

昔、独仏語のバイリンガルであるドイツ国籍の人で、NHKのテレビとラジオのドイツ語講座で講師をしていた方と、お友達というか「悪友」になっていたことがありました。私が大学生だったころです。

ミヒャエル・ミュンツァーさんです。覚えていらっしゃる方もいるにちがいありません。ミュンツァーさんに言わせると、たとえばフランス語や英語を知っていれば、スペイン語やポルトガル語やイタリア語の新聞なんか、ちょっとしたコツを覚えるだけで、七割くらいは意味がとれるとおっしゃっていました。

本当かどうか知りませんが。なにしろ、冗談とおとぼけ（ほぼ嘘のことです）が多いひょうきんな性格の人でしたので。

ミュンツァーさんからはいろいろなことを教えてもらいました。

いまでも覚えているのは、映画監督としてのジャン・コクトーの下で助監督をしていたミュンツァーさんに、コクトーが言った言葉です。「議論はぜったいにするな」ですが、私はこれを座右の銘にしています。

最近、こういう昔のことをしきりに思い出します。

＊

話を hour に戻します。

英語の hour を辞書で調べてみました。

＊ hour： 時刻、(60分という意味の) 時間、時代、(特別な) 時。語源は、「ある特定の時・時期・季節」、あるいは「過ぎ行くもの」

時間（時刻）が気になるのは、この世に未練があるから

時間や時刻や「とき」というものを知ったり意識するためには、「聞く」（耳を使う）と、「見る」（目を使う）が大きな役割を果たしていることが分かります。

もっとも、上で述べた話は、日時計、水時計、掛け時計、置き時計、懐中時計、腕時計といった時計という機械（器械・計器）によって、「とき」を分けて細分化し、それを時間や時刻として知覚する行為です。

それ以外に、たとえば、腹時計、太陽の位置を見る、他の生物の行動、明暗、寒暖を知覚するという、機械や計器に頼らない、「とき」や「時間」や「時刻」の知覚の仕方もあると言えそうです。

＊

あるとき、「消えてしまおう」と思って山に入って、一晩を過ごしたことがありました。

時計は持って行きませんでした。そのときの状態と状況と様子、つまり、ある日の午後から翌日の正午くらいまでの間の記憶をたどってみると、やたら、「とき」や「時間」や「時刻」が気になったのを覚えています。

時間が気になったというのは、要するに迷っていたのです。この世に未練があったということですね。正確にいうと、揺れていました。

「消えてしまおう」という気持ちが強くなると、時間（時刻）が気になりません。まったく、気になりません。

「やっぱり、帰ろう」という気持ちになると、時間（時刻）を知りたくなります。むしろ知りたくなります。そのうち、心の迷いだけでなく、道に迷ってしまい、てんてこ舞いしたというお恥ずかしい結末を迎えました。

機械や計器によらない「とき」

その結末はさておき、里が恋しくなり、人生に未練を感じたときに、どうやって「時間」や「時刻」を知ろうとしたかと言いますと、さきほど述べた、腹時計、太陽の位置を見る、他の生物の行動、明暗、寒暖を知覚するという方法でした。

私はアウトドア的な活動が苦手ですが、いま述べたような経験がありました。キャンプや登山や山歩きなどが好きな方なら、他にも時計に頼らずに「とき」を知る方法をご存知にちがいありません。

なにしろ、自然は「とき」の「印・徴（しるし）」に満ちているのです。自分の場合には、あの苦い体験で知りました。

＊

いま自分なりに、その他にも「とき」を知る方法がないかと、山の中ではなく、PCを前にして考えています。

何かが変化し移り変わっていく様子や過程という、流れや動きを知覚する方法もあるのではないのでしょうか。頭に浮かんだのは、食べ物です。いまお腹がすいているからでしょう。

太古にヒトが、まだ農耕や牧畜という手段を思いつくまえ、つまり自然界にあるものを採取・狩猟・漁労という手段によって、手に入れて食べていた。そんな、中学と高校の社会科なんかで習ったことを思い出しています。

＊

当時の人たちが、食べるために取ってきたものをじっと眺めているという光景が、さきほどから、頭に浮かんでいるのです。食べるために取ってきたものをじっと見つめているのは、腐ってしまうと困るから、どうしようかと考えているのです。

かといって、食べるのにも限度があります。だから、食べきれないものを見守っています。食べ物はいつも手に入るわけではなかったと考えられます。

比較的長く保存できるものと、できないものがあります。その保存できないものを、見守る。すると、当然のことながら、変化があらわれます。

腐敗の進行です。

＊

夢野久作の『ドグラ・マグラ』という奇妙な小説を思い出しました。さらにまた、高校生か大学生のころに、リンゴが腐っていく過程を撮った短編映画を見た記憶がよみがえってきました。英国かどこかの前衛作品＝実験作だったような気がします。

こうした、物が朽ちていくイメージや光景も、「とき」の移り変わりと重なる感じがします。ということは、年を取ることも、一種の腐敗だとも言えそうな気がしてきました。

We all live and die. だから、I'm alive. = I'm living. = I'm dying. であり、生と死は連続しているということでしょうか。

生まれ死ぬ あいだなどなく 生まれ死ぬ

*

空腹のせいかな、ぼーっとしてきました。頭の整理をする必要があるみたいです。思いつくままに、大和言葉系の語を並べてみます。

かわる・変わる・うつる・移る・うつりかわる・移り変わる・すぎる・過ぎる・へる・経る・へだたる・隔たる・ま・まあい・あいだ・間・こく・刻・とき・時

こんなところでしょうか。これらの言葉の羅列をじっと見つめて、「とき」「時間」「時刻」について、引き続き考えてみます。

時忘れ 足元に見る 時の影

*

なんだか暗く終わってしまい、申し訳ありません。

以上の文章は、以下の記事の一部を再構成し加筆したものでした。

「「時間」と「とき」 2020/08/20

https://blogpostings.blogspot.com/2021/08/blog-post_30.html

地球は大きな日時計

あなたは時（とき）を見たことがありますか？ 聞いたことがありますか？ 触ったことはあるでしょうか？ 嗅いだことは？ 舌で味わったことは？

今回はそういう話をします。
そうでしたね。記事の冒頭の一節です。

これからスーパーに行ってきます。

外には、まだ日が照っています。

ときを見てみます。聞いてみます。草木に触ってみます。空気を吸いこんでみます。

地球は大きな日時計、いや、大きな時計。もったいないじゃないですか。

自然は「とき」の「印・徴（しるし）」に満ちているのです。そのしるしは概念ではないはず。むしろ観察でしょう。

スーパーでは旬のものを探してみましよう。手に取って、ときのにおいを嗅ぎ、今夜はときを舌で味わってみましよう。

では、元気を出して、行ってまいります。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 英語 # 時間 # 時計 # 太陽 # 影# 地球 # ミヒャ
エル・ミュンツァー # ジャン・コクトー # 夢野久作

04/17 眠れない夜の遊び

＊

眠れない夜の遊び

星野廉

2022年4月17日 14:04

目次

言葉を転がす

顔をうつす

マスク

声を移す

真似る、シンクロ、影

取り憑く

呪術の時代に生きる

言葉を転がす

眠れない夜や、寝入り際に、私は言葉を転がします。

どうするのかと言いますと、ある言葉やフレーズをポンと投げて、それから連想する音（発音）や文字やイメージを、別の言葉ですくい取るのです。

たとえば、「犬・いぬ」が「去ぬ」になるのは同音のつながりです。「犬・いぬ」が「廉」になるのは、前に飼っていた犬の名前という連想です。「犬・いぬ」が「影」に転じるのは偶然です。

とりとめのない遊びであり戯れなのです。こんなふう言葉に転がしているうちに、眠りが訪れることもあり、目がさえてしばらく眠れないでいることもあります。

＊

私の書く記事はだいたい、言葉を転がしてできあがります。いい加減な人間なのです。

とっかかりがない状態で書く場合が頻繁にあります。とっかかりがないので、言葉をポンと投げて、言葉と呼ぶ感じで作文します。

今回はそれを意識的にやってみたいと思います。最近の記事に出てくる言葉、わくわくする言葉を投げたり、転がしたり、組み合わせながら作文してみることになります。

顔をうつす

「顔」も「うつす・うつる」も私の大好きな言葉です。字面を見ただけで、自分で口にしただけでわくわくしてきます。

＊

顔を映す。

鏡ですね。

顔を写す。

写真ですね。

顔を移す。

私の中では、鏡であり写真のことです。ただ、ひとさまは「顔を移す」でどんなイメージをいただくのかは分かりません。想像するだけです。

デスマスクでしょうか？ デスマスクもマスクです。すぐにこういうくだらない駄洒落が出ます。以前に記事でも書いたギャグです。

デスマスクは顔を移していますよね。その制作過程を想像すると怖いです。私はしたくないです。仕度無いデス。そんな心の準備ができていません。

マスク

マスク、仮面、マスカレード、仮面舞踏会。

わくわくしますね。

マスカレードといえば、この曲を思い出します。しかも、この動画を思い出します。

(動画省略)

カーペンターズによる This Masquerade ですが、なぜかマルグリット・デュラスの自伝的小説の映画化作品である『愛人/ラマン』(L' Amant) の映像が使われた動画になっています。

YouTube の醍醐味は、こういう編集に出会えることです。

その「なぜか」の偶然がすごくいい味の動画になっていることに驚きます。何度視聴したか覚えていないくらい好きです。音源も大きめで、中途難聴者の私には聞きやすいです。

*

デスマスクからマスカレードに来ましたが、この曲にうっとりしたので、次に行きます。

声を移す

声を移す。

声もわくわくする言葉で好きです。録音のことですね。

声を録る。

レコード、テープレコーダー、デジタル録音という流れでしょうか。

*

声を移すといえば、エコー、つまり、こだま、硯、木魂、木霊です。どの漢字もいい字面をしています。ぞくぞくします。「やまびこ」とも言いますね。山彦は名前みたいに見えます。海彦さんを思い出します。

自分の顔を水面に映して、恋して、水に落ちたという西洋の伝説がありますが、いろいろなバージョンがあるみたいです。諸説ありというやつです。

その水に落ちたナルキッソスが、こだまであるエコー（エーコー）という精霊と絡んでくる説もあるそうです。

*

姿を水面に映す。姿が移る。
声に移る。声が響く。声が伝わる。
音に移る。音が響く。音が伝わる。

いま人はこうした自然界の現象を自分で作り出すようになり、その作ったものに取り憑かれています。

自分の作った物に嗜癖しているのです。その最たるものは映像（姿）でも音楽（音声）でもなく、文字（意味）だと私は思います。

姿が伝わる。
声が伝わる。
音が伝わる。

言葉（音と形）が伝わる。

音声と文字が伝わる。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

こうした連鎖にイメージの韻を感じます。イメージが重なるという意味です。面白いですね。勝手につなげて感心していれば世話ないですけど。

広がりすぎたので、話を戻します。

真似る、シンクロ、影

声を移す。

声を真似る。声帯模写。

振りを真似る。形態模写。

私はこどものころから、物真似が大好きでした。物真似番組とかそっくりショーのたぐいには目がなかったのです。いまも「似ている」が大好きで好きすぎるくらいです。

これまでに「似ている」とか「そっくり」をテーマにずいぶんたくさんの記事を書いてきました。あらためて見ると呆れるほどです。

最近では「シンクロ」にも手を出していますが、基本的には「似ている」なのです。

「影」も「似ている」に似ています。こういうレトリックというかギャグの根っこにあるのも、「似ている」なのです。ここまで来るとビョーキかもしれません。

「似ている」に取り憑かれているようです。

取り憑く

霊が乗り移る。

霊が取り憑く。憑依。

このところ「うつる・うつす」をテーマに記事を書いてきましたが、「移る」の中に「乗り移る」という意味があるのがずっと気になっていました。

木の影が地面に映る。影が地面に移る。

木の影が水面に写る。影が水面に移る。

上のような例文の記事に使ったこともありましたが、こんなことをやっているうちに、私にとって「移る」がリアルにイメージできるようになってきました。

「映る」も「写る」も、ぜんぶ「移る」に面倒見てもらいましょう。そんな気分なのです。

なぜかと言いますと、みんな「移る」からなのですが、何が移るのでしょうか？

魂と心です。

心や魂が移るのです。姿だけではなく。

呪術の時代に生きる

心や魂が移るなんて、怪しいですか？ 妖しいですか？ 危ういですか？ 馬鹿らしいですか？

そうかもしれません。

でも、あなたは愛する人の写真を踏めますか？ 姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふう加工されて、冷静でいられますか？ 姿が映ったものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのですよ。

めちゃくちゃ言って、ごめんなさい。「映る」も「写る」も「移る」だというのは本心だし本気なのです。正気かは不明ですけど。

なにも、おどろおどろしい話をしているわけではありません。誰もが日常的に体験していることです。

＊

私たちは未だに呪術の時代に生きている、とまでは今回は言いません。

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 文字# 漢字 # 鏡 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画
呪術

04/18 過剰で過激な想像力

＊

過剰で過激な想像力

星野廉

2022年4月18日 09:24

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。
(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

昨夜もなかなか眠りに就けなかったので、うとうとしながら考えたことを思いだして言葉にしてみます。

目次

地面に映る

鏡に映る

人工の影

影を写す

言葉は最強の人工の影

過剰で過激な想像力

想像力を消していれば、ボタンが押せる

地面に映る

木が地面に映る。
木の影が地面に映る。
木の姿が地面に影として映る。

実際問題として何が移るのでしょうか。移動という意味です。影が映っているわけですが、その影って何ですか？

たぶん理系の問題みたいなので、理系的な発想ではなく考えてみます。光とは何かとか影とは何かなんて、私には荷が重すぎます。わくわくしません。

わくわくするどころか難しそうで気持ちが萎えてしまいます。

*

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしか私にはできません。

姿が影として、その輪郭だけが歪んで地面にうつっている。いまズルをしました。映っているのか、移っているのか分からなくなったのです。

ひらがなは便利ですね。漢字と違って、分からないところを保留できるのです。ぼかせるのです。ひらがなモザイク説。

*

輪郭はいいですね。輪郭がうつる。木という物、つまり本体は移っていない。

これは確かでしょう。たぶん。

なんか変です。

輪郭じゃなくてシルエットではないでしょうか。輪郭は枠で、その中が塗りつぶされている感じですから、シルエットに訂正します。

*

木が地面に影として映る場合には、木という本体はそのままで、シルエットが地面にうつる。

あっさりとしら一っを書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。謎ですから、なぞるしかなさそうです。空（くう）をなぞるのです。

想像するのです。像を想いえがく。イメージを抱く。抱きしめるのです。

鏡に映る

木が水面に映る。

木の姿が水面に映る。

実際問題として、何が移るのでしょうか。移動という意味です。地面の影とは違って、水面だと条件がよければ鏡みたいに映るわけです。

木の姿が鏡に映る。

これとほぼ同じではないでしょうか。映っているのは、姿であり、映像であり、鏡像とも言います。鏡像は私にとっては嫌な言葉です。理系ばいですよ。

辞書で調べてみました。やっぱり理系です。しかも数学とも関係あるみたいです。それに私の苦手な「鏡像段階」なんて言葉も載っていました。こういうもっともらしい用語はパスします。

*

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしかできません。

鏡に木が映っているのをイメージします。想像するという意味です。鏡を持って木のそばに行く気にはなれないのです。そんなところを近所の人に見られたらどうしましょう。

ただでさえ変人に見られているのに、へたすると通報されますよ。

「近所のおじいさんが、手鏡を持って桜の木のそばに立ってキョロキョロしています」

うちの居間でおとなしく想像しているほうが、ぜったいによさそうです。だいいち安全です。

*

木の姿が鏡像として鏡に映っている。木という本体の何かが移っているわけではなさそうです。木が傷ついたり、木の一部が欠けたり、減っているとは考えにくいです。

鏡像って何でしょう。理系的には考えられないので、想像しつづけます。左右が反対なんですよね。ところで、なんで上下はそのままなのでしょう。

なんだかとんでもない方向に行きそうなので、上下は考えません。

鏡像という言葉の意味不明なままに保留して使いつづけるのがいちばん、私にとって現実的な方法みたいです。

*

木が鏡に鏡像として映る場合には、木の本体はそのまま、その左右反対の鏡像が鏡にうつる。

あっさりとしらーっと書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。

人工の影

ちょっと待ってください。

鏡に映す像は意識的にうつします。これは「写す」ではないでしょうか。さらに言うなら「移す」です。そもそも鏡は人が作るものです。人の作った物に人が意識的に像（姿）をうつすのです。

映像、影像、いや、むしろ影（かげ・えい）と書きたいところです。自然にできている影と、人工的に作った影とは違うと思います。

＊

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

（拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用）

そうでした。そういうことです。

＊

人は影に意味を見るのです。自然の影であれ、人工の影であれ、その影に意味を見るのです。この意味には、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などが含まれます。

各人が影に勝手に意味を見るのですから、個人的なものでまちまちです。意味は人の中にあるものですから、確認も検証もできません。何らかの判断をするためには、各人の証言が必要です。

証言は言葉という形をとります。話し言葉であったり、書き言葉、つまり文字です。

影の意味は、文字として固定され、「残る・残す」ことが圧倒的に多いと思われます。

＊

影に何がうつっているかは、一概に言えるものではなく、各人がそれぞれ影に何を見るか、正確に言えば何を五感で知覚するかである、なんて言えそうな気がします。

もっと正確に言えば、影で各人のいadakイメージは刻々と変わるにちがいありません。猫を検索して、画像検索をするといろいろな猫の画像が出てくるのに似ています。一定していないし、固定していないように思います。

影に何が移っているかは、客観的にも普遍的にもとらえられないということですね。各人による言葉による証言しか、判断材料はないわけです。頭の中を見るわけにはいきません。

しかも証言は当てにならないでしょう。刻々と移り変わりつつある自分の中にある「何か」を言葉にするなんて土台無理なのです。だいいち、言葉はその「何か」ではないのですから。

言葉はお茶を濁すために存在するようです。

＊

とはいえ、言葉は大したものなのです。後で触れることになりますが、言葉によって、脳が暴走するのです（想像力のことです）。その起爆剤が言葉ですから、捨てたものではありません。

影を写す

人は影を意識的にうつします。影を作るのです。自分で作った影に意味を見たいからでしょう。正確に言えば、人は自分が見たい意味を見るために影を作るのではないのでしょうか。

ぜったいにそうです。さもなければ、わざわざ「鏡」（比喩です）を作ったり、その鏡に「影」（比喩です）をうつすなんて、面倒なことはしません。

人は自分の見たいものを見るために影を作り、あるいは見つくろった影を持ってきて、その影に自分の見たいものを見て、気持よくなりたいに決まっています。ぶっちゃけた話が、やらせなんです。

自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

*

影を写生する。

絵による写生、描写。言葉による写生、描写。

この場合には、本体つまり被写体、写される対象は無傷のはずです。何かが減ったり加わったり、変化することはないでしょう。

せいぜい、写生される間に時間的な拘束を受けて、劣化する、腐敗が進む、あるいは成長するぐらいでしょうか。

*

影を写真に撮る。

静止影像としての写真、写真撮影。レントゲンやCTやMRIも含めていいと思います。

フィルムによる映画の撮影、デジタル映像による動画。これもCTとかMRIがある気がします。詳しいことは知りません。

この場合には、被写体は何らかの変化をこうむるようです。放射線を浴びるなんて、目に見えないし、その後遺症は時間の経過を待たないと確認できそうもありません。

あ、そう言えば私は、この種の撮影の前に何度も造影剤を飲んだことがあります。あれって体に何らかの影響を与えているはずですが、大丈夫なのでしょう。

フィルム撮影やデジタル撮影は、ただ見ているだけでは済まない気がします。人は撮りたい絵を取ろうとしますから、被写体をいじったり、移動させたり、光や風など環境を変える可能性が大です。

＊

映画や写真にはぜんぜん詳しくないのですが、撮影には加工、修正、編集がつきものだと聞いています。

よく考えると当たり前です。写真や動画は被写体である事物ではないわけです。

そこに特撮、漫画、アニメ、CGといったものを考えあわせると、訳が分からなくなります。

私には荷が重すぎます。研究でも探求でもなく、私は好きで楽しむためにやっているのですから、知らないことを調べて深入りはしません。

寝入り際にネット検索なんてできません。いまは眠れない夜のとりとめのない思いを思いだしているのです。

言葉は最強の人工の影

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとしています。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える
――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持ちよくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあってこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

(拙文「続・外にあって、外からやって来て、外であるもの」より引用)

*

話し言葉である音声も、書き言葉である文字も、事物とはぜんぜん似ていません。少し似た感じがする身振りや表情という視覚言語にくらべても、似ていない度ははるかに高いです。

それなのに音声と文字による意味の喚起力、つまり意味、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などを呼びさましたり、さらには音声と文字をきっかけに、それらの意味を勝手に生み出す力には、想像を絶するものがあります。

そうです。想像力のことです。

この文字の呼びさます、そして文字が勝手に生み出す力は、文字を学習した成果なのでしょうが、そのように言葉で置き換えたところで、不思議さは解消されません。

過剰で過激な想像力

人の想像力は、過剰で過激なのです。逸脱しているのです。

だから、「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字を見て、各人が勝手に猫を想像するのです。

「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「ねこ」と発音して、その音は猫に似ていますか？

ぜんぜん似ていないのに、猫を想像するのです。あっさり書きましたが、すごいことではないでしょうか。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

*

持論なのですが、言葉は人の作った最強の映像、つまり影だと思います。

話し言葉（音声）や書き言葉（文字）によって、意味という像（イメージ・印象）が浮かんだり、意味の暴走が始まるのですから、これは絵や影や写真や動画と同じく映像と見なしてかまわないと思います。

そんなわけで、写真と動画の話に移ります。

＊

あなたは愛する人の写真を踏めますか？ その人ではなく、ただその姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふうに加工作られて、冷静でいられますか？ その人ではなく、その姿が映っただけのものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのによ。

想像力を消していれば、ボタンが押せる

愛する人の写真を踏める人は、想像力が欠如しているか、想像力を消している人でしょう。

想像力が欠如しているか、想像力を消していれば、平気で文字としての人を、数字としての人を処理したり処分できます。

さらには、文字や数字としての人を大量に処分するボタンを押せるでしょう。いろいろなボタンがありますが、もう何度も、無数に押されていますね。

最終ボタンだけは押す結果にならないでほしいです。祈っています。

Imagine.

#日本語 # 漢字# 和語 # 大和言葉 # 文字 # 漢字 # 鏡 # 影 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画# 想像力

04/18 なぞって、真似て、なる

＊

なぞって、真似て、なる

星野廉

2022年4月18日 14:34

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

目次

「真似る」を「うつる」で説明する

分身

あの世

魂がうつる

心に移る、気持ちに移る

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

ある、いる、いく、なる

形でも模様でもなく、顔

「真似る」を「うつる」で説明する

「真似る」と「うつる」はどちらも私の大好きな言葉で、わくわくするのですが、「真似る」を「うつる」で説明してみましょう。

やったことはありません。両者をからませると面白いことになりそうです。

＊

「真似る」と「学ぶ」は同源だそうです。たしかに似ています。「似ている」「似せる」「似る」ともからみそうですね。

言葉を真似ることで言葉がうつる。映る、写る、移る。

なるほど。自分で感心してしまいます。鏡や影みたいに映る。写真やコピー機みたいに写る。ある人から別の人に移る。要するに「伝わる」わけです。

こういう言葉の連鎖、イメージの連鎖が快いです。言葉の世界、イメージの世界、現実の世界がまじわる部分に身を置いているような気分になります。

この三つの世界は、そんなものがあるとしての話ですが、別個に存在するのではなく、三つの輪が重なりあってまじわるような形で「ある」ようにイメージしています。

人は、言葉の世界、イメージの世界、現実の世界という三つの世界を行ったり来たりするとも言えるでしょう。

分身

分身、もう一人の自分、片割れ、影のような存在。これはなかなか魅力的なイメージですね。

鏡、写真、動画、日記、自分で書いた作文、こども、きょうだい、おや——こういったものは分身という言葉でくれそうです。

分身の相手には何がうつる、あるいはうつっているのでしょうか。

*

分身には、姿（顔・身体）、魂、気持ち、気分、心、記憶、知識、血（血縁）、DNA、癖（表情・仕草・身振り）、声（声の質、話し方、口調）といったものが、うつり（移・写・映）、つたわり、模倣・学習されているのではないのでしょうか？

分身には「うつる」要素が満載なのです。これだけのものが、自分と相手の間で「うつる」可能性があります。あとは「うつる」濃度でしょうか。

頭に思えがこうとすると、ぞくぞくします。さまざまな分身がありえますが、通底するのは「愛おしさ」ではないでしょうか。食べてしまいたいほど愛おしいのです。

官能的で、エロチックにさえ感じられます。そもそも自分以外の自分というのは結合や合体に近いものがあります。結合や合体は別れでもあるわけです。

もともと異なるもの、同一ではないもの同士が出会い、くっつくのですから当然です。異なるものであった痕跡と記憶がある限り、別れはつねに意識されます。

いつか別れ別れになるのではないかという思いがあるからこそ、激しく結びつこうとします。

＊

相手に自分を感じる。他人に自分を見る。外見は違っているのに、血でつながっている。まったく知らない者同士が、遺伝子の検査できょうだい、あるいは親子だと判明した。

前世でつながっていた。前世では一個の人間だった。前世では親子だった。前世で、再会を約束していた。こういうのも、きわめて観念的ではありますが、一種の分身でしょうね。

観念であるがゆえに、燃えてしまうなんてありそうです。人は観念で欲情する生き物です。ポルノがいい例です。

あの世

あの世。天国とまでは特定しません。ざっくりあの世としておきます。

あの世に移る。

いい言葉ですね。移動の意味の「移る」が希望をいだかせてくれます。楽観的なフレーズと言えるでしょう。

あの世に遷る。

「遷る」は都なんかが移転するときに使う漢字のようです。遷都と言いますね。左遷の遷でもあります。変遷、遷宮も思いだします。基本的には「移る」なのですが、用法が限られています。

そうした知識はさておき「遷」という見慣れない漢字、あまり使ったことのない文字に異和感（違和感ではなく）を覚え、異化も感じ、なんとなく「いいなあ」と思ってしまいう自分がいます。

あえて理屈をつけると、「遷」は訳ありっぽいのです。単なる「移動」ではなく、なんか背景に事情がある気がして、「あの世に遷る」なんて書くと、「なんで？」とか「どうしたの？」と呼びかけたくなるのです。

勝手に呼びかけている。ですよ。一人で盛り上がりすぎて失礼しました。

魂がうつる

魂がうつる。魂をうつす。

文字どおりに取ってイメージする、つまり視覚的な絵として想像するのが難しい気がします。観念的であり抽象的なのです。

その身振りや動作をしろと言われても、戸惑います。比喻、暗喩ととらえて、具体的な動作に置き換えないと無理に思えます。

写真、とりわけ肖像や遺影には魂がうつっていきそうですね。愛する人、近親者はもちろん、知らない人であっても、その姿が写っていたり映っていると、魂が移っているように思えてなりません。

おろそかにはできないのです。

遺品整理は大変な作業でしょうね。いろいろな物に魂がうつっていると考えると、私にはできそうもありません。自分の生前整理どころか、唯一の肉親だった母の遺品整理もほとんど手をつけていません。

そのくせ、自分は神仏のたぐいは信じていないと信じているのです。魂と神仏という言葉は私の中では結びつかないのですが、人それぞれですよ。

心に移る、気持ちが移る

魂から話に移り、ほっとします。

心や気持ちは、魂と重なる部分がありますが、魂は重い言葉だと痛感しました。

心が彼女に移った。彼の心移りが許せない。心変わりをした。

その計画のほうに気持ちが移りつつある。気持ちが傾く。

ある人から別の人へと、誰かの気持ちが移るよりも、心に移るほうがずっと深刻な気がします。

気を持ちようや心の持ちようと心では大違いですよ。心は本尊みたいなものです。その本尊が移ってしまうなんて、想像しただけで悲しいし、心移した相手が憎くなりそうです。

*

こうやって、言葉を転がすことで、言葉の世界から思いの世界へ、さらには現実の世界を想像することができます。一時的な疑似体験みたいなものでしょうか。

これも、心や気持ちが移ることなのでしょうね。

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

「似ている・似る・似せる」「まねる・まなぶ」「なる・なりかわる・なりきる・なりすます」「かわる・ばける・てんじる」

私にとっては失神しそうなほど強烈なわくわくぞくぞく感をいだかせる言葉たちです。

こうした身振りや動作や仕草がぜんぶ入っている作品があります。

パトリシア・ハイスミス作の小説『太陽がいっぱい』と、その映画化された作品である『太陽がいっぱい』です。

以下の記事をお読みいただくのがいちばんいいと思います。

(記事へのリンク省略)

まだこの一連の言葉の連鎖とテーマについては語ることがたくさんありそうですが、いまの体調では無理なようです。

考えただけで息切れがしてきました。

ある、いる、いく、なる

記事の冒頭で引用した言葉の羅列をもう一度眺めてみましょう。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

こうした動きや姿やありようは、あらゆる生命に見られる気がします。生命、生き物はそうした過程を経ることで「生」をいとなみ、まっとうするのではないのでしょうか。

無生物でもそうしたありようが見られる気がします。たとえば、雲の形、水（液体、気体、固体）、岩・石・砂、光と影のありようが、そうです。長い目で見れば、あるいはごく短いスパンで見れば、生物か無生物かにかかわらず、万物流転という感じがします。

もちろん、人が勝手に見たありようにちがいはありません。人の思いや知覚とは別個に「ある」のでしょうか。

＊

人が「ある・いる・おる」から「いく・生く・活く・行く・ゆく・往く・逝く」や「なる・生る・成る・為る・慣る・馴る・熟る・鳴る・萎る・褻る」へと「うつる」。

いま書いた文はたわむれですが、私には「言えている」ように感じられてなりません。あくまでも個人的なイメージです。

個人的なイメージは、他人には荒唐無稽に見えるものです。

「アホか」「馬鹿らしい」で済ますことができます。それでいいのでしょうか。他人のことがすらすら分かるほうが荒唐無稽なのですから。

＊

言葉にそなわった音と形。これは人の外にあるものです。一瞬で消えていく音声、あるいはしばらくは残る文字の形としてあらわれるという意味です。人の外にありますから、音や形として確認できます。具象とか具体とか物と言えるでしょう。

その音と形が、人に意味やイメージをいだかせます。これは人、しかも各人の中にあるものです。中にあるのですから、確認できません。観念とか抽象と言えるでしょう。

＊

外にある言葉の音と形は、誰もが生まれたときにすでに外にあったものです。それを

真似て学ぶことができるのは、自分の外にあるからです。その外にある音と形を、耳や目や指や手で知覚し、なぞることによって、真似て学ぶわけです。

繰り返えし繰り返えしなぞり、真似ます。学習ですね。これは一生続きます。

*

言葉の音と形は、人の外にあって、人の中に入ってきます（なぞる・まねる）。そして出ていきます（はっする・はなす・なぞる・かく）。

人の中でどうなっているのかは確認できません。想像するしかないのです。手がかりは中から出てきたものでしょう。とはいえ、出てきたものもまた、音と形なのです。それしか確認できないのです。

*

どういうことなのでしょう。なんでなのでしょう。

不思議ですね。謎です。さっぱり分かりません。知ることもできない気がします。

言葉ほど不思議なものはありません。なぜ、これほど言葉の不思議さにこだわるのかと言いますと、言葉は意味をになっているからです。人は意味に振りまわされているからです。

*

意味には二つあります。一つは、辞書に載っている言葉の語義です。もう一つは、「人生の意味って何？」みたいな使い方をするときの意味です。

この二つを意味という言葉になわせることには無理がある気がします。それぞれ別の言葉をあてるべきだと思います。だいいち、ややこしいじゃありませんか。

「人生の意味って何？」「人生の意味？ 辞書を見れば」

＊

「無意味」の意味が辞書に載っているのは不条理でナンセンスです。「意味」の意味が辞書に載っているのはシュールなギャグです。

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

これがずっと続いて今日にいたるのです。なぜか。これからも続くでしょう。なぜか。

＊

ヒトは孤独な生き物です。言葉と意味は地球上でヒトだけに通じるギャグです。ヒトのひとり相撲なのです。ヒト同士でもよく通じません。一人ひとりのひとり相撲だからです。世界情勢を見ると悲しいほど明らかです。自分のまわりを見ると嫌になるほど明らかにはずです。

＊

半分冗談はさておき（半分は本気です）、次に参りましょう。

形でも模様でもなく、顔

ある、いる、いく、なる。

この言葉を並べて、口で転がし、文字としてなぞり、それをたぶん頭か子心か気持ちか魂の領域で、並べ、転がし、なぞるのでしょうか。

外と中。その両方を行ったり来たりしているかに見える言葉。声はたちまち消えます。文字だけが居続けます。消さない限りは残るのです。

文字は、うつしている、うつっている気がします。

何を、何が、何に、と関係なく、うつしている、うつっている。

*

文字は、答えてくれそうもありません。

外にあり外である文字は、なぞるしかなさそうです。目でも指でも体でもいいです。動かす中で触れるしかなさそうです。

こちらから働きかけない限り、文字はただの模様としてあるだけなのです。文字が文字であるためには、文字が文字になるためには、こちらが文字になる必要があるのかもしれない。

なぞって、真似て、なるのです。赤ちゃんのように。赤ちゃんだったころのように。赤ちゃんのころほど「なる」である時期は、人にはないと思います。だんだん「いる」「ある」になって「いく」のです。さいごはもちろん「いく」です。

文字はたぶん顔なのです。形でも模様でもなく顔です。

*

とりとめのない文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文字 # 言葉 # 作文 # 顔

04/19 自分、分身、身内

＊

自分、分身、身内

星野廉

2022年4月19日 08:27

自分こそ、分身の最たるものではないでしょうか。「自分」と言葉で意識したときに、すでに分かれている、別れている。そんな気がします。自分を見ている自分がいるからです。自、分、だからではなく。

分身は、愛おしいです。自分から離れて、うつった、移った、映った、写った、存在なら、子でしょうか。自分の元なら、親でしょうか。親に対する愛おしさと、子に対する愛おしさとは違うのだらうと想像します。

私には子がいません。親は亡くなりました。

自分と別個に親から、離れて、放れた、存在が、はらからでしょうか。枝同士とか根っこ同士みたい。わかれているながら、つながっている。おたがいに、そっくり。これも、私にはいないので、想像するしかありません。

＊

自分、分身と来て、今度は身内という言葉が出てきましたが、これも私にはぴんと来ない言葉です。そういう意識が希薄な環境で生まれ育ちました。その後もずっとそんな感じで生きてきました。

身分けはどうでしょう。そんな言葉を、昔、本で読んだことを思い出しました。身分け、言分けだった記憶があります。見分け、事分け。

分けるのは苦手です。分けなくてもいいです。分からなくてもかまいません。

身分け、身分、ひっくり返して分身。戻して自分。うつして、わけて、帰った孵ったようです。卵みたい。

黄身の片割れが白身なのでしょうか。もしそうなら、白身は黄身を何て呼ぶのでしょうか。ねえ、……。白身って自身に似ていませんか？

*

意味はありません。失礼しました。

日記

04/22 片割れ

＊

片割れ

星野廉

2022年4月22日 08:38

自分こそ、分身の最たるものではないでしょうか。「自分」と言葉で意識したときに、すでに分かれている、別れている。そんな気がします。

(拙文「自分、分身、身内」より引用)

片割れというと、バニシング・ツインを思い出します。ふたごで生まれるはずが、胎内で亡くなってしまった片割れのことらしいのです。

自分にバニシング・ツインがいたと両親から聞かされて育った少年の話を書こうとしたことがあります。草稿はあるのですが、そのままになっています。

ある少年から聞いた話を勝手に膨らませたものです。似ているとか、そっくりとか、分身とかが好きなら私には魅力的なテーマに感じられます。

＊

一方で、残酷な話にも思えます。そんな話を聞かされて育った子は、何かを負って生きる気がするからです。負って追われているのかもしれない。

感知できない物語（抽象）が過酷な生（具体）に転じる恐ろしさを感じます。

具体的には、毎日鏡を見るたびに片割れをみとめ、声を出すたびに別の声を聞き、欲情するたびにもう一つの欲情を感じるのです（私の草稿ではそんな展開になります）。

しかも生まれる前にお母さんのお腹の中で別れた片割れが異性だったとすれば、人との関係で大きな影響を与えそうに思われます。

私が考えすぎなのかもしれません。モデルの少年は、しごくあっけらけんと身の上を語ってくれたのです。何かを負ってしまったのはむしろ私のようにです。

*



二点があれば顔を見てしまう。顔に見えてしまう。そんな話を何度か見聞きしました。

天井の模様やトイレの壁の染みと同じようです。私たちは顔に囲まれて生きています。たぶん生まれたときに顔に囲まれていると感じたからでしょう。

顔は安心させてくれる一方で不安にさせもします。

*



どきっとする。ぞくっとくる。

もし、二点に顔を見てしまったとすれば、鏡の中を覗きこむ体験に近いかもしれない。

「それ」が顔である以上、こちらが見ることは、相手が見ることに他ならないからであり、そこに関係が生じるから。

顔は人にとってそれほど特権的なイメージ。

これを擬人、鏡像、錯覚、影、まぼろしと名づけたところで、手なづけることはできない。こちらが優位に立てるわけではない。謎と不安は解消されない。

「それ」は自分のようで自分ではない。自分の一部のようにそうではないらしい。ないらしいとしか言えない。

顔を見てしまったとたん、ままならない、つまりこちらの思いどおりにならない存在がそこに「いる」。それが片割れ。

＊

片割れ。

親から見れば、自分は親という自分の一部。「それ」も、親から見れば、親という自分の一部。

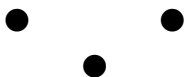
「それ」から見れば、自分は「それ」という自分の自分ではない。

「それ」を見てしまったという限りにおいて、「それ」は自分なのかもしれない。溶けて消えてしまった自分なのかもしれない。

消えているからこそ、それは「それ」、または「何か」として目の前に立ちあらわれている。

言葉、文字、映像、影、意味、イメージ、まぼろし。

＊



何らかの関係性を見てしまう。かたちを見留めてしまう。意味を見てしまう。実体は、おそくないのに。

＊

バニシング・ポイントという言葉思い出しました。消失点と訳されています。遠近法で絵を描くときの不思議な点です。架空の点というべきなのでしょうか。

その説明の絵を見ていると気が遠くなりそうで、好きです。人の思いの仕組みを目で見ているような気分になります。

「思う」以前の「感じる」、つまり知覚が、あんな感じなのかもしれません。

誰も直接に見たことがなく体験もしたことがないのに、リアルなものとして、人にまわりつつける仕組みとか仕掛けみたいに思えます。学習（まなび・まねび）ではなく直感とか直観のようだという意味です。

＊

● .

たとえば、大小を見てしまう。ウィンクを見てしまう。陰陽、月と太陽を見てしまう。月と地球を見てしまう。自分と親を見てしまう。自分と子を見てしまう。片割れを見てしまう。自分とあの人を見てしまう。

隔たりを見てしまう。遠さを見てしまう。近さを見てしまう。近さや親しさを見てしまう。似ているを見てしまう。差異を見てしまう。色を見てしまう。重さを見てしまう。量を見てしまう。形を見てしまう。魂を見てしまう。感情を見てしまう。

＊

.
●

たとえば、遠近を見てしまう。トンネルを見てしまう。「ここ」と「あそこ」を見てしまう（空間）。「いま」と「いつか」を見てしまう（時間）。わたし（わ・吾・我・な・己・

汝)とあなた(わ・吾・我・な・己・汝・彼方・貴方)を見てしまう(関係)。

＊

その説明の絵を見ていると気が遠くなりそうで、好きです。人の思いの仕組みを目で見ているような気分になります。「思う」以前の「感じる」、つまり知覚が、あんな感じなのかもしれません。

ただし、その仕組みには気づかないのです。気づいたら、仕組まれた仕組みではなくなるからです。その意味で、仕組まれた仕組みとは、錯覚であり捏造であり、距離化(距離の捏造)であり、奥行き、深さの捏造、背景・歴史・始原の捏造、物語・筋書き・フィクション(話の捏造)なのです。

要するに、作り話ということになります。想像力や創造性と呼んでみることもできるでしょう。作ったという点では同じです。

それしか人にとってのリアルはありえません。世界と直接には触れあえないからです。人は意味という物語の中に放りこまれているのかもしれません。疑念や異議はいっさい認められない夢に、です。

人は隔靴搔痒の遠隔操作をして生きていると言えそうです。もどかしいと思いつつ、自分という殻の中から外の世界を見ながら遠隔操作しているさまを想像してみてください。

＊

隔靴搔痒。長靴を履いたまま、足の痒いところを搔いているようにもどかしいが、それしか搔く方法がない。それしか描く、書く方法がない。

なんで、こんなことになるのか？ たぶん、欠けているから。したがって、賭けるしかない。

かけているから、かいても、かいても、かきたらない。

＊

・



実体はない二点に、現実界（そんなものがあれば）にある似た関係を重ねてしまう。あるいは、思い（そんなものがあれば）の中にある、それと似た関係を重ねてしまう。

彼方にある、像に目の前の像を重ねてみる。重ねて見る。そうやって彼方を操っていることにする（遠隔操作）。

遠隔操作を忘れる、あるいは気づかないで、ここにいてここと向きあっていることにする。

その仕組みは忘れる（思いだしても消す）。その仕組みには気づかない。気づかない限りはその仕組みが使える。気づくと使えなくなる。つまり、気づいてもいいことは一つもない。

この仕組みがあって、人はここまで築きあげてきた。良い悪いの問題ではない。

ここ、かなた。いま、いつか。わたし、あなた。ひとつ、たくさん。うえ、した。かみ、しも。みぎ、ひだり。うち、そと。

＊

一、二、三。

1 2 3

乙、影、山、猫、語、聖、蠢

dog sea space letter

文字、かたち、もよう。線と点からなる文字をなぞる。

何度も何度も真似てなぞり学ぶ。学習の成果。

「カフ力」を「カフカ」と読むのも学習の成果。それくらいのエラーや書き換えは無視するのが学習の成果。

漢字の「力」とカタカナの「カ」を区別しろというのが無理。漢字の「口」とカタカナの「ロ」を識別するのが無理なのと同じ。

マカロン。

*

dog を d、o、g や g、o、d と読んではならない。dog を思いうかべることが読むということ。

犬に「大」という文字を見てはならない。犬を思いうかべるのが学習の成果。

聖に「耳」と「口」と「王」を見てはならない。

BBQ をビービーキューと読んではならない。

いまではなぞるのでなく、指で入力する文字。文字は究極の抽象。究極の顔。究極の謎。究極の映像。究極の錯覚。究極の擬態。究極の影。

入力した瞬間にネット空間で複製され拡散される文字。複製の複製を見分けることはできない。本物と偽物、現物と似せものを区別する意味はなくなっている。

*

このように必然ではないものに、ある程度の必然を感じるようになるのが、何度も何度もなぞった結果、つまり学習の成果と言えそうです。偶然や恣意（でたらめ）に必然と整然を見る想像力が養われたとも言えるかもしれません。

この想像に、ある程度の有効性があることも確かであり、たとえば仲間を月に送りこんだとか、地球の温度を〇度上げたとか、あなたと私がいまこうやって端末でつながっているという実績に感動しない人はまずいないと思われま

この途方もない仕組みを砂上の楼閣と見るか、堅牢なパルテノンと見るかは、人それぞれでしょう。

＊

要するに、作り話ということになります。

でも、それしか人にとってのリアルはありえません。世界と直接には触れあえないからです。人は意味という物語の中に放りこまれているかもしれません。

もちろん、いま述べたのも、たんなるお話です。それ以上でもそれ以下でもありません。人は遠隔操作して現実を生きているなんて、分かるわけがないじゃありませんか。

言葉の綾なんです。ヒトという生き物だけに通じる——それでいてヒト同士では通じないことの多い感のある——言葉というギャグを使ったギャグという意味です。

いまあなたが読んでいるのは言葉であり文字なのです。それ以上でもそれ以下でもありません。

ですから、本気に取らないでくださいね。

＊

消える。無くなる。遠くにある。たどり着けない。

消えているけど無くなっているけど、有る、在る、居る、生きている。

遠くにあるけど近くにあると知覚する。遠くを知覚する。遠くを近くする。遠隔操作。

遠近があるように見せる。奥行きがあるように見せる。深みがあるように見せる。広いように見せる。俯瞰しているように見せる。拡大しているように見せる。速いように

見せる。早いように見せる。遅いように見せる。多いように見せる。少ないように見せる。痩せているように見せる。背が高いように見せる。優しいように見せる。お金持ちに見せる。賢そうに見せる。誠意があるように見せる。

要するに、やってる感じじゃないですか。「感」だけ。いかにも本物らしいの「らしい」と同じ。文学っぽい「っぽい」と同じ。哲学的「的」と同じ。知っている振りの「振り」と同じ。

実体がない。あるように見えるだけ。それが言葉。とくに文字。

文字を文字どおりに取ると馬鹿を見る。文字を文字どおりに取らないと阿呆を見る。どっちもどっち。すももももももものうち。

かけているから、かいても、かいても、かきたらない。

*

そして、十年が過ぎた。

*

あれから十年後――。

*

たとえば、こうやってやすやすと時間の処理をするのが言葉であり、言葉の虚構です。こうした仕組みには騙されるしかない、騙られるしかないのでしょう。

書かれた文字はいったん信じるしかないようです。読むことは信じることです。信じないと読めないからです。

反発や否定や苛立ちは、読んだ後の話と言えるでしょう。

文字のこうした仕組みにいちいちかかわっては日常生活はいとなめません。

＊

誰もがバニシング・ツインという物語とバニシング・ポイントという仕組みをかかえている気がします。

かかえているけど、見えないのです。いや、かかえているから、見えないと言うべきかもしれません。

そんなの分かるわけがないじゃありませんか。たんなる言葉の綾なのです。

文字どおりに取らないでくださいね。

とはいえ、文字を文字どおりに取らないのは至難の業です。そんなことをすれば、たぶん人でなくなります。外に出て、外そのものになることになります。

#日記# コント# レトリック# 文字# 顔

04/22 そして、十年が過ぎた。

＊

そして、十年が過ぎた。

星野廉

2022年4月22日 20:05

そして、十年が過ぎた。

(中略)

たとえば、こうやってやすやすと時間の処理をするのが言葉であり、言葉の虚構です。こうした仕組みには騙されるしかない、騙られるしかないのでしょう。

(拙文「片割れ」より引用)

小説を読んでいる、いきなり「そして、十年が過ぎた。」みたいな記述に出会うことがあります。映画やテレビドラマでも、とうとうに「十年後——。」なんて字幕が現れて、えっと思うことがあります。

信じるしかありません。読むことや見ることは信じることなのです。読んだことや見たことに疑問を持ったり、批判したり、否定するのは、信じた後に来ます。

文字どおりに取ると馬鹿を見る。そうも言えますが、文字を文字どおりに取らないでいるのは、人をやめろというのに等しいのではないのでしょうか。

「そして、十年が過ぎた。」とか「十年後——。」なんて信じてはならないのです、とは言いませんが、文字には、以上述べたような性質があるのを知っておいても損にはならないとは言えそうです。

＊

文字や文章だけでなく、聞くのもそうかもしれません。

聞いている間は、聞いている内容を否定する余裕がないからです。反発を覚えて聞いていても、聞いている限りは肯定しているのです。もちろん、意識に余裕が出てくると反撃の構えに入ります。

そのときには、逆に相手の言うことを聞かなくなって、反論の言葉を練る過程にいます。二つ以上のことに集中するのは至難の業です。これには個人差があり、複数のことにある程度集中できる人は才能に恵まれていると言うべきでしょう。

＊

読む、見る、聞く、匂いを嗅ぐ、味わう――。

何らかの知覚を人が経験している最中には、知覚した時点ですでにその体験を信じているわけです。その体験に投げ込まれているようなものです。無理やりには言いませんが、体験しつつある側には選択肢はないと言えます。

＊

音楽がいちばん分かりやすいでしょう。楽曲を聞きはじめると、よほど嫌いな曲でない限りは聞きつづけます。人を運んでいくという点では、音楽はもっとも優れた乗り物であり、あれよあれよと聞き手を運んでいくからです。

麻薬とは言いませんが、お酒と同様に、音楽を聞いている間は一種の酩酊状態にあるのかもしれません。

映画館で見る映画もあれよあれよでしょう。演奏時間という枠のある音楽と同じく、上映時間という拘束が人を縛りつけるからです。ビデオで見る映画は中断する権利を見る人が握っているので、縛りは緩いと言えます。

＊

夢はどうでしょう？ 夢はたった一人で映画館の最前列の座席に縛りつけられて強制

的に見せられる映画のようなものです。

夢の筋書きというか進行には注文は付けられません。夢を思いどおりに見ることができますか？

その意味で夢は究極のあれよあれよという乗り物かもしれません。自らの意思では、行先も決められないし、下車できないのです。

＊

夢の中でジェットコースターに乗っている場면을思いえがいてみてください。ずんずん上がっていきます。あと三メートルほどで下りになります。胸がどきどき高鳴ります。

あなたの後ろの席の女性が声を上げはじめました。雲一つない空がどンドン近づいてきます。上りつめたコースターの速度が一瞬遅くなります。

そして、十年が過ぎました。

＊

あなたは、いま現実という映画を見えています。ままならないという点では、現実も夢に負けないくらいのあれよあれよです。

現実は思いどおりになりますか？

あなたはたった一人で映画館の最前列に座らされているのかもしれませんが。しかも座席に縛りつけられて。あなたは見ているだけ。

そして、十年が過ぎました。

＊

十年前のあなたを思いだしてください。note で記事を読んでいたあなたです。記事の

タイトルは「そして、十年が過ぎた。」でした。

現実は思いどおりになりますか？

思いは思いどおりになりますか？

言葉の世界は思いどおりになりますか？

*

読むことは信じることです。信じないで読むことはできないのです。

文字を文字どおりを取らないで読むことも、たぶんできないみたいです。

#エッセイ # コント

04/23 バニシング【三人称エッセイ】

＊

バニシング【三人称エッセイ】

星野廉

2022年4月23日 07:40

「女性の恋人ができるたびに、交際を邪魔をされている気がしてならないんです。幻聴が聞こえることはありませんが、命令されているとか行動を指示されている感じはします。

付き合っている相手が男性だと、邪魔されている気はしないですね。ただ、自分の中にいる片割れが僕の体を借りて楽しんでいる感覚はあります。嫌ではありませんよ。そんなときには僕も楽しんでいるんです」

会社員Sさん（男性・24）は語る。

＊

大学を卒業して就職し、両親と離れて住むようになったことで、Sさんが母親から片割れの話の聞かされることはなくなった。それがうれしい。なぜ、母親があれだけ片割れに執着するのか。理解できないことはないが、一人で生活するようになってからは、やはり母親の態度は行きすぎていると思う。

「あなたの中には、Kちゃんが溶けている。Kちゃんはあなたの中で生きているのよ」

繰り返えし聞かされた言葉だ。母親の話では、妊娠時の検査ではふたごを出産する予定だったが、そのうちの一人が胎内でしだいに小さくなり、しまいには「溶けてしまった」らしい。

「ちゃんとしないと、Kちゃんが悲しむでしょ？」

『そんなことをすると、Kちゃんが笑っているよ』というバージョンもある。母親の言葉を父親はにこにこしながら、そばで聞いているだけだ。父親は片割れの話はいっさいしない。

片割れの命を吸って自分は母親の胎内で生きのびたという思いが、Sさんにはまだある。

「うちの宗教というか信仰のようなものですね。仏壇ですか？ それはないです。位牌もありません。お腹の中で溶けたというんですから、遺骨や遺影があるわけじゃないし。ただ毎日何かの形で話には出てきます。話すのは母だけですけど」

片割れの話は母親の創作ではないか、作り話なのではないか。そう思ったことは何度もある。母親と離れて住むようになり、それがいまでは確信に変わってきている。

「そうでも思わないと、僕は自由に恋愛もできないし、結婚もできない気がするんです。——ええ、するつもりです、相手が女性でも男性でも。結婚して子どもが何人もほしいと思っています。ひとりっ子は寂しいですもん」

明日、久しぶりにSさんは帰郷する。母親とはこれまでどおりに接するつもりだと言う。

「明後日が誕生日なんです。ケーキは二つ出てくるんですよ。子どものころには友だちが不思議がりました。もちろん、友だちは事情を知りません。わが家の秘密ですから。僕もプレゼントをするんです。これだけはやめません」

Sさんはうれしそうな表情で言い、片割れへのプレゼントが入っているという、足元に置いたデパートの袋を指さした。

三人称エッセイ # 誕生日 # 片割れ # 小説 # 掌編

04/23 空っぽ

＊

空っぽ

星野廉

2022年4月23日 12:33

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的にはやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

(拙文「【夜話】正方形と長方形で悩む夜」より引用)

目次

空っぽの立方体

各面が画面になっている箱

愛という箱、真実という箱

振りまわされる

置き換える

関係性

なぞる

空っぽ

空っぽの立方体

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることでかしくまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

中に何も入っていないことがいちばん大切です。なにしろ、言葉の話をしているのです。言葉が空っぽの箱だという話です。

言葉には何かが入っていますか？

＊

猫、ねこ、ネコ、neko。

この言葉には何も入っていません。入っている、何か詰まっていると感じるのは人だけです。猫にはそう感じられないでしょう。猫に尋ねたことがないので想像するだけです。

ネコという音声でも、ネコという文字でも事情は変わりません。空です。殻なのです。

ネコという言葉を作ってネコだと決めたのかもしれませんが。その場に立ちあつたことがないので想像するだけです。

こんなふうに言葉には不思議なことがたくさんあります。空っぽなのに謎だらけなんて、ギャグに思えてなりません。

＊

言葉はヒトにしか通じない擬人ギャグのようです。

たとえば、猫にも通じない猫という言葉でギャグ独走状態なのです。オカメインコ（オカメですよ）でもコビトカバ（なんというネーミングなのでしょう）でも事情は同じです。

孤独なギャグです。独走、独奏、独創、毒草。しかも空っぽなのだから、不思議です。

＊

言葉に罪はありません。私は言葉が大好きです。愛しています。そんなわけで、言葉のあり方に疑問と懸念をいただいているのです。

つまりは、言葉に対する人のあり方に、です。

念のために申し添えます。

各面が画面になっている箱

猫を思いうかべてください。視覚的なイメージが浮かぶかもしれません。刻々と変わ
りませんか？ 猫をネットで画像検索してみると、いろいろな種類の猫がいろいろな格
好をしています。

生まれたての子猫もいるし、高齢らしき猫もいます。それぜんぶが猫です。それと同
じく、猫という言葉で各人が思いえがく猫のイメージは数えきれないものであり、刻々
と移り変わっていると考えられます。

つまり、猫という言葉は、音声と文字としては確認できても、猫のイメージは確認で
きないことになります。想像するしかないのです。

*

猫という言葉を空っぽの立方体にたとえるなら、その各面には猫の画像がつぎつぎと
映しだされている感じでしょうか。各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空
です。画面に映った映像も、空っぽです。

斜めから見ても後ろから見ても駄目です。映像だからです。投影された影みたいなも
ので、実体はないという意味です。

でも、猫なのです。その箱は猫だと決めたのです。cat でも事態は変わりません。

愛という箱、真実という箱

猫を見たことはありますか？ 触ったことは？ 山を見たことはありますか？ 薔薇の匂いを嗅いだ経験はあるでしょうか？

愛はどうですか？ 真実や論理に触ったことはありますか？ 詩の匂いを嗅いだことはありますか？ 哲学や思想を舌で味わった経験はどうでしょう？

*

文学っぽさ、論理っぽい、真実らしさ、愛のような、哲学的、詩みみたいな、知っている振り。

ぽさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り。こうしたものが、言葉の空っぽらしさ、空っぽぽさを表している気がします。

*

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

上に引用したのは、何度もいろいろな記事で私が書いてきたフレーズですが、「ぽさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」と同様に、これも言葉の空っぽさを表している気がします。

たとえば「○△X」という言葉をめぐって、「○△Xとは何か？」とああでもないこうでもない、ああだこうだが続いているのは、「○△X」という言葉が空であり殻でしかないからではないでしょうか。

中身がないから、「何か？」の答えが出るわけがないのです。これまでも出なかったし、いまも出ていないし、これからも出ないでしょう。

ただし、「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」はあるでしょう。

01/20 土曜日

実体はなく、イメージやまぼろしとして立ちあらわれている感じです。

*

愛、真実、論理、詩、小説、哲学、文学、平和、思想、普遍性、客観性。こうしたものを、ネットで検索するとその使い方が分かります。その言葉が使われている文や文章の中で、その言葉は生きています。

「〇〇とは？」ではなく、その〇〇の用法を見て、積極的に「〇△Xっぽさ、〇△Xっぽい、〇△Xらしさ、〇△Xらしい、〇△Xのような、〇△X的、〇△Xみたい、〇△Xの振り」とたわむれることが大切だと私は思います。

たとえば、愛という空っぽの箱、真実という空っぽの箱の各面に、ネットで検索した文や文章が映るようなものです。その映像をながめる。その画面の後ろには何もないのだと割りきることで、気持ちが楽になればいいですね。

何かを想定して振りまわされ躍起になるよりは、心やすらぐのではないかと私は思います。

とはいえ、ないものに振りまわされるのが好きでたまらない人もいます。人それぞれです。

振りまわされる

言葉ではなく、どうやら自分たちが言葉に勝手にいただいているイメージやまぼろしに、人は振りまわされているというのが正確な言い方かもしれません。

「〇△Xっぽさ、〇△Xっぽい、〇△Xらしさ、〇△Xらしい、〇△Xのような、〇△X的、〇△Xみたい、〇△Xの振り」をめぐっててんてこ舞いしているようです。

上の「〇△X」に、あなたのいちばん気になるもの、いちばん愛しているもの、いちばん嫌いなものを当てはめてみると、体感できるのではないのでしょうか。

「振りまわされる」には、愛も憎しみも怒りも悲しみも含まれます。

そして、喜びや快感もです。人は振りまわされることに嗜癖しているのかもしれない。

置き換える

言葉の根っこには、置き換えるがあるようです。



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、置き換わっていくわけです。

*

Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する。

Aの代わりにBを用いる。つまり代用する。

「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる。

これも、十三年ほど前から、何度も使ってきたフレーズです。言葉の仕組みについて述べたものです。

代用するというのは、置き換えることに他なりません。

猫の代わりに猫という言葉を用いる。このように言えば分かりやすいと思います。

話し言葉である音声、書き言葉である文字だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も、事物の代わりに用いられます。置き換えているわけです。

関係性

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。現れるのです。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。



今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

*

人それぞれですが、二点を見ている限りは何か置き換えています。そのものを見るというのはきわめて難しいようです。かならず、何か自分の知っているものやことに置き換えるのです。

いま私は二点とか、大きさの異なる二つの黒い点という言い方をしました。これは一つの見方です。人によって、



をどんな言葉に置き換えるかは異なります。たまたま似たような言葉になるのは大いに考えられますが、つねに同じではないでしょう。

いずれにせよ、関係性に置き換えて見てしまいます。無意味というのも、関係性です。

関係性を、意味、筋書き、物語、背景、隠れた意味、隠喩などに置き換えることもできるでしょう。

因果関係という物語にまで発展させる人がいても驚きません。

なぞる

*

.



*



＊



＊

背後には何も無いはずなのに、何かを見てしまう。これは何かをなぞっているとも言えそうです。

人は無意味なものを恐れます。不安に駆られるのです。そこで、何か見たいもの、これまでに見たものに置き換えます。

言葉の場合だと、名づけるのです。名づけて手なづけ、飼いならそうと試みます。何か知っているもの、お馴染みのもの、要するに自分が安心するものに置き換えることで、心の平静を保つとか、気持ちの上で優位に立とうとするわけです。

＊

それはそれでいいのです。そうしてこそ、人です。それができないと人として生きるのに困難を覚えるでしょう。生きづらくなります。

一方で、別の生きづらさも引き受けなければなりません。それが意味です。意味には、イメージ、筋書き、物語も含まれます。こうしたものは、人を振りまわします。その結果として、生きづらくなります。

＊

意味、イメージ、筋書き、物語には、人を振りまわすと同時に、人の気を逸らす働きもあります。

お馴染みのもので、無意味という不安な気持ちを逸らすのです。

イメージや物語には動きがありますから、よけいに気持ちが紛れます。表情や身振りの根っこには動きがあります。動いているものを見ていると、自分も動きます。

気持ち、心、魂だけでなく、体も動きます。というか、いま挙げたものは連動しているのです。

*

なぞるという動きを利用したものが、言葉でしょう。音声であれば、波ですから、もろに動かされます。

文字であれば、繰り返しなぞって真似て学んで習得しますから、それが学習の成果として自動的に動きを誘います。

これはすごい工夫です。

私は文字というものが不思議でなりません。よくもまあ、こんなややこしい、込みいった仕組みのものがあるものだ、とたえず感心しています。

*

文字は習得しないと意味を持ちません（その文字を知らない人には無意味です、ヒト以外の生き物にも意味を成しません、これだけでも不思議だしすごいです）。習得すると、人を動かします。人は文字で動いていると言っても言いすぎではないでしょう。

音声や表情や身振りや映像よりも、人は文字に信頼を置いています。学習の成果は恐ろしいものです。

文字の基本は信じることです。文字を読むことは文字を信じることに他なりません。いったん信じるのです。信じるのを撤回するのは至難の技です。面倒でもあります。

つぎつぎと文字が目の前に現れるのですから、処理しきれないのです。そのため、人は文字を受け入れ、圧倒され、結果として信じてしまう場合が多くなります。

批判、否定、反発は、信じた結果として生じる後付けです。信じたことには変わりありません。信じないと否定もできないとも言えます。

空っぽ

二つの点をいろいろに置き換えられるのは、二点が空っぽであるからに他なりません。空っぽだから、各人が勝手に何かを見てしまうのです。何を見てしまうのかは、そのときの気分や体調や天気にもよるでしょう。

一定していないのです。移り変わるし揺らぐのです。それが人です。正解が一つだけあるわけではないし、天才とか神のような人と呼ばれる人だけがある正しい答えを独占しているわけでもないでしょう。

そう思ったがるのが人情なだけだと思います。

*

「空っぽ」を「中身がない」とか「無意味」とか「無」とか「意味の萌芽」とか「有意味」とか「有」とか「存在」とか、いろいろに置き換えられること自体が「空っぽ」だからでしょう。

ここでお断りしますが、依然として言葉の話をしています。音声、文字、表情、身振りのことです。

*

「空っぽ」です。空（くう）とか、無（む）とか、気取ったり格好を付けると語弊や言葉の垢が付いて、空っぽが「有」になってしまいます。「っぽい」が付いてしまうのです。

言葉は空っぽなんです。だから、そこに何かを詰めこんでしまうのです。それが人情です。

なにしろ、空っぽを直視したら、人はたぶん人ではなくなります。人の外に出て、外そのものに化してしまうかもしれません。もちろん、いまのは比喻です。置き換えです。

置き換えている限り、大丈夫です。

置き換えないことには、直視してしまいますから。雲をつかむ「ような」話で申し訳ありませんでした。

「ような」でいいのだと思います。つかめるわけがない雲をつかんでしまったら……。想像するだけにとどめましょう。想像は置き換えですから。

#文字 # 言葉 # 意味 # 物語 # 筋書き # イメージ # 想像

04/23 空から降ってくる言葉

＊

空から降ってくる言葉

星野廉

2022年4月23日 16:16

いま私の寝る部屋は亡くなった母の寝室でした。最期の母は長方形の枠から立方体に収められ、つぎに立方体に収められて帰ってきました。その立方体の中の母は球体だとイメージしています。その球体もまた器なのだと思います。人はなんらかの器に収まっているという意味です。そう考えると安心します。

(拙文「【夜話】正方形と長方形で悩む夜」より引用)

私は丸かったり球状のものには洗練を感じます。形として見事で美しいのです。あと、丸いものは広がるというか拡散する気がしてなりません。無限に大きくなっていくのではないかという怖さも感じます。固体や液体よりも気体をイメージしているのかもしれない。

(中略)

ふわふわ——こんなのが飛んでいけば妖しいです。見たことはありませんが、火の玉を連想します。ただ人魂だと思えば、気心の知れた同士ですから、手を合わせてひたすらお祈りをする事で消えてくれそうな楽観と安心感があります。

(拙文「【小話】あやしい動きをするもの」より引用)

目次

文字という異物

空っぽの立方体

球体の言葉

上を向く、正面を向く

空から降ってくる言葉

球体のイメージ、立方体のイメージ

大風呂敷を広げる

進化する影

まだ続いている夢

文字という異物

私は文字に異物を感じます。なぜかは分かりません。分からないから、この記事を書いている気もします。

文字の異物感は、人の作るもので自然に帰らないものが圧倒的に四角い形をしている異和感（違和感ではなく）にも似ています。

とうとうにこの星に現れたもののような感じと云えばいいのでしょうか。地球外的な異物性と云えばいいのでしょうか。不自然であり、反自然にも思えるほどです。

*

表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）という四つを私は言葉として考えています。

表情、身振り、音声は、発せられた瞬間に消えますが、文字だけが残ります。消さない限り居座るのです。これが私には驚きです。不思議でなりません。

また、文字を習得するにはかなりの時間がかかります。どの言葉も覚えるのに時間がかかりますし、一生かけて覚えていくものですが、文字の習得に要する時間と労力は群を抜いています。

それでも必死に覚えようとします。識字率という言葉があることが、文字の学習の特殊性を物語っているでしょう。

あと、学習塾で教えていたころに、文字の読み書きだけが著しく苦手な生徒さんを相手に四苦八苦したことも思い出されます。

ふだん喋っている分にはじつに感性豊かで聡明なお子さんでした。学習障害という言葉がなかった時代の話です。不思議でした。

＊

謎です。なぜ、文字だけが、こうなのでしょう？

人類には無文字でいくという選択肢もあったはずなのです。手話という言語の存在も気になります。

空っぽの立方体

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることかしまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

(拙文「空っぽ」より引用)

過去の記事からの引用を含めて、ここまでの文章を読みかえしてみると、かなり妙ちくりんなことを書いている気がします。自分で書いておきながら、不安になるほどです。

あなた、大丈夫？ という感じです。

＊

私は論理とか論理的という言葉がよく分かりませんが、論理らしさとか論理的っぽさは何となく分かる気がします。その「らしさ」と「ぽさ」をイメージすると、私は論理的ではありません。

今回の記事はとくにそうなりそうな予感がします。

いずれにせよ、私は自分の直感を信じて書いていくしかありません。勢いを大切に書きなぐっていくという意味です。それが私の書き方です。

＊

言葉はいまや立方体になっている。そんなイメージを私は持っています。イメージですから個人的なものであり、検証はできません。ただ語るしかありません。

立方体としての言葉は、各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空です。画面に映った映像も、空っぽです。

画面を斜めから見ても後ろから見ても、ズレはありません。二次元の映像だからです。投影された影みたいなもので、実体はないという意味です。

*

立方体（言葉のことです）の各面に映っているのはいわば影であり、二次元の映像であることが大切な点です。

球体の言葉

いま私は、書き言葉（文字）のない言葉を想像しています。表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）だけが言葉としてあるという意味です。

ありえない荒唐無稽な夢想です。

文字のない言葉、それは私にとっては球体なのです。なぜか、です。

*

文字だけが特殊なものであるとすれば、どこが特殊なのかは観察するしかありません。目に見えているものを意識的に見るのです。そうすれば、気づくことがあるかもしれません。

文字を習得するには、人は視線を落として地面や紙や画面に向かいます。文字を真似てなぞるためには、平面に記された文字を見ながら平面に丹念になぞり写していきます。

それを何度も何度も繰り返して覚えていくのが、文字の学習です。思いだしてください。読書も同じ姿勢でおこないます。

視線を落とす。前屈みになって手元のものに見入る。これはスマホを使うときの姿勢と重なります。人類にとっては、ごく新しい体勢ではないでしょうか。立位や二足歩行よりもさらに「不自然」で慣れない姿勢なのです。

上を向く、正面を向く

表情、身振り、話し言葉を真似て身につけるさいには、あえて視線を下に向ける必要はありませんが、文字を真似て学ぶさいにはどうしても下を向かずにはられません。

めっちゃくちゃこじつけて申し訳ありません。でも、そうじゃありませんか？

順序として、人が生まれていきなり文字を学ぶことは考えにくいです。赤ちゃんはたいてい仰向けに寝ていて、周囲を見まわし、表情や身振りや音声を見たり聞いたりして、反応したり、真似たりしているようです。

言葉を身につけつつある赤ちゃんの顔と目が空のほうを向いているのは象徴的に感じられます。

*

その視線は赤ちゃんから見て正面であったり横であったり下であったり上であったりするでしょう。おとなは赤ちゃんを自分たちとなるべく同じ目線に持ってこようとしているように見えます。

赤ちゃんの頭を少し高くするという意味です。首がしっかりしてくれば、さらに赤ちゃんの頭は高くなり、背を伸ばして座った状態に近づいていきます。

赤ちゃんは背を伸ばして目線を正面や上下や左右に向けます。その状態で、表情、身

振り、話し言葉を身につけていくのでしょうか。そのうち、立って歩くようになります。

目を落として、表情、身振り、話し言葉をなぞったり真似たりすることは稀だと思われ
れます。

空から降ってくる言葉

ここでいきなり飛躍します。論理もへったくれもありません。なりふりかまわず話を
進めます。

文字を除く言葉は空から降ってくるのではないのでしょうか。空から、上から、天から
という感じです。それをなぞったり、真似たりして、受けとったり、自分からも発する
ようになるのです。

赤ちゃんをイメージして話を進めてきましたが、大昔（大ざっぱな言い方で恐縮です
けど）のヒトもそんな感じで文字以外の言葉を身につけたり、使うようになったのでは
ないのでしょうか。

*

ここで言葉を立体としてイメージすると、立方体ではなく、球体であるような気がし
ます。

我ながら、よくもまあ、強引にここまでこじつけたものだと思います。

球体の言葉といえば、言霊を連想しますが、この言葉にはいろいろなイメージが垢の
ようにこびりついているので、あえて使いません。

いずれにせよ、たま、玉・珠・球、魂・魄・霊という一連の言葉は無視できません。む
しろ積極的に考えてみたいです。

球体のイメージ、立方体のイメージ

球体はふわふわ浮かぶ感じがします。浮遊しているのです。気体のようで拡散して消えていく運命にあります。

立方体は固定化を指向します。地面の近くで固まって残るのです。

何かに似ていると思ったのですが、私が勝手に作った「動詞的なもの」が球体のイメージに重なり、「名詞的なもの」が立方体のイメージに重なることに気づきました。

自分ででっちあげたものですから、似ているも、重なるもないのですが、こういう符合は気になります。

*

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっとすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より引用）

大風呂敷を広げる

ここで大風呂敷を広げさせていただきます。

表情、身振り、話し言葉は、球体の言葉。一方の、書き言葉、つまり文字は、立方体の言葉。

なんてまとめましたが、うさんくさいですね。嘘っぽくていかがわしい。まとめた本

人とそっくりじゃないですか。

大風呂敷とは、うさんくさいものですが、自分でやってみると赤面します。

自分を出しにして、人類や言語を語って申し訳ありません。語りは騙り、レトリックはトリックということでお許し願います。

*

たしかに出だしの自己引用から怪しかったようです。

ここまで来たのですから、最後までどんどんやっちゃいましょう。

*

立方体の各面という画面に映る影、つまり映像ですが、あれはもともと人工の影なのです。

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。そっくりを見るためではないでしょうか。

(拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用)

影を落とすと言いますが、地面や水面の影は落ちたものです。地面に絵や印を描いたのと重なります。覗きこんだり描いたりするときの姿勢がシンクロするのです。

地面や水面に映る影が、鏡や壁に映るようになる。それがスクリーンに映しだされた幻灯や映画になる。それがテレビやパソコンやスマホの画面（スクリーン）に映しだされた影に進化する。

目を落として、文字という影を見たり読む。背を丸めて、あるいはうつむき加減にスマホをいじる。そんな姿勢や動作ともシンクロします。

大量生産されてどれも似ていたり同じに見えるスマホ。お店や工場ですらりと並んでいたスマホ。どれもそっくり。

そのスマホを覗きこむ、目を細めたり、目を見開いたり、ときには笑みを浮かべる、顔をしかめることもある、やや口を開けている人もいる。

指で画面をなぞる、スライドするのがもどかしいのか眉を寄せたり、舌打ちする人もいる。

やや前屈みに歩きながらスマホの画面に見入る、ときどき歩を緩めたり、立ち止る。

みんな、似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくりなのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より引用)

人は自分の作るものに似ていくのです。

*

めちゃくちゃこじつけて申し訳ありません。

進化する影

持論なのですが、文字は究極の映像であり影だと思います。

視覚的なイメージである映像は、事物に似ていますが、文字は事物にぜんぜん似ていません。

猫の映像は猫に似ています。そっくりなものもあります。でも、猫も、ネコも、ねこも、neko も、猫にはぜんぜん似ていません。

それなのに、猫という文字で猫をイメージするのですから、文字は影（鏡像も含みます）の進化したものと言えるのではないのでしょうか。おそらくなぞって真似て学んだという学習の成果でしょう。さらにいうなら、いわゆる条件反射なのかもしれません。

とにかく「猫」という文字で猫が想起されるのですから、すごいです。こんなもの、他にありますか？

私の言う文字の異物性とか異物感とは、そういう意味なのです。なんで？ どうしてそうなるの？ どういうわけでこうなっちゃったわけ？

なぞるが謎になったなんて駄洒落で済まされる問題ではないのです。

まだ続いている夢

言葉が空から降ってきた、かつての夢のような時代を想像してみましょう。

言葉と接するときには、視線を上げ、相手と同じ時間を共有するしかなかった時代。言葉が発せられたとたんに消え去っていた時代。言葉がそういうものだった時代。

表情、身振り、話し言葉のことです。

顔を上げる。相手を見る。あるいはちょっと視線を下に向けながら、相手と対する。言葉が見える。言葉が消える。言葉がつぎつぎと発せられる。

現れると消えるの反復と連続。一回限りの生と死。

言葉は空気を伝わって空から降ってくる。地面を揺さぶる。

＊

まるでコンサートのようではないでしょうか。ライブのようではないでしょうか。

見える、聞こえる。消える。波が伝わる。波が消える。同じ時間と場所を共有し過ごす。

音楽も言葉です。そこには、音声だけでなく、表情、身振りが 있습니다。波と波動があります。つぎつぎと現れつぎつぎと消えていきます。それが言葉なのです。

言葉は目の前で生きて死ぬのです。それに立ちあうのが私たちの生きることなのです。言葉が言葉として残るのは不自然なのです。残った言葉は異物なのです。もちろん文字のことです。

見える、聞こえる。消える。波が伝わる。波が消える。同じ時間と場所を共有し過ごす――。

懐かしいのでしょうか。やっぱり言葉は空から降ってほしいのでしょうか。

まだ夢は続いているもようです。

＊

耳すまし 目を開ける人 閉じる人

#言葉 #文字 #音声 #表情 #身振り #影# スマホ # シンクロ # 赤ちゃん # 音楽
コンサート # ライブ

04/24 文字の世界

＊

文字の世界

星野廉

2022年4月24日 09:06

目次

聖なる土地に行く。

聖なる土地に

聖なる

聖なるものを訪ねて

聖なる土地に行く。

文字には文字の世界があるのでしょうか。

たとえば、「聖なる土地に行く。」という文。「せいなるとちにいく。」と声に出して言ったときと、「聖なる土地に行く。」と書いたときとは違って感じられます。

それだけにはとどまりません。「聖なる土地に往く。」と書くとまた違います。さらには「聖なる土地に逝く。」となると明らかに違ってきます。

そんなことを言うなら、「せいなるとちにいく。」「せいなるとちにゆく。」「セイナルトチニイク。」「聖ナル土地ニ行ク。」も異なります。

こうなると、文字には文字の世界があるとは言いようがないのです。

聖なる土地に

実を言うと、「聖なる土地に行く。」とは個人的には書きません。書くとすれば、「聖なる土地を訪ねる。」とか「聖なる土地におもむく。」と書くでしょう。

「聖なる土地」と「行く」とではアンバランスなのです。私の個人的な語感の話です。この「語感」という印象は私的なものです。人によって異なるにちがいません。

「赴く」ではなく「おもむく」と書いたのも、語感から来るものかもしれませんが、どちらかというところ好き嫌いから選んだ表記だと言えます。「赴」という漢字が苦手なのです。

聖なる

文字どおりに文字を取る。

よく書く文なのですが、言葉の綾として書いているだけで、その意味は不明です。私はいい加減な人間なのです。

文字どおりに文字を取るとは、どういうことなのでしょう。考えてみると、ますます不明になります。レトリックには大した意味はないとはいえ、気になります。

たとえば「聖なる」ですが、その意味となるとまったく分かりません。「聖なる」という言い回しがあるから使っている。正直に言うと、そうなります。

「聖なる」。いい響きでいい字面のフレーズです。厳かな雰囲気を感じられます。雰囲気ですから、文字どおりに取ったというよりも、「聖なる」という言葉の向こうを見ている気がします。

「聖なる」。じっと見ていると、「聖」が、耳、口、王からできていることに気づきます。これが文字を文字どおりに取るのでしょうか。

そういうことにしておきます。

聖なるものを訪ねて

古井由吉の随想集に『聖なるものを訪ねて』があります。

ひょっとすると、このタイトルが頭にあって、この記事を書いているのかもしれませんが。「そう言えば、あったなあ」と思いだし、二階からその本を持ってきて、いまPCの脇に置いています。

『聖耳』という本もありますが、「聖」は古井由吉の文章にはよく出てきます。いちばん目につくのは、「日、月」なのですが、これは誰の文章でも頻出する文字のようです。

古井由吉の文章では尋常ではないほど頻繁に目にします。「明」もそうです。「明」が半端ではなくよく出てくる『仮往生伝試文』はまさに座右の書で、いまもPCの「左」側にあります。

きのう、この本を読んでいてある箇所を目にして泣いてしまいました。古井由吉を感じてしまったのです。

”一時間あまり前に、火ののこる灰をその中へ明けてしまったらしい。”

古井由吉は下書きを鉛筆で書いていたらしいのですが、その削りかすをクッキーの入っていた空缶に煙草の灰といっしょに放りこむ習慣があり、ある日火が削りかすに移って缶が発熱した話です。

「空けてしまった」ではなく「明けてしまった」と書いてしまったその筆の勢いに、鉛筆で文字を書いていたその時の古井由吉を感じてしまったのです。

こんな素晴らしい体験は文字の世界でしかできないのではないのでしょうか。

古井由吉 # 言葉 # 日本語 # 小説 # 漢字 # 文字 # 顔

04/24 とっかかり

＊

とっかかり

星野廉

2022年4月24日 11:19

目次

意味という空っぽ

努力目標

抽象画

とっかかり

延々と続く迂回、または脱線

抽象、具象

「ようなもの」を作文する

意味という空っぽ

何かを見るとき、人にはとっかかりが必要だという気がします。とっかかりがないと不安になるからかもしれません。とっかかりとは意味のようなものだとイメージしています。

「意味だ」と言い切るわけにはいきません。意味のようなものというふうに、「ようなもの」という言いまわしを使って迂回するしかないのです。「意味」という言葉が空っぽだからです。

空っぽなのは、おまえの頭だよ。そう言われるとそうかもしれない、いや、そうにちがいないと思います。

この記事は、空っぽの頭が、空っぽ（意味のようなもののこと）について考えているものです。

ちなみに、辞書に載っているのは意味の語義であって、意味ではありません。ここで言っている意味というのは、「この単語の意味は何？」という場合の意味に加えて、「人生に意味なんてある？」というときの意味です。

例文で見ると後者の意味の「空っぽ感」がよくお分かりになるのではありませんか。そんなものがあるわけがありません。

意味に意味なんてありますか？

レトリックはさておき、やっぱり空っぽなのです。空っぽが言うのですから、意味はありません。

努力目標

何かを目にして、その姿なり形なり様（さま）を認めるときには、取りかかっているのです。さもないと、ぼんやりとながめていることになります。

「ああ、これは〇〇だ」と言葉にしたときには、言葉の世界に入っているように思われます。「ように」「思われる」のであって、これも迂回するしかありません。

「本当に」とか「真の」とか「まさに」は私も使いますが、言葉の綾であって、ぜんぜん「本当に」でも「真の」でも「まさに」でもありません。努力目標なのです。

「真の」とか「本当の」と言えば言うほど、嘘っぽくなるのです。「本当の」とか「真の」という言い回しを見たら、あるいは耳にしたら、「そうじゃないんだ」と考えれば馬鹿を見ないかもしれません。

「真の」とか「本当の」とは努力目標であり、景気づけだとも言えます。なにしろ、空っぽの頭が空っぽの文字に空っぽの意味を求めているのですから、努力目標を定め、それを口実にして景気づけ（虚勢を張ること）をしないことには、人間なんてやっつけられ

ないのです。

私のことです。ひとさまのことは知りません。

抽象画

抽象画と呼ばれているものがあります。抽象画がありますとは言えません。口が裂けても言えません。「と呼ばれているもの」（「らしきもの」のたぐいです）があるのです。「抽象画」という言葉は空っぽなのです。

辞書や事典に載っているのは語義です。そう決めたのです。誰が決めたのかは知りませんが、決めたから載っているのです。語義というのは建前なのかもしれません。

白紙の辞書や事典を出版するわけにはいかないからです。だから、無意味の意味や意味の意味も語義として辞書に載っています。

冗談はさておき、抽象画と呼ばれているものはとっかかりがないものの典型だと思います。

「抽象画とはとっかかりのない、またはとっかかりが見当たらないものである」という語義はどうでしょう。意味ではなく（意味なんてありません）、語義（建前とか努力目標のことです）です。

どこから手をつけていいのか、どこから目をつけていいのか不明ということです。

「抽象画とは訳の分かんない絵である」なんて語義があったとすれば、なかなか正直で好きになりそうです。

*

冗談はさておき、抽象画が具象画であることは確かでしょう。具象画にとっかかりが

ない場合に、抽象画と呼んでいるのです。

それが芸術性（芸術ではなく芸術性）や芸術っぽさ（芸術ではなく芸術っぽさ）の「性」であり「ぽさ」なのかもしれません。

万が一抽象画だと自ら称している作品があるとすれば、「確信犯」というよりも、やらせではないでしょうか。芸術界でしか通じないであろうギャグでしかありません。

「何描いているの？」「抽象画だよ」

「何書いているの？」「難解で抽象的な現代詩」

「何書いているの？」「難解で晦渋な哲学エッセイ」

まさか、そんなことはないと思いますが、万が一あったとすれば、「らしさ」や「性」や「ぽさ」を求めているにちがいありません。ギャグです。

とっかかり

*

.

●

*

●

*

●

.

*

01/21 とうっかり

以上は、「空っぽ」という記事から引用しました。

空っぽが空っぽを引用したわけです。

三つのというか、三組の二点がかいてありますが、その各二点に何を見るかが「とっかかり」です。意味や関係性や物語が立ちあらわれるという美辞麗句も可能です。

見るためには、取りかからないと見えないと言えお分かりいただけるでしょうか。上の各二点という「空っぽ」に何を見るかは人それぞれです。

延々と続く迂回、または脱線

空っぽにどんな意味を見るかは人それぞれですから、その意味は保留して、あえて言葉にするなら迂回するしかありません。

意味を断言、つまり「こうだ」と言い切っても迂回していることに変わりはありません。言い切っただけです。

言葉を使うことでわざわざ迂回しているのです。言葉は迂回の道具なのです。したがって、いまも迂回になります。

とっかかりは始まりです。ああでもないこうでもない、ああだこうだの始まりなのです。迂回の始まりです。何かが決まって一件落ち着いたわけでありません。

とっかかりとは、多数の他者による「ああでもないこうでもない、ああだこうだ」という延々と続く迂回（こうなると脱線と変わりません）に参加することだ、なんていうものなかなか言えている気がします。

抽象、具象

抽象とか抽象的という言葉がありますが、取りかかる余地がないという感じでしょうか。とっかかりがないものを難解だと感じる人もいます。

難しそうだと珍重されるという風潮もあります。

「抽象的だね」、「抽象的すぎて分かんない」、「難解ですな、ふむふむ」、「うーむ、難解というか晦渋ですね。頭をかかえますわ」、「御作は私には難しすぎて、とてもとても……」

抽象というのは具象に対する印象のようです（韻を踏んでいます）。あくまでも具象であり具体です。見る対象がない場合には、抽象とか抽象的だとは言われないからです。

何か具体的な形や模様やありさまを目にして、「抽象的だ」「これぞまさしく抽象だ」なんて言うわけです。

それが絵であれば、褒め言葉になるかもしれません。試しに、抽象的な絵、つまり訳の分からない具象を描いてみてはいかがでしょうか。

「ようなもの」を作文する

絵心のない方は、抽象的な文章、つまり訳の分からない文章を書くのもいいかもしれません。

訳の分からない文章を書くのに文才が必要なのかは不明ですが——ある程度の文彩（言葉の綾・レトリック）は必要な気がします——、ペンと新聞や雑誌があれば書けそうです。

書けそうというか、書けるといって、賭けるのです。

新聞を床に広げて、ペンを上から勢いよく落とすなり投げるのです。ペンの当たった文字というか言葉をメモして、組みあわせて作文します。

詩のようなもの（詩ではありませんというか、詩というものはありません、小説というものが無いと同じです、小説のようなものがあるだけです、誰もが「ようなもの」や「らしいもの」を求めるからです）が書けるかもしれません。詩というジャンルは、じつに懐が深いのです。

文字は具体的なものです。インクの染みであったり、画素の集まりであったりします。形もあります。目に見えます。

でも、文字は空っぽなのです。その空っぽにとっかかりを見つけて読んでくれる人がいるはずですが、とっかかりが見当たらないければ、「抽象的だ」「難解だ」と褒めてくれる人もいるにちがいません。

どうでしょう。書けそうですか？

書けそうというか、書けるというか、賭けるのです。じつのところ、かけるしかないようです。

運よく誰かに引っ掛かるかもしれません。とっかかりはひっかけりなのです。運であり賭けなのです。魚を針に掛ける釣りと同じです。

#言葉 #日本語 #小説 #文字 #とっかかり #文章 #抽象画 #作文 #意味

04/25 橋を架ける

＊

橋を架ける

星野廉

2022年4月25日 08:21

かける。

掛ける。手を掛ける。手掛ける。肩に手を掛ける。肩に手をのせる。

きっかけ。切っ掛け。切り掛ける。

掛ける。掛かる。取り掛かる。始める。

何かが始まる。

＊

かける。

架ける。橋を架ける。架橋。掛け渡す。渡しかける。

何かと何かの間にかける。誰かと誰かの間にかける。

川に橋を架ける。架け橋。掛け橋。懸け橋。

仮にかけ渡した橋。架設。仮設。仮説。

はしごを掛ける。梯子を掛ける。天への梯子。

十字架。架設。仮設。高架。空にかかる橋。虹。虹の橋。

＊

橋を駆ける。橋を翔る。空を翔る。

虹を渡る。虹を翔る。天を翔る。

言葉を掛ける。言葉を懸ける。言葉を翔る。言葉を賭ける。

何かと何かの間にかける。誰かと誰かの間にかける。

言葉に掛ける。言葉に懸ける。言葉に翔る。言葉に賭ける。

＊

橋を掛ける。

何かと何かの間にかける。誰かと誰かの間にかける。何かと誰かの間にかける。

形と形の間にかける。音と音の間にかける。意味と意味の間にかける。

はじまる。はじめる。かける。かかる。

#言葉 # 漢字 # ひらがな # 文字 # 意味 # 無意味 # 連想

04/26 伝わるもの、伝わらないもの

＊

伝わるもの、伝わらないもの

星野廉

2022年4月26日 08:06

つたえる。つたわる。伝える。伝わる。

熱を伝える。熱が伝わる。熱を移す。熱が移る。

熱を通じさせる。熱が通じる。熱を届ける。熱が届く。

熱を移動させる。熱が移動する。

＊

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂。

どれもが見えないものです。

何かから何かへ。誰かから誰かへ。何かから誰かへ。誰かから何かへ。

いまからいつかへ。いつかからいまへ。ここからあなたへ。あなたからここへ。

いま、ここ、いつか、あなた、どこか。

＊

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂。

伝わる。移る。届く。通じる。

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

具体的には、まず見て、なぞったり、真似たり、学んだりします。

見るものだからです。以心伝心の対極にあると言えます。まず型(形)を覚えるのです。

＊

表情、身振り、文字のどれもが、形であり姿です。視覚言語という言い方もできます。

表情も身振りも文字も、伝わるし、移せるし、届くし、通じると言えます。たしかに
そう言えるのですが、ここで言っているのは、意味やメッセージではなく、形や模様や動き
なのです。

あくまでも、目に見える形と動きの話です。

＊

文字に話を絞ります。

とくに日本語の文字、つまり表記を考えてみましょう。

ひらがながあり、カタカナがあり、漢字があり、ローマ字があり、アラビア数字があり、
ローマ数字があるのです。それだけではなく、約物もたくさんあります。

これほど複雑な表記は、他に見当たりません。

意味やメッセージは、移せるのもの、言い換えると翻訳可能とされているものです(私
は翻訳されたものは別物だと考えていますが、ここでは触れません)。

形や模様は、たぶん移せません、翻訳できません。写したり、映すことはできるで

しょう。

移すというよりも、映したり、写したりするもの。それが日本語の文字ではないでしょうか。

具体的には、まず見て（映す）、なぞったり（写す）、真似たり（写す）、学んだり（写す）します。

＊

大昔に大陸からこの列島に伝わったものは、たぶん意味ではなく漢字という形なのです。

うつす。つたわる。

この列島にある意味が、伝わってきた形を迎えたのではないのでしょうか。

移す、映す、写す。伝わる。

＊

文字は顔なのです。

顔ほど見えないものはありません。つい、表情、いや、むしろ表情の意味を見てしまうのです。具象に抽象を、つい見てしまうとも言えます。形を見ることはそれほど難しいのです。

(※同様に、見た形を覚えていることも難しく、意味やメッセージや筋書きは覚えていても、見たはずの形を忘れていたことはよくあります。映画がいい例です。このことに敏感なのは蓮實重彦です。)

意味を、見るのではなく、見えるのでもなく、「つい見てしまう」ことが、決定的に大切な点だと思います。

#言葉 # 漢字 # ひらがな # カタカナ # 文字 # 表記 # 顔 # 意味# メッセージ # 翻訳
蓮實重彦

04/27 かける、かかる、かかわる

＊

かける、かかる、かかわる

星野廉

2022年4月27日 07:51

目次

とっかかり、きっかけ

声を掛ける

触れる、触る、触られる

かかわり、かわり、かえる

気掛かり

かかわりあい

とっかかり、きっかけ

かける、かかる、かかわる、かかわり。

かかわりを作る、切っ掛けを作る。取っかかり、取りかかる。

始める、始まる、しかける、しはじめる、しだす。

呼びかける、話しかける、問いかける、押しかける。

走りかける、歩きかける、動きかける、落ちかける、あがりかける、のぼりかける。

声を掛ける

声を掛ける、言葉を掛ける、息を掛ける、息を吹きかける。

切っ掛け。何かが始まる。かかわることで、かかわりあい生まれる。

肩に手を掛ける。体に手を掛ける。体重が掛かる、体重を掛ける。寄っかかる。体を預ける、体を委ねる、体を任せる。

重みが掛かる、ゆだねる、あずける、のせる、もたせかける、たくす。

自分が相手にうつっていく。同時に相手が自分にうつってくる。

移す、映す、写す。伝える。伝わる。移る。届く。通じる。

触れる、触る、触られる

「掛ける」は「掛けられる」、「掛かる」。

触れる、触る、接する、接触する。

*

息が顔に掛かる。唾が顔に掛かる。液が体に掛かる。人と人との関係が生じる。

風が顔に掛かる、雨が顔に掛かる、水が体に掛かる。土が顔と体に掛かる。火の粉が体に掛かる。物と人との関係が生じる。

雨が木に掛かる。蜘蛛が枝に引っ掛かる。蜘蛛の巣に蝶が掛かる。物と物との関係、生き物と生き物との関係が生じる。

*

食べると食べられる。喰うと喰われる。

殺めると殺められる。

生と死はかかわりあう、かかわりあい。

双方が無傷であるかかわりあいはないのかもしれない。

かかわり、かわり、かえる

かかわりあい、つぎのかかわりあいの予告なのかもしれない。つぎのかかわりあいで、立場が逆転しない保証はない。「喰う」の逆は「喰われる」しかない。

かかわり、かえし、かえる。帰る、変える、孵る、替える、還る。

土を掛けて、土に返す。土に変わる。土に帰る。いつかまた変わる。よみがえる。

新しいかかわりあいが始まる。それが自分か他者かにかかわりなく始まる。くりかえす。繰り返す。糸を掛け繰る繰る回る無数の輪。

気掛かり

何かが顔に掛かる。何かが体に掛かる。何かの重みが体に掛かる。その分だけ心が重くなる。

気掛かりになる。心懸かりが生じる。懸念が生まれる。

心の重みを解消するのは難しい。相手が「それ」であれば、それだけ難しい。相手が「何か」であれば、よけいに難しい。

名づけられない「何か」に掛かれることほど、気掛かりなことはない。

かかわりあい

する。される。

掛かるは、相手に触れること。そのまま体重をかけた続けることもある。一方的なようで、一方向的なようで、そうではない。

触れれば必ず触れられることになる。「掛ける・掛かる」は、相互的であり、双方的なかかわり方、つまりかかわりあい。

かけるとかかるを切っ掛けにして、かかわりとかかわりあいが生まれる。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

#言葉 #漢字 # ひらがな # 文字 # かかわる # 関係 # 連想 # 掛け詞

04/27 映っている私、写っている私、移っている私

＊

映っている私、写っている私、移っている私

星野廉

2022年4月27日 13:08

人が自分を直接見たことがないというのは当たり前でありながら、ふつうは考えないことだと思われまゝ。でも、こういうことが気になる人がいます。ひとりだけですが、私も知っています。

私にとってきわめて近い人です。でも、見たことはありません。会っているような気はします。その人についてお話ししたいと思います。

ぶっちゃけた話が私のことなのですが、直接見たことがない私というよりも、鏡に映っているものであったり、写真に写ったものである「私」であるをご理解願います。

ややこしいことを言って申し訳ありません。じっさい、ややこしい話なのです。どうか、ややこしいのは私なのですけど。

目次

映っているもの

写ったもの

「ずれ」と気配

写っているもの

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

移っている

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

とっかかり

自分という気配

映っているもの

たとえば、鏡を覗きこみますね。映っているものがあります。いわゆる映っている人なのですが、正確にいうと人ではなく、人の映像とか姿であり、映った影なのです。

私にはお化粧をする習慣がありません。だから自分の顔や姿を鏡に映して、その鏡を覗きこむことはほとんどありません。朝、洗面所で顔を洗ったついでとか、シェーバーでひげをそったあとに確認のためにちょっと見るくらいです。

毎日、それも日に何度か、そこそこの時間を鏡の前で費やす人は大変だろうと想像します。お化粧なんて面倒ではないかと要らぬ心配をしてしまいます。お金もかかるにちがいません。

もちろん、お化粧が楽しいという方もいるはずです。お化粧という行為に何らかの価値を見出している人もいるでしょう。

＊

私の場合には、鏡を前にすると、つまり自分の顔や姿を見ると、自分が見えなくなります。自分であるはずの像は目に入っているのですが、見れば見るほどそれが何なのか分からなくなるのです。

自分だとは頭で分かっています。その姿と形は見えていますが、見留められないのです。認められないのではなく、見留められないです。目に留まっていない感じなのです。

ですから、鏡を前にしたまま目をつむると、目をつむる直前に見えていたはずの顔が像として残っていない、つまり残像がないのです。

特に顔です。着ている服とかは思い出そうとすれば何とか思い出せますが、顔を思い浮かべることができません。

念のために言いますが、いま話しているのは、鏡を前にしたまま目をつむる直前の自分の顔のことです。髪型や耳も思い出せません。首も自信がありません。

写ったもの

必死になって自分、つまりさっき見たばかりの自分の顔を思いだそうとしているのですが、なかなか浮かばないうちに、かつて写真で見た自分の顔が浮かんできます。

自分の顔ではなく、正確に言えば、写真に写ったものです。べつに正確にいうべきものでもないのかもしれませんが。

自分の顔を思いだそうとして、さっき鏡で見たばかりの顔の像ではなく、写真の像が優勢になってくるともう駄目です。そちらに意識が行くのか、写真の像ばかりが、頭か臉の裏か知りませんが、そこに浮かんでくるのです。

その写真というのは、証明書に貼るために撮ったものです。数年ごとに取り替えなければならない写真があって、数か月前に見た「最新の」私を撮った写真が頭に浮かびます。私の写真というと、それくらいしかないのです。

「ずれ」と気配

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。

正確に言えば、時間ではなく、「ずれ」なのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「いま」との「ずれ」として感知するしかない気がします。

この「ずれ」こそが私にとって具体的な自分の像なのかもしれません。残念ながら、「それ」は見えませんが、「それ」の気配を感じることはできます。

その「気配」に親しみを覚えます。愛おしくてたまらないくらいです。「自分」とは「気配」なのかもしれません。

写っているもの

以上、映っているものとしての自分つまり鏡像、写ったものとしての自分つまり写真の像、鏡に映っている「前」と「いま」の「ずれ」としての自分、そして「気配」としての自分——四つの自分についてお話ししました。

もう一つの自分を見ることができるようなのですが、残念ながら見たことはありません。

スマホの自撮りの画面に写っているものとしての自分のことです。

私には自前のスマホがありません。外出するときにスマホを借りて、電話機として使うだけです。それ以外の機能については使ったことがないので、知りません。

*

私のイメージする自撮りとは、要するにリアルタイムで見る写真です。リアルタイムに写っている自分の姿ということになります。しかも、動画として見ることもできるそうです。

リアルタイムで見る鏡像と、過去の自分が写った写真の中間に位置するものとして考えていますが、よく分かりません。

【挿入話】鏡の前では見るのではなくビビる

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。正確

に言えば、時間ではなく、ずれなのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかないとも言える気がします。

この場合のずれは印象であって計測も検証もできません。その意味で、このずれは「似ている」に似ています。念のために言い添えますが、鏡だから「似ている」に似ているわけではありません。鏡には「似ていない」も映るのです。

「似ている」を見るためには、同時に「似ていない」も見ていなければならないということです。ここは似ている、ここは似てないというふうに見ていないと、見えないとも言えます。

白と黒の細かい点からなる絵や写真（文字でもいいです）は、濃淡はあるにせよ、白の点と黒の点を同時に見ていないと形が見えないと思われませんが、それと似ているのではないのでしょうか。

*

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものはあえて見ないだけの体感的な知恵がそなわっているようです。というか、おそらく見えないのです。

ずればかりがやたら目につく。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれません。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言えるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかし

いと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真が好例です。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていとも言える気がします。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？
なんてぐあいに天使を見る人もいます。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ています。似ているけど、自分ではない誰か。いまの自分以外に自分はいないはずなのに、自分がそこに映っている――。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えません。

鏡に我が身を映し、どんなに頑張ってみたところで、しょせん鏡像は幻でしかない。鏡に映った像と、実像あるいは実物とは似ているが、同じではありません。鏡像を見て我が身を知ろうというのは、冷静に考えれば正気の沙汰ではない気がします。

絵や写真や映画や動画は、鏡に似ています。人はそれらを前にして、鏡に面すると同じ反応をします。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。ただ見るだけではないということです。物思いにふけったり、考えるのです。

＊

飛躍します。

絵、写真、映画、動画は、実は自分を映すためのものではないでしょうか。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分なのです。広義の自分。複数形の自分。おそらく赤ん坊にとっての「自分」と同じ。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊なのです。

＊

鏡の前で、人は普通ではない精神状態になります。簡単に言うと、緊張してびびるのです。恐怖でおののくと言え、言い過ぎでしょうが、それに近い気がします。

鏡を前にして、人はビビるしかない――。

したがって、鏡の前の人は見ているわけではありません。ビビっているのです。だから自分が見えないのです。見えていると思っただけです。見えていない自分なんて気味が悪くて受け入れられないということでしょう。そんな荒唐無稽な、つまり馬鹿な話は拒否してしまうのです。

こういうことはよくあります。人が自分を守るために備わった習性だと思われます。錯覚や自己暗示を利用して、メンタルが受けるダメージを阻止するのです。

＊

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

＊

人はそこにはないものを見ます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見ることもあります。可視化とか見える化なんて手品を発明したりもします（手品ですから種はあります、見えないものを見る化しているのではなく、見えにくいものを見るように錯覚させているだけです、だいたいにおいて「見える」とはヒト固有の視覚機能を用いた錯覚であり錯視なのです、他の生き物と比較して相対的なものであり、絶対的なものではなく限定付きだという意味です、簡単に言いますと、見える化とは制作者（作者がいるんです）が見せたいテーマを図解にしたものです、あくまでも絵なのです、えっ、なんて言わないでくださいね、うまい絵にだまされない人はいません、だまされた時点で絵だと思っていないからです、いま言っている「見える化」の絵には、写真や映画やビデオも含まれます、あれらは人が作った絵です、撮影や現像や編集や加工や修正をなさっている人はあれらが作られた絵だと知っているはずですよ）。

見えないものを見るのですから、人は見えているはずのものを見ていないことがあっても不思議ではない気がします。

＊

見えないものを見る場合の「見えないもの」というのは、たとえば、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想のことです（どれもが自分がすでに知っているお馴染みのもので見新しいものはありません、知らないものを人が見ることはありません、というか知らないものは見えないのです、だから知っているものに置き換えて見ます）。そこには映ったり写っていないにもかかわらず「つい見てしまうもの」なのです。

つい見てしまう、意味やメッセージや筋書き（物語）やテーマや思想に共通する点は何でしょうか？ ぜんぶ自分が見たいものだという共通点があります。自分が見たいものを、つい見てしまうのです。それが「見えないもの」です。

その「見えないもの」を見ているとき、人はたぶん「どこかに移っている」と思われます。鏡や写真や画面のある「ここ」や「そこ」にはいないという意味です。

難しい話ではありません。不思議な話でもありません。いまのあなたがそうです。

気がつきましたか？ お帰りなさい。

では、また行ってらっしゃいませ。

【※「挿入話」はここまで、です。】

移っている

話を戻します。

鏡を覗きこむとき、人は映っているというよりも移っているのではないのでしょうか。

身体は映っているのかもしれませんが、心や気持ちや魂は移っているのではないのでしょうか。

「どこか」に移っているのかもしれませんが。

その「どこか」は「何か」や「誰か」と同様に、保留の言葉です。特定はできないから「どこか」と保留するしかない気がします。

そこにはないものを見てしまう、置き換えてしまう

人はそこにはないものを見てしまいます。鏡、絵、写真、動画が、そうです。見えないはずのものを見てしまうこともあります。つまり置き換えてしまうのです。

*

.

●

*

●

●

*



*

以上、三組の二点が描いてありましたが、その各二点に人は何かを見てしまいます。

.



たとえば、平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えて見る
ことがあるでしょう。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふう
に連想を呼びさ
ます気がします。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、
2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。



今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるか
もしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなとこど
も。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。
「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした
目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実

体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

とっかかり

「何か」に、「それではない何か」を見てしまう。

その「それではない何か」がとっかかりです。何かを見るとき、人には「とっかかり」が必要です。「見えてしまうもの」、つまり「置き換えてしまうもの」が必要だとも言えます。

「とっかかり」がないと不安になるからかもしれません。「とっかかり」とは、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

上の三組の二点で見たように、「そのもの」を見るのはとても難しいのです。「何か」に置き換えてしまいます。

＊

その「何か」とは、自分がすでに知っているもの、自分が無意識に見たいもの、見ることで自分が安心するものです。

（大切なことなので繰り返しますが）ざっくりと言えば、意味や関係性や筋書き（物語）のようなものとイメージしています。

それはたぶん「見る」のでも「見える」のもなく、むしろ「見てしまう」、正確に言えば「置き換えてしまう」のです。

「見てしまう」のですから、無意識にとっさに見てしまうのです。ここがいちばん大切だと思います。

上の各二点という、いわば「空っぽ」に何を「見てしまうか」つまり「置き換えてしまう」は人それぞれで、本人の言葉による証言以外に確認はできません。つまり検証はできませんが、各人の証言をもとにある程度のコンセンサスが形成されることは大いにありえます。

＊

じっさい、そうなっている気がします。みなさんも、自分のまわりを観察なさってみてください。

もちろん、そのコンセンサスも、局所的なもので、いくつかの集団に分れるだろうし、その集団の成員もつぎつぎと変わる気がします。私の周囲を観察した結果ではそうなっています。

何が覚えてしまうかは、ふいに頭に浮かぶ印象（なにしろ「見てしまう」つまり「置き換えてしまう」のです）ですから、各人もよく分かっていないからでしょう。刻々と変わる可能性も大です。

自分という気配

話を鏡に戻します。

鏡に映っているもの（つまりいわゆる自分の顔）を目にすると、私はどこかに移っています。そんな私は頭で自分の顔だと知っているもの、つまり知識（情報でもいいです）としての自分を目の当たりにしてビビってしまいます。

「これは自分なんだ」と、鏡に映った像（私自身ではありません、像であり影です）を「自分」に置き換えてしまいます。私が人間だからでしょう。

頭では、鏡の像だと分かっています。知ってもいます。でも、納得はしていないようです。不安とおののきの中にも言えます。

鏡を前にした私はふつうの状態ではないのです。あえていえば、どこかに「移っている」のです。

そんな私にとって自分とは気配なのです。

*

不安とおののきの中にいる。平たく言えば、ビビっている私は、よく目をつむります。自分の気配に耳を澄ませます。自分の体の動き、体の中、体の表面、体のまわりで起こっていること、生じていることに集中しようと努めます。

目をつむったまま、自分の手と指でできる限り、自分の体をあちこち触ってみます。舌に意識を集中して自分の口の中を舌でさぐることもあります。嗅覚に集中してみることもあります。

五感はそれぞれを意識的に集中しないとなかなか感知できません。意外と難しいのです。自分というものが、これほどままたらない、つまり思いどおりにならないものなのかと苛立つこともあります。

*

目をつむっているから、当たり前だと言われそうですが、この気配としての自分が、鏡に映っている影とはぜんぜん違うことは確かです。目に映っている自分だけが自分ではないと言いたいです。

自分が見えないという私事にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

*

この記事は、三本の記事の一部を再編成し加筆したものです。

#私小説 # 小説 # 鏡 # 写真 # 自撮り

04/28 間違う、違う、違い

＊

間違え、違え、違い

星野廉

2022年4月28日 08:36

目次

ちがう、たがう、ことなる

掛ける、転じる、訛る

それる、はずれる

似せもの、似たもの、似せたもの

ちがう、たがう、ことなる

間違え、まちがう、間違い、まちがい

ちがう、違え

違い、ちがい

たがう、ちがう、違え

たがい、違い、互い

差異、違和感、異和感、相違、相異

違えと異なるの違い。

異なる、ことなる。事成るや事馴るとは異なるみたい。

＊

見間違え、見間違える、見違える、見誤る、見外す、見落とす、見損なう。どれも見るという行為にともなう。

見るにはこれだけのものが入っている。

見るには見えないや見ないも入っている。見る見えるは努力目標。

何かに別の何かを意識的に見る。絵や写真や映画やデジタル映像のような人工的な

「影」がそうだ。人工の影には意味が仕組んであるから、その意味を汲んでやる。要するにやらせであり演出、つまり「〇〇ごっこ」の「ごっこ」。

何かに別の何かを無意識に見てしまう。水面に映った影や、地面や壁に映った影、目に映った像がそうだ。自然の影には意味やメッセージはないから、ありもしない意味やメッセージをでっちあげる。何を見てしまうのかは人それぞれで確認も検証もできない。何々を見たという証言があるだけ。

見えないものを見る、見てしまう。見落とすの真逆とも言えますが、よく見ているというわけではなく、むしろよく見ていないから、見えないものを見てしまうようです。（※このことについては、後ほど「練習問題」があります。）

掛ける、転じる、訛る

言葉を掛ける、掛け詞。わざと間違える。わざと揺れる。わざと逸れる。

言葉の同音や音の類似、文字の形の類似、言葉が喚起するイメージを掛けることで、別個のもの同士が一瞬だけつながる。掛け詞。駄洒落。比喩。イメージの比喩。連想。

訛る、訛り、活用、変わる、変える、方言、誤用、慣習、転じる、「転じて」
言葉は決まりではなく慣習の集まり。訛ることで言葉は変わる。生きているから変わる。言葉を変えないようにすることは、言葉を殺すこと。

言葉はあやまるというよりも、それてかわる。それずにはかわれない。

それる、はずれる

それる、そらす、はずれる、はずす、ずれる、ずる
外れる
当たる、外れる、当たり外れ
合う、正しい、間違いない
しくじる、失敗

まげる、曲げる、曲解、誤解、曲者、くせもの、食わせもの、癖がある、ここにこう曲がったところがあるでしょ、ここが本物と違うのよ

誤る、あやまる、誤り、あやまり、過ち、あやまち、
誤りを謝る。誤りを詫びる。
謝る、あやまる、謝り、あやまり。

合う、合っている、正しい、
正しい、正す、修正、訂正、改正
本物、偽物・贋物、偽者、模造品
真偽、正誤

つまんないですね。ぜんぜんわくわくしません。

似せもの、似たもの、似せたもの

似ている、にせもの、似せたもの、似たもの、似ているもの、似通っている、似ているけど違う、そっくりだけど違う、似ているけど同じではない

似せものと似たものと似せたものを区別できますか？

三者はたしかに似ていますが、文字を文字どおりに取ると区別できます。意味を取ったり、書いてないことを見たり読んだりすると区別できません。日本語を知らない人のほうが区別できそうです。

似せもの、似たもの、似せたもの。「た」と「せ」の有無が違います。有無を言わず、失礼しました。これがさきほど予告した「練習問題」でした。

冗談はさておき（半分は本気です）、人は何かに別の何かを無意識に見てしまうのです。いまの場合には、言葉の綾に、人はありもしない意味やメッセージを無意識に見てしまうという例でした。意味やメッセージがないものを見るのは至難の業なのです。つい見てしまうのです。

＊

偽物の偽物、本当の偽物、本当の本物、真の本物、真の偽物、本物よりも質のいい偽

物、本物よりもよくできた模造品、複製、複製の複製、コピーのコピー

嘘、虚偽、偽り、いつわる、偽る、詐る
かたる、騙る、語る、語り、騙り、騙す、だます、だまかす、詐欺、詐偽、あざむく、
欺く、まどわす、惑わす、まどう、惑う、戸惑う

同じ、同一、同一は唯一、同一はたった一つしかないもの
似ている、激似、酷似、そっくり

似ているは印象だから検証できません。同じは精密な計器を使って測定すれば検証できます。ヒトの知覚に頼っては検証できないということです。ヒトにとって「同じ」は努力目標なのでしょう。「見る・見える」と同じです。

あら、「同じ」って言ってしまいました。目標に向かって努力します。精進します。

同一は世界とか宇宙にたった一つしかないもの、そっくりは似ているを活用して強めたものでしょうか。おこを活用して激おこぶんぶん丸にするのと同じなのかもしれません。景気づけなのでしょう。たしかに「同一」と「そっくり」には最上級っぽい勢いを感じます。「っぽい」のです。

#言葉# 漢字# ひらがな# 文字# 間違う# 異なる# 似ている# 連想# 掛け詞

04/28 なすがまま、されるがまま

＊

なすがまま、されるがまま

星野廉

2022年4月28日 11:47

目次

決めるではなく、決まる

読めてないんです。

なすがまま、されるがまま **

** 決めるではなく、決まる **

かける。かかる。

橋を架ける。橋を架けるのは人。

橋が架かる。「架かる」が前面に出て人が退く。

決める。人が決める。

決まる。責任者不在。

＊

「決める」は人為、「決まる」は人のする領域ではない。

とはいえ、人が「決める」ということはまずなくて、「決まる」のだという気がします。

何で決まるのかと言えば、たぶん以下の要因だと思われます（以下は引用です）。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、

階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

(拙文「決めるとき、決まるときの決め手」より引用)

*

上のリストに、新しく加えたいものがあります。

辻褄合わせ、「一度言った手前」とか「ああ言った以上」、自分で勝手に作った筋書き、面子です。こんな乗りで戦争をされたのではたまらないです。

しかも、たった一人による、辻褄合わせと、自分で勝手に作った筋書きと、「一度言った手前」とか「ああ言った以上」、面子です。

そのたった一人の辻褄合わせに、全世界が付き合わされているのです。なんで？ どうしてそうなるわけ？

最終戦争の切っ掛けとなるボタンを押す権利を、そのたった一人が託されているからです。だから何も言えないし、怒らせるわけにはいかない。

よって、そのたった一人のなすがまま。そのたった一人は、辻褄合わせのなすがまま。こんなギャグで人類が終わっていいのでしょうか？

辻褄合わせとは、言葉の上での帳尻を合わせること、辻を通すことに他なりません。人は言葉にひれ伏しているのです。

＊

とはいえ、自分の問題として考えると、いま付け加えたもの、辻褃合わせ、「一度言った手前」とか「ああ言った以上」、自分で勝手に作った筋書き、面子に自分が勝てる自信はぜんぜんありません。人にとって最強のものだと思います。

これらを人から除いたら人ではなくなるのではないのでしょうか。

** 読めてないんです。 **

読む。読んだ。読まない。読んでいない。読めてない。読まれていない。

言う。言われている。言えている。言えてる。

最近ご飯がちゃんと食べれてない。いただいた本ですけど、まだ読めてないんです。それはなかなか言えてるわ。

である。だ。となっている。となっています。となっております。

その製品は税込みで五万円です。その製品は税込みで五万円となっております。

非人称。ニュートラル。身を任せる。まかせる。まかす。まける。負ける。全面降伏。

必然。運命。天命。運。偶然。なりゆき。成りゆき任せ。受け身。受動。能動。無為。人為。天為。天意。責任者不在。

** なすがまま、されるがまま **

する。される。してもらう。していただく。なすがまま。されるがまま。そのまま。あるがまま。自然。天然。必然。

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

＊

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

誰が。誰に。誰を。不明。問わない。わかんない。

＊

橋を架ける。橋に掛ける。橋が架かる。橋が掛かる。
橋がかかる。橋はかかる。橋がかけられる。橋にかける。橋にかかる。

かかる。かけられる。
かく。かかれる。かかる。

書く。書かれる。書ける。掛ける、掛かる。賭ける。賭け。
語る。語られる。騙る、騙られる。

＊

グーグルでの検索結果です。

“なすがまま” 約 2,900,000 件 (0.51 秒)

“なるがまま” 約 2,190,000 件 (0.94 秒)

“されるがまま” 約 6,200,000 件 (0.37 秒)

ちょっと気になったので、検索してみました。

ヒットした文書のほんの一部にざっと目を通して見ると、この言い回しを使うさいには、「誰が」、「誰によって」、「何が」、「何によって」が不明だということがよく分かります。

＊

書くがままに。書かれるがままに。書けるままに。
掛けるままに。掛かるままに。賭けるままに。
語るがままに。語られるがままに。
騙るがままに。騙られるがままに。
まま。ままに。ままならないまま。

自分の意思とか意志によってではなく、「〇〇がままに」書いたり語ったりしている気がしてなりません。

現実も、言葉も、思いも、自分も、ままならないもの、つまり思いどおりにならないものだとつくづく思います。たぶん私だけなのでしょうね。

何か（「誰か」よりも絶対に「何か」です）に身をまかせたり、身をゆだねたほうがずっと楽なのです。「〇〇がままに」状態、最高。責任者不在。

#言葉# 漢字# ひらがな# 文字# 決める# 意思決定# 連想

04/28 それない、ぶれない、あやまらない

＊

** それない、ぶれない、あやまらない

星野廉

2022年4月28日 15:07 **

間違う、誤る、たがう、違う、ちがう。

外れる、はずれる、はずれる、はずす、ずれる、ずる。

逸れる、それる、そらす、反れる、反らす。

曲がる、まがる、曲げる、まげる。曲解、誤解。

しくじる、失敗。

誤る、あやまる、誤り、あやまり、過ち、あやまち。

合う、合っている、正しい、正す。修正、訂正、改正。

本物、偽物・贋物、偽者、模造品。

真偽、正誤。

＊

何から逸れないのでしょうか？ 何から違（たが）わないのでしょうか？ 何から外れないのでしょうか？ 何からずれないのでしょうか？

何に合わせるのでしょうか？ 何に沿っていればいいのでしょうか？

目次

** 決まりに沿う

見えないもの、見えなくて動かないもの

言葉の綾、レトリック

千鳥足でふらふら気ままに

固定化を指向するもの

杓子定規なものの不自然さ **

** 決まりに沿う**

決まり、決まったもの、決めたものから、逸れない。外れない。違わない。
決まり、決まったもの、決めたものに、合わせる。沿っている。

沿うべきもの、合わせるべきものは、動かないものでなければなりません。動くものに合わせたり、沿うのはきわめて難しいからです。

ふらふらしたもの、不安定なもの、揺らぐもの、ぶれるもの、まちまちなものでは、駄目なのです。

*

そりゃあ、そうでしょうね。

でも、そんなものって自然界にあるでしょうか？

私が見たところでは、自然界は動くもの、揺らぐもの、移り変わるもの、予測不能なもの、不確定なものに満ち満ちています。万物流転です。

——その動きには規則性があるのよ。じつは決まっているの。不安定に見えるだけで、じつは安定した動きに沿っているのよ。

** 見えないもの、見えなくて動かないもの **

見えないし、五感で知覚できないけど、動かないものがある。それが世界を、いや宇宙を支配している。普遍的で客観的な真実や真理や法則があるの。

ほんまかいな、そうかいな。で？

とにかく、そうなのよ。信じてちょうだい。悪い目にはあわせないから。信じる者は

救われるって言うでしょ？

(見えないし体感できないけど、信じるしかないもの。私はそういうものに嫌悪感を覚えます。私は信じるのではなく自分で考えたいのです。信じている振りはできます。「信じています」と言うこともできます。これまでそうしてきたことは何度もあります。でも、心売り渡すことはできません。ここでは本音の話をしています。)

*

見えないし、体感できなくて、動かないものがあるから、それに合わせましょう。それからそれないようにしましょう。それにそった考え方をするのです――。

嫌な予感がします。私がこれまで避けてきたもののようです。

論理とか数学とか公式とか法則とか科学とか、そういうものの匂い(臭いとは書きません)に似ています。

論理とか数学とか法則とか科学はいいのです。げんに私は物理学が好きで独学で勉強しています(笑われそうですが、言葉を考えるときに自分なりに物理学のモデルを意識する場合があります)。

そういう領域自体はいいのですが、そういう領域「っぽさ」とか、そういう領域「らしさ」が嫌なのです。

どういふことかと申しますと、客観的で普遍的だから万能だ、信じないのは変だみたいな、その領域の枠と限界性を考慮しない議論に傾くことです。こうした傾向は、研究者よりも部外者に多い気がします。

*

とはいえ、そうした領域は避けてきたのでよく知りません。ただ端で見たことはあります。たとえば、証明とか立証とか、式を立てるとか、証明するとか、そんな言い回しを覚えています。

ある領域の枠組みと限界性を見るのには、使用されているレトリックを検討するのがもっとも有効だからです。とくに注目すべきなのは、どのような置き換えがおこなわれているか（何が何に置き換えられているか）です。どんな学問でも置き換えという作業があります。そもそも数や言葉を用いての記述や、数式やグラフや図解は置き換えです。

たとえば、数学でも、ある対象（事象）を処理するために、置き換えが頻繁におこなわれていますが、これが数学のレトリックです。どんな思考も置き換えが基本になります。したがって知覚（おもに視覚）の制約を受けることになります。普遍性や客観性はそうした制約があつての話なのです。

いま述べたのは、いかにもド文系っぽい発想だという気がします。きっと、そうなのでしょう。

** 言葉の綾、レトリック **

証明は明らかにするのでしょうか。立証するとは、立てるのでしょうか。式を立てるというくらいですから、立てるのでしょうかね。

そういう言葉の綾とかレトリックは、形であり模様ですから目に見えます。

私は私らしく、言葉の綾を見ていきます。

立てると言い回しにめちゃくちゃ感じるものがあります。分かりやすいのです。

*

だいたい、立てたり、立つのは、見せたいからなのです。

「見て見て」、「すごいっしょ?」、「どや!」、「こんなものですわ」、「もっと立てましようか?」

見るほうも、同調します。褒め称えます。

「すごい!」、「お見事」、「たくましいわ」、「厳かですね」、「す、素敵すぎます」、「参りました」

私に言わせると、不自然なのです。立てて見せて、それに感動するなんて、そんな演出されたギャグに私には付きあえません。

やらせに同調するとか、マウント行為への忖度は嫌なのです。

*

証明みたいに明るくするのも、だいたいは見せたいし、見たいから明るくします。当り前ですよ。暗いほうがいいという人もいますけど.....。真っ暗は困りますが、ほの暗いほうが適度に想像力を刺激されて個人的には好きです。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

そもそも、ああいうものって陰でこっそりしませんか？ 明かりの煌々かついたところでなんて恥ずかしくてできません。赤裸々とか、真っ昼間とか、あからさまとか、私は苦手ですね、はい。

思うように行動できません。ええ、そうですとも。やっぱり薄暗いところがいいです。そのものずばりとか、包み隠さずぜんぶよりも、ちょっとだけ派です。

話が逸れてきました。逸れるほうが好きなんです。それたり、ずれたり、はずれたり、タイミングをはずしたり、ちょっとふざけてまげたり、あやまちをおかすほうが、よくないですか？

** 千鳥足でふらふら気ままに **

目に見えなくて、動かなくて、ぶれない筋。それに沿って、逸れないように、従う、導かれる。

証明によって導かれるなんていう、言い回しというカレトリックがありますが、導かれるんですね。導かれる、リードされる……。嫌ですね。自分で気ままにいきたいです。

リードする人、リーダーなんて興味はないですね。そもそも代理でしょう？　それが何か代理じゃなくなっていないですか？　私たちが選んだ代理がお代理さまみたいに偉くなって、ひな壇を作っているなんていうギャグには付きあえません。

＊

見えないものに導かれるなんて、考えようによっては、あれですけど、導かれるというのが嫌です。あれよあれよと運ばれるのは楽ちんでいいですよ。

でも、命令される感じは嫌なんです。

それに沿わないと、駄目なんでしょう？　動かないのですから、杓子定規ということじゃないですか。窮屈です。私には無理。例外を認めない感じですね。無理です。

プログラミングみたいに融通がきかないいんでは？　私はあれが苦手で、できれば無縁で生きていきたいです。これまでがそうでしたから、これからもそうでありたいです。この先はそれほど長くはないみたいですが、だからこそ、ふらふら千鳥足でいきたいです。

** 固定化を指向するもの **

分かりますよ。

プログラミングみたいな融通のきかない、つまりぶらぶらふらふらを認めない、例外を認めない論理とか公式とか法則に従って、動いている機械や仕組みや計器やシステムがあるらしいのですよね。

こちらが、その機械や仕組みに合わせて杓子定規にしないと正しく作動しないのですよね？　それはそれでいいのです。私だってその恩恵にあずかって生きていることは承知しています。

でも、言葉の世界にまで、そういう窮屈な理屈を持ち込まないでほしいのです。言葉の世界には言葉の世界の論理（比喻です）と文法（比喻です）があるのです。それを体系的な論理とやらに従わせるのは、それこそ非論理的ではないでしょうか。

＊

別の世界なんです。言葉の世界と数（すう・かず）や公式の世界とは別個のものなんです。

さらにいうと、現実の世界（そんなものがあるとして）、思いの世界（そんなものがあるとして）、数学や科学の世界（そんなものがあるとして）、言葉の世界（そんなものがあるとして）は、それぞれ別物だと思うのです。それぞれに独自の論理（比喻です）と文法（比喻です）があるのです。

思うだけですけど。

＊

もっと飛躍しますね。しかも、論理的な展開はしません（これまでもそうでしたけど）、というかできませんので、この先は直感を頼りに連想で書きます。

＊

見えなくて動かない決まりというのは、固定化を指向する名詞に似ています。見えて動きまくっているものというのは、動詞に似ています。

名詞的なものは（名詞じゃありませんよ）自然界になくて——見えなくて、でもいいです——、自然界は動詞的なものに満ち満ちている気がします。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっ

とすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。

（拙文「空から降ってくる言葉」より引用）

** 杓子定規なものの不自然さ **

名詞の不自然さは、論理の不自然さと重なって、私には感じられます。論理の不自然さというのは、文字の異物感と重なって私には見えるんです。

文字の異物感は、人の作るもので自然に帰らないものが圧倒的に四角い形をしている異和感（違和感ではなく）にも似ています。

とうとうこの星に現れたもののような感じと云えばいいのでしょうか。地球外的な異物性と云えばいいのでしょうか。不自然であり、反自然にも思えるほどです。

*

表情、身振りという視覚言語と、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）という四つを私は言葉として考えています。

表情、身振り、音声は、発せられた瞬間に消えますが、文字だけが残ります。消さない限り居座るのです。これが私には驚きです。不思議でなりません。

*

要するに、不思議なだけです。訳が分からないだけなんです。

間違う、誤る、たがう、違う、ちがう。

外れる、はずれる、はずれる、はずす、ずれる、ずる。
逸れる、それる、そらす、反れる、反らす。
曲がる、まがる、曲げる、まげる。曲解、誤解。
しくじる、失敗。
誤る、あやまる、誤り、あやまり、過ち、あやまち。

こうした言葉のイメージが自然であり、私にはしっくりします。

*

その一方で、

合う、合っている、正しい、正す。修正、訂正、改正

というのは、嘘くさいです。

何に合わせるのでしょうか？ 正しいって窮屈じゃないですか？ 杓子定規なものに従いたくはありません。だいいち、不自然じゃないですか。杓子定規なものが自然界にありますか？ 体感できますか？

そもそも「正しい」って決まっているんですか？

誰かが決めたのなら、ノーサンキューです。「決まっている」のでしたら、考えなくてもそうなっているという意味でしょうから、何とも言えません。

見えなくて、体感できなくて、なすすべがないものに興味はないですね。そんなものがあつたとしても、わざわざ言葉にしたいとも思いません。仮にそんなものがあるとして、名づけて、手なずけられるわけがありません。私なら、保留します。放っておくという意味です。

いまはそれしか言えません。

*

それない、ぶれない、あやまらない――。

似てるわ。

何かや誰かに似ているはさておき、そんなものは自然界にはありません。不自然です。少なくとも、私は見たことも体感したこともありません。理想として求めたいとも思わないです。

やっぱり嫌です。嫌いです。

人それぞれですけど。

*

今回の記事は、「なすがまま、されるがまま」という記事の続編に当たります。

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれませんが。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

*

レトリックの多いとりとめのない文章にお付き合いいただき、どうもありがとうございました。こういう理系の領域がらみの、ややこしいテーマのときには、レトリックを駆使するしかありません。

私は、レトリックこそが、「それない、ぶれない、あやまらないもの」に対抗できる手段ではないかと本気で信じているのです。

連休のある方は、よい連休をお過ごしください。

#国語がすき # 日記 # 散文 # 言葉 # 漢字 # ひらがな # 文字# 名詞 # 動詞 # 連想
レトリック

04/29 「それない、ぶれない、あやまらない」世界

＊

**「それない、ぶれない、あやまらない」世界

星野廉

2022年4月29日 11:54 **

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されがままを望んでいるのかもしれませんが。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

(拙文「それない、ぶれない、あやまらない」より引用)

目次

** 機械を動かす

錯覚を利用してしなやかな動きを作り出す

模造物

人が機械に似る、機械になる

杓子定規に憧れる

辻褄合わせ

不自然なもの

自然から、それてぶれてあやまった

人間化する機械、機械化する人間 **

** 機械を動かす **

「それない、ぶれない、あやまらない」がないと機械は動かない。いま文字を書いているこの画面も、このパソコンも、「それない、ぶれない、あやまらない」仕組みで動いているのでしょ。

「それない、ぶれない、あやまらない」で動いているものには「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令しか通じません。もちろん指示し命令するのは人ですから、人が機械に合わせるわけです。

新しい機械を作るたびに、新たな「それない、ぶれない、あやまらない」仕組みを作る必要があります。新しくできた機械にはそれに応じた「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令をしなければ正しく動いてくれません。

「それない、ぶれない、あやまらない」指示と命令は簡略化されて、研究者や開発者以外の、一般のユーザーや消費者にも使えるようになってきているのはみなさんご存じのとおりです。

みなさんの目の前にある端末がそうですね。「それない、ぶれない、あやまらない」ものの「それない、ぶれない、あやまらない」部分が隠されているわけです。

つまり、ややこしさやぎこちなさが消えて自然に見えるし、手や指で操作してもしなやかでスムーズに感じられるのですから、じつにうまくできています。

機械の機械っぽさを隠して消すことが、機械の進化であり洗練だと言えます。機械が人間っぽくなるのです。

**** 錯覚を利用してしなやかな動きを作り出す ****

自然界にある自然でしなやかな動きを人が作るためには、「それない、ぶれない、あやまらない」が必要です。自然界のしなやかな動きは、分断された細かな直線を並べることによって作りだせます。

分断を細分化すればするほど、ぎざぎざや凹凸が消えてなめらかな動きを作り出すことができるのですから、それは視覚の錯覚に頼った捏造と言えますが、一般的には再現と呼ばれています。

再現と捏造は異なりますが、再現のほうがかっこいいからでしょう。人は体裁をととも気にするのです。いまや人は、あらを隠すのにかなり上達しています。

聴覚を用いた錯覚を利用しても、同じような再現、つまり捏造がおこなわれています。ごちない不自然な音も、細分化することでしなやかで自然な音に錯覚されるという意味です。

現在、仮想現実という名前で、視覚と聴覚だけでなく、他の知覚も、錯覚を利用して再現、つまり捏造しようという試みに拍車が掛かっているのは、みなさんご存じのとおりです。

** 模造物 **

自然界にあるものの模造物は、「それない、ぶれない、あやまらない」によって作りだせます。模造物ですから、似ているだけでじつは違うわけですが、大差がない、つまりその差が知覚できなければ人は合格とします。

いい意味でも悪い意味でも大ざっぱで適当なところがあります。

自然界にあるものの模造物は、「それる、ぶれる、あやまる」によって、「それない、ぶれない、あやまらない」を使って作られている、と言えるでしょう。

「それる、ぶれる、あやまる」とは人のことです。とはいえ、「それる、ぶれる、あやまる」存在である人には、「それない、ぶれない、あやまらない」な部分があるからこそ、こんなことが起きているはずです。

人とは、「それる、ぶれる、あやまる」時々/ところによって「それない、ぶれない、あやまらない」である、と言うべきでしょう。まばらでまだら状なのです。両方の性質を兼ねそなえているとも言えます。

** 人が機械に似る、機械になる **

人は自分の「それる、ぶれる、あやまる」部分をどれだけでも小さくして、「それない、ぶれない、あやまらない」部分を大きくしていきたいと願っています。

自分の「それない、ぶれない、あやまらない」部分が大きければ、思いどおりになると考えているからです。要するに、人間が機械のようになれば（機械っぽくなれば）、万事が効率よく進むという考え方です。人は自分のままならなさ（人間らしさ）に手を焼いているからです。

これは「それる、ぶれる、あやまる」部分は無駄という発想に他なりません。「それる、ぶれる、あやまる」が多い人たちは排除されたり処分されていきます。あるいは、自分自身の「それる、ぶれる、あやまる」部分を消そうとしたり、なかったことにしようと努めます。

あっさり書きましたが、恐ろしいことです。

この排除と処分と隠蔽を効率よくおこなうためには、「それない、ぶれない、あやまらない」リーダー（たち）が、「それない、ぶれない、あやまらない」人たちを「それない、ぶれない、あやまらない」ように指示し命令するのが理想です。

お察しのとおり、独裁のことです。なお、現在の独裁が民主主義から生まれていることは注目すべき事実だと思います。

独裁と民主主義の両方の根っこに「それない、ぶれない、あやまらない」への指向があるからだと思われています。それほど根深く根強い仕組みなのです。

** 杓子定規に憧れる **

「それない、ぶれない、あやまらない」は人に見えない仕組みとして、人の作ったありとあらゆるものに仕組まれているようです。人が杓子定規に考えた結果、一見杓子定規ではないもの——隠されているのです——がつぎつぎと作りだされ、あちこちにあふれていると考えられます。

「それない、ぶれない、あやまらない」ものに満ちている、「それない、ぶれない、あやまらない」世界です。ただし、そうは見えないところが大切な点です。

手本が自然だから、「それない、ぶれない、あやまらない」という不自然な部分を隠しているから、そう見えないのかもしれませんが。あるいは、見えていても見ていないとも考えられます。人はこのすっとぼけが得意だからです。

いずれにせよ、「それない、ぶれない、あやまらない」は見えないのです。観念であり抽象なのでしょう。観念と抽象は、普遍や客観と呼ばれることがあります。それが錯覚や混同なのかは不明です。

杓子定規な指示や命令によってしか動かない機械がこれだけうまく行っているのですから、人が自分も杓子定規になりたいと思うのは当然の成りゆきでしょう。

人は自分たちの作りだした杓子定規に合わせ、杓子定規に慣れ、杓子定規が自然だと錯覚し、自分たち自身が杓子定規になるように邁進しているのかもしれませんが。

人は杓子定規に憧れひれ伏すようになります。その結果、何よりも辻褃合わせを優先しはじめます。

** 辻褃合わせ **

「辻褃を合わせる」とは、「それない、ぶれない、あやまらない」に合わせることでありますが、「それない、ぶれない、あやまらない」は人が作ったものです（決めたとも言えるでしょう）。「それない、ぶれない、あやまらない」は、ほとんどの場合が言葉で表されます（言葉を使うのですから、「決めた」と言っていていいでしょう）。

現実や思いにくらべて、言葉がいじりやすいからです。現実も思いも、思いどおりになりませんが、言葉はいじりやすいので、言葉だけは思いどおりになると、人は高をくくっている節があります。

じっさいには、人は言葉におどらされています。言葉は人の道具でも下僕でも奴隷でもなく、自立している、つまり人から離れていて、人の外にあるからだと考えられます。

言葉は意外とままならないものなのです。このままならさは、「それない、ぶれない、あやまらない」の自立性（人から離れて、人の外にあること）と通底しているように思えてなりません。

人は、自分がままならないもののされるがままになっていることにもっと敏感であっていいと私は思います。

とはいえ、人が人ではないもの、しかも見えないもの——「それない、ぶれない、あやまらない」という仕組みのことで——に合わせていくのですから、その事態をすくい取り、とらえることはきわめて難しいでしょう。

自然界で、不自然（人のことです）が不自然（「それない、ぶれない、あやまらない」のことで）を作りだし、しかも不自然を作りだした不自然がその不自然に憧れ、ひれ伏し、その真似をしようとしている。

そうした過程がエスカレートしている。そうも言える気がします。

** 不自然なもの **

私の言う不自然なものの性質を挙げてみます。

・残る。しかも残りつづけて自然に帰らない。イメージとしては文字です。物質からなる染みや痕跡という具象であり具体でもある文字はなかなか消えません。形という抽象でもあるために空間的にも時間的にも伝わるからです。インターネットによって複製と拡散（両方とも「伝わる」です）が同時になったことが「残る」に拍車を掛けています。文字が残ることと、人の作った四角いもの（建造物や製品や商品）が自然に帰らない形で居残っていることは、よく似ている気がします。

・固定化する。イメージとしては名前です。名づける行為です。名づけによる固定化は、見えません。抽象であり観念だからです。この見えない固定化が、「それない、ぶれない、あやまらない」という見えない仕組みと深くかかわっている、あるいはその根っこにある気がしてなりません。

不自然なものが目に見える形で残ること、同時に目に見えない形で固定化すること、この両方の性質を兼ねそなえているのが不思議であり、不気味でなりません。

自分ででっちあげたイメージを不思議がり不気味に感じているのですから世話ないですけど。

** 自然から、それてぶれてあやまった **

人は「それない、ぶれない、あやまらない」を作りだし、自らがそうでありたいと願っているようですが、そもそも人は自然から逸脱した生き物です。

逸脱しているとは、それている、ぶれている、あやまっていることです。外れているとも言えます。何から外れているのかというと、繰り返しになりますが、自然からに他なりません。とほうもなく、自然からはずれてずれているのが人間なのです。

「それて、ぶれて、あやまっている」存在が、「それない、ぶれない、あやまらない」を作り出したのです。このように言うとギャグに聞こえますけど。

上で述べたように、「それない、ぶれない、あやまらない」は見えない固定化という点で不自然なばかりではなく、目に見える形で残る、しかも自然に帰らない、という不自然な現象を起こしていることはきわめて深刻な事態です。

地球上の他の生き物たちも巻き添えにしているからです。

「それて、ぶれて、あやまっている」存在が、「それない、ぶれない、あやまらない」を作りだしてしまい、さらには自分の作ったものを模倣しはじめて、それにブレーキが掛からなくなっている――。

この事態に対し、なすすべもないのでしょうか。なすがままになるしかないのでしょうか。

** 人間化する機械、機械化する人間 **

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽくなるというギャグ的な事態をまねく気がします（そして、いつか逆転するとか.....）。もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

漢字 # ひらがな # 文字 # 名詞 # 機械 # 連想 # レトリック # 自然 # 不自然

04/30 人間の形（ひとがた）化、人形（ひとが
た）の人間化

＊

** 人間の形(ひとがた)化、人形(ひとがた)の人間化

星野廉

2022年4月30日 08:31 **

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」もののなすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽくなるというギャグ的な事態をまねく気がします(そして、いつか逆転するとか.....)。もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

(拙文「「それない、ぶれない、あやまらない」世界」より引用)

＊

人は、「それる、ぶれる、あやまる」自分を持てあますどころか、嫌悪しているのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものに導かれたい、身をゆだねたい、支配されたいのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものになりたいのかもしれない。

究極の「それない、ぶれない、あやまらない」を目指しているのかもしれませんが。

まわりを見ていると、そんな気がしてならないのです。

＊

不死

目次

** 作る、似る、なる

自然をいじる、加工する

人間の非人間化 **

** 作る、似る、なる **

人は思う、思いに似せて作る。

発明、創作、芸術、文学、科学技術

＊

人は自然のものに自分を見る、人を見る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人は自分に似せたものを作る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分の作ったものをまねる、自分の作ったものに似る、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

人が作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛す、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分に似せて作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛する、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

ナルキッソス、エーコー、ピュグマリオン、ゴーレム、『フランケンシュタイン』に出てくる名のない怪物、ドリアン・グレイ、ピグマリオン、トム・リプリー（パトリシア・ハイスミス作『太陽がいっぱい（リプリー）』）

＊

人間の人形化、人形の人間化

人間の物化、物の人間化

擬人、擬物

人間の機械化、機械の人間化

人間のフィクション化、フィクションの人間化

人間の作品化、作品の人間化

人間の神化、神の人間化

人間の動物化、動物の人間化

人間の仮想現実化、仮想現実の人間化

＊

道具、玩具、呪術、魔術、魔法、機械、人工頭脳、人工知能、仮想現実

＊

不死

** 自然をいじる、加工する **

絵、絵に描いたように美しい、人形（にんぎょう・ひとかた）、玩具、愛玩動物・家畜

(品種改良)、映像、二次元、写真のように綺麗

人工的な美、自然にはない美しさ、不自然な美しさ

写真や映画やデジタル画像を模倣する作られた演出された現実

修正、編集、改良、交配、デザイン・設計、外科手術、整形手術

人は見えないものに魂を売りわたし、見えるが至上の世界に没入していく。

見るために見えないものが必要な生き物は、おそらく自然から逸脱してしまった人だけ。

＊

サイボーグ、不老長寿、美容整形、容姿端麗、皮膚が異常になめらか、染み一つない肌、しなやかな動き、理想的なプロポーション、健康

神話、擬人、伝説、伝承、口承、物語、文字、写本、印刷、フォトコピー

落書き、壁画、描写、写生、模造、複製

小説やテレビドラマや映画のような筋書きの日常、会話、人生

＊

自然を作る、人工の自然

不死は究極の不自然（反自然というべきかもしれませんが）であり、究極の人工（人工には必ず目的があります）であり、究極の「それない、ぶれない、あやまらない」（しかも見えません、永遠に目にすることはできないでしょう）ではないでしょうか。

究極ですから、不死は、たぶん人のオブセッションになっています。人が言葉を相手にしているからだと思います。言葉は人を不死に誘うからです（不死という夢に誘うのです）。とくに不自然の権化である文字です。だから、人は文字から離れられないのです。

** 人間の非人間化 **

マスゲーム、軍隊、制服、合唱、規則、行進、一糸乱れぬ

法律、戒律、一本化、画一化、支配、階級、階層、代議制、党支配、政党政治

私は文字になりたい、小説の中で生きていたい、映画になりたい、キャラクターになりたい、登場人物になりたい

現実逃避、ボバリズム、ボヴァリー夫人、ドン・キホーテ

人形になりたい、人形のような肌がほしい

*

私は論理になりたい、哲学になりたい、私は数学になりたい

私は詩になりたい、私は言葉になりたい、私は物語になりたい、私は小説になりたい

私は音楽になりたい、私はあの楽曲になりたい、私は音符になりたい、私は音になりたい、私は声になりたい、私は声だけになりたい

私はゲームになりたい、私は世界になりたい、私は地球になりたい、私は山になりたい、私は海になりたい、私は川になりたい

私は犬になりたい、私は猫になりたい、私は金魚になりたい

私はカラスになりたい、私は白鳥になりたい、私はゴキブリになりたい、私はウィルスになりたい

人は、名づけたものにしかなりたいと思わないのではないのでしょうか。呼びかけ、話しかけることは、人にとってとても大切です。

名前と顔のないものには人は話しかけられません。さらに大切なことは、何かに話しかけたとき、人はそのものになっています。正確に言えば、なりきっています。

*

私はあなたになりたい、私はあの人（異性）になりたい、私はこどもになりたい、私はこどもに戻りたい、私は二十年前の私になりたい、私は別人になりたい、私は私になりたい、私は本当の私になりたい

もはや名前のないものになりたいと思うようになる人。自分には名前はないはずです。自分は世界とのかかわりあいのない場にしかいないからです。かかわりのない場では名は意味を成しません。

*

自分と「自分」が離れていく。

分れた自分。別れた自分。取り戻せない自分。たどり着けない自分。

「見える」だけがある世界。

#言葉# 文字# 人形# 機械# 連想# レトリック# 自然# 不自然# 自分# 名詞# 名前# 想像# 創造# 小説# 芸術# フィクション

04/30 そう、そる、それる

＊

** そう、そる、それる

星野廉

2022年4月30日 10:38 **

目次

** そう、そらす、たがう

あやまる、あやめる

決める、決まる

それない、ぶれない、あやまらない **

** そう、そらす、たがう **

見えないものに沿う、添う。

見えないものから身を反らす、逸らす。

見えないものに合わせる。

見えないものにたがう、違う。

見えないものから外れる。

見えないものからずれる。

＊

見えなくて、それなくて、ぶれなくて、あやまらないものに、そう。

見えなくて、それなくて、ぶれなくて、あやまらないものから、それる。

そうそれるがたがう、そうそれるがたがいちがいにやってくる。

ちがうたがう、たがいちがい。

** あやまる、あやめる **

それない、ぶれない、あやまらないものに身をゆだね、導かれる。
見えなくて、それなくて、ぶれなくて、あやまらないものを目指す。

あやまるものはあやまらない。
あやまるものはあやまる。
あやまらないものがあやまる。
あやまらないものがあやまらない。
あやまってもあやまらない。

*

あやまる、あやまち。
あやまる、あやまり。

あやめる、あやまる。
あやまる、あやめる。

あやめる、あやめ。

あやめ。
菖蒲、文目、綾目、*Iris sanguinea*、漢女。

あやめて、あやまる。
あやまって、あやめる。
あやまって、あやまる。

あやまって済む問題。
あやめて済む問題。

あやめとかきつばたとしょうぶをあやまる。
あやめばしで、みをあやまる。ごめんなさい。
あやめばしはあやめた橋。諸説あり。

あやめ亭は落ちついたお店です。
あじさい亭もすごく美味しかったです。最高でした。

*

あやまらないそうり。

あやまらない、あいむそうり。
あいむそうりと言わないそうり。
あいむそうりと言わないあいむそうり。(早口言葉)

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。
あやまりをみとめないみちびくひと。
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。(早口言葉)

** 決める、決まる **

おのれの筋書きがいちばんたいせつなみちびき手。

決める、決まる、選ぶ、決める、決まる
選んだ人が決める、決めた人が決める

選んだ人にすべてを委ねる、あやめることまで委ねる。

決めた決まりは正しい
正しいと決めれば正しい

*

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。
あやまりをみとめないみちびくひと。
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。(早口言葉)

だれもとめられない。
あやめることを委ねられた人には逆らえない。
見えないものに沿っているから、誰も何も言えない。

見えないものが正しいとされている。
正しいと決められた。
正しいと決まった。

決まりには逆らわない、逆らえない。
決まりがいちばん偉い。

決まりにひれ伏す。
決まりを崇める。

決まりのためにあやまる。
決まりのためにあやめる。

決まりがきわまる。
きわまって泣き出しそう。

** それない、ぶれない、あやまらない **

それない、ぶれない、あやまらないものを決める。
決めたものは正しい。正しいものは、もう正せない。
それない、ぶれない、あやまらないものに身をゆだね、導かれる。

だれもとめられない。
あやめることを委ねられた人には逆らえない。
見えないものに沿っているから、誰も何も言えない。

それない、ぶれない、あやまらないものが、それない、ぶれない、あやまらないようにしろ、と命じる。

一糸乱れず従う。一糸乱れず付度。あやめられるのが怖いから付度。
付度は独裁の完成形。命令しなくても従ってくれる。オートメーション化された独裁。
独裁の自動化。

だれもが、それない、ぶれない、あやまらないものになる。

*

それない、ぶれない、あやまらないものには誰も勝てない。
それない、ぶれない、あやまらないものは人の上に立つ。
それない、ぶれない、あやまらないものは見えない。
見えないものが人の上に立つ。

それない、ぶれない、あやまらないものは、それで、ぶれて、あやまるものの中にある。
見えないものは、見えるものの中にある。

*

掛けても掛けてもとまらない。夢の中の駆けると同じで、駆けても駆けても前に進まない。えんえんと続きそうな足踏み。言葉の輪は回りつづける。

繰る繰る回る歯車はとまらない、とめられない。

#言葉 # 文字 # 大和言葉 # 和語 # 連想 # レトリック # 掛け詞# 駄洒落 # 比喻

04/30 現象、現像

＊

** 現象、現像

星野廉

2022年4月30日 13:35 **

目次

** 文字をながめる

現象

あらわれる、立ちあらわれる

現像

像をつくる **

** 文字をながめる **

現象。

辞書は参考程度にして、原則として引きません。ただ漢字をひたすら見て、思いをめぐらします。漢字からなる熟語のイメージを思いうかべます。

文字の音と形をながめ、それが呼びさますイメージをすくい取ろうと努めるのです。深く探りはしません。表面にとどまります。

アメンボのように水面をすいすい滑り、ゲンゴロウのように深くもぐらないという意味です。

私の書く記事は、ぜんぶものごとの表面をなぞったものです。深く立ち入ることはありません。ひたすら、表面を見てなぞるだけなのです。知ったり分かるよりも気づくの待ちます。

寝入り際の夢うつつの心境で書くことを心がけています。調べたり、誰かの本を引用するのはできるだけ控えます。寝際に本や辞書は使えませんから。

だから絵空事やぼんやりしたとりとめのないことしか書けません。いい加減な人間なのです。この記事のタイトルを見れば一目瞭然ですよ。半分眠っているとしか考えられません。

** 現象 **

現象。

形が現れている、ということですね。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。

漢字をまじえると意味が見えてきます。意味が分れて分かってくる気持ちになります。分かっているのかどうかは不明です。

見える気がするというのが正確な言い方だと思います。見えるや見るは大切です。分かるや知るや悟るよりも大切だと私は考えています。見るほど難しいことを私は他には知りません。

ちょっと遊んでみます。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。

現象、表象、顕象。

顕象ってかっこよくないですか？ 気になったので検索してみたら、ありました。

「けんしょう」とも「げんしょう」とも読むようです。私は初めて見ました。Nice to meet you. 初めまして。

きょうの収穫です。

** あらわれる、立ちあらわれる **

形があらわれる。形が見える。形が姿をあらわす。

こうやって言葉を置き換えて転がすとわくわくします。現象という言葉があらわれているとは思いません。移り変わっているのです。

見ることは、見えないものと置き換えることです。そのものを見ることは、たぶん人にはできません。知っているものや、見たいものに置き換えてしまうからです。

*

現象。形が立ちあらわれる。

立ちあらわれるはカッコいい言葉です。背筋が伸びる思いがします。形がすっと立つ。いいですねえ。

「立つ」や「立てる」は見せるための動作ですから、言葉の立ち振る舞いとかたたずまいがカッコいいのでしょうか。

意味が立ちあらわれる。

この言い回しが好きで、何度も記事で使ったことがあります。

** 現像 **

現象というと、私はどうしても現像を連想します。

現像、現象。

字面はそっくりとは言いませんが、似ています。象も像も、姿や形のことです。人偏

が付いただけで、気難しげに私には見えます。

象は、動物の象に似ています。博物館で見たマンモスの骨みたい。そう思うと、ますますそう見えてきます。生きたゾウではなく、骨なのです。骨組みというか。

＊

現像は「写真を現像する」ときだけに使う言葉のようです。

正確には「フィルムを現像する」みたいですが、写真にはぜんぜん詳しくないので、現像の意味もよく分かりません。

現像も、やはり像があらわれてくると理解しておきます。深入りはしません。

＊

写真を撮るプロセスについても、現像や焼き付けや引き伸ばしについてもまったく知りません。

勝手に想像する、つまり空想するしかないのですが、そのほうが好きだったりします。

本を読まずにタイトルを見て、その内容をでっち上げるのが好きなのと似ている気がします。

＊

写真を撮り、自分で現像や焼き付けや引き伸ばしをする人は、わくわくするの連続なのでしょうね。

ファインダーを覗いた瞬間に「形があらわれる」が始まる。レンズとかピントとかを調節したり、アングルっていうんですか、撮る位置なんかを変えたりするたびに、新たな「形があらわれる」と出会うにちがいありません。

そして、暗室に入り、自分で紙の写真にする。現像するときなんて、どきどきなんだろうね。紙の写真ができあがるまでには、さらに「形があらわれる」を何度も経験するのですから、想像しているだけで息が苦しくなりそうです。

** 像をつくる **

像は作るのでしょうか。写真もフィルムの映画もデジタルの映像も、手を加えて作ったものに他なりません。加工とか修正とか編集のことですが、言葉で知っているだけで具体的には知りません。

というか、見ること自体が像を作るわけです。ヒトがヒトに備わっている知覚機能と脳の機能を使って見ているわけですから。

「見る」は絶対的なものではなく、他の生き物たちとくらべれば、相対的なものであるはずです。「見る・見える」なんて言葉があるから、言葉の世界に入ってしまった、「見る・見える」が当り前に思っているのではないのでしょうか。

(言葉はものを見えなくしているように思えてなりません。逆に言葉によって見えることもありますけど。)

しかも、人は「見る」ときに、何かと置き換えてしまいます。意味やイメージや自分の知っているものや自分の見たいものに置き換えないと見えないという意味です。

自分でそう思いこんでいるだけなのですけど。

*

こんなふうに言葉でまとめていること自体が、ものを見えなくしているのですね。見ることは難しいです。

#漢字 # 言葉 # 日本語 # 形

04/30 仮象、化象

＊

** 仮象、化象

星野廉

2022年4月30日 17:18 **

抽象、具象、事象、現象、表象、仮象、印象。

こんなふうに、言葉を並べてわくわくする人がいます。ここにもいます。辞書や事典で調べたり、ネット検索をする気配はありません。ただながめて、にやにやしたり、うーむとうなってみたり、鼻をほじったり、たまに天井の模様に見入っていたりしています。(拙文「例の象さんの話」より引用)

目次

** 仮象

かり、かりる

仮の姿、本当の姿

化象

but skin deep

ぺらぺら、厚みがない

本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている

お化けごっことしての世界 **

** 仮象 **

仮象。

前から気になっている言葉です。ものすごくかっこいいです。ぞくっときます。「かしょう」であって「けしょう」ではないようですが、「けしょう」もいいなあと思います。

辞書を引いた記憶があります。哲学か美学かの用語らしいのですが、専門用語は苦手なので、勝手にイメージしてみます。私は研究者でも探求者でもありません。

＊

仮象。かしょう、けしょう。

姿や形が仮のものなのでしょうね。想像するとぞくぞくします。怪しいというよりも妖しいです。仮の姿ですよ。妖しすぎます。

仮ということは、本当の姿があるのでしょうか。化けているということになりそうです。あるいは借りている。「仮」と「借りる」はつながっていたはずですが。

** かり、かりる **

『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』という記事を書いた書いたときに、「かり」と「かりる」について調べたり、考えたことがあるのですが、ほとんど忘れていています。

年を取ったせいか、物忘れが加速度的にひどくなり、集中力がめっきり萎えてきました。

＊

その記事にざっと目を通しましたが、長いですね。無駄に長いというやつです。もうあんな長いものは書けません。

仮象も何度か使っています。やっぱり深入りはしていないみたいです。浅い人間なので、深入りできないのです。表面をなぞるだけ。

** 仮の姿、本当の姿 **

仮の姿。借りた姿。本当の姿がある。どこかにあるのか、隠しているだけなのか。

姿が変わったのか、移り変わったという感じなのか。答えなんかありませんから、いろいろ想像してぞくぞくして楽しめます。

本物の姿があって仮の姿という発想は好きではありません。本物と偽物とか、真偽とか、正誤が苦手なのです。ぶっちゃけた話が、嫌悪感を覚えるのです。

嘘っぼいのです。本物も偽物も、正統も邪道も、等しいと思っているからでしょう。

** 化象 **

仮象。かしょう、けしょう。

「けしょう」は私が勝手に付けくわえた読みですが、「けしょう」といえば、化粧ですよ、ふつうは。

仮象、化粧。

私はお化粧をする習慣はありませんが、興味はあります。自分のすっぴんに粉や色をつけるようですね。大変でしょうね。

自分の顔の表面をいじるわけです。表面をいじって変えるのです。根本は変わりません。表面だけ。

表面だけでも、あれだけ変わるのです。

** but skin deep **

——Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)
(拙文「【掌編小説】バット・スキン・ディープ」より引用)

美は皮膜にあるのみ。

美しさは、皮膚の厚さくらいしかないという意味です。どんな美人さんでも、皮をむけば.....という感じでしょうか。残酷なフレーズですね。文字どおりに取って、そのさまを想像するとぞっとします。

でも言えていると思います。お化粧だって、表面だけを変えるのですから、分かりやすいです文句です。

よく考えると、深さがなくてぺらぺらものに美しいと感じさせるものが多い気がします。

** ペらぺら、厚みがない **

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。
文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

すごいですよね。不思議です。不思議すぎて腰を抜かすのを忘れるくらいです。

*

薄いのに厚い。表層なのに深層。浅いのに深い。平面なのに遠近が感じられる。小さいのに大きい気がする。狭いのに広い感じがする。

反対だと言われたり思われていることが、同時に起きているのです。でも、それは言葉の世界と現実世界を混同しているから不思議なのであり、よく観察すればよくあることなのです。

不思議の国じゃないですか。ルイス・キャロルは、やっぱりすごいわという話になります。ジル・ドゥルーズはやっぱりすごいという話にもなりそうです。

この辺のことは「不思議なままでいい」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

** 本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている **

現在の世界は、薄いのに厚いものに満ち満ちています。

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。
文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

なんでこうなっているのでしょうか。想像力のたくましさで学習の成果だと思います。

なにしろ、写真に映った「あれ」を見て、人は欲情するのです。これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。誰もが経験していると想像できるからです。

レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのと同じでしょう。条件反射とも言えそうです。

「あれ」というのは人、それぞれです。自分にとっての「あれ」が何かは普通はひとさまには言いません。プライベートなことだからです。

*

写真に映った映像で興奮するのは、想像力のたくましさですね。人は本物を相手にしなくても欲情できるという意味です。まさか、インクや紙や画素や液晶に欲情しているのではないのは確かだと思われまます。いくらいろんなフェチがあるだろうとは言え、です。

とは言うものの、偽物や似たものや似せたもののほうが好きだという人がいても、不思議はありません。

現在は、本物と偽物、「複製」と「複製の複製」、本当か嘘か、こういった区別が困難になり、さらにいうなら、その区別が意味をなくしつつある時代なのです。

このことが露呈するのは、戦争が起きるときだというのは、悲しい皮肉であり悲劇だと思います。いまみなさんが実感なさっているのではないのでしょうか。

＊

「あれ」の映像から、「あれ」が書いてある文章に話を移します。

人はぺらぺらの紙に印刷された文字でも興奮するのです（紙やインクや文字に欲情しているという意味ではありません、念のため）。これは学習の成果です。文字を何度も何度も見てなぞり、写すことによって、真似て学ばないと、そういう楽しみは味わえないのです。

欲情だけにとどまりません。喜怒哀楽すべてが、文字で引きおこされることはみなさんが日常的に経験なさっていることですね。

これは小説で偽物だから感動しないよ。これは言葉であって事物でも現象でもないから、何とも思わないもん——。

そんなの嘘です。万が一そんなことを言う存在がいれば、人ではないでしょう。それは人の姿をした機械かもしれません。いまは、そんな機械がいてもおかしくない時代です。

冗談はさておき、化象とかお化けかもしれません。いるんですよ、そういうのが。以下のまとめで、その話をします。

** お化けごっことしての世界 **

まとめます。

仮象、化象、化粧。

うわべだけ、ぺらぺら。薄いけど厚い。浅いけど深い。小さいけど大きい。短いけど長い。平面だけど立体。静止しているけど動いている。

仮の物からなる世界。ぜんぶ仮のもの、ぜんぶ借りもの。

偽物、似たもの、似せたものに満ち満ちた世界。

情報とは、知識とは、事実とは、「似せたもの」であり「似たもの」である。ひょっとすると偽物かもしれない。

あなたがいまご覧になっている端末の画面に映っているものがそうです。

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。

化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。

以上です。

漢字 # 言葉 # 日本語 # 化粧 # 本物 # 偽物 # ルイス・キャロル # ジル・ドゥルーズ
小説 # 連想

05/01 ペラペラしたもの

＊

** ぺらぺらしたもの

星野廉

2022年5月1日 09:34 **

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。

文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

（拙文「仮象、化象」より引用）

目次

** 薄っぺらいもの

ぺらぺらしたもの

人の作った四角いもの

文字もぺらぺら

雨の気配 **

** 薄っぺらいもの **

現在の世界は、薄っぺらいものに満ちています。薄っぺらいのにぶ厚いのです。

大昔から薄っぺらいものは自然界にあったようです。思いつくのは葉っぱです。おびただしい数のぺらぺらの葉っぱがいまも至るところにあります。ただし葉っぱはぶ厚い感じがしません。

現在目につく薄っぺらいものは何といっても紙です。ただの紙はぺらぺらですが、そこに文字がのっかっていると、とたんにぶ厚くなります。文字ののっかっている紙をぶ厚いと感じるのはヒトだけだと考えられます。

なにしろ、文字ののっかっている紙を人が飽きもせずにながめ、大切に保存し、写しを取り、広く配っているのですから、薄っぺらいだけのものでないことは確かでしょう。

たぶん、いや、きつとぶ厚いのです。ただ薄っぺらいものをながめたり、大事にするほど、人は暇ではないと思われるからです。

*

ぺらぺらの紙にのっかっているものは文字だけではありません。ざっくりと言えば、絵ものっかっています。絵には手描きのものをはじめ、光学器械で映したもの、印刷されたもの、機械で描いたものがあります。

人は薄っぺらい紙にのっかっている文字と絵をながめているようです。「ようす」と人ごとのように書いたのは、なぜか不思議でならないからです。見慣れた光景と言え、不思議でなりません。

人の仲良しの人以外の生き物たち、たとえば犬や猫や金魚や馬や牛や豚や鶏も不思議に思っているかもしれません。尋ねたことがないので想像するだけですけど。

** ペらぺらしたもの **

ぺらぺらしたものを思いつくままに、列挙してみます。

*

まず、人にあるもの。

まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

*

身のまわりにあるもの。

新聞、雑誌、ノート、本、メモ帳、ルースリーフ、ノートパソコン（キーボードおよび本体、モニター）、携帯電話（キーボードおよび本体、モニター）、クリアファイル、紙幣、硬貨

テレビ（画面と本体）、カーペット、座布団、畳、戸・ドア、ガラス窓、障子、時計、カレンダー、写真、写真を入れるフレーム、引き出し、カーテン、鏡

フックに掛けてあるエプロン、そんなこと言ったら衣類ぜんぶ

葉の包み紙（プラスチック製）、皿、まな板、ふきん、見ようによっては食器ぜんぶ、フライパン、見ようにとっては鍋、鍋の蓋

ティッシュペーパー、トイレトペーパー

＊

けっこう疲れますね。天候のせいでしょうか。

身のまわりにあるべらべらしたものを探しているうちに、既視感を覚えました。あるものを探していたときと同じものを探しているのに気づいたのです。

四角いものです。人の作った、つまり人工の四角いものと言うべきでしょう。

** 人の作った四角いもの **

過去の記事から引用します。

＊

この部屋は和室なのですが、引き戸も長方形、サッシの窓も長方形、あと壁のカレンダーも、テレビとそのリモコンも、テーブルも、パソコンの画面も、ティッシュの箱も、本も新聞も棚も枠に収めた写真も、ぜんぶ長方形です。あ、畳を忘れていました。目につく正方形は座布団とカーペットくらいです。

寝るためにつかっている部屋もそうです。ベッド、シーツ、布団、枕、エアコン、エアコンのコントローラー、たんす。そして天井の羽目板が長四角です。夜は小さな電球の

明かりのもとで寝ているのですが、目を開けると眼鏡を外した目にぼんやりとその羽目板の様が見えて安心します。見慣れているからでしょう。

(拙文「【夜話】正方形と長方形で悩む夜」より引用)

*

人は長方形に囲まれて生きている気がします。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ.....。

人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

(拙文「【夜話】夜になると「何か」を手なづけようとする」より引用)

*

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがない。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

(拙文「【夜話】直線で切りとり分ける」より引用)

** 文字もぺらぺら **

よく考えると人の作った四角いものにはぺらぺらなものが、けっこうあると気づきます。

しかも四角いほうが大切にされている気がします。

きわめつけはお札でしょう。紙幣です。それに、クレジットカードも、ポイントカードも。

あと名札でしょうか。各人にとっていちばん大切なものである名前が文字として示されている四角いぺらぺらです。

お札（おさつ）とな札（ふだ）とお札（れい）って似ていませんか？

究極のお札はお札ではないでしょうか？ お札（ふだ）ではなくお札（さつ）です、念のため。個人的な意見を押しつける気持ちはありませんけど。

*

いずれにせよ、文字を書いたり、映したり（印刷や photocopy や端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複写）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散）、ぺらぺら（紙や液晶画面のことです）が四角いことは注目に値します。

みなさんと私をつないでいる端末の画面というぺらぺらも四角いです。

私は文字、みなさんも文字です。文字同士としての付き合いです。ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、ぺらぺらなはずです。

** 雨の気配 **

居間の窓から外を見ると雨が降っています。

二階に上がって、南向きの窓のカーテンを開けると遠くにコンビニが見えます。

そこからの風景——夜の景色ですが——を記事にしたのも思いだしました。眠れない夜の話です。

記事を見つけたので、以下に引用します。

*

うちの二階の窓からは数百メートル離れたところにあるコンビニが見える。

カーテンを開けると、暗い中に煌々としたガラス張りの店舗が遠く浮かんでいる。闇の中でそのまばゆさは異様といえば異様であり、もちろん四角い。横に長い四角形のなかに、さまざまな色が見える。駐車場でときおり長細い車が動くのがシルエットになって動く。

吸い寄せられるように人が入っていき、何かを手にして出ていくのをながめていると、夜のコンビニに入る人たちの気持ちがこちらにうつってくるようで、孤独感と同時に安堵と満足を覚える。

利用者には一人暮らしの人もあるだろう。旅や移動の途中に寄る人もいるにちがいない。緊急事態で駆け込む人がたまにいと聞く。

ああ、あそこに行けば人がいて、四角い棚に収められ、四角い容器に入った食べ物や飲み物がいっぱい並んでいる。長方形の雑誌や本だって並んでいる。深夜に自由に出入りできるのはコンビニくらいではないだろうか。

真っ暗ななかに明るい光を放って浮かぶ四角形。自然のなかにある不自然は人をほっとさせる。人自身が不自然だからにちがいない。

夜はもちろん昼間でも私が外に出ることはめったにないのだが、夜に動いている「生の」人間が見えるのは窓からだけなので、眠れぬ夜によく二階に上がる。

距離があってコンビニから出てくる人の顔まではわからないものの、その足取りは心なしか軽く見える。シルエットとして浮かぶ人の姿は四角くはない。よかったね、なんてその影につぶやいて階下の寝室にいくとよく眠れる。

(拙文「【夜話】シルエット」より引用)

*

このところ、記憶力がめっきり衰え、自分で書いたはずの文章が他人の文章のように感じられます。

私としては珍しく常体で書いた記事なのでよけいに他人の文章に思えるのかもしれませんが。小説では常体で書くことが多いのですが、noteの記事はほとんどが敬体です。

なぜ、あのときに常体を選んだのか。あのときの自分に尋ねてみたい気がします。

*

上の記事を書いたころは心身ともに調子がかなり悪かったのですが、いまこうして、あの時とつながっている「いま」にいるわけですね。

雨のせいかな、ちょっと気温が低いせいかな、年のせいかな、頭がぼんやりします。

この記事のタイトルを忘れてしまいました。

「ぺらぺらしたもの」でした。自分のことじゃないですか。ぺらぺらがぺらぺらについて書くとは。

きのうの記事のしりとりで書いているようです。相変わらず適当な人間ですね。最近

は、連想というか、しりとりばかりで書いています。記事の章立てもしりとりなのです。
連想、廉想、呆廉想。

*

補聴器を通した耳には雨の音は聞こえません。

雨の気配を楽しみながら、四角やぺらぺらのものについて、もう少し考えてみたいと思います。

#言葉 # 日本語 # 文字 # 複製 # 印刷 # 写本 # 翻訳 # 紙 # ぺらぺら # 四角 # 連想
雨

05/01 イメージの韻を踏む

＊

** イメージの韻を踏む

星野廉

2022年5月1日 16:02 **

ぺらぺらしたものを思いつくままに、列挙してみます。

まず、人にあるもの。

まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

(拙文「ぺらぺらしたもの」より引用)

目次

** 舌べろ

言の葉

ぺらぺらがぺらぺらを生む

ぺらぺらがぺらぺらに

言の葉を聞く

言の葉を映す・書く、言の葉を見る・読む

言の葉を写す、言の葉を移す

ぺらぺらというイメージの韻

孤独な賭け **

** 舌べろ **

舌べろは方言なのでしょうか。

「べろ」という発音は舌に擬態しているように私には思えます。「べろ」をいう音を舌で転がしてみます。舌で舌を転がすのです。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

ごいっしょに発音してみませんか？

ぺろぺろ、ぺらぺら、べろべろ、あっかんべえ。ぺらぺら、英語がぺらぺら、へらへら、へろへろ、れろれろ。

なんだか軽薄でいいですね。軽くて薄い感じ。親近感を覚えます。他者とは思えないのです。

*

ヨーロッパの諸言語で、言語を意味する言葉の語源が「舌」であるのは興味深いです。英語だと language であり、tongue ですね。

l と t では、舌の先が上の歯の後ろの歯茎に来ます。l ではぴったりと舌が貼りつき、t では軽く舌打ちする感じ。

ウラジーミル・ナポコフの L への、尋常ではないこだわりについて書いた記事がありましたので、以下に引用します。アート・ガーファンクルの動画を使って、英語の L と T の発音をねちっこく、しかも少々エロく語った記事です。

(動画省略)

アート・ガーファンクルの大きめの口が大きく開いたときに見える舌の動きに注目してください。

私なんか、見入ってしまいます。同じ口、同じ舌の動きを真似ている自分があります。自分が舌になっていくような不思議な気持ちになります。

これだけ口と唇と口蓋と舌の動きや形や構えがよく分かる動画は珍しいです。声もいいですね。会場であるセントラルパークの雰囲気も最高です。

では、以下に引用します。

*

L と T は基本的に舌先が同じ位置にあり、T では上の歯のすぐ後ろにある口蓋を舌先が叩くというか弾くようにして発音されます。舌打ちにも近いです。ナボコフはそれを十分に意識しています。

ナボコフの L という子音に対する入れこみようは尋常ではありません。L フェチと言ってもお墓の下のナボコフさんは腹を立てないのではないのでしょうか。

(拙文「音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」より引用)

** 言の葉 **

言の葉という言い方の葉ですが、これも私にはべらべらに感じられます。ヨーロッパの言語における舌のべらべらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。

(※「韻を踏む」というのは、通常は言葉の音(おん)の一致や類似に注目して言葉を掛けるレトリックを指します。「イメージの韻を踏む」とは、言葉の語義や、言葉の喚起するイメージの類似に注目して言葉を掛けるレトリックのことであり、私が勝手にそう呼んでいるだけです。)

*

言葉はべらべら。そんな気がしてきました。たしかにそのようです。とはいえ、これはあくまでも個人的なイメージの話であり、普遍を意識したり指向しているわけではありません。

イメージの連想というか、直感とか直観というか、体感的な感覚が私は好きです。イメージとは個人的なものですから人それぞれであり、確認も検証もできませんが、だからこそ愛おしいのです。

おそらく死ぬ間際までついてきて、私を楽しませてくれるようなイメージなのです。大切にしたいと思っています。

** ぺらぺらがぺらぺらを生む **

いずれにせよ、文字を書いたり、映したり（印刷やフォトコピーや端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複写）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散）、ぺらぺら（紙や液晶画面のことです）が四角いことは注目に値します。

（拙文「ぺらぺらしたもの」より引用）

ぺらぺらがぺらぺらを生む。うむ。有無。無から有が生じる。ぺらぺらからぺらぺらという具合にちょっと厚みを増して、意味が立ちあらわれる。

言葉は音声、放した離れたとたんに消える。声の存在感の薄さはきわまりない。きわめて薄い。なのに、人はそこに意味やイメージを取る。

意味やイメージというものは見えないけど、どうやらぶ厚いものらしい。さもなければ、人がこれだけ執着するわけがありません。

*

ぺらぺらとした言の葉に各人のいづく実体を欠いたさまざまな意味とイメージが（各人の頭の中にあるイメージが）、ぺらぺらとした言の葉と化して（言葉として）発せられる。

ある言の葉と別の言の葉が重なる。するとその重なった意味とイメージがさらに濃くなる。厚くなる。熱くもなる。

言の葉に言の葉を重ねる。重なる。葉が積み重なるように意味がぶ厚く層をなしていく。

要するに、薄いと厚いが同時に起きています。言葉は薄っぺらいのにぶ厚いのです。

薄いと厚いが反対なのは言葉の世界でのことであり、つまり言葉を用いた論理の世界の辻褃なのであり、現実世界では必ずしも反対ではないのです。

「不思議の国」の出来事は、物理学、とりわけ現代物理学の世界で起きているように私には感じられます。

この辺のことは「不思議なままでいい」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

** ぺらぺらがぺらぺらに **

ひよっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、ぺらぺらなはずです。

（拙文「ぺらぺらしたもの」より引用）

空気の震え（波）という形でしか実体のないぺらぺらの音声を、形というぺらぺらの文字に落としていく。

影が地面に落ちるように、音声という影が文字として紙に落ちることで、紙に映り（書かれ）、その紙が写され（筆写や写本や印刷や複写され）、さらにその写された紙があちこちに移っていく（配布や翻訳や拡散される）。つまり伝わる。

** 言の葉を聞く **

聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

** 言の葉を映す・書く、言の葉を見る・読む **

映す。書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る。つまり書かれる。

*

見る、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見えない。

** 言の葉を写す、言の葉を移す **

写す。筆写する。印刷する。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

*

移す。配布する。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

＊

翻訳する。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言の葉の文字に移されることもある。翻訳。

＊

複製＝拡散する。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。ネット上での複製＝拡散。

** ペらぺらというイメージの韻 **

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。

ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

＊

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字は似ていますか？ 見えないものありますが、見たときに似ていると感じますか？

人それぞれですよ。またはケースバイケースだと思います。そのときの気分でも変

わる気がします。

要するに、こじつけなのです。

** 孤独な賭け**

どちらにせよ、アルミ缶とミカンの数々の特性の中で、音の類似、つまり言葉として似ているという点が、一瞬両者をつないだのです。簡単に言うと、言葉が事物同士を一瞬つないだのです。

(拙文「駄洒落と比喩と掛け詞」より引用)

言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字のそれぞれが持つ数々の特性の中で、イメージの類似、この場合には「べらべら」という薄っぺらいものとしてのイメージが、私の中で一瞬ぜんぶをつないだのです。

掛け詞や駄洒落で掛ける要素である、発音や文字の形は、人の外にあるものですから、聞いて、あるいは見て一致や類似が確認できますが、イメージは人の中にあるものですから、確認も検証もできません。

*

私が勝手に作った言い回しである「イメージの韻を踏む」というのは、やはり言葉の喚起するイメージの類似に掛ける比喩に近いのかもしれませんが。

いずれにせよ、個人的なイメージに頼る孤独ないとなみなのです。ギャグといっしょで、誰かに受けるか受けないかは、賭けだと言えようがありません。

掛け詞も駄洒落も比喩も、そしてイメージの韻も、誰かが乗ってくれるかどうかにかかっているという意味では、賭けだと言えそうです。しかも孤独な賭けなのです。

*

個人的で孤独なギャグにお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

#言葉 # 日本語 # 文字 # 漢字 # イメージ # 紙# ぺらぺら # 舌 # 連想 # 言の葉 # 掛け詞 # 比喩 # レトリック # シンクロ

05/02 【連想メモ】 薄っぺらいもの

＊

**【連想メモ】薄っぺらいもの

星野廉

2022年5月2日 09:40 **

薄っぺらいものについての連想メモです。

＊まぶた

まぶたの裏に浮かぶ、臭いものには蓋を。

ふた、蓋。皮膚、肌、皮。皮膜。膜。幕。巻く。撒く。

＊ひらめく

枚方、ひらかた。字面と音の響きが美しい、蝶の舞いが目に映るよう。語源や蘊蓄や含蓄は無用。個人的なイメージを楽しむ。浅く表面をなぞる。深くは探らない。連想。イメージの韻。

ひらめく、閃く。ひらめる。ひらめかす、閃かす、平めかす。

ひらめ、ヒラメ、鯉、比目魚、平目。

ひらひらしたもの。ぺらぺらしたもの。薄いもの。一枚二枚と数える、一面二面と数える。鏡やレンズも。

＊ひらひら

旗、標識、看板。

手のひら、てのひら、かざす、ひらひらさせる、振る、撫でる、平手打ち、ぱしっ、びしゃり、びたっ、べたっ、べたべた、びたびた、びんた。

手に汗握る。手のひらにかく汗、手の甲にかく汗、指の甲に浮き出る汗、細かい汗の粒、小さな球のような汗が浮かんでいる。

*おおう、被う、覆う、さえぎる、遮る

盾、楯、身を守る。

スクリーン。

マスク、仮面、身を守る、顔を隠す。

アクリル製の透明なスクリーン。身を守り、同時に遮る。透かし見る。距離があり遮断されているけど相手が見えるし聞こえる。液晶画面を通した関係に似ている。デジタル化された音声と画像か、肉声とアクリルを通して見た像かの違い。匂いは分かる。息づかいや空気の震えも感じられる。同じ場を共有しているという感覚の有無。リアルタイム。距離、隔たり、distance。

皮をむく、皮を剥ぐ、皮が剥げる。

皮をむいていただく、皮のままいただく。

桃の皮をむく、薄く、産毛の生えたようなざらっこい皮をむく。

ゆで卵の殻を取る、取るより剥く感じ、つるつるの固まった白身が出てくる、白身の薄い部分に黄身がやや黒っぽく透けて見えることがある。

剥くときのわくわくした感じ、もどかしさ、丁寧に剥かないとうまくいかないと思うと緊張する、焦る。罪悪感に似たもの、背徳感まであと一歩という感じ。

剥く、めくる、ぬがす、はぐ、ハグ。

*皮、革

太鼓。鼓膜。震え。振動。音。波。

叩く、打つ。

打楽器、管楽器。震え。波。空気。耳。

*薄い

薄い氷。

薄くて透けて見える。薄いベール、薄い覆い、薄い皮。

まぶた、顔の皮膚、肌、耳たぶの薄い人、厚い人。

肌が白い人、陶器のような濃い白さ、細かい血管が透けて見えるような薄い白さ、血の染みた肉が透けて見えるからかピンクがかった白、静脈なのか青い筋となった血管が見える。

*薄いものを重ねる、束ねる

薄いものを丸める、巻物、めくる、のぼす、スクロール。
指でなぞる。指で弾く。指を走らせる。指で走らせる。

*文字の書いてある薄く四角いもの

始まりと終わりがある。本、巻物、頁、ページ。

上から下へ、右から左へ、下から上へは聞いたことがないが、左から右へと読み書きする文字がある、始まりと終わりがあるべらべら。

絵には始まりと終りがいいのか。点と線と面のからみ。からみを解く。解けない気もする、溶けない気もする、融けない気もする。

絵を並べることで時間が生まれる。絵が夢に近づく。絵が現実に近づく。物語と筋書きが生まれる。二枚の絵が動画の始まり。動画は絵の悲願。映画は絵の悲願の達成。映画は時間の芸術。絵が時間になる。絵が時間のずれになる。映画はコマ送り。コマを重ねる。絵を重ねる。現れる絵、消える絵。記憶。記憶の中の絵といま見ている絵。連続とずれ。

絵（具象）は忘れられ物語（抽象）が立ちあらわれる。抽象への蓮實重彦の抵抗。

点と線と面は、おそらく抽象であり観念。形もおそらく抽象。形を形として意識している限りは、見えない。むしろ読んでいる。解いている。読めないはずのものを読んでいる。読んでしまう。解けない謎を解こうとしている。難解は解こうとするから難しいのだろう。解かなくてもいい。見ていればいい。とはいえ、見ることは難しい。見えないものやことを見てしまう。見るには見落とすがつきもの。見るには見えないものを見るがつきもの。

なぞることのできないなぞは諦めるしかない。

解くのを諦めて、なぞる。何かに導かれてうながされてなぞる。始まりと終りはおそらくない。いましかない。ここしかない。ひたすら見つめる、ひたすらながめる。解くのではなく溶ける。こちらが溶けて解けていく。ほどけていく。

*はる、張る、貼る

平たいものに張りつく。

はりつく、壁に張りつき壁に擬態する。

ひつつく、何かにひつつき、くつつき、身を寄せる、身を任し委ねる、ひつつき虫、コバンザメ。何かに擬態する、寄生する。共生する。

ふせる、地面に伏せる、ひれ伏す、地面に擬態する、マヌルネコ、負ける。

へばりつく、壁にへばりつく、擬態、カメムシ。身をできる限り平たくする。

ほふく、這う、腹ばう、腹這う。身を伏せて歩く。

* note もぺらぺら

note、ノート。

メモ、防備録、手記、印象記、草稿、草案、小論文、短いエッセイ、短い手紙、記号、音符、メロディー、手形、紙幣。

ぺらぺらから音を生む音符。シブヤノオト。渋谷の音。渋谷の♪。渋谷 note。あくびの音。あくびノート。

音符、符、札。符号、符合、付合（つけあい）。

紙幣、御幣。五平餅。弊、塀、屏、平、幣。屏風、スクリーン。

手形、手のかた。てのひら。掌。

*

このメモを見ながら記事を書いていこうと考えています。

#連想 # 言葉 # 日本語 # 掛け詞 # 比喩 # イメージ

05/03 お化け

＊

** お化け

星野廉

2022年5月3日 08:03 **

目次

** お化け【ショート・バージョン】

お化け【ロング・バージョン】**

** お化け【ショート・バージョン】**

お化け。幽霊でも霊でもなくお化け。化け物でも妖怪でも妖精でもなくお化け。あっけらかんと、お化け。すんなりと、お化け。あっさりと、お化け。

おどろおどろしくも、もったいぶってもいない、お化け。ここで言うお化けは、おそらくひとさまの言うお化けではない。

お化けは文字どおり化けたもの。何かが何かに化けたのだろうが、その何かは大切ではない。何かは保留すべきもの。保留したいから何かと言う。

＊

お化けは平べったい。ぺらぺらで薄い。立体感にとぼしい。かといって平面ではないだろう。薄くて厚みに欠けるだけ。

お化け屋敷のお化けは人がお化けに化けているだけ。あれは人。化けた人にすぎない。

お化けを見た人はいない。誰もお化けを見たことはない。お化けを見たという話があるだけ。お化けは噂であり話である。お化けは語るものであり語られるもの。

＊

お化けは語るもの、写してみるもの、映るもの。もしかすると、移るものかもしれない。断定はできない。あくまでも噂。根も葉もない噂かもしれない。

幽霊ではない。そんな深刻な話ではない。それほどリアルな話でもない。正体不明の化け物がお化け。見たという話はあっても、見た人はいない。見たという話を聞いた人が、又聞きで語る。噂。

お化けは平べったい。ぺらぺらして薄い。存在感がとぼしい。影のように影が薄い。陽炎のようにとりとめがない。蜻蛉のようにたよりない。

＊

見たという話はあっても見えない。写ったものはある。写した絵や写真はあるが、映ったものはない。言葉と絵と写真はあつても、そもそも言葉と絵と写真がお化けなのだ。実体を欠いた言葉、絵、写真。

実体はないが、移ったものである可能性は否定できない。否定できなくてあるものは無数にある。

お化けが残したと言われているものはある。物、痕跡、印が残っている。確証はない。噂としてあるだけ。

＊

怖いが恐ろしくはない。たたりはない。恨みもない。呪いとも無関係。むしろお呪いと関係が深そう。

呪うは祝うに似ている。まじないとのろいといわいは似ている。そっくり。読むと詠むや、歌うと唱うと謡うと唄うと詠うと訴ふが似ているくらいに、そっくり。

機械化した人間と人間化した機械、本物と似せたものと似たものと似せもの、コピーとコピーのコピーと同じくらいまぎらわしくて似ている。

＊

お化けは化けているというより、かぶっている。被っているものは薄っぺらいはず。ぺらぺらなものを見たら、お化けだと思ったほうがいいかもしれない。

お化けは目の前にいる。見えない噂として、いる。残したと言われる物、痕跡、印がある。

ひょっとすると顔。というより、顔の気配。顔がいる気配。

** お化け【ロング・バージョン】 **

お化け。幽霊でも霊でもなくお化け。化け物でも妖怪でも妖精でもなくお化け。あつ

けらかんと、お化け。すんなりと、お化け。あっさりと、お化け。おどろおどろしくも、もったいぶってもいない、お化け。

私のイメージするお化け。ひとさまについては知らない。ひとさまの思いに立ち入るつもりはないから、こちらにも立ち入らず口出しないほしい。

ここで言うお化けは、おそらくひとさまの言うお化けではない。おそらく。

お化けは文字どおり化けたもの。何かが何かに化けたのだろうが、その何かは大切ではない。何かは保留すべきもの。保留したいから何かと言う。名づけたわけではない。名づけて手なずけるつもりはない。放って置くから、そうっとしておいてほしい。

＊

お化けは平べったい。ぺらぺらで薄い。立体感にとぼしいのだ。かといって平面ではないだろう。薄くて厚みに欠けるだけ。

お化け屋敷のお化けは人がお化けに化けているだけだから、あれをイメージしてはいない。あれは人だ。化けた人にすぎない。

お化けを見た人はいない。誰もお化けを見たことはない。お化けを見たという話があるだけ。お化けは噂であり話である。お化けは語るものであり語られるもの。

＊

お化けは語るもの、写してみるもの、映るもの。もしかすると、移るものかもしれない。断定はできない。あくまでも噂。根も葉もない噂かもしれない。

「かもしれない」というのがお化けをよく表している。「かもね」や「かもよ」のほうがもっと適切かも。

幽霊ではない。そんな深刻な話ではない。それほどリアルな話でもない。正体不明の化け物がお化け。見たという話はあっても、見た人はいない。見たという話を聞いた人が、又聞きで語る。噂。

お化けは平べったい。ぺらぺらして薄い。存在感がとぼしいのだ。影のように影が薄い。陽炎のようにとりとめがない。蜻蛉のようにたよりない。はかないなんて上等なものではない。

＊

見たという話はあっても見えない。写ったものはある。写した絵や写真はあがあるが、映ったものはない。言葉と絵と写真はあがある。そもそも言葉と絵と写真がお化けなのだ。実体を欠いた言葉、絵、写真。

実体はないが、移ったものである可能性は否定できない。否定できなくてあるものは無数にある。

お化けが残したと言われているものはあがある。物、痕跡、印が残っている。確証はない。噂としてあがあるだけ。

＊

怖いが恐ろしくはない。たたりはない。恨みも怨みも憾みも浦見もない。呪いとも無関係。むしろお呪いと関係が深そう。マジで関係深そう。マジまぎらわしい。

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が）、まじもの・蟲物。

（拙文「おまじないを旋律に乗せる」より引用）

呪うは祝うに似ている。まじないとのろいといわいは似ている。そっくり。読むと詠むや、歌うと唱うと謡うと唄うと詠うと訴ふが似ているくらいに、そっくり。

機械化した人間と人間化した機械、本物と似せたものと似たものと似せもの、コピーとコピーのコピーと同じくらいまぎらわしくて似ている。

＊

お化けは化けているというより、かぶっている。かぶりもの。被っているものは薄っぺらいはず。ぺらぺらなものをかぶっている、被っている、気触っている、歌舞っている。

ぺらぺらなものを見たら、お化けだと思ったほうがいいかもしれない。

お化けは目の前にいる。あがある。見えない噂としてあがある。いる。残したと言われる物、痕跡、印があがある。もじ、もんじ、まんじ、文字、卍。

ひょっとすると顔。というより、顔の気配。顔のある気配というのが、ふさわしい言い方かもしれない。

#連想 # イメージ # 影 # 言葉の綾

05/07 言葉をはなす、言葉をうつす

＊

** 言葉をはなす、言葉をうつす

星野廉β

2022年5月7日 15:02 **

目次

** 言葉をはなす

言葉をうつす **

** 言葉をはなす **

はなす、放す、離す、話す、放つ、発する。

何かは何かからはなれていく。何かの一部がはなれていくのかもしれない。何かが無傷のままに何かはなれていくことも考えられる。「はなす・はなれる」ことによって、その何かは何らかの変化をこうむると考えるのが妥当な気もする。まして、人がはなしたり、人から何かはなれていくのであれば、人は移り変わるのが自然ではないだろうか。

はなされる相手が人である場合も、物である場合も、ひょっとすると事である場合もありうる。さまざまなケースを「はなす・はなれる」という言葉でおおざっぱにとらえてみる。

＊

英語の on と off のイメージを借りてみる。接触しているものが、離れるというイメージ。離れるからには、その素地はあったわけだ。別個のものとしてくっついていて、溶けあっていたのではなく、くっついていて。

＊

剥離と解離と乖離という言葉が頭に浮かぶ。どれもが気になるイメージを喚起する。危うい語感のある言葉であり不穏なのだ。

たとえば、剥離は、剥がれて離れていくこと。剥がれるというのが痛々しい。医学でも使われる言葉だ。本来は剥がれてはならないものが剥がれていく。剥がれた結果、何かの損傷が生じるニュアンスを感じる。

遊んでみよう。言葉は剥離する——。これはいったいどういうことなのだろう。いま私は「言葉は剥離する。」という言葉をはなした。必然性もなく、ただ戯れにはなしたにすぎない。「言葉」と「剥離する」という二つの要素にはつながる必然も理屈も見当たらないに、いっしょにされてはなされた、はなたれた。

無理やりいっしょにされてむりやり放りだされた感がある。この無理やりな感じと「言葉は剥離する。」が擬態している。言葉やフレーズや文の綾と、その綾が醸すイメージを掛けるのが私は好きだ。言葉を掛けるというのは、このように必然のなさど無理やりとかかわれている。

掛け詞、韻、比喩、駄洒落というふう言葉に掛けることで、言葉の音や文字や意味やイメージが一瞬つながり、次の瞬間には引き剥がされる。言葉を掛けて、それが人に引っ掛かるかどうかは賭けだと言える。かけるは宙ぶらりんでありサスペンス。

言葉を掛ける場合だけではないだろう。どんな句も文も、言葉が分けられるものならば、言葉と言葉を一瞬つなげたものだとも考えられる。そして剥離されるのだ。「つなぐ」と「はがす」は人という場において起きる一瞬の出来事であり、その痕跡が文字であり記憶なのかもしれない。

＊

剥離。はなすからには、もともと分れていて、くっついていたものが剥がされて、離れるということか。はなされる素地があるもの同士がいつかはなれるのかもしれない。

乖離。そむき離れる。背くは背中を向けること。背くからには、何らかの因縁やかかわりがあるはずだ。

解離。解け離れる、解き離す。むすびをほどいてはなすのだから、からまるくらいにくっつき合っていたのか。いい意味にも悪い意味にも取れる。精神医学用語に、この言葉の見えるものがいくつかある。

何かと何かがくっついていれば、はなれていいもの、はなれると困るもの、どちらでもいいものがあるだろう。はなれる前のくっつき具合や程度も考慮されるにちがいない。いずれにせよ、はなれる。

*

言葉は剥離する。言葉が剥離する。

言葉は乖離する。言葉が乖離する。

言葉は解離する。言葉が解離する。

どれも文字どおりに取って想像すると、もしそんなことが起きたとするなら、言葉をはなす、放つ、発するところではない、深刻で恐ろしい状況だろう。とはいえ、まったくこうした事態が起きないとは考えられない。案外、起きているのかもしれない。

** 言葉をうつす **

言葉がはなれる。言葉が離れる。言葉が放れる。

言葉をはなす。言葉を離す。言葉を放す。言葉を話す。

言葉を放つ。言葉を発する。

*

話し言葉は、発せられたとたんに消える。聞く相手がいな限り、相手が耳を傾けない限り、残らない。相手に音声が届けば、相手に移る可能性があるが、それが残るかどうかは分からない。そもそも残ったかどうかを確認できないし検証もできない。

音声は消えていく。つぎつぎと発せられることもある。音声は「消える」と書いたが、

この消えるの実相は不明。私には説明できない。

聞いた音声を反復して暗唱する、あるいは書きとめる。暗唱や暗記という言葉が懐かしい。自分が暗唱しているものはすぐには思いだせない。何かの拍子にふと出てきて、ああこれは一種の暗唱だと思うことがある。旋律や節のある歌や詩歌や長い文章の一節。断片であったり、かなり長いものであったりする。

音声を残すには、録音や録画という方法がある。その方式はアナログであったりデジタルであったりするのだろう。録音されれば、音声が何かに置き換えられるのだから、複製と拡散が可能になる。再生と呼ばれることがあるが、完全な再生はありえない。

音声を移すためには、置き換えなければならない。音声を移すとは置き換えることに他ならない。そもそも言葉をうつすことは妥協なのであるが、それを妥協だと意識しないことが暗黙の了解になっている。興ざめするからだろう。現実をつかみきれない人間にとって、大切なのは努力目標でしかない現実ではなくむしろ現実感であり、よくできた臨場感は悲願なのだ。

＊

書き言葉は、発せられても、つまり書かれても残る。文字という形で残るから消さない限りは保存ができる。移す（移動・翻訳・拡散）、写す（筆写・印刷・複製・拡散）、映す（写す・映像化）が可能だ。

インターネット上では、リアルタイムの投稿によって、移すと写すと映すが同時に起きる。液晶画面を見ながらの文字の入力は、執筆であり投稿であり複製であり、同時に拡散である。この実相は私には不明であり、説明できない。

自分の書いた言葉たちはどこに行くのでしょうか？

ネット上で文章を公開しているとよく考えます。note で下書きをつくり、それを投稿したとたんに、あなたの目に触れることになります。あなただけではありません。不特定多数の人に読まれる可能性が生じます。一瞬に、ですよ。

(拙文「【小話】書いた言葉はどこに行く」より引用)

*

現在は、音声も文字も映像もデジタル化された情報として処理されているようだ。その意味では、その処理には大差がないのかもしれない。

*

” (前略)

そして、目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ、と励ます。

八百年ほども昔に生きたイスラムの神秘家詩人の、「七つの谷」と題する記から、おそらくいくつかの言語に飴して、二十世紀になりドイツ語に訳され、断片として私の耳にまでようやく響いて来た声である。”

(古井由吉作「埴輪の馬」『野川』(講談社刊) 所収)

詩人の言葉が、「いくつかの言語に飴して」「ドイツ語に訳され」「耳にまで響いて来た声」と要約できる。「飴する」というのは翻訳を指しているのだろうが、「響く」ともまさに共振する素晴らしい言い回しだと思う。

比喩的なだけでなく詩的にも感じられるのは、ギリシア神話に登場するエコーを連想するからだろう。ナルキッソスが水面に自分の姿を「映した」のに呼応するように、エコーの発した歌の節がこだまになった、つまり強引に言えば「うつた」という逸話がある。こだま、飴、木霊、木魂という複数の興味深い表記も思いうかべずにはいられない。まさに響くのだ。

詩人が発した言葉が声でそれが書きとめられたのか、そもそも文字として書かれたものなのかは知らない。いずれにせよ、「目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ」と発せられた言葉が、別の複数の言語に移され、ドイツ語訳となったものを古井由吉が読み、日本語にした一節が『野川』に引用されている。

その日本語訳を読者である私が読み、それを私が引用という形でうつた(移した・写した)一節が、あなたの端末の画面に映され、それをあなたが読んでいる。「八百年ほども昔」にイスラムの詩人によって「はなされた」言葉が、いくつかの「うつる」を経て、ここに「ある」。

研して響いてここにあるとも言える。そうは言えても、私にはその実相がつかめない。いったい何がどう起きてこうなっているのだろう。はなす、うつす、こだまする、ひびくという言葉を使っても、空しいだけだ。

*

はなされた言葉が、こんな経路をたどることに本気で驚いていいはずなのに、その驚きが実感できないでいる。頭で理解したつもりが、つかめていないし、言葉ですくい取れてもいない。ただただもどかしくてならない。

#言葉 #日本語 #音声 #文字 #翻訳 #古井由吉 #読書 #小説

05/08 うつるはうつる

＊

** うつるはうつる

星野廉β

2022年5月8日 10:38 **

目次

** 文字の不自然さ

固有名詞をうつす

うつるはうつる **

** 文字の不自然さ **

表情、身振り、話し言葉（音声）、書き言葉（文字）のうち、文字だけが残り、あとの言葉は発した瞬間に消える。

言葉を口にする、書く。

言葉を耳にする、目にする。

「書く」だけが浮いている。赤ちゃんを思いうかべると「書く」がないのに気づく。「書く」は、「なぞる」「まねる」「写す」という行為を通じて系統的に学ぶ必要がある。

「書く」には体系があり、その意味では不自然なのである。無文字社会や無文字文化はあっても、無言葉社会や文化はありえない。

文字に体系があるというのは、文字は段階的に意識的に学ばなければならないということだ。これは文字が目に見える形で残り、保存されているからだろう。

体系化するためには、その対象が目に見えていなければならない。目に見えないものを整理するためには記憶に頼る必要があるが、整理どころか体系化しようと望むなら、並々ならぬ記憶力を要するにちがいない。

並々ならぬ記憶力がなければ扱えないものがあるとするなら、それは自然界には見られないという意味での「不自然なもの」であり、おそらく人工物だと言えるだろう。

文字をある程度習得した者にとって、文字は当然のものであり、自然なものに感じられるのは学習の成果にちがいない。習得する過程での苦勞を忘れていているという意味である。

この当然という感覚は思考停止にほかならないが、文字を使用するためには、文字の不思議さにとまどっていたり、こだわってられないことを考えれば、この思考停止も当然だということになる。

** 固有名詞をうつす **

表情、身振り、話し言葉（音声）、書き言葉（文字）。

言葉を口にする、書く。

言葉を耳にする、目にする。

言葉を口にする、書く、耳にする、目にするという行為は、言葉をうつしていると言える。「うつす」は動詞だが、どの動詞も、限定的なものであって、ある動きの一部を言い表しているのにすぎない。これは名詞と同じである。

言葉は事物でない以上、言葉は事物の一部しか、うつせない、つまり移せないし、映せないし、写せない。

*

固有名詞という言い方がありますが、この世にたったひとつ、たったひとりしかないという前提に立ったレトリックです。

固有名詞は、名前という呪文の中で最強であり、その放つ力はまばゆいです。文字どおり、目がくらむのです。中毒性と毒性も強いです。

作家、音楽家、芸術家は、作品を残すと言うよりも、作品名を残しているというのが、日常生活を送るさいの感覚です。

名前は最小最短最軽の引用だからです。

(拙文「片想い」より引用)

＊

人名を口にしたり書いたりすることを引用だと考える人は少ないかもしれないが、引用以外の何ものでもない。この考え方から言えば、あらゆる言葉を口にしたり書くことが引用になる。

誰もが生まれたときに、言葉がすでにあっただけだから、言葉は借り物だと言えるし、共有物だとも言えるし、引用するものだとも言える。借り物と見なせば貸し借りという連想が働き、共有物であれば汚さずに使うという配慮が生じ、引用という文脈で考えれば、現在であれば出典や著作権を気にする人もいても不思議はない。

ある事物や事象を、ある言葉で述べたり論じるさいには、その言葉の語義やイメージにしばられるのは当然の成りゆきだ。言葉を使うことは、言葉の世界の論理と文法、つまりレトリックにしたがうことを意味する。

＊

固有名詞のうち、人名に話をしばってみよう。名前こそが最小最短最軽最強の引用だからだ。名詞であり人名が最小最短再軽だというのは分かりやすいだろう。名詞には活用がないからすっきりもしている。

人名が最強の引用であるというのは、人名に対する人の思い入れが大きいからにほかならない。名詞の中で人名ほど人がこだわりを示すものはないからだ。大切にもし、ないがしろにもする。人名は、名づけられた人の分身なのである。

同姓同名はあるにしても、ふつう人はある人名で、ある特定の人物を思いうかべるだ

ろう。人名を唱えたり、文字として記すことにより、その人名を持つ人物をうつす（移す・写す・映す）のであり、引用するのである。

人名の書いてある名札を踏んだり、ハサミを入れたり、切り刻んだり、インクで改ざんしたり、インクを塗って消したりするのにためらいがあるとなれば、それは人名が単なる文字や言葉や名詞ではないからだろう。これは、単なる人名ではなく、知っている人物や親しい人物、さらには愛する人の名前を思いうかべると分かりやすいだろう。

人名以外に、これほどの強い輝きを持つ言葉があるとは思えない。その意味で、人名は最小最短最軽最強の引用だと言える。

** うつるはうつる **

固有名詞。地名、団体名、集団名、国名、人名、作品名、商品名、商標。

固有名詞の放つ光はまぶしい。固有名詞を出せば、そのまわりの言葉がかすんで見えるほどまばゆいため、聞いている人や読んでいる人が、文脈の大半を忘れて固有名詞だけを覚えていることも日常的に経験するにちがいない。

「〇〇についての話だった」「〇〇が△△だという話だった」というふうには〇〇という固有名詞が記憶の中心になる。

固有名詞を口にしたり書いたりする行為は、その指ししめす事物を呼びよせることだとも言えるだろう。「呼びよせる」「招く」「連れてくる」「よみがえらせる」「その場に立ちあらわれる」「目に浮かぶ」「そこにいる（ある）ような気分になる」。

こう考えると、固有名詞を唱えることが呪術的な行為に思えてきてならない。たしかにそうなのだろう。そもそも人以外のものを名づけることは、擬人なのである。

人ではないものに声を掛け、名づけて、手なづける。名前という生餌（なまえ）、つまり生の餌を供えて、手なづけ、飼いならそうという気持ちが根っこにあると考えられる。

＊

固有名詞に話をしぼると、たとえば地名であれば、土地の名を唱えることで、自分がその土地を呼びよせ、同時にその土地に自分が一時的に「移った」気分になる。人名であれば、その人を呼びよせ、同時にその人になりきることもできる。やり方しだいではなりすますことも可能だろう。

要するに、その土地に「移った」ような気持ちになり、その人に「乗り移る」のである。これは気分の問題であるが、そもそも人は気分で生きている。気分を想像力と置き換えても大差はないだろう。

人名に話をしぼると、誰かに「なる」と「なりきる」と「なりすます」のあいだに、人はそれほど明確な境を設けていない気がする。虎の威を借る狐。

＊

現在、引用はきわめて容易にできる。ネット上ではいわゆる「まとめ」が横行している。日替わりで、誰かの名前、著作名、著作からの一節をうつして（移して、写して、映して）、その著作者になる、なりきる、なりすますことが可能な時代になっている。これは癖になる。

記念写真のように、楽な気持ちで、人名、著作名、著作からの抜粋をうつし、その横に自分の名前やユーザー名を添える。もちろん、有名のほうが無名よりもその輝きはまばゆい。抜粋は忘れ去られ、うつされた人名と作品名が記憶に残る。

同時に、そのうつした人物の名前も記憶に残る。正確に言えば、その人名のあるサイトに行けば、記念写真がたくさん見られるという記憶も残るにちがいない。

＊

名前はきわめて簡単にうつすことができる。うつすことで、自分がうつる気分にもなる。名前の中でも人名、人名の中でも有名な人の名前をうつすことは、最小最短最軽最強の引用である。

うつすことで、自分がその威を借りるだけでなく、その人物になった気分にもなれる。つまり、自分がうつるのである。うつされた有名な人の人名は、さらにその名前を見た他の人たちにも「うつる」を伝染させる。うつるはうつる。

人はうつるとうつすに嗜癖している。対象が、映像、文書、音声に関係なく、現在は「うつす」「うつる」が、端末さえあれば誰でもきわめて容易にできる時代になっている。嗜癖するなというのが無理なのである。

#言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 名前 # 固有名詞 # 人名 # 地名 # 引用

05/08 うつすためには、うつらなければならない

＊

** うつすためには、うつらなければならない

星野廉β

2022年5月8日 14:10 **

人はうつるとうつすに嗜癖している。対象が、映像、文書、音声に関係なく、現在は「うつす」「うつる」が、端末さえあれば誰でもきわめて容易にできる時代になっている。嗜癖するなというのが無理なのである。

(拙文「うつるはうつる」より引用)

目次

** 映像や文書や音声をうつす

人がうつる

うつすためには、うつらなければならない **

** 映像や文書や音声をうつす **

うつすためには、うつらなければならない。

何かを、うつす、移す、映す、写すためには、自分が移らなければならない。

何かを、移す(配布・引用・拡散)、映す(撮影・投影)、写す(引用・複製・録画・録音・保存)するためには、自分が移らなければならない。

「うつす」の対象を映像と文書と音声に拡大すると、表記がややこしくなってくる。和語に漢字をまじえたり、和語に相当する漢字を用いた熟語を併記するからだ。

現在、「うつす・うつる」はさまざまな作業や処理をふくむ時代になっている。とりわけ、インターネットの普及は、「うつす・うつる」の対象を、映像と文書と音声にまで広

げ、デジタル情報化するという形で一本化し、さらには、パソコンやスマホやタブレットという簡略化された操作が可能な端末の一般化するにいたっている。

ユーザーであるはずのヒトが、機械の操作に追いついているかという点、はなはだ疑問に思わざるをえない。

** 人がうつる **

心がうつる、思いがうつる、意識がうつる、気持ちがうつる、魂がうつる、身体がうつる、知覚がうつる。

心をうつす、思いをうつす、意識をうつす、気持ちをうつす、魂をうつす、身体をうつす、知覚をうつす。

心がはなれる、思いがはなれる、意識がはなれる、気持ちがはなれる、魂がはなれる、身体がはなれる、知覚がはなれる。

心がつく、思いがつく、意識がつく、気持ちがつく、魂がつく、身体がうつく、知覚がつく。

人が移るというのは、ここでは超常現象や神秘体験ではなく、誰もが日常に体験するだろう行為や状態を指している。

たとえば、文章を読み書きしているさいには、人の意識はふつうではない状態にある。これは、自然界にはないという意味で、文字が不自然なものだからにほかならない。そもそも人が文字を相手にしなければならぬ必然はない。文字は人が作ったものなのである。

文字の読み書きをするさなかの人は、文字を並べる、つまりつづる作業と、文面を考える作業と、直接には作文とかかわりのない思いの中を行ったり来たりしていると考えられる。

集中力の問題なのかもしれないが、大ざっぱに言って、いま挙げた三つの作業と状態が、まばらに入り乱れている気もする。はっきりと分れているのなら、入れ替わって

るのだろうし、まばらであったりだまだらであったりするのであれば、同時にある三つの領域が濃淡の波のように意識と身体を訪れているのかもしれない。

いずれにせよ、移ったり、揺らいだり、離れたり、くっついたりしているように思える。

意識や心や気持ちや思いや魂というものは、見えないし、実体もないだろうし、確認も検証もできないから、とりあえず言葉でそう呼んで、いじっているにすぎない。

印象やイメージの問題なのである。

** うつすためには、うつらなければならない **

うつすためには、うつらなければならない。

和語は感覚的に体に訴えてくるとはいえ、多義的なために頭で整理するにはとりとめのない印象を与える。また、言葉を使うことは、言葉の世界の論理と文法に身をまかせることだとはいえ、どうしても現実世界の論理と文法に当てはめたい気持ちになる。

単純に考えてみよう。

何かを移すためには、人は自分が移らなければならない。

何かは何であってもいい。石ころであっても、文字であっても、人であっても、ペットであってもいい。それを移す、つまり移動させるためには、それとその動作に意識を移さなければならない。

意識は一面ではなくても、枠があって意識できる部分は限られていると思われる。視界のようなものと考えるといいかもしれない。視界には枠があり、枠の外は見えない。

枠の中にあるもの全部が見えているかという、そんなことはなく、視点や視線と呼ばれている意識の点や線があるような気がする。とはいっても、視点や視線がそそがれている部分が見えているのかもまた疑問である。

そもそも「見る・見える」とは言葉であって、その言葉が指ししめす事物があるとは限らないし、「見損ねる」「見落とす」「見えない・見ない」「見誤る」もある。

＊

人が何かを移すさいには、人はどこかに移っている。人の意識だけでなく、身体の一部も移っている気がする。移っているというのは、意識されていないとも言える。

意識が意識されていないと言えばトートロジーであるとか矛盾だと考えるのは、矛盾である。言葉と事物が対応していない、つまり言葉の世界と現実の世界が対応していないことから考えて矛盾である。

言葉の世界の論理と文法は、現実世界の論理と文法や、論理と呼ばれている辻褄の世界の論理と文法とは異なり、対応していない。矛盾という言葉の喚起するイメージははなはだあやしい。

したがって、人が何かを移すさいには、人の意識や身体の一部も移っている、つまり意識されていない気がする。

＊

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっ

とすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きたがらない）。

（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より引用）

（拙文「空から降ってくる言葉」より引用）

#言葉 #日本語 #音声 #文字 #大和言葉 #和語 #漢字 #動詞 #名詞#意識

05/10 名詞的なものはうつり、動詞的なものはつ
たわる

＊

** 名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

星野廉β

2022年5月10日 08:25 **

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より引用)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より引用)

目次

** うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

本物感と本物っぽさこそがリアリティ **

** うつる、つたわる **

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかでしょうが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声がうつる、音声伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱がつたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

** うつるは、かわる **

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。

写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手であっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。

** つたわる **

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喩です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。冗談っぽく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

*

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。

** 本物感と本物っぽさこそがリアリティ **

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や源泉でなくていいのです。というか、本物や源泉が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や源泉を演じる、あるいは振りをすると言えます。

本物感、本物っぽさ、源泉感、源泉っぽさで我慢するのです。それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています。意識するとがっかりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

「〇〇感」「〇〇ぽさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぽさ」「らしさ」「性」「的」の洗練の追求だと言えそうです。

05/10 うつる、つたわる

＊

** うつる、つたわる

星野廉β

2022年5月10日 14:37 **

用言体と勝手に呼んでいるものについてお話します。あくまでも個人的な呼び名なので分かっただけか心もとないのですが、説明させてください。イメージとしては古井由吉の小説やエッセイに見られる文章のつづり方で、主語が省かれていたり、抽象度の高い名詞や人称代名詞や固有名詞の放つ強い光を避けながら書いていく方法なのです。

(拙文「【夜話】用言体」より引用)

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

(拙文「名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる」より引用)

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より引用)

目次

** 出そうで出ない

「何か」

「あれ」

うつる、つたわる **

** 出そうで出ない **

出そうで出ない。なかなか出てくれない。出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに動きがやむ。

*

何が出そうなのでしょう？ 何がなかなか出てくれないのでしょうか？

上の文章では不明です。

「伝わる・伝える」を意識して書いた文章で、意識的に「何が」や「何を」を書いていないのです。省いているのはなく、書いていないのです。省くとは隠すことですが、隠すものがないのです。

** 「何か」 **

何かが出そうで出ない。なかなか出てくれない。何かを出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに動きがやむ。

*

冒頭の文章に「何か」を入れてみました。補ったのではなく、入れたのです。

「何か」は保留する言葉です。特定しないで、とりあえず「何か」とするのです。特定しないとと言っても、「何か」と名指していることに注目したいです。すっとぼけていると言

えるでしょう。

冒頭の文章に「何か」を入れたのだから、「何か」が省かれるという形で隠れていて、いまそれを出したのだとも言えるでしょう。この辺の解釈は人それぞれです。

「あれ」

出そうで出ない。なかなか、あれが出てくれない。あれを出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに動きがやむ。

*

冒頭の文章に「あれ」を入れてみました。補ったのではなく、入れたのです。

「あれ」は「何か」と同様に保留する言葉です。特定しないで、とりあえず「あれ」とするのです。特定しないと言っても、「あれ」と名指していることに注目したいです。すつとぼけていると言えるでしょう。

冒頭の文章に「あれ」を入れたのだから、「あれ」が省かれるという形で隠れていて、いまそれを出したのだとも言えるでしょう。この辺の解釈は人それぞれです。

** うつる、つたわる**

A)

出そうで出ない。なかなか出てくれない。出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに

動きがやむ。

B)

何かが出そうで出ない。なかなか出てくれない。何かを出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。そうなのか。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに動きがやむ。

C)

出そうで出ない。なかなか、あれが出てくれない。あれを出したいのに出てくれない。来ている気配はある。そこまで来ているのは分かるのだが、そこから先に進む気配はない。いらいらするが、苛立つとよけいに出てくれない気がするので、気持ちを逸らしてみると、少しだけ先に進んだ感じがする。ただし、うかうかしていると、ずずっと動くそぶりが伝わってきて、漏れそうになる。ようやく出るかと安心したのも束の間、気を向けたとたんに動きがやむ。

*

A) の文章では「伝わる・伝える」が前面に出てきてきます。「何が」「何を」がないからです。「出そうで出ない」という状況が動詞を中心に記述されています。私の中では、状況や動きは「伝わる・伝える」ものなのです。私が用言体と勝手に呼んでいるものは、こんな感じの文章です。

B) と C) の文章では「うつる・うつす」と親和性があります。「何か」や「あれ」があることによって、「何か」や「あれ」が「出そうで出ない」という話になっています。「何か」や「あれ」は代名詞ですが、名詞と同じく指示性があります。私の中では、名詞や代名詞は「うつる・うつす」ものなのです。

代名詞とは文字どおり、名詞の代わりです。名詞の代わりに、ぼかすようにして、つまり保留する形で名指しているとはいえ、その指示性は動詞よりもずっと強力です。名詞や代名詞の指示性、言い換えると何かを固定しようとする指向性は、動詞の喚起する動きよりも目立ちます。

B)とC)では、書かれている動きや状況よりも、「何か」や「あれ」が読む人の気持ちをつかむために、人は自分を投影（投映と書きたいところです）して自分を読んでいるとも言えます。書かれている言葉を読むのではなく、書かれている言葉に自分を読んでいるのです。

*

A)の文章を読む場合に、人は動詞が呼びさます動きに浸ることになりますが、B)やC)では、動詞の主体つまり「〇〇は(が)」や、客体つまり「〇〇を(に)」に意識の大半が向けられることになります。

B)やC)を読むさいには、人は自分にとっての「何か」や「あれ」を当てはめることで、容易にその文章を自分の体験として読めるようになるとも言えるでしょう。したがって、A)よりは読みやすくなります。

*

A)では、「動きや状況を伝える」ことが主眼となり、人はなかなか入っていきません。読みにくい、つまり慣れないと読むのに苦労するのです。他の言語に翻訳しにくいと思われまます。この文章を英語に訳せるでしょうか。

B)やC)では、人は「自分の体験にうつす(移す・映す・写す)」ことが比較的容易ですから、読みやすく感じるでしょう。また、A)にくらべれば、他の言語に翻訳しやすいと思われまます。そもそも翻訳とは「うつす」ことだからです。

私はA)を用言体と勝手に名づけています。考えようによっては、ありえない文章であり、自分語みたいなものですから、ひとさまには分かりにくいにちがひありません。

その意味では、駄洒落と似ています。読む人が乗ってくれないかぎり、単なるすべるギャグでしかありません。さしあたって、用言体を実践することが私の課題です。自分で書くしかないのです。

#言葉 #日本語 #用言 #動詞 #名詞 #代名詞

うつせみのあなたに 2022年3-5月

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
